
魔法戦記リリカルなのは Infinite Blue

J I N

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法戦記リリカルなのは Infinite Blue

【Nコード】

N2484N

【作者名】

JIN

【あらすじ】

「六課が解散してから3ヶ月間、ある部隊に行つて欲しいんよ」
機動六課の部隊長、八神はやてから突然そう伝えられたスバルとティアナ、そしてエース・オブ・エースの魔導師、高町なのは。

その部隊は何か？

そしてなのは達三人がその部隊へと出向く事になった理由とは・・・？

そこで彼女達が知った事・・・

それはJS事件の解決は、終わりではなく始まりに過ぎなかったという事だった。

その世界を覆った暗雲突き破り、何処までも上って行こう。

大事な人の為、自分の為、そして世界の為・・・今、この無限に広がる青い空へ！

魔法戦記リリカルなのは Infinite Blue 始まります

《 警告 》

これは“魔法少女リリカルなのはStrikers”の二次創作作品です。

同様の作品に関して、著しく嫌悪を覚えられる方の閲覧はお勧めできません。

Flight 00 : オリジナル登場人物・用語紹介(前書き)

これは“魔法少女リリカルなのはStrikers”の二次創作作品です。

同様の作品に関して、著しく嫌悪を覚えられる方の閲覧はお勧めできません

また、随時登場人物等を追加して行く予定です

また、本編の登場人物や本編で出てくる用語に関しては、公式サイト、もしくは・・・

Nanoha Wiki <http://nanoha.julynet.jp/>

をご覧ください。私も参考にしております。

Flight 00 : オリジナル登場人物・用語紹介

戦技教導隊第四班第十一航空隊 ブルーインパクト
Aggressor Group No. 4 the 11th
SQ "Blue Impact"

イルマ・トレノ(22)

出身：ミッドチルダ南部

階級：一等空佐

所属：時空管理局本局戦技教導隊第四班・戦技研究部第十一航空隊
“ブルーインパクト”

役職：ブルーインパクト隊長、ブルーインパクト“フロントコマンドー”

所持資格：戦技教導官資格、大隊指揮官、第一種キャリア、臨時戦隊編成資格

魔法ランク：総合AAA+

デバイス：レヴィン

コールサイン：ブルー1、(または)ブルーリーダー

戦技研究と管理局内でもトップクラスエリートである教導官魔導師を更なる高みへと育成するための機関である戦技教導隊の第四班“戦技研究部”が唯一持つ直属の第十一飛行隊“ブルー・インパクト”を取りまとめる部隊長。経歴は至って普通であり、本局の武装隊の時代にアルとコンビを結成。幾つかの事件の解決を経て、現在に至る。性格は優しくもお茶目な所があり、訓練を受ける魔導師達からは最初は本当に隊長かと疑われたり、チャーミングな笑顔にどこかお茶目な所もあるためかつて訓練生から「こんな優しそうな人で本当に隊長か」と聞かれた事もある。

射撃魔法および空中からの攻撃能力は折り紙つきで、高威力の弾丸を瞬時に多数発射するバースト・ショットや更には光学迷彩のような幻術までを使いこなす。

相棒のデバイス“レヴィン”とは十数年の付き合いらしく、今はお互いの思考をリンクさせたりと、チームリーダーとしてのイルマを完全に支援できるようレヴィンはこれまで十回以上のバージョンアップを重ねている。

またブルーインパクトを率いる隊長であるが、最大魔力値やランクは隊員の中では最も低い。

その事をおかしてはコンプレックスとして抱えていた時期もあったようだが、現在は完全に割り切って克服している。

名前の由来は86シリーズで有名なトヨタのスポーツ・クーペ、スプリンター・トレノから。

セレス・クラレンス(22)

階級：二等空佐、ブルーインパクト“フロントアタッカー”

所属：時空管理局本局戦技教導隊第四班・戦技研究部第十一航空隊

“ブルーインパクト”

役職：ブルーインパクト副隊長

資格：執務官資格、戦技教導官資格

魔法ランク：空戦SS

デバイス：セイヴァーフ

コールサイン：ブルー2

物腰は柔らかいがイルマに比べてかなりしつかりした性格で、少しでもおかしい所や気になる所を見過ごせない性格。イルマとの性格の対比から、訓練を受ける魔導師は最初に彼女が隊長だと誤解してしまうらしい。隊員の中では一番魔法ランクは高い。

デバイス“セイヴアーF”^{フリーダム}を駆使しての中距離から近距離を得意とするアタッカーで、フロントからセンターまでで得意の射撃や近接格闘術を十分に発揮できる。

ブルーインパクトに所属する前の経歴に、隊員以外には明かしていない秘密があるようだが・・・
名前の由来はトヨタ自動車の普通セダン車カローラ・セレスより。

アル・ボーイング（23）

階級：三等空佐

所属：時空管理局本局戦技教導隊第四班・戦技研究部第十一航空隊
“ブルーインパクト”

役職：ブルーインパクト“フロントアタッカー”

資格：戦技教導官、第一種キャリア資格

魔法ランク：空戦S+

コールサイン：ブルー3

デバイス：マーヴェリック

経歴はブルーインパクトの中ではイルマと同じく、平凡な武装隊の一員からここまでなり上がった叩き上げのエリート魔導師。彼とコンビを組んで、数々の事件を解決に導き今に至る。実際、中距離からの攻撃を得意とするイルマと近接戦闘に特化したアルの相性はコンビを組んだ7〜8年前当初から良かった。

性格はイルマ曰く、かなり生真面目。もう少し楽にしると言われるほど、かなり固い性格。

デバイスは細長い太刀の形状をしたアームドデバイス“マーヴェリック”で、主に近距離から中距離までを難なくこなす事が出来る。彼の名前の由来はアメリカの航空機メーカー、ボーイング社から。

ブラット・レクサス（19）

階級：一等空尉

所属：時空管理局本局戦技教導隊第四班・戦技研究部第十一航空隊

“ブルーインパクト”

役職：ブルーインパクト“ロングレンジスナイパー”

資格：小隊指揮官資格など

魔法ランク：総合S-

コールサイン：ブルー4

デバイス：オウルズ・アイ

ブルーインパクト所属以前は、金銭的な契約を結ぶ傭兵色の強い囑託魔導師という経歴を持つ。あくまで一人で稼いでこそ良しという一匹オオカミな所があったため、イルマ曰く最初は全く反りが合わなかったとのこと。

デバイスは砲撃から精密狙撃までをこなせるといふ射撃型デバイス“オウルズ・アイ”。

魔法攻撃時に発生する反応を極限まで抑える事に成功し、名前の通り得物を見つけてから気付かれないまま忍び寄る梟の目さながら、見つめられたら死あるのみという事からブラットがそう名付けた。彼の名前の由来は、トヨタ自動車の高級車ブランド“レクサス”から。

ルノア・インテグラ（19）

階級：一等空尉

所属：時空管理局戦技教導隊第四班・戦技研究部第十一航空隊“ブルーインパクト”

役職：ブルーインパクト“センターガード”

資格：小隊指揮官資格、救急医療資格など

魔法ランク：総合S

コールサイン：ブルー5

デバイス：スカイ・スクレーパー

元は本局の戦技教導隊所属ではあったが、戦地に赴き戦闘行為を行いつつ負傷した局員に応急処置を施すための衛生魔導師であったが、ある事件においてイルマ達と関わり、後にブルーインパクトに所属する事になった。性格はややおっとりした性格で、何事にも柔軟な姿勢。

槍型のデバイス、スカイ・スクレーパーから繰り出される突撃力の高い攻撃や、誘導弾攻撃でフロントアタッカーのセレスとアルのサポートを行う。

名前の由来は本田技研工業が製造していたセダン型乗用車インテグラから。

マリノ・クラレンス（19）

階級：一等空尉

所属：時空管理局戦技教導隊第四班・戦技研究部第十一航空隊“ブルーインパクト”

役職：ブルーインパクト“バックサポーター”

資格：普通自動車運転免許等

魔法ランク：空戦S-

コールサイン：ブルー6

デバイス：アイギス

セレスの妹で、性格はかなり大人しめ。

姉同様、ブルーインパクト所属以前の経歴にはやや詳細不明な点が多い。

使用デバイスは防御力に特化したデバイス、アイギス。離れた位置に居る隊員にも、緊急時にはバリアを展開させる事が出来、今ではブルーインパクトの防御の要となっている。

名前の由来はトヨタ・カローラセレスの姉妹車、スプリンター・マリノから。

セリーナ・トライハート

階級：三等陸尉

所属：時空管理局戦技教導隊第四班・戦技研究部第十一飛行隊“ブルーインパクト”

役職：総合オペレーター、医務官、研究班主任

資格：一級通信士、医務官資格

魔法ランク：総合B+

ブルーポイントでオペレーターを務める女性だが、医務官資格も持っているため必要があれば医療任務に従事できる。

平常時はブルーインパクト付きの研究班の研究主任として活動している。

セレスとは性格こそ違うが、セリーナは包容力のあるお姉さんというように隊員達からも思われている。

名前の由来は札幌ポデー工業が製造している高規格救急自動車“トライハート”から。

本局特殊作戦師団「パトリオットフォース」
Administration Bureau Special
Operation Division” Patriot Fo
rce”

ツエーザー・ヴァーリゲルト

階級：少将

所属：本局特殊作戦師団パトリオットフォース

本局所属の特殊大隊を率いる幹部の青年。階級は少将。
冷徹かつ冷酷な性格の持ち主で、弱者を見下す癖がある。
サーベルのような形状のアームデバイス“イエーガー”を用いて、
華麗な剣戟を得意とする。

エミール・ローア

ツエーザーの副官として立ち回る女性。
グローブ型のデバイス“リンドブルム”を用いての、広域殲滅魔法
とかなり大胆な攻撃を得意とする。性格は冷静であり、ツエーザー
を全面的に信頼しているためか、ツエーザー以外の人間の言葉には
耳を貸さない。

シュミット・ハイゼル

ツエーザーの副官で幹部の一人。

前線にでる戦闘部隊を率いる事もしばしばで、かなり好戦的な性格。
双剣のデバイス“グラディウス”で、道をふさぐ敵を容赦なく薙ぎ

払う。

その他

ブルーリボン

謎の女性魔導師。

攻撃と回避を表裏一体で行う空戦機動“メビウス・マニョーバ”を考案し、実際にそれを100%使いこなせる唯一の人物との事だが・
・
・

“用語集”

《時空管理局戦技教導隊第四班・戦技研究部》

戦技教導隊の第四班はかつて、大勢の魔導師への戦技教導と戦技研究を同時にこなすというかなり過酷な役割を担っていたが、所属する魔導師の負担から第四班の中で、なのはが所属する第五班同様に多くの魔導師に戦技教導を専門にする部隊と、研究に主眼を置いてごく少数の魔導師に研究にて開発された戦技を教授するための機関としての戦技研究部の二つに分かれたという経歴がある。現在は戦技研究部は高度は秘匿性が必要という事で、本部の場所は公表されておらず、また戦技教導隊第四班本隊と第四班戦技研究部の司令部ブルーポイントは異なり、たがいに上部コマンドでは無いため命令系統は繋がっていない。

《第十一飛行隊“ブルーインパクト”》

時空管理局本局戦技教導隊第四班・戦技研究部第十一航空隊“ブルーインパクト”

主に選抜された戦技教官に新たな戦闘技術の教授や教導方針の確立を経て、管理局全体の危機対策術の向上を任務としている。

元々は戦技教導隊の一部であり、新たな戦闘技術の開発や進化する脅威への対策術開発のために開発された戦技を試験・研究するのを主として発足した部隊。

十年程前に先進技術や新たに開発された戦闘技術には、高度な秘匿性が必要ということで、世界のどこかへと移設され、彼らの本拠地の場所は管理局内でも上層部の更に一握りの人間しか知らないという。

年間を通しておよそ数ヶ月間、主に戦技教導隊の教官を訓練生として招聘し、新たな戦闘技術の教授により、その教官の技量向上を図ると共に、その教官が訓練を受けさせる側となった場合に、より高度かつ効率的な訓練を受けさせるようになるため、結果として管理局全体の戦力向上を図る事が目的である。

訓練を受けた教官などの魔導師は総合的な戦闘技術の数段階の向上が見受けられるという。しかし訓練を受けた人から広まったのか、戦技研究部の存在は魔導師には広く知られているが、そのイメージは教導隊の教導隊というものがほとんどで、それ以外のより具体的な活動に関してはあまり知られていない。

また先進技術の粋を集めた研究をしているという事から、その技術を盗み出したりする敵の脅威から研究部全体を守るための防衛隊という側面も持ち合わせている。

基地が存在する場所には、天然由来のAMFが存在しており、この空域ではある程度のリミッター解除が許可されているが、それでもそこでの訓練は通常の数倍はキツイらしい。

部隊人数は管理局内でも最も少なく、スタッフらの待機要員の数を合わせても15名。

AE808式ヘリコプター

本局や地上本部などの武装隊や首都防衛隊でも導入が検討されている最新鋭高機動輸送ヘリコプター。一機につき定員は10名程度。機体の空気抵抗を減らしての高速化と、最新のテクノロジーによる大幅なステルス化が図られている。戦技研究部で開発し、二機を試験的に配備している。

Flight 00 : オリジナル登場人物・用語紹介(後書き)

もう分かった方も中にはいらっしゃるかと思いますが、“ブルーインパクト”のモデルは航空自衛隊のアクロバット飛行チーム“ブルーインパルス”です。

ブルーインパクトはアクロバット飛行はしませんが、ブルーインパルス同様に戦技研究という設定は、かなり参考にさせていただきました。

F l i g h t 0 1 : F r o n t i e r F a n t a s y (前 書 き)

早速ですが、第一話です。

言い忘れましたが、なのはシリーズを投稿するのは初めてです。
評価等は、できればお手柔らかにお願いいたします(笑)

新暦76年12月2日

多くの世界が様々な文化を有し、次元という隔たりを経て存在する。

そう・・・世界は一つでなく、次元と言う枠組みを越えて多数存在する。

そして原始のままの世界もあれば、発達した大都市が地表を覆わんと広がる世界もある。

この場合後者に当たる世界「ミッドチルダ」には、管理世界と呼ばれる世界で発達した科学技術や魔法文化を監視、統制する「時空管理局」という組織の地上本部が存在する。

管理局は各世界で起こりうる可能性のある大規模災害や凶悪な次元犯罪に立ち向かうための組織で、その傘下には有能な魔導師や局長が多数集う、まさに平和の砦。

数ヶ月前にそのミッドチルダでは、ある恐ろしい事件が起きていた。JS事件、違法な無人兵器や非道な人体兵器を製造運用し、拳句は古代の質量兵器“聖王のゆりかご”を蘇らせ、人々を恐怖のどん底に陥れた事件だ。

逮捕されたジエイル・スカリエツィが沈黙を続けているため、目的は定かではないがミッドチルダ全域が極度の危険に晒されていたのは事実である。

だが彼の野望は、若きエース魔導師達が集う“機動六課”と大勢の平和を願う魔導師達によって阻止された。

危険の規模が大きかっただけに、機動六課は今では一部から奇跡の部隊と呼ばれる事もあるらしく、部隊長である八神はやてはその

れを聞いて苦笑いを浮かべていた。

そんな彼女は今、嬉しい悩みに頭を悩ませていた。それは、この機動六課が育てた若きストライカー達の進路だ。

ライトニング部隊の二人、突撃力のある槍型アームドデバイス使いの少年エリオ・モンディアルと竜召喚士の少女キャロル・ルシエは二人とも来年の五月から自然保護隊にしばらく身を置く事になった。

一方でナックル型デバイスで近接格闘を得意とするスバル・ナカジマ、そして彼女の良きパートナー、銃型デバイス使いのティアナ・ランスターの進路は未だに決定していない。

別に進路が無いわけじゃない。JS事件での二人の活躍は、管理局中に広がるほど凄い物だった。

だから、そんな二人を是非部隊の一員にと要請してきた管理局の部隊が沢山あるのだ。

はやてがざつと確認しただけでも、二人合わせておよそ150部隊。もちろんどの部隊に行きたいかは本人達次第、しかしその以前に候補をある程度まで絞ろうと思いい、これまでに何回もスターズ分隊の隊長 高町なのは や、ティアナの進路希望が執務官方面ということで執務官でライトニング分隊長 フェイト・T・ハラオウンの意見を聞いたりもした。

そしてそれでどうにかこうにか、およそ70くらいまでは絞り込む事が出来た。

「うーん、やっぱりなんぼ考えてもわからへんなあ。」

はやてがこの日何度目かになる嬉しい弱音を吐いた時、部屋のドアがノックされたのではやては軽く「どうぞ」と返事をした。

部屋のドアがシュツと開き、そこにはピンクの長い髪を持つ女性が佇んでいた。

「シグナム、どないしたん？」

シグナムと呼ばれた女性は、夜天の魔導書の主であるはやてに使える守護騎士“ヴォルケンリッター”のリーダー格だ。

「いえ、主はやてにお届け物が一つ・・・それより、少々お疲れのようで」

「ふふっ、みんなに心配かけとるんやなあ。でもこれは嬉しい悩みやから、あんまり気にせんといてや」

「そうですか」

ならば良いかとシグナムが薄い笑みを浮かべると、はやては機動六課から伸びる道の向こうから、あちこちが汚れた練習着で隊舎へと帰ってくる四人のストライカーと彼女達を指導していたなのはフエイト、そして守護騎士のヴィータが返ってくるのを発見して思わず微笑んだ。

「・・・シグナム、今あの子達はどの方向にも伸びる可能性を秘めとるんや。せやから、その可能性をもっと伸ばせる所に、私としてはやりたいんよ」

手を振る彼女達に手を振り返しながら、はやては自身に秘めた思いをシグナムに打ち明ける。

「1課から5課、貴重な戦力としてあの子たちを欲しがってる部隊も、実際に彼女達のノウハウを生かせる所もぎょうさんある。でもな、まだあの子達が伸びる方向っていつのを決めてしまいたくないんよ」

「それなら、それも含めて彼女達に決めさせれば良いのではないですか？」

「せやなあ、そうなのかもしれへんなあ・・・そういえばシグナム、忘れてたけど用って何やったんや？」

振り返って尋られたシグナムが、大事な何かを思い出したようにスツと左わきに抱えていた僅かな厚みの封筒を差し出した。

「主はやて、あなたにお届け物です」

「なんやー？　もしかしてまたあの子達へのお誘いか？　もう、堪忍してくれへんかなあ・・・」

流石に気分的に参り始めたはやてが、苦笑を浮かべてその封筒を受け取った。

はやてはその封筒が他の案内に比べてかなり薄いような感じがした。

「さてさて・・・ん？　これは、なんやあ？」

封を切り出てきたのは、一冊の10ページにも満たないくらいの小冊子に数枚の紙だった。。

同年12月12日　機動六課隊舎内会議室

「今日来てもらったのは、他でもあらへん」

真正面のイスにスバルとティアナ、そして隣になのはがいる状態ではやてが二人にそう告げた。

それを聞いて、進路の発表を待っていた二人の表情が固くなる。

「もう二人の希望していた転属先にいろいろと話はしてるんやけどな・・・実はその前に、この機動六課が解散してからの5月から7月末までのおよそ3ヶ月間な、ある部隊に出向して欲しいんよ」

「ある部隊・・・どこですか？」

「ブルーインパクトって、聞いたことないかな？」

やや心配げに尋ねるスバルに、彼女たちをこれまで指導してきたなのはが優しく囁く。

「え？」

「せや、本局戦技教導隊の第四班第十一飛行隊、戦技研究部直属のエース部隊。それがブルーインパクトや」

「そつ、それって本当ですか！？」

ブルーインパクトを知るティアナが驚きの表情で思わず立ち上がる。

「ティア、何を驚いているの？ 私までビックリして・・・」

「スバル、アンタ・・・ブルーインパクトを知らないの！？」

ティアナがスバルにグイと詰め寄り、スバルはティアナの様子に思わず苦笑いを浮かべた。

「ブルーインパクトといえば、簡単には教導官の教導官！ 教導隊員の技量を更に高めるための、先生の先生みたいな部隊よ！ そんな部隊を知らないなんて、アンタそれでも管理局員なの！？」

「わかったわかった！ つて、アレ？ 私たち、教導官じゃないけど・・・どうして？」

「そついえば・・・そうよね」

スバルが苦笑しながら投げかけた質問に、ティアナはスバルを掴んでいた手を離れた。

「それがあちらさんの提案がなあ、六課の教導官と教導官が主に指導にあたっていた魔導師に、是非来てほしいって言うんや」

「それじゃ、もしかして!？」

「そう。二人と一緒に、私も行くのかなっていうこと」

なのはが二人に笑顔を向けて答えると、二人は驚きと嬉しさが混じり合ったようなパツと明るい表情になる。

「二人には色々と教えた事もあったけど、正直まだ教え足らへん事もたくさんあるんよ。せやから、なのはちゃんにまた教えてもらう時間が三か月伸びるようなもんや。それと、どういった道に進みたいかってばんやりとは決まってると思うんやけど、もう少し具体的になるまでに考える期間が必要やって思うんや」

「ハイ！是非お願いします！ティアア！」

なのはとはやてに立ち上がり敬礼と笑顔を向けたスバルが、今度は逆にティアナに大声で呼びかける。

「うん！私からも出向の件、是非お願いします！またなのはさんに教導していただけるなら！」

二人からの元気の良い返事を聞いて、はやてとなのはがお互いに顔を見合わせて微笑んで頷く。

「二人とも、おおきに！せやかて、それはウチらが教えた内容の量が足りないって言うてるようなもんや。ほんま、酷いなあ」

はやてが苦笑いを浮かべて頬を掻き、スバルとティアナも同様に少し気まずそうに軽く苦笑する。

「それじゃ、この件は了解したで。二人とも、今日はもう戻ってええよ」

「はい。 それでは失礼します」

ティアナの敬礼に続いて、それに合わせるかのようにスバルも敬礼をなのはとはやてに向けて部屋を後にした。

二人が部屋から出て少しした時、はやてが沈黙を破るように口を開いた。

「・・・ほんま、これで良かったんやろか？」

「はやてちゃん？」

「正直なあ、なのはちゃんにはホンマに申し訳ないと思とるんよ。ウチの誘いで機動六課に来てもらたはええけど、ウチは部隊運用に必死でなのはちゃんの事全然手伝いでけへんかったしなあ・・・それに酷い後遺症まで残させてしまっし、なんて謝って良いか分からへんくらいや」

はやてがしんみりとした表情でなのはに謝るがそれはなのはは、はやてを安心させるためか笑顔で受け止める。

「何言ってるの。あの空港火災の次の日、私^がはやてちゃんに言った事覚えてる？ “機動六課っていう楽しそうな部隊に誘ってくれなかったら、そっちの方が怒るよ”って言ったよね」

「そういえば、そうやったなあ。あかんなあ、色々ありすぎてどんどん忘れてるんかなあ？」

「忘れたら、また思い出せば良いよ」

なのはがはやてに優しく微笑みかけると、はやての手の上に自分の手を重ねる。

「だから、はやてちゃんが謝る事じゃない。それに、私は全然後悔していない。みんな無事だったし、それにヴィヴィオを助ける時に少し無茶したことだって、今でもあれで良かったって・・・そう思ってるから」

なのはの励ましを聞いて、はやては胸にじんわりと温かい物が広がるような気がした。

「おおきになあ、なのはちゃん。ホンマに、なのはちゃんやフェイトちゃんが友達で良かったわあ」

はやてとなのはの温かい語らい、そして機動六課の一日が終わる。

夕陽は水平線の向こうに沈み、二つの月が首都クラナガンをぼんやりとそのおぼろげな月光で照らしている。

ミッドチルダの首都クラナガンから離れること二百キロ余りの海上。その上空を漆黒の闇に溶け込むような黒い防護服“バリアジャケツト”に身を包む謎の集団およそ十数人が、高速で飛行していた。

『各員、戦闘態勢！ 作戦目標を確認！』

『作戦目標、機動六課主要戦力へ可能な限り最大の被害をもたらすこと。既に各員の攻撃目標詳細はインプット済みだ』

そう物騒なことを念話で言い放つ彼らの手には、なのはのデバイス
“レイジングハート・エクセリオン”のようなロッド型の他に、光
刃を出すブレードのような物を持つ者までいた。

明らかに尋常ではない存在。しかしこの距離にまで近付いても管理
局の防空レーダーは何も捉えられていない。

『しかし、俺たちは見つからないのか？ 管理局の防衛網は嚴重と
聞いたが？』

『心配するな。向こうに我々の仲間を送り込んでいる。彼らが今、
一時的にレーダーに虚偽の情報を送っている。我々の事など、知る
由も無い』

『そうか。それなら、安心してそのエース・オブ・エースを殺れる
というものだ！』

彼らがもうすぐ始める戦慄の計画を実行に入ろうとしていた時だ、
メンバーの中の女性魔導師が何かに気付いた。

『待て！ 前方から何かが来る！ 数は6、速い！』

『何だ？ まさか管理局の魔導師か？』

『チツ、哨戒部隊か？ まあいい、軽く蹴散らすぞ。作戦に支障が
出れば厄介なことになる！』

思わぬ伏兵に出鼻を挫かれたせいか、苛立ち混じりに男がそう言い
放った。

同じ頃、その不審な集団と対向するように飛んでいたのは、こち
らも6名の魔導師。

しかし闇夜のような不気味な漆黒さに対して、彼らはどこまでも澄んだ青空のような青基調のバリアジャケットに後方に青白い軌跡を描きながら高速で飛んでいた。

『ブルー1からオール。目標を確認、スタート・インターセプトミッション！』

先頭に行く魔導師の青年が、銃型のデバイスを握ったまま念話で周囲を共に飛び三角形のデルタ隊形を作る仲間にそう告げた。

『ブレイク、レディ ナウ！（散開準備・・・今！）高度5000』

『了解！』

先頭に行く魔導師に、左隣に位置していた女性魔導師が答え、青い魔導師群が一斉に散開し高度を上げていく。

『警告、警告！ 君たちは時空管理局の重要指定空域に無許可で侵入しようとしている。ただちに針路を変更せよ、繰り返す直ちに針路変更せよ』

ブルー1というコールサインの青年が、彼らに念話でそう警告する。しかしその返答として返ってきたのは、無数の光弾だった。

『いきなり攻撃かよ・・・』

『しかたない。ブルー1からブルーオール、インターセプト（迎撃せよ）！ 絶対防衛ラインは六課から半径100km、それ以内には彼らを入れるな』

『了解！ ブルー2、アタックポジション！』

『ブルー4、ロングレンジ・アタックポジション』

ブルー2と名乗った女性魔導師が、誘導性の光弾を避けながら高度を下げつつその武装集団に接近していく。鋭い切り込みで光刃を同時に三発放ち、そしてその集団の間を彼女は突っ切った。

「こいつ、速いぞ！」

「なにを、まだ避けられ・・・！」

体勢を一瞬崩されるも反撃に移ろうとした時、彼の頭上から幾多の光線が降り注ぎ間一髪それから逃れる。

そこには予め回り込んでいたであろう相手側の砲撃態勢の魔導師が・・・！

他にも遠距離から正確な砲撃や同時多角攻撃に、彼らは劣勢から脱するどころか逃げるだけで精一杯になってしまう。

「クソッ、こちらの動きが読まれているのか？」

「違う！ こっちの動きや攻撃は予測不可・・・アイツらは俺たちがどう動いても攻撃できる隊形なんだ」

「どこの部隊だ！？・・・こんな奴ら、私たちのデータに無い！」

事前に管理局中の部隊のデータを入手していたが、こんな戦闘隊形や戦術を取る魔導師の集団は聞いたことが無かった。

やがて回避に限界が来た黒い魔導師の方は、数人が瞬く間に落とされてお互いの数は互角となった。

「こんなッ、こんなことがッ・・・！」

「落ちつけ！ 数ならばまだ互角だ！」

その時、高速で動きまわる女性魔導師ブルー2を彼はようやく照準に捉えた。

「これは、もらったあぁッ！」

即座に取った反撃態勢から彼女に対して放たれた一条の光線、エネルギーからの魔法推定レベルはSと直撃すれば命の保証は無い。すると彼女はなんとその光線に向かって飛びこむ。

（馬鹿め！ 血迷ったか！！）

直撃する・・・彼がそう確信して思わず笑みを浮かべた次の瞬間、その笑みは驚愕に変わった。

光線が擦るか擦らないかというギリギリのラインをブルー2は飛び抜け、そしてデバイスの刃を振りかざし高速で迫ってくる。

その一瞬後、ブルー2から光刃でエネルギーを叩きこまれた彼は撃墜された。

ついに数でも劣勢を強いられるようになり、やむを得ず彼らは撤退を決める。

「くっ、こいつらめ・・・こんどはこの戦闘データで、必ず！」

急に反転した魔導師達の姿を、遠くから後方から情報支援をしていたブルー6が捉えた。

『ブルー6より、彼らが逃げます!』

『ブルー4よりリーダーへ。落っこちた奴らも、残ってる奴らが拾い上げて行ってる』

『ブルー1、了解。追う必要は無い』

敵の撤退に安堵したようにブルー1が全員に告げ、彼らはしばらく空中を飛翔するうちに再び元の6人でのデルタ隊形へと戻る。

『ブルーポイント、ブルーインパクト。コンプリートミッション、RTB（基地へ帰還する）』

『ブルーポイント了解。ジャンプホールを開きます。上空で待機』
『ブルー1、了解』

（思ったより彼らの行動が早かった。これは少し、プランの前倒しが必要かもしれない）

敵の脅威が完全に去った事を確認して、彼らは身を翻してミッドチルダの闇夜のどこかへと飛び去って行った。

翌日、ミッドチルダでは何事も無かったかのように大勢の人々がさんさんと照らす陽光の下でまた一日を送っている。

当然機動六課も、これまで続けてきたように今日も朝から訓練に明け暮れる。

訓練が終わった後、お昼にみんなで集まって昼食を食べている途中、食堂内のテレビではニュースが放送されていた。

彼らは知る由も無いだろう、そのニュースの番組内に昨日の事件が全く報道されていないのだから。

Flight 01 : Frontier Fantasy (後書き)

なんかいきなりチートっぽくなりましたが、一応いろいろな複線はあるので心配なく。

ご意見や感想、それから誤字等がありましたら遠慮なくどうぞ。

Flight 02 : 青い衝撃(前書き)

第二話です。

新出登場人物が沢山出ますので、分からなくなった方は“Flight 00 登場人物・用語紹介”の方を参考にしてください。

新暦76年5月1日

どこまでも見渡せば、大地の地平線と海に伸びる水平線。

市街の面影は何処にもなく、スバルとティアナの眼前には機動六課よりはやや年季の入っている建物が佇んでいた。

数日前の機動六課の解散とたくさんの仲間たちとの別れは寂しくもあったが、それはこれからの素晴らし出会いをも意味している。

そう、今二人の目の前にはそれがある……。

「とうとう、来ちゃったね」

「そうね。ここが、私たちの第二の機動六課よ」

徹底的に位置情報を秘匿されて転移し、彼女たちが管理局本局の転移室の風景から次に見たのはこの景色だ。

膨らむ二人の期待に応えるように、正門には堂々と戦技研究部の表札が掲げられていた。

石畳には円の中央に6つの翼が並んで三角形を象り、ミッドチルダ語で記された部隊章が描かれていたり、それを見た二人は期待と共に緊張も高まる。

いくつかの建物からは白衣を着た技師や研究者とも見える人影があちらこちらに。

「それにしてもティア……場所、どこかな？」

「えっ？ 私、アンタについて行ってるつもりだったんだけど……」

「ハア……っていうか、広すぎだよ戦技研究部って」

「部隊の人数が管理局内でも最小なのに、この広さは何なのよ!」

ざっと見渡しただけでも、機動六課の敷地が十以上は入りそうな広大な平地に、多くの建物や倉庫、そして航空機の格納庫まであった。しかし初日から早速やってしまった、本当にこのコンビでここでもやっていけるのと改めてお互いにそういう考えがよぎる。

その時二人の耳に、近くからシャツシャツという何かが擦れるような音が聞こえてきた。

二人が植木の間から顔を覗かせると、一人の青みがかった髪的青年が作業服姿で付近を箒ではわいていた。

清掃員の人かなと、二人は顔を見合わせて意見を一致させた。

「あのーすいません」

「私たち、今日から戦技研究部に転属になったんですけれど・・・本部棟の場所ってどちらにあるんですか？　ちょっと迷子になったみたいで」

そこで二人は荷物を背にからい、その清掃員に道を聞く事にした。彼はスツと顔を上げるとあまり似合っていない帽子を脱いでニコリと笑った。

「ハハツ、大体みんな最初は迷子になるんで大丈夫。　一時間ほど前にもこのくらいの小さな子を連れた教導隊の方が、同僚に道を聞いていました」

「そ、そうなんですか・・・アハハハ。私たちも例に漏れずってことかなティア？」

「うん。それよりスバル、教導隊って・・・多分、なのはさんよね？」

（なのはさんも、迷ってたんだ・・・。）

ティアの問いかけにスバルが苦笑いを浮かべつつ頷く。

「そこにこの建物の外周に沿って伸びる綺麗な道があるでしょ？それを道なりに行って、この建物の丁度真裏のところから曲って真っすぐ行けばすぐ着きますよ」

「そうですか、分かりました。ありがとうございます！」

「ありがとうございます！清掃員さん！」

二人が駆け足で建物沿いの道を走り、建物の影へと入る。

「……清掃員？」

スバルに清掃員と呼ばれた青年は自分の姿を見つめしばらく考える。

「……んー、まあいいか」

彼はそういうと軽い笑みを浮かべて、再び箒で地面に落ちた枯葉をはわき始めた。

本部棟の応接室では、先行して戦技研究部入りしたなのはとヴィオ、そして彼女たちと対向して座る赤髪の女性が談笑を楽しんでいた。

「……へえ、それは本当に大変だったわね」

「はいセレスさん。最初は里親を探すって言ってたんですけど、私もそのうちヴィオと一緒に居られたらって、むしろ私の方がそう考えるようになってました」

「情が移るって、そういうことよね。でもヴィオちゃん、な

のはママがずっと一緒に良かったわね」

「うん。ママ、ずっと一緒に！」

なのはと話していた女性セレスが茶菓子をおいしそうに食べるヴィオに笑顔を向けると、彼女は同じように笑みを返した。

「そういえば、教導官として分隊のフォワードにはどういった訓練を？」

「最初は基礎の訓練として弾丸回避術シュートイベーションのような個人用メニューから模擬戦に至るまで様々、徐々に個人のレベルに合わせてデバイスのリミッターも解除して行きました」

「そう・・・そうになると、一年くらい経ったら相当向上している筈よね。みんな元々素質はあったんだもの・・・奇跡を起こせたのも頷けるわ」

セレスは顎に軽く手を当ててなのはが行った教導プログラムの進度を推測し、なのはが思わず照れ笑いを浮かべる。

「そうそう、それでその子達はまだ来ないのかしら？」

「え？ ああ、もうすぐ来るとは思うんですけど、ただ・・・」

なのはが部屋に掛けてあった時計を見て、少し困惑したような表情を見せる。

「ただ？」

「いえ、私も来る途中に迷ってしまったので、二人も今頃どうかなって・・・」

恥ずかしそうに苦笑するのは、それに対してセレスも合わせて苦笑い。

「やっぱり、エース・オブ・エースでも迷子になる事はあるのね・
・まあ、ここは最初に来た人には結構分かりづらいから、仕方ない
わ」

彼女がそう言った時、部屋のドアがノックされてキリツとした男性
の声が聞こえる。

「クラレンス二佐、ナカジマ二等陸士、並びにランスター二等陸士
をお連れしました」

「アル？ どうぞ」

セレスがカップをテーブルへと置き戸の方を向き直るタイミングに
合わせるかのように、返事から一拍遅れて戸は開く。

そこには二人揃って少し焦っているような表情のスバルとティアナ
が、長身に銀の短髪をもつ眼鏡の青年アルに連れられていた。

「すみません、なのはさん！」

「私たち、遅れましたか！？」

それを聞いて二人は遅刻を心配していたのかと察したのが、二
人に向けて軽く首を振る。

「ううん、大丈夫。ギリギリだけど、ちゃんと時間内だよ」

「よかったあー。あの清掃員の人に聞かなかつたら今頃危なかつ
たあ。ね、ティア」

「うん。本当に何とか助かったわ」

（・・・清掃員？ ウちに清掃員なんて居なかった筈だけど・・・
？）

スバルの清掃員という言葉に、戦技研究部のスタッフを大体把握しているセレスは思わず眉をひそめた。

「紹介します、こちらは元機動六課、スターズ分隊の・・・」
「スバル・ナカジマ二等陸士です、よろしくお願いします！」
「同じく、ティアナ・ランスター二等陸士であります！」

二人からの挨拶と敬礼を向けられると、セレスもそれに応えるために立ち上がる。

「航空戦技教導隊第四班・第11航空隊、セレス・クラレンス二等空佐です。ようこそ、ブルーインパクトへ」

この時彼女は前へ進み出て二人と握手を交わす。

「へえ、なんかいかにもお姉さんって感じの人ね。 ギン姉に雰囲気
気が似てるかな？」

「そうなの？ 私には良く分からないけど・・・」

セレスには聞こえないよう、スバルとティアナは念話で会話をする。二人はセレスに対して清楚というかクールというか、なのはとはまた違った雰囲気と同時に、誰かを教導する立場としてのなのはとセレスの似たような空気を感じ取っていた。

「どうぞ。 なのはさんの横で良いかしら？」

「はい、失礼します」

二人は持参していた荷物類を置き、なのはの横に座りながら間に座るヴィヴィオに微笑みかけていた。

「具体的なプランは後でまた発表するけど、それより前に軽く触りだけ教えておくわ。ご存知の通り、ここは戦技教導隊でも少し特殊な班・戦技研究部」

戦技研究部の具体的な活動を知っているのは、スバル、そしてテイアナはそろって軽く頷いた。

「戦技研究部は、大まかに二つのメインとなる活動を行う部署。一つは基本戦技教導官に更なる戦闘技術の教授や、教導方針の幅を広げるための訓練。そしてもう一つは、防衛術としての新たな戦闘技術の開発と確立」

セレスはフツと横を向き、大窓から外を眺める。

「ここに来る途中に、結構多くの白衣を着た人たちがいたと思うわ。彼らがこの戦技研究部の研究スタッフ。大体800人以上は居るわね」

「800人!? そ、そんなに居るんですか!」

スバルが驚いてセレスへと思わず尋ね返す。

「彼らが新しい戦技や技術を、日夜研究している人たち。大体6割の班が、交代制の24時間体制で勤務しているわ。日々進化している次元犯罪に立ち向かうには、それを上回る早さで進化しないといけないから」

次元犯罪と聞いて、三人は一樣にJS事件での記憶をよみがえらせた。

訓練を受けたから、あそこまで頑張れた。

訓練を受けて、初めて気付いた想いもあった。

訓練を受けさせて、初めて分かった“訓練”という意味。それぞれの思いが交錯する。

「それで、三人にはこの三ヶ月間に私たちとそれから研究班の一部と合同で、戦技開発の一環のプログラムに参加してもらおう」

「それって、あの・・・私たちを研究対象にするっていう事ですか？」

「平たく言えばね。でも安心して。あくまで、貴女たちに参加してもらうのは観測だけで、人体実験とか・・・そんな危険な事はやって無いわ」

スバルがかつて非道な人体実験を経て生みだされた戦闘機人という事を知ってか知らずか、セレスは彼女を安心させるようにそつと囁いた。

「それにしても・・・本当に遅いわね」

その時ふと、セレスが時計を見上げて不満そうに呟いた。

「遅いって、誰かを待たれてるんですか？」

「そうよ。しかもよりもよってここの隊長、ホントに一番しっかりしてないといけない筈なのにね・・・」

セレスのその言葉に、スバルやティアナだけでなくのはまでキョトンとしていた。

別にセレスが変な事を言ったからではない。それは・・・

「あのセレスさんが、部隊長じゃなかったんですか？」

どうやらなのはも、スバル達より長い時間セレスと話していたにもかかわらずてつきりセレスが隊長だと思いついていたようだ。

そういえば、確かにセレスは隊長だと名乗った事は無かったとは思
うが・・・

(でもなのはさんとはまたちょっと違うけど、なんか隊長っぽいな
あつて思っちゃってた・・・)

スバルもさつきセレスと握手を交わした時と言い、凜とした彼女の
態度に隊長の面影を見出していた所だった。

「え、私？ ふふつ、残念ね。私は副隊長、ここのナンバー2よ。
でも気にしないで。良く言われるの、隊長より隊長っぽいってね」

少し悪戯っぽく言うセレス。やっと気付いたねというような表情の
セレスと、一様に驚いたままの三人の表情の奇妙なコントラスト。

「それじゃあ、隊長って一体・・・」

スバルが言いかけた時、部屋のドアが軽くノックされる。

「入るよ？」

「ええ」

外から聞こえた男性の声に、軽く返事をしたセレス。
そして開いたドアの所に立っていたのは・・・

「アレ？ 清掃員さん、ですよね？」

「でも、その格好・・・」

そこに立っていたのは、スバルとティアナが道を尋ねた清掃員の青年。
だがその格好はさっきの作業着からブルーインパクトの青基調の制服になっており、さっき見た彼のどこかゆるやかな雰囲気とは制服一つで全く違うように変わっていた。

「紹介します。彼がこの戦技教導隊第四班・戦技研究第11航空隊の隊長」

「どうも、ブルーインパクト部隊長の一等空佐、イルマ・トレノと申します。ようこそおいで下さいました」

『ええええっ!?! ウソーツ!』

『まさか・・・あの人だったなんて!』

スバルとティアナが思わず念話で叫び声を上げる最中、ブルーインパクトの伝統なのか、さきほどのセレスと同じようにイルマも三人と握手を交わす。

「さて今日は初日ですので、最初に皆さんには普段我々がどういった活動をやっているのかというのを・・・」

「それは、もうやりました」

「・・・あ、そう」

危うく被る所だった。

セレスが横槍を入れ、イルマが説明しようとした事を未然に止める。

「では御三方、今回参加していただくプログラムを簡単に・・・」
「それも説明済みです! もう、私が何もしなかったとも思っているのですか?」

「あちゃー、仕事早いね」

「・・・誰かさんが遅いだけじゃないんですか？」

呆れ顔のセレスに、思わず赤面して頭を抱えるイルマ。

まるでちよっとした漫才のようなイルマとセレスのやり取りに、スバルにティアナは苦笑しつつ緊張もほぐれた。

それにしても、確かにセレスの言った通りこの二人が並べば明らかにセレスの方がオーラというか何というか、とにかく隊長っぽいのはセレスの方だと、三人は一様にそう考えていた。

F l i g h t 0 3 : S p e e d o f L i g h t (前書き)

ここでストックが尽きます。

更新はしばらく後になる予定なのでご了承ください。

新暦76年5月1日 PM 0:20

ようやく二人の漫才(?)が終わった。

案内された応接室に居る五人プラス子供一人は、席についてイルマとセレスの説明を受ける。

「では改めて・・・具体的にどういったプログラムかというのを、話して行きます」

そういうとイルマ達となのは達の間のテーブルの上に、光の枠で囲まれたモニターが現れ、そこに幾つかの情報が表示される。

「主に2つのプログラムがあります。一つは、高町教導官を教導官として、あとのお二方がその教導を受ける、これは今まで機動六課でやられていた事と同じような事。そしてもう一つが、三人を一チームとして我々ブルーインパクトとの模擬戦を予定しています」
「つまり、私たちがこれまで機動六課でやってきたような訓練と、みなさんと合同の模擬戦形式の訓練をするっていうことですか？」
「ええ、そう言う事です。ただ、日数的には我々との合同訓練の方が少なくなり・・・大体割合は2対1から3対1ってところですかね」

イルマの説明によると、メインはこれまで機動六課でやってきたようななのはの監督による訓練。

『ホントに八神部隊長が言ってたように、機動六課の期間延長って感じだね、ティア』

『そうね・・・ッてスバル、まだ話し中!』
『あ、ゴメンゴメン。アハハ』

念話でスバルとティアナが隠れて雑談をかわしている時も、イルマの説明は続く。

「・・・それではその後者の方、我々が日頃やっている3対3の模擬戦というのを説明しますが・・・実際に見てもらいましょうか。ではどうぞ、あちらに」

そういうとおもむろに立ち上がりイルマが笑顔で部屋の外へと案内を始める。

「今日の午後に、私たちの3対3での模擬戦があるのよ。いろいろと話すより、実際に見てもらった方が早いと思うから、皆さんには今日は見学という形で参加してもらいます」

「わかりました。ご参考にさせていただきます」

と、なのはが答えて部屋を出てから数分も歩くか歩かないうちに、もう一つの部屋の前へと辿り着いた。

扉の前には“第11航空隊”と書かれた看板まである。

部屋は先程の部屋とは違い、白い壁に複数のモニターやパソコン、さらには長机が一つあるだけであり、それを取り囲むように数人の男女が椅子に座っていた。

そしてスバル達はその部屋に入ると、その場にいたブルーインパクトの隊員4名と、スタッフの二人が起立し敬礼で出迎えた。

「なおいれ!」

イルマのびしっとした一声に、他の隊員達は同時に敬礼を止めそし

て椅子へと座った。

このときだけは、本当にイルマが隊長のように見えた。隊長
なんだけど。

「では5月1日、午後のブリーフィング（打ち合わせ）の時間です
が・・・こちらの三名が今日から三ヶ月間、訓練生ということで転
属になりましたので、皆さんどうぞよろしくお願いします」

軽く挨拶をしてイルマがブリーフィングを始めるかと思いきや、彼
の左隣に並んで座るスバルとティアナ、なのはと彼女の膝に座るヴ
イヴィオに皆の視線が向く。

「元機動六課、スバル・ナカジマ二等陸士です。 まだまだ至らな
い所がありますが、よろしくお願いします」

「同じく元機動六課、ティアナ・ランスター二等陸士です。 ブル
ーインパクトの皆さんと御一緒出来、光栄であります！」

「高町なのは一等空尉。 本日只今より、第十一航空隊へと出向とな
ります」

立ち上がった三名の挨拶が終わり、今度はブルーインパクト側のま
だ初対面となる四名とスタッフの二名がなのは達の方を向き直る。

「アル・ボーイング三等空佐。 三ヶ月間、よろしくお願いします」

眼鏡をかけた銀髪の青年が、最初に挨拶をし・・・

「一等空尉、ブラット・レクサスだ。 機動六課の華々しい活躍は
聞いている、こちらこそよろしく頼む」

長めの茶色の長髪に、やや気障っぽさを見せる青年が三人へ敬礼を向け……

「私はルノア・インテグラ、一等空尉です。」

続けてグリーンのツインテールの少女と……

「マリノ・クラレンス一等空尉です。三ヶ月間、一緒に頑張りましょう！」

赤いショートヘアの少女が続ぎざまに挨拶を行った。

「クラレンス……ってことは、もしかして？」

「そう。妹よ」

スバルがセレス一連のやり取りを見ていたセレスを見ると、彼女は首をやや傾けるような仕草で笑顔で答えた。

「さて、紹介も終わった事ですし……そろそろブリーフィングを始めますよと」

イルマが数枚の紙を挟んだファイルを取り出したと思えば、それは部隊員の全員がほぼ同時に机の下から取り出していた。

実に準備が良いというか、全員はイルマの言葉に合わせて機敏に動くようだ。

「5月1日、午後のブリーフィング始めます。午後は3対3の模擬戦形式による訓練。ミッションスタートならびにテイクオフは1300時を予定……」

はきはきとした口調で必要事項を述べるイルマと、それを書き留めるセレスらの隊員達。

「えー、いつものように・・・スクランブル発生の場合は、基本隊形^リCで空中集合。 転移が必要な場合は、1、4、5。反対側を2、3、6として臨時編成ののち、転移態勢を取ります」

『なのはさん、スクランブル態勢ってというのは、アラート態勢とどこが違うんですか？』

『スクランブル態勢は、移動速度も地上より速い空の脅威に対してのアラート態勢のようなものかな。 アラート態勢と、やっている事はあまり変わらないよ』

『そうなんですか』

イルマ達が淡々とブリーフィング項目をこなしているうちに、スバルは“スクランブル”という新出ワードを尋ねた。

そして彼女はなのはから念話で返答を聞き頷いていると、ブリーフィングを終えブルーインパクトの隊員達がぞろぞろと立ち上がる。

「では、各員ミッションの準備を」

「了解」

ブリーフィングが終わると他の隊員達はそそくさとどこかへと行ってしまった。

唯一イルマと研究部のスタッフだけが残り、延長の打ち合わせをしている。

ほんの数分ほどでそれも終わり、イルマはようやく席を立ち上がる事ができた。

「それじゃ、模擬戦の準備がありますので。　ああ、見学はこの屋上が一番見やすいから、そちらでどうぞ。　風も気持ち良いですからね」

そう笑顔で言いつつ、イルマは残っていた部隊のスタッフになのは達を案内するように指示を出すや否や、彼も他の隊員達同様に忙しそうにその場を後にした。

彼のその指示通り、屋上へ通じるエレベーターを下りて薄暗い廊下を行くと、開いたドアの先から眩い光が差し込む。

「うわーあ、景色良い！」

「ホント、ミッドのリゾート地域みたいね」

スバルにティアナが周囲を見渡すと、研究部のある盆地を囲むように新緑に覆われた山肌が平行しており、飛行場がある反対側はブルーの海に面していた。

そして波風で揺れる水面が、キラキラと宝石のような煌めきを放っている。

「ほら、ヴィヴィオ。　綺麗ね」

「うわあ。　キレイ！」

なのはもヴィヴィオを抱えて、その高級リゾートにも勝るとも劣らないその景色を見てお互い瞳を輝かせる。

「あれ？　ねえティア、あっちに誰かいるよ？」

「ん？」

スバル達が広い屋上の向こう側へと目を向けると、何やらモニターを操作して作業をしている白衣の女性がそこにはいた。

「あのー、すみません」

「ごめんなさい、今忙しいの。もう少し待って！」

「は、はい！ すみませんでした」

緑髪の長髪を後ろで束ねた髪型の白衣の女性に待つよう注意され、スバルは思わず軽くだじろいだ。

『第1棟から第12棟まで、全観測要員、スタンバイ完了』

『ブルーポイント、ミッション実施とブルーインパクトならびにスワロー1と2の離陸許可承認。 テイクオフは13時ジャスト』

『医療班、第一エプロンにスタンバイ完了です』

「了解。開始まであと5分です、そのまま待機してください」

どうやら女性はオペレーターの一人らしく、絶えず飛び込んでくる通信に戸惑うことなく受け答えを続けている。

やがて通信が止み静かになると、彼女はモニターを幾つかを残して全て消し、スバル達の方へと向き直る。

「応対できず、すみませんでした。」

「いえいえ、私が無理に話そうとしたのがいけないだけです」

「ところで、貴方たちが今日から来る事になっていた訓練生さんですか？」

その女性の問いかけにスバル達は自己紹介も含め、屋上に来るに至った経緯を軽く説明する。

「そうだったんですか。あ、申し遅れました・・・私、戦技研究部所属の技官セリーナ・トライハートです。セリーナとお呼びください」

セリーナと名乗った彼女は、イルマ達よりやや年上のお姉さんという風に見えた。

「よろしくお願ひします。早速何ですがセリーナさん、ここでやっていたのは遠隔サポートですか？」

「ええ。それと、観測サポートにミッションの総合オペレートまで・・・最初がかなり忙しいんです」

「それを1人で!? 普通、どんなに少なくても3人でやる事ですよね?」

「良いんですよ。もう慣れましたから、大丈夫です」

驚くスバルやなのはに、セリーナは笑顔でそう答えると彼女が開いていたモニターの一つに通信が入る。

『ブルー1、ミッション準備完了』

『ブルーインパクト、ブルーポイント、作戦開始許可。 1300時ジャスト』

「ミッション総合コントロール、いつでもどうぞ」

最後にセリーナがブルー1ことイルマや、ブルーインパクトの司令部であるブルーポイントからの通信を聞きGOサインを出す。それを合図にか最初に聞こえてきたのはバタバタというヘリのロー

ターが高速で回転して、格納庫付近から大空に飛び去って行く姿だった。

そのヘリコプターが飛行場の滑走路上で、二機が逆方向へと飛んでいく。

「あのヘリコプターって・・・？ 六課のとは違う」

六課でヴァイスや、ゆりかご戦時にはアルトが操縦桿を握っていたJF704式とは、ボディの色や特徴的な流線形の形、回転するローターの枚数から違った。

「ええ、そうですね。あの機体はAE808式ヘリコプターです。戦技研究部で2年前に開発し、この部隊だけで実戦配備をしている、まあ試験機のようなものです」

簡単に解説するセリーナ。一方のスバル達は、もしあのヘリを元六課のヘリパイロットのヴァイスが見たら一日は興奮状態が収まらないのではと、思い出すとちよつとした笑いが込み上がってくる。

「あのヘリはこの模擬戦に？」

「ええ。簡単にいえば、あの自分たちのヘリを守ってなおかつ相手のヘリを落とさないといけないんです。相手のヘリに疑似的に表現した攻撃を1回当てるか、相手のチームの魔導師を一人3回攻撃を当てて全員を戦闘不能にすれば勝ちです」

ヘリも遠ざかり、豆粒くらいの小ささに見えるくらいまで遠ざかった時、屋上で影となっている一階の広場にブルーインパクトの6人が姿を現した。

既に全員が個人によって細部に違いはあるものの、お揃いの青を基調とした防護服バリアシヤケットを纏っており、模擬戦の準備は万端と言ったところ

だろう。

その様子を見ようと柵に寄りかかるスバルとティアナに気付いたイルマが、軽く笑って二人へと手を振る。

そして彼が全員にアイコンタクトでスタートの了承を得ると、彼は一呼吸置いて通信で開始の合図を告げる。

『ワン・テイクオフ　　ナウ!』

“ナウ”つまり“今”というイルマの一声で、6人は一斉に大空に飛び出す。

そして6人は飛行場までひとつ飛びした直後、イルマ達は編隊を二分割してそれぞれ左右へと飛んで行ったへりを追いかける。

「セリーナさん・・・模擬戦もう、始まったんですか？」

「ううん。あれからまた両チームが滑走路上に飛んできて、そしてお互いがクロス・・・それが、模擬戦開始の合図よ」

なのはの質問に答えたセリーナの言うとおり、両チームがお互いに向向するように飛ぶ方向を変え徐々に接近して行く。

そしてイルマとブラットにルノアのチームと、セレスとアルにマリノのチームが真っすぐ伸びる滑走路を音速以上の相対速度で直交した。

『チーム1ブレイク』

『チーム2ブレイク。　　さあて、勝負よイルマ』

雄大に散開した6人が、空中に軌跡を描いていく。先に仕掛けたのはセレスが率いるチーム2だった。

「ジャベリン・バレット!」

” Javeline Bullet ”

アルが振り上げたデバイスから多数の細長い光線がチーム1のヘリ、スワロー1へと向かっていく。

『5カット、4ゴー・LRアタックポジション』

飛んでいくアルの攻撃が突然空中で飛び散り、白煙の中からブルー5ルノアが飛び出す。

『マイティ・ストリング！』

” Mighty String ”

ルノアのデバイス“スカイ・スクレーパー”が開いた魔法陣から無数のバインドが伸び、突出したセレスを狙う。

『甘い！』

それをセレスは素早い空中機動で回避すると、追撃の手ををルノアへと向ける。

しかし彼女に攻撃をする前にセレスは空中で静止し、真上を見上げた。

『来るのは分かってたわ！』

セレスの上空から、イルマが彼のデバイス“レヴィン”で数発の弾丸を放ちながら突撃してくる。

彼を視認するとセレスはイルマの攻撃をかわしつつニイツと笑みを浮かべイルマへ攻撃を加えるため、デバイス“セイヴァー”にエネルギーをチャージする。

『そうか、さすがに三度目だからな。でも・・・今日のフォーメーションは新しいんだ』

セレスがその言葉に眉をひそめた瞬間、イルマは素早く姿勢を翻しセレスの攻撃ラインから離脱する。

『えっ!?!』

『ブレイカー・スピア!』

そしてそこへと飛び込んできたのは、防御に専念していた筈のルノアの一撃だった。

ルノアの槍先が進ったエネルギーが空中で爆発を起こし、それを地上から見ているスバルとティアナは思わず声を上げた。

「隊長が攻撃すると見せかけておいて、防御に専念していた筈のもう一人が攻撃を入れる。すごいチームワーク。でも・・・多分避けられた」

なのはが何かを感じ取っていたのと同様に、セレスを攻撃したルノアも違和感を感じ取っていた。

「外した・・・!?!」

ルノアの見つめる先の煙が晴れていくと、そこにはツインブレード状に変形したセレスのデバイス“セイヴァーフ”で、ルノアの槍先が止められていた光景だった。

「危なかったわ。まったく攻撃すると見せかけてフェイントなんて、いつもながらやってくれるじゃない!」

『うんさすがウチのフロントだ、ちょっとタイミングとかを改良

しないといけないかな・・・」

セレスへの攻撃が失敗に終わったのを見て、イルマは空中を飛びながら管制サポートを行っているセリーナに尋ねた。

「ええ。今の攻撃データ、送っておきますので後で確認してください」

『ラジャ』

” Want you switch to the Second pattern of attack in this battle?” (模擬戦の攻撃を第二パターンへと切り替えますか?)

「そうだな、そうしようレヴィン！」

” Roger that” (了解しました)

レヴィンからの進言もありイルマは次の攻撃パターンに入るため、再びヘリと隊員達をサポート出来る位置へと向かう。

その間にブラットが長距離砲でヘリへと砲撃を放つが、それはマリノのシールドで防御されてしまった。

「すごい・・・防御していると思ったら、素早く攻撃に変えた？」

「いいえ、あれは元々トレノ隊長とレヴィンさんが考案したフェイント攻撃ですね。まあ相手が相手だけに、ちよつと失敗気味のようですけど」

「つまり、防御すると見せかけて、実は攻撃を仕掛けていたのはトレノ隊長のチームだったんですか」

「ええ。まあ、そう言う事です」

模擬戦の一部始終に思わず食い入るように上空で繰り広げられる戦

闘を見つめていたスバルとティアナに、セリーナがコンソールを操作しながら軽い笑みを浮かべて答える。

またセリーナが言うには、イルマが数時間かけて考案した作戦もセレスに阻止される事が多いのだとか……。

「しかし個人的な火力なら、クラレンス副隊長が一番トップです。ですから、トレノ隊長の妙案も上手くいかない時が度々あるんですよ」

「そうなんですか」

「はい。ですから、この模擬戦はいつもどちらが勝つかなんて、もう十年くらいの付き合いになる私でさえ……」

セリーナがそう答えていた時だ……

突如赤く”SCRAMBLE”と表示された警告画面が開くと同時に、基地内にピーツピーツという短かい音と長いウーツという長音を組み合わせたけたたましい警報が鳴り響き始めた。

スクランブル発令、赤色灯が点灯し異常事態の発生を告げるサインだった。

あまり聞きたくないようなアラームを聞いて、なのは達の緊張は一気に高まった。

「なに？ なんなの!？」

「スクランブル……どうして?」

『ブルーポイント、詳細を!』

スバル達が困惑を浮かべる中、イルマが非常事態の発生を素早く察知し、通信で司令部にスクランブルの詳細を尋ねる。

『南海上の沖合約70kmの地点に、次元跳躍と思われる異常魔力を検知。』

『同時に、その地点にて艦艇らしき物体が出現。 容姿からおそら

く輸送船であると推定されていますが……」

『待つてください！ 未確認船の後方から、多数の熱源感知！ この反応……まさか!?!』

ブルーポイントオペレーターの一人が、信じられないという口調で驚きの声を上げた。

「どうしたの？ 一体何が？」

『ブルーポイントよりブルーインパクト、新出の反応はガジェットドローンです!』

「ガジェット!?!」

「そんな！ あれはレリックの封印で活動を停止した筈でしょう!?!」

『しかし……先にミッドチルダで起こったJS事件で使用されていた数種類のガジェットと、極めて酷似する観測データです。』

隊司令部ブルーポイントからのガジェット出現の報告に、スバルにティアナは驚きの声をあげて思わず聞き返す。

『原因究明は後だ……現場へ急行する必要がある。ブルー1よりブルーオール、ミッションアポート（作戦中止）、メイク・デルタ（デルタ隊形へ）』

イルマはその一報を極めて危険度が高いと判断し、そのガジェットが出現したという現場へと急行するため模擬戦を中止。

飛行場の上空でバラバラだった隊員達は上空を飛ぶイルマの元へと素早く駆けつけ、空中で6人のデルタ隊形を作り現場へと飛んで行った。

これが再び訪れる脅威との戦いの幕開け、そして束の間の平和の終焉を現していたとは、この時誰か気付いた人は居たのだろうか。

「なのはさん！ ガジェットが出るなんて、どうしてなんですか？」
ガジェットと聞けばあのJ.S事件を嫌でも思い出してしまう。
あんな事件はもう二度と起こされないようにと、丁寧にレリックは
封印処理を施した筈だった。
ところがそのガジェットらしき飛行物体は、今も刻一刻と接近して
いる。これは事実だった。

「わからない。もしかしたら、私たちがまだ封印していないレリック
があったのか、それとも・・・」

『レリック以外の別の何かを、追うためのガジェットか・・・いず
れにせよ、船に何かあると考えた方が良いな』

イルマの通信になのはは、そうだと思えますと言うような表情で頷
き通信画面を見上げる。

「トレノ隊長、私も行きます！」

これは多分、私たちのやり残した仕事だと、なのはは直感的に感じ
取っていた。

しかしそう思ったのはなのはだけでは無かった。

「なのはさん、私たちも行きます！」

「私たちも・・・行かせてください！」

スバルにティアナも二人揃ってなのはに真剣な表情で訴えた。

「二人とも・・・」

それを聞いてなのはが困惑と感謝が半々の表情をしていると、三人のやり取りを聞いていたブラットが溜息交じりに答える。

『まったく、噂に違わず突撃思考というか、なんというか・・・しかしなあ、隊長？』

『ああ、願っても無い要請だ。よろしく頼むよ、元機動六課のエンジニア達。協力感謝する！』

イルマの返答を聞いて、三人は一樣に気持ちを引き締め同時に笑顔を浮かべた。

ただ一人、ヴィヴィオだけは心配そうに三人を見つめている。

心配という言葉だけでは足りない心情が、ヴィヴィオと彼女の母親になったなのはの心にも存在した。

「ママ・・・」

ヴィヴィオに声を掛けられてなのはは、すまなそうな表情でヴィヴィオの方を向く。

でも、あのガジェットがあるとと言う事はまたこの子が危険な目にあう事になるかもしれない。

（だから・・・そうなる前に、今度こそ絶対に守り抜いて見せる！）

「ヴィヴィオ、ゴメンね。でも、大丈夫・・・すぐに帰ってくるから、セリーナさんと一緒にお留守番、できるかな？」

「うん・・・やくそく、だよ」

あの時のように、なのははヴィヴィオを安心させるように笑顔を向けながら指切りを交わす。

『高町一尉は、このまま我々と合流してください。それと、陸戦魔導師のお二人さん・・・聞こえますか?』

「はい」

イルマからの問いかけにスバルとティアナもそろって返事を返す。

『二人には、模擬戦で上がっていたへりを回す。それに乗って、後に続いて欲しい』
「わかりました!」

再びあの空へと戻る　あの時と同じような決意をなのはは秘め、大切なパートナーであるレイジング・ハート・エクセリオンを優しく握りしめる。

そして・・・

「レイジング・ハート、セット・アップ!」

” Standby , ready . ”

彼女の想いに答えるようにレイジング・ハート・エクセリオンが桜色の輝きを放つ。

” Barrier Jacket , Aggressive Mode ! ”

そして神々しい光が引いて行くと、そこには白を基調としたバリアジャケットに杖型に変形したレイジング・ハート・エクセリオンを持つなのはの姿があった。

『ブルーコントロールから高町一尉、離陸許可は既に取ってあります。それから、コールサインは六課と同じ“スターズ1”で宜し

いのですか？』

「はい。 スターズ1、高町なのは、行きます！」

一拍呼吸を整えると、高速移動魔法アクセルフィンの輝く羽を散らし、なのはは大空に舞い上がった。

程なくして屋上へ、後方のハッチを開いたヘリが降下して来る。

イルマの指示通り、スバルとティアナはそれへと乗り込んだ。

離れていく戦技研究部の施設。

その一角の屋上には、どんどん小さくなっていくセリーナとずっと心配そうにこつちを見つめるヴィヴィオの姿があった。

（ゴメンね、ヴィヴィオ。 でも私、こんどは約束、絶対に守るから！ 私は絶対に落ちないよ・・・だから、今度は安心して待っていて）

一言、願うようになのはは心の中でそう告げ、気持ちを切り替えてガジェットが来ているという南の空へと飛んで行った。

Flight 03 : Speed of Light (後書き)

今回の更新は未定ですが、数週間以内を目指しています。

これまでの、ご意見・ご感想をお待ちしております。

ご指摘は、お手数ですが感想欄ではなくメッセージの方でお願いいたします。

Flight 04 : Mission Start

新暦76年5月1日 PM1:20

陽光がさんさんと輝く中、高高度を行く6人の編隊。青空の色を反射してブルーに輝く海は、全く開発されていないため世界屈指の透明度を誇る。

その海に輸送船らしき船が海上へ突然出現したという一報を受けて、イルマ率いるブルーインパクトはスクランブル出撃を行った。

戦技研究部の施設は先進性の高い技術開発を行っているため、そのデータが盗まれては大変な事になりかねない。

おかげで戦技研究部の施設への接近に関しては、本局や地上本部タワーと同程度の制限が課せられている。

『ブルー1より、ブルーオールならびにスターズ1へ。左に目標の船を発見した・・・かなり傷んでる』

『はい。外壁の損傷が著しいです・・・おそらく、ガジェットが内部に侵入しようとする際に出来た傷かと思えます』

輸送船の予想だにしなかった損傷具合に、現場に駆け付けた全員が思わず息をのんだ。

『ブルー1よりブルーポイント。これはむやみやたらに、退去勧告はしない方がいいかもしれない』

本来なら民間人や民間船舶航空機などの高レベル制限地区への接近は許されておらず、退去勧告や下手すれば攻撃に発展する場合もある。

しかしこの時ばかりはイルマはこの船が、もしかしたら何かに追わ

れてきたのではないかと推測した。

そしてその追う側の存在が、ガジェットだとしたら……うまくつじつまが合う。

もしそうならば、また再び危険な海域へと引き返せと言うのはあまりに酷な話だ。

『ブルーポイントより、ブルーならびにスターズへ。多数の周波で交信を試みましたが、応答ありません』

『了解。ガジェットの本空域到達は？』

『あと約5分30秒です。その数、ゆうに100を越えています』
もう5分も無いのか……。

通信妨害の様子は見られないが、だからと言って中に人が居ないとも限らない。

眼下にポツンとただ一隻、海の上を漂流するボロボロの船を見てイルマは頭を悩ませる。

『ブルーポイントより、新たに反応あり！ 映像出します！』

その時二度ある事は何とやらで、隊司令部がまた何かを発見したようだ。

そして輸送船へ向け飛行するイルマ達は、目の前に開いたモニターの映像を見て驚いた。

『ガジェット……それもコイツは新型の！？』

『大きいわね。それに、あの翼についているのは多分爆弾よ。同類のを、JS事件で押収した未完成ガジェットとして見た事があるわ』

更に息をのむセレスに、セリーナが幾つかのモニターを開いて解説

を加える。

それによると後方から出現した新型の爆撃機型ガジェットの大さを比較すると、空港で見かけるような大型機と変わらないくらいの大きさだった。

『それに、あの機体は戦闘機型のガジェット？型を機内に多数格納している筈よ。戦力が不足すれば、またあの中から多数のガジェットが出てくるかもしれない。みんな、注意して』

『チツ、まだ更にあるって言うのか。どうするよ隊長』

『隊長、ガジェット第一波のETA（到達予定時刻）まで、あと5分だ』

ブラットに続いてアルまでもイルマに指示を求める。

こうなれば、考えられる事は一つだった。そう考えてイルマはようやく腹をくくる。

イルマはブルーインパクトの編隊の後方から接近し、少し離れた横を飛ぶなのはに視線を向ける。

『上空の敵は自分たちでどうにかする・・・』

『え？ それじゃ、私たちは・・・？』

まさかまた見ておくだけ、なんて事は無いとは思うがそれでもなのはは一瞬戸惑った。

『決まっているでしょう？ ガジェットがやって来てるんだから、

あの船にはロストログアか、それに似た何かがある可能性が高い。』

『こつちで勝手に決めて申し訳ないが、それが一番効率は良いだろう。スターズは、あの船の内部を探索をしてくれないか？』

確かに急な申し出だが、自分たちはそういう状況に対応するために

これまでに訓練を重ねてきた。

多分イルマの言葉の中には、そういう事への一種の期待に似た思いが込められているのかもしれない。

やるしかない・・・なのは黒煙を上げる船を一瞥すると、後方から接近するへりに乗るスバルとティアナに話しかける。

『二人とも、聞いた？』

『はい』

『私と三人で、船内に進入するよ。へりのパイロットさん、聞こえますか？』

『はい。こちらスワロー2』

通信に出た短髪の男性が、なのはの問いかけに応答した。

『二人を降ろすため、船に降下して』

『了解。あと3分で着きます』

なのは3分と聞いて、先程聞いたガジエットの到達予想時刻を思い出した。

戻ってくるまでは間に合わない・・・でも、今は任せてくれというイルマの言葉を信じるしかない。

なのはが南の上空を振り返ると、遠くを飛ぶブルーインパクト隊員達がガジエット迎撃の為に高度を上げていると事だった。

『さっきも伝えたように、4は船外でスターズの直掩についてください』

『了解した。んじゃ、みんな頑張れよ』

へツと軽く鼻を鳴らして手を振り、ブラットがライフル型に変形したオウルズ・アイを片腕に船の方へと向かっていく。

その様子を見てこれであつちは大丈夫だろうとイルマは、思わず安堵の表情を浮かべる。

さて、それでは問題はこつちだ。

イルマは気持ちを引き締め、再度前方を見つめる。

前方の上空から多数のキラキラと何かが光っている。

航空機型ガジェットだ。それも水平線のラインを覆い尽くす程、膨大な数だ。

『ブルーポイントよりブルーインパクト。警告は流しましたが無視されたので、攻撃を許可します』

『ラジャ。ブルーインパクト・エンゲージ、ブレイク・レディ
ナウ！』

ブラットが後方に退き、残った五人はガジェットへ向かつて攻撃隊形に変化するために散開していく。

その様子は、大空に花が広がるようにそれぞれの方向へと広がって行く。

「着陸ポイントまで、あと1分です」

操縦士のカウントを聞き、ティアナが後方に開いたハッチから外を見ると眼下には、後ろに広い甲板がある船の船体が見えた。
あそこになら、ヘリも降りられそうだ。

『甲板へ降ります。お二人はスタンバイを！』

ヘリパイロットに促され、スバルとティアナは覚悟を決めてデバイスを握り締めるとそれを掲げた。

「いくよ、マツハ・キャリバー！」

「頼むわよ、クロス・ミラージュ！」

” Set up!”

二人のデバイスの宝石状の部分が、スバルは青とティアナはオレンジに輝くと、その光がヘリから溢れだすばかりに広がり二人を包む。次の瞬間そこには各々のバリアジャケットを着た二人が、徐々に迫ってくる船の床を眼下に見据えていた。

ガンという少しのショックの後、ヘリは無事に甲板に着陸できたが、ヘリから降りて甲板に降り立ったスバルは足元に真つ先に違和感を覚えた。

「アレ？　なんか少し、傾いてない？」

「ホントだ。　急ぐわよスバル、この船・・・沈むわ！」

損傷によって生じた破孔から浸水が始まり、船体を僅かに右へと傾けていた。

ティアナの言うとおり、これ以上浸水が進めば短時間で船は沈没する可能性がある。

もし内部に生存者がいるまま沈めば、生存は絶望的となる。

「二人とも、待って」

上から声がし、スバルとティアナが振り向くとなのはが甲板に降り立つところだった。

降り立ったなのはは声には出さなかったものの、スバル達が先に感じ取っていた船体の傾斜を感じ取り途端に表情を引き締めた。

「船内を探るよ。　今、船内はセリーナさんがスキャンで確認している所だから、私たちは先に船内に進入したガジェットを片づけ

よう」

「はい。でもなんか、なのはさんと一緒なら安心するなあ」

「私も。あの時は一人で三人も相手にしないといけなかったからね」

ティアナの言う“一人で三人も相手にしないといけなかった時”は、聖王のゆりかご起動と同時に地上本部目がけて展開した戦闘機人のうち3体との戦闘の事だ。

Sクラスの魔導師さえ命を落としかねないという危険な戦闘機人に対して、ティアナは冷静に機転を利かせて見事その三人を無力化する事が出来た。

「もう、ティアナまで……。戦闘は何が起こるか分からないんだから、油断は禁物よ」

「あ、あー……。わ、分かってます。分かってますってば、アハハ……」

「すみません。つい……」

二人のあわてたりアクションに、なのはは苦笑を浮かべると火災が起きているせいか熱気が伝わってくる内部を見据える。

「それじゃ、行くよ?」

「はいッ!」

スバルとティアナの力強く揃った返事を頼もしく感じ、なのはは二人と共に船内へと進入していった。

三人が船内に突入したのを、ずっと隊舎の屋上から見守っていたセ

リーナは確認すると、すかさず画面を船内での活動をサポートできる物へと切り替える。

『スターズは船内に突入しました』

『ラジャ。 セリーナ、サポートは向こうについてくれ』

『良いのですか？』

『君がスターズのサポートについてくれた方が安心する。 小さな女の子も心配そうに見てるだろうから、早く安心させてあげれば良い』

イルマに言われ、セリーナは「えっ？」と軽く声を上げ、何かに気付いたようにセリーナはふと後ろを振り返る。

セリーナが開いたモニターの一つに映るなのはの姿を、ヴィヴィオは胸に手を宛てて祈るようなポーズでずっと見つめていた。

きつとなのは達が無事に帰ってくるように、じっと画面を見て祈っているのだろう。

その様子を見てセリーナはフツと軽く下を向いて、自分のやるべき事を見定めた。

『そうね……。 それじゃ、私はスターズを全力でサポートします』

『よろしく頼む』

通信を終えて軽く笑みを浮かべたイルマが前を見据えると、もう黒い粒のように多数の飛行する影が多数見えていた。

そして次の瞬間、前方に見えるガジェットの翼にマウントされたミサイルらしき物体が、翼から切り離されてこちらへ飛んで来る。

空中に白煙のラインを描いてミサイルが飛んでいく先、それは……

『ブルーリーダー、避けて！』

照準はイルマに向けられていた。それに気付いたセレスがイルマに回避を促すが、イルマは真つすぐに飛行したまま一向に回避しようとしなない。命中まであと三秒と迫った時、相変わらず悠然さを見せるイルマの意思を受けたデバイス“レヴィン”が発光する。

”Stealth haze”

レヴィンが呼応した瞬間、イルマが突然まるで空気に溶け込むようにその姿を消した。

イルマの姿が消えたため、彼を追尾していたミサイルは目標を喪失して迷走、やがて空中で爆発した。

今のがイルマの幻術の一つ、ステルス・ヘイズであった。

ステルス・ヘイズは可視光を含むありとあらゆる光や電波などを反射させずに受け流す事が出来るため、相手からすれば視覚からもまた赤外線や電波などからでも本当に消えたように錯覚してしまう。

そのヴェールに隠れたまま、イルマはレヴィンの撃鉄を起こして狙いを定めると、銃口に青白いエネルギーが収束する。

”Energy bullet”

ダンツ、ダンツと続けざまに二発放った魔法弾。

何も無い筈の空間から突然現れた魔法弾を受け、ガジェットはその場で爆散。

ステルス・ヘイズを解除したイルマは、ガジェットの真上を取っていた。

真上に現れたイルマを狙うため、ガジェットが急角度で上へと飛行角度を変える。

イルマもそれを迎撃するために再びエネルギーを収束するが、上か

ら何かが接近してくるのを感じ取り後ろへと下がった。

” Distorsion slash ”

鋭い煌めきが無数に上空から降り注ぎ、それを受けたガジエットの一群がバラバラに切断され爆発した。

キンツという音がシルマが見上げると、日本刀のような形状のデバイス“マーヴェリック”を鞘へと直すアルの姿だった。

「いつも突出するなと言ってるのは、どこの隊長だったか？」

「そういう君も、アタックのコールを忘れていたぞ？」

イルマとアルは、お互いに皮肉を言いあいながら背中を向けあう。

その二人を取り囲むようにガジエットが滞空し、二人はデバイスを構える。

分かってはいたがやはり囲まれたか・・・アルの表情に緊張が走る。そしてガジエットの銃口の部分が光り、パルスレーザーが二人目がけて撃たれようとした時だ・・・

” Sunlight slug ”

不意に空が光ったと思ったたらイルマ達を取り囲むガジエットの群に、青空から幾本もの眩いレーザーが降り注ぎ、その鋼鉄のボディを紙切れのように突き破った。

(・・・！この攻撃は)

そしてレーザーがスウツと消えた瞬間、光線に穴をあけられたガジエット？型は一樣に爆発した。

煙が晴れるとそこにはセレスが、半ば呆れ顔で滞空している。

「ちょっと、何いきなり窮地に陥ってたのよ！」

「別に窮地ではない」

セレスの少しきつめの物言いに、アルがやや軽く返した。
ムツとなる二人の間に、不穏な空気が流れる。

「まあ、そんな事より。左右はルノアとマリノ、そして砲撃でブラットが頑張ってくれている。それなら気兼ねなく、本命を叩き落とせる」

イルマが取りなすと彼らの前方には、巨大爆撃機がだんだんと近付いて来る姿がハッキリと見えた。

その数およそ10機、翼部には十数発の大型爆弾が大量に搭載されている。

きつとアレで船を文字通り海の藻屑にしようつもりなのだろう。だが傷ついて傾いた沈みかけの船に対して使うには、アリの殺すのに魔法を使うのと同じように余りにも過剰な武装だった。

(そこまでして、葬りたい何かがある・・・というわけかな?)

イルマは後ろ目に、また更に傾きを増した船を見つめる。

そして余計な事は考えるまいと彼は迫ってくる爆撃機の編隊へと振り返った。

『ブルー1から3まで、ブレイク・ナウ!』

三人は雲を突き抜け、爆撃機を迎撃する態勢を取るために散開。

そのイルマ達を迎え撃つため、残存の機体や爆撃機からもガジェット?型が多数発進してきた。

更に過酷になるであろう大空の戦場へ、三人はそれぞれの方角へ広がって行った。

Flight 05 : 遭遇 Encounter

新暦76年5月1日 PM1:45

遙か彼方で鳴り響く遠雷のように、時折ボンボンツという爆音が船内を移動するのは達にも聞こえていた。走って船内を移動していると、鋼鉄製の扉が捻じ曲げられるように破られている個所が幾つもあった。

「この痕跡・・・ガジェットね！」

「うん。そうだね・・・ロック装置に侵入しようとした形跡もあるから、ガジェットが狙ってる物はきつとこの先よ！」

なのはがティア達を伴って船内を駆けていると、少し走ったところで向こうから来る何かに気付いた。それと同時にセリーナから通信が入る。

「スターズ、気を付けてください！ ガジェットの一部分が貴方たちを捕捉、一部の戦力が反転。ガジェット、来ます！」

「スターズ1、了解。セリーナさん、引き続きサポートをお願いします」

「はい！」

長く続く回廊の奥、そこから何かキラキラと反射する何かが接近してくる。

細長く角が丸くなった円柱状の青白い物体が、床の上を滑るように浮遊して進んでくる。

「ガジェット？型！ やっぱりあれも居たんだ！」

「二人とも、来るよ！」

なのはが注意を促したのと同時に、ガジェットから一斉にパルスレーザーが放たれた。

” Round shield ”

なのはが右手を前に掲げ、飛んできたレーザー攻撃に対してシールドを張ると、飛び込んできたレーザーはその障壁に当たって消滅した。

そして彼女は障壁を消すと同時に魔法陣を展開させ、桜色のエネルギーが正面に収束した。

” Acceler shooter ”

なのはがレイジングハート・エクセリオンを振ると、分散した魔法弾が前方のガジェットに向かって曲りながら飛んでいく。

そして鋼で出来たボディにも軽々と穴をあけ、ガジェットはその場で爆散した。

これで終わったかに見えたがその時、なのはは床面を突き破ってガジェットが来ようとしているのを察知し、そちらへもアクセル・シューターを放つ。

魔力弾は床面を突き破り、下でうようよしていたガジェットに命中し爆発を起こすと、衝撃で床面の一部が天井まで吹き飛んだ。

（うわあ、改めて近くで見ると・・・やっぱり、なのはさんってスゴイ）

これまで模擬戦の相手としてなのはの技を見た事はあったが、味方としてなのはの技を間近で見たのはこれが二度目だった。

二度目はもちろん今、そして一度目は4年前のミッドチルダの空港火災でスバルを救助に来たなのはが天井を突き破る際に放ったディバインバスター・エクステンション。

スバルが思わず感心してその光景を見入っていたその時、マツハキヤリバーが何かを察知してスバルに注意を促す。

” Enemies come down!” (敵、上から来ます!)
「・・・ッ!」

上を見上げるとガジェットが数機、こんどは天井の通気口から降りてくる。

スバルは素早く後ろへ飛びのいて、リボルバーナックルにエネルギーを溜め、そして一瞬で狙いを定めて一気に放った。

「リボルバー、シュートッ!」

青白く発光する魔力弾は突出した一機に命中、爆発して飛び散った破片を避けるように他のガジェットが迂回して再びスバルに迫る。

「甘いッ! うりゃあああっ!!!」

完全にガジェットの動きを見きっていたスバル。

足蹴でガジェットの姿勢を崩し、体勢を崩した一機にとどめの一撃をお見舞いした。

「ふう、なんとかなった・・・」

派手な爆発の後、別に汗をかいたわけではないが癖のような無意識の動作で軽く額をスバルが拭いた時、後方に何かの気配を感じた。またしてもガジェットだった。それもスバルへ攻撃態勢に入ってい

る！

(動き速ッ！ でも！)

即座に障壁を展開しようとスバルが左手の平を差し出す。

しかしその時スバルの横を高速で何か飛びぬけていくと、それはそのガジェットに当たり、貫通して更にもう一つ奥に居たガジェットに命中して二機は爆発した。

「ティア！」

「スバル、後ろに注意しないとダメよ！ こいつら、以前より動きが早くなるように学習するんだから」

「ゴメン、ゴメン。 でもおかげで助かりましたー」

ナイスサポートと、スバルが後ろを振り向くと二機を撃ち抜いたティアが、呆れ顔のままクロスミラーージュから使用済みのカートリッジを排策していた。

『さすが、元機動六課のフォーワードね』

「ありがとうございます、セリーナさん。 でも、隊長陣に比べたら、私たちなんかまだまだですから」

『ふふっ、目指せる目標があるって良い事よ。 さて、なのはさんの方も片付いたみたいよ』

セリーナの言うとおり、なのはの前方から襲来したガジェットは一機残らず地面に残骸として横たわるのみ。

時折見えるバチバチッという残骸の漏電が、まるで負け犬の遠吠えのように見えた。

「とりあえず、第一波は凌いだみたいね。 二人とも、大丈夫？」

「はい、なのはさんも大丈夫ですか？」

「ありがとう、ティアナ。大丈夫これくらいなら、体に負担がかかるほどじゃないよ」

なのはは先のJ S事件でヴィヴィオを救出するために高威力高負担の最終奥義、スターライト・ブレイカーEX FBを放っている。医務官だったシャマルには数年の療養を勧められてくらいで、今でも後遺症が時折襲うズキリとする痛みとして出てくる事があるのだという。

それを心配してティアナなのはに心配顔で尋ねたが、逆になのはの満面の笑みを見てむしろ安堵したようだ。

『熱源反応があるブリッジはその先です。手前のブロックにはガジェットが複数確認されています、油断せず注意して進んでください』

「スターズ1、了解。スバル、ティア、行くよ」

「はい！」

「援護は任せてください！」

スバルとティアナの返事なのはは頷き、三人はその先の船室へと急ぐ。

そしてまた先程見たように、なのは達の侵入に気付いたガジェットが十機ほど、こじ開けようとしていたドアから反転してなのは達に向かい突撃してきた。

再び気を引き締めるなのは達。

戦闘に備えて、なのはがレイジングハート・エクセリオンを構え、スバルとティアナがそれぞれカートリッジロードを済ませる。

しかしその臨戦態勢は、突然飛び込んできたセリーナの慌てたような声で崩される事になる。

『気を付けてくださいスターズ！ 前方から熱源反応・・・これは、ガジェットじゃない。 物体判別、不明！？』
「不明って！？」

なのはが思わず聞き返そうと言いかけた時、天井の鋼板がグニヤリと曲ったかと思うと、そこから高さ3メートルはあるつかという風貌をした鋼鉄のロボットのような巨人が降り立ち、接近していたガジェットを殴り飛ばした。

まるで巨木に思いつきり殴られたように、横からの強烈な一撃をお見舞いされたガジェットは数機まとめて中からへし折れて爆散した。

「な、なに！？ アレはなんなのよ！？」
「私だつて分からないわよ！」

鋼鉄製の重々しい西洋騎士のような甲冑を着ているのか、それともそれが本体なのかは分からない。
しかしそのロボットらしき物体は、甲冑の頭部の目の部分を禍々しく赤に光らせており、敵意むき出しというような感じだ。

『お主ら・・・我が主に仇なす者か？』
「喋った！？ ティア、アレ喋ったよ！」
「分かつてる！ でも、話せて良かった」

低く野太くも威厳あるような声で、その鎧は喋った。
その事に驚くスバルだが、ティアナや同時に前に進み出たのはは、むしろ好都合と思った。

話せるという事は、こっちの言う事を相手も理解出来ると言う事もなるからだ。

「貴方は、無人機に襲われていたこの船の乗組員ですか？ 私たち

は時空管理局です。貴方たちを助けに来ました」

見上げるほど身長が高く、鋭い相手に対して、なのはが優しく語りかける。

するとそれを聞いてかその騎士甲冑は動きを止めて、身体を覆っていた赤いオーラも収まって行く。

『時空・・・管理局・・・？ 助けに、来た・・・？』

「はい。この船は沈没の危険もあります、はやく脱出しないと大変な事になります！」

なのはがその騎士甲冑に詰め寄るが、その騎士甲冑は微動だにしない。

そう思った次の瞬間、騎士甲冑の体に再び赤いオーラ、そして赤く輝いていた目が更に禍々しい輝きを増した。

『時空管理局！ それは我が主を害さんとする者達だッ！！』

「えっ！？」

赤いエネルギーを溜め、真っすぐ振り上げた鋼鉄の巨塊のような拳を、まっすぐなのはへと振り下ろす。

「なのはさん、危ない！！」

そこへ反射的に飛び出していたスバルが青白い魔力を溜めていた拳で、その騎士甲冑の拳に対向した。

「スバルッ！」

「なのはさん、今のうちに下がってください！」

「スバル、馬鹿ッ！ よく見なさい！！」

スバルの介入になのはは咄嗟に声を上げ、それに答えかけたスバルだが後ろからその拳と拳のぶつかり合いを見ていたティアナは異変に気付いた。

スバルのリボルバーナックルが押されている。力でもそうだが、なんとスバルの拳に集めた魔力が花弁のように散って行き、魔力が消えかけていた。

「ウソツ!? まさかAMF!? ぐっ!!!」

とっさに飛びのいたスバルの目の前に、振り下ろされた騎士甲冑の拳は床面にクレーターのような大穴をあけた。すさまじい威力に毒づく三人。

「待ってください! 時空管理局が敵って、一体どういう事ですか!?!」

『問答無用! 直ちに去るか、我が前で無残にも圧潰するか・・・二つに一つだ!』

どうやら聞く耳持たないらしい。

だからといって「はい帰ります」では無責任というか、第一戦闘力が高い自立機動のロボットを放っておくことなんてあってはならない。

! だったら、やりたくはないが嫌でも聞く耳を持つようにすれば・・・

「良く分からないけど、スバル、ティアナ。あのロボットを止めるよ!」

「了解です!」

すると覚悟を決めたなのは足もとにミッドチルダ式特有の円形と正方形を組み合わせた魔法陣が展開し、同時にレイジングハート・エクセリオンに桜色の光が集まる。

「これなら・・・デイベイン・バスターツ!!」

眩い閃光がなのはが構えるレイジング・ハートの杖先から迸る。そして避ける動作をしなかった例の騎士甲冑は、その光の奔流にのみ込まれた。

エネルギーの爆発が起こり、目の前が白い煙、なのはが圧縮した魔力の残滓が次第に晴れていく。そしてそこには・・・

「ウソ、でしょう!？」

「デイベインバスターが・・・なのはさんの砲撃が、効かない!？」

スバルとティアナが、なのはの主砲ともいえる砲撃を受けたにも関わらず無傷であったことに愕然となる。

当のなのはも、高濃度のAMFでも破る自信があつたデイベインバスターが無効化された事に、驚きと同時にある確信を得た。

「くつ。気を付けてこれは、AMFじゃない!」

『はい、なのはさんの言うとおりです。魔法の結合を妨害するAMFと違って、あのフィールドはエネルギーを分散させて分解しています』

セリーナがスバルの攻撃となのはの砲撃時のデータから、騎士甲冑が纏っている赤いオーラの正体を突き止めた。

しかし残念な事に、障壁の正体が分かつてても対抗手段が無いのだ。

「仕方ない、一度退くよ」

「なのはさん、待ってください！」

その時撤退を促そうとしたなのはだが、隣にいたスバルが何かを思いついたように覚悟を決めた表情でなのはへ振り向いた。

「一つ、あの技なら・・・なんとかなるかもしれません」

「あ、スバル！」

なのはの制止を聞く前にマツハキヤリバーで走りだすスバル。

その彼女の瞳がいつものブルーから金色に変化する。

そしてリボルバーナックルにも、今まで見た事無いようなエネルギーを構築する魔法陣のような図形が展開する。

「スバルの、戦闘機人モード・・・」

「IS・振動破碎・・・たしかにコレならいける！」

心配するなのはとは対照的に、本気になったスバルを信じているティアナ。

タイプ・ゼロと呼ばれる戦闘機人であるスバルの固有能力に、振動破碎と言う物がある。

相手のフレームに共振を起こさせて内部まで一気に破壊するという、ある意味えげつない攻撃ではあるが、魔法が効かないという現状を打破できるのはこれくらいだ。

「いつけえええええっ！！！」

戦闘機人モードのスバルが突きだした振動破碎能力を付与した拳、それに対抗して騎士甲冑も大きな拳にあのオーラを纏わせて同じように突きだし、そしてぶつかつた。

激しい火花や閃光が散る中、両者ともに一步も引かない。魔法では無いせいか、先程と違って勢いも全く衰えない。行ける！ スバルだけでなく、なのはもティアナもそう確信した。

『妙案だ。だが、甘いわ！！』

叫び声をあげた騎士甲冑、その咆哮に応えるように増大したオーラ。そしてなんと振動破碎のエネルギーまでもが、急激に減少を始めた。

「そ、そんなツ！？」

「スバル！ 逃げて！！」

やがて先程と同じようにエネルギーが消失したスバルのナツクル。なのはがスバルの危機を感じ取り叫ぶが、それと同時にスバルへと強烈な一撃が叩きこまれた。

「ガッ！！」

声にならない声をあげて吹き飛ばされたスバルが、後方の内壁を破壊して叩きつけられると、そのまま倒れ込んで動かなくなった。

「スバル、スバルッ！ ちょっと、しっかりしなさいよ！ねえッ！」

「あ……うぐう……」

ティアナが思わず駆け寄ってスバルを抱えると、彼女は頭から血を流していた。

揺さぶりながら必死に呼びかけるも、ティアナの呼びかけにスバルは答えることなく、虚ろな目でただうめくのみだった。

「隊長！ イルマ隊長！ 大変です、船内でスターズが遭遇した大型の人型兵器に全く攻撃が効かないどころか、スターズ3ナカジマ陸士まで・・・！」

「ブルー1了解！ 上空はセレス達に任せ、今そちらに向かっている！ あと基地から医療班を寄こして、ナカジマ陸士の手当てを！」
「りよ、了解です！ 医療班、スタンバイを急いでください！」

いつもは冷静にオペレートをこなすセリーナの声が高くなり、やや冷静さを欠いている。

緊急事態の発生に急遽イルマが船内へと飛び込み、同時に応急救護班の手配の指示をセリーナに出した。

時間が無いため、狭い船内を走らずに微妙なコントロールで高速で飛ぶイルマ。

そして目標の地点までまだ先だが、イルマはそこでもゴウンゴウンツという鋼鉄が打ちひしがれるような音を聞いた。

「そこかあッ！」

「くっ！」

叩きこまれる一撃を必死に回避するなのはとティアナ。

ティアナは負傷し気絶したスバルを抱えているため、今殆どの攻撃を回避しているのはなのはだった。

しかしそうやって逃げての時間稼ぎもそう長くは出来そうになかった。

（やりたくはなかったけど・・・二人の安全には代えられない！）

覚悟を決めたなのはがティアナへと振り向く。

「ティアナ、スバルを連れて外へ！　ここは、私がどうにかするから！」

「なのはさん・・・無茶ですよ！　だって、ソイツに魔法は効かないんですよ！　ディバインバスターだって！」

「そうだね。　そういえば私、ティアナに無茶はダメだって厳しくあたった事もあったけど、説得力・・・無いよね」

少し物哀しそうな表情のなのはの足もとに、幾重もの魔法陣が展開する。

それは先程のディバインバスターよりも複雑かつ膨大で、それはこの魔法攻撃の威力がディバインバスターの比ではない事を現していた。

「なのはさん・・・その魔法、まさか!？」

「そう。　私の最後の切り札・・・ブラスターモード、セットアップ！」

なのはの周囲に桜色のオーラが集まる。

そして同時にレイジング・ハートにも桜色のエネルギーが光の玉となって大きな球を形作って行く。

「仕方ないけど、行くよ！　私の、全力全開！」

” A l r i g h t , S t a r l i g h t b r e a k e r ”

レイジングハートもなのはと同様に覚悟を決め、最終奥義のスターライト・ブレイカーをコールする。

ところが魔力を収束し狙いを定め、そして発射まであと少しと迫った時だった。

なのはの身体に異変が起き、なのはは思わず胸を押さえて膝から倒れ込んだ。

「あぐうつ・・・い、痛いッ・・・ダメッ、撃てないッ！」
「なのはさんッ!!！」

レイジングハートもなのはの異変に攻撃を中止し、スバルを抱えたままたまらず駆け寄ったティアナ。

「まさか、あの事件の後遺症が！」
「シャマルに、言われてはいたけど・・・まさか、ここまで・・・なんてッ！」

後遺症の激痛で顔を歪めるのはが、自らが抱える後遺症の重さに改めて気付いた。

絶望的な状況。もはや現時点でまともに戦えるのは、ティアナだけとなってしまうた。

それでも諦めない！

ティアナはなのはにスバルを預けると、ツーハンドモードのクロスミラージユを両手にした。

だが、どれだけ考えても対抗策は浮かばない。

「ティアナ、ダメ！・・・まともに戦ってはダメよ」
「分かってます！でも・・・」

” Variable Barrett ”

ダンドンツと二発連続で覚悟の弾丸を撃つティアナ。
しかしそれも例にもれず、騎士甲冑が纏うオーラにかき消されてしまった。

「それでも・・・ここに守りたい人が居るんですッ！！」

もう一度連続で撃つが、それもやはり当たる寸前で消滅してしまっ
た。

「無駄よ。 我は例え女子供と言えど、敵には容赦はせぬ。 これ
で終わりだ、これも運命と思い悪く思うな・・・！」

（スバルも、なのはさんも・・・あとは私だけ！ でも、こんな奴
一体一人でどうしろって言うの！？）

振り上げた腕の影が、なのは達を覆う。

一番前でクロスミラージユを構えるティアナに絶望感が過った。

しかしその時

ヒュウンッ スゴオッ！！

何かが空気を切り裂いて飛ぶ音と、一瞬後には小さな爆発音と衝撃
波がティアナ達を襲った。

「ウッ！」

「い、今は・・・」

その物体が飛び込んできた方向に立っていたのは・・・

「済まない、遅くなって大変申し訳ない」

カートリッジ排莖の白煙をあげるリボルバーピストル型のデバイス、
そしてこんな状況にも関わらず間に合ったという安堵のせいから少し
笑みを浮かべるイルマだった。

「トレノ隊長！」

「トレノ一佐！ このロボット、魔法以外のエネルギー攻撃が一切効きません！」

しかしティアナもなのも増援の登場に決して安堵することはない。目の前には何もかもエネルギーを無効化してしまう相手。増援が来た所で、到底喜べるような状況ではないからだ。

「無理です隊長！ デイバインバスターでもコイツのフィールドは・・・えっ？ な、なんで!？」

しかしその時、ティアナはキンキンツという金属片のようは物が床に落ちる音を聞いた。

その音その下方向を振り向くと、ロボットの方にこれまでにない異変が起きていた。

なんと、ロボットの右手からポロボロつと破片がこぼれている。

つまり今飛び込んだであろうイルマの攻撃が明らかに効いていた・・・一体どうして？

「き、貴様・・・我が“契約の護壁”を・・・破った、のか!？ 馬鹿なツ！」

先程の余裕は一瞬で無くなり、騎士甲冑はイルマの方を振り返る。その顔に表情があれば、間違いなく驚愕の二文字がその顔に刻まれている筈だった。

「そこまでだ、そのロボットさん。 そのフィールドを破る方法はもう発見済み、これ以上の抵抗は無意味だから、大人しく武装を解除して管理局戦技研究部第十一航空隊長である自分の保護下に入って欲しい」

「降伏せよと？ 生憎だが、それは出来ん！ 傷一つ負ったからとて、剣を捨てるは戦士の恥！ 我を突き動かすは、主の領域を蹂躪される事への怒り！ それと、主を守護せし者としての当然の責務！」

雄たけびを上げるように騎士甲冑が自らの意思を語る。

どうやら主従関係にあるその主とやらに、この騎士甲冑はよほどの思い入れがあるようだ。

「それじゃあ、やっぱり貴方を止める必要がある。 私もあなたと戦う理由は似ている。 一時的とはいえ、部隊の仲間となった者を傷つけられたことへの怒り。 そしてこの一撃は・・・部隊長として命を預かる者としての責務」

” M a g n u m b u l l e t ”

床面を打ち鳴らすように疾走してくる騎士甲冑に、イルマは早撃ちの要領で腰付近に構えたレヴィンの銃口を向けてカートリッジを口ードする。
その銃口にブルーのエネルギーが集まり、球状の魔導弾を形成していく。

「良いかい、高町教導官、ランスター陸士。 一撃必殺高威力の攻撃も確かに良いが、時には大した威力が無い攻撃が工夫一つで大きな威力を発揮する事がある。 これも、戦技研究で見つけた方法の一つ・・・」

” B u r s t s h o o t ”
「バースト・シュートツ！」

そして騎士甲冑がイルマから10mへと迫った時、彼が撃鉄の部分にレヴィンを握る手とは反対の右手を添え、スバアアンツという破裂音と共に放った魔力弾。

反動でレヴィンは軽く跳ね上がり、イルマの身体も後方へと後退した。

しかしその魔力弾はエネルギー無効化のオーラを突き破り、騎士甲冑の拳から肩までを粉々に吹き飛ばした。

「ウグオオオオツッ！！ ま・・まさか、我が契約の護壁を破るとは・・・む、無念！」

右腕を吹き飛ばされ後ろへと倒れた騎士甲冑のロボットを見て、ティアナはそれを倒したイルマの射撃術に思わず息をのんだ。

（確か、射撃魔法マグナム・バレットはAA+ランクの高威力魔法弾。でも、なのはさんのデイバインバスターでも貫けなかったあのフィールドを貫くなんて、一体・・・トレノ隊長は何をしたの！？）

あまりにも非現実的な光景。

強力な砲撃デイバインバスターでダメージすら与えられなかった鎧を、それに比べて非力な筈のイルマの射撃が鎧を腕ごと粉碎したのだ。

その一部始終を目撃していたティアナになのはは、しばらく言葉を発する事が出来なかった。

Flight 05 : 遭遇（Encounter）（後書き）

全員を上手く書くには、どうしたらいいか・・・結構悩んでこうなりました（笑）

ご意見やご感想をお待ちしております。

初めての方も、遠慮なくどんどんお寄せ下さい。

Flight 06 : 秘技バースト・ショット!

新暦76年5月1日 PM 2:15

ズズウウンツという地響きと砂煙が舞い上がる。

騎士甲冑はそのままの意味で右腕を失い、イルマが放った魔法弾の衝撃で後ろへと吹っ飛ばされた。

” Magazine reload ”

バシュツという魔力残滓を排出する音と一緒に、レヴィンの全弾使い果たして空になった弾倉から使用済みのカートリッジが飛び出す。そして異空間から現れた新しいカートリッジと瞬時に入れ替え、イルマはスナップを利かせた手首の動きでシリンダーの位置を元に戻した。

「ウググ……………」

ゆっくりとした動きでその騎士甲冑が上半身だけ起き上がる。

しかしその眼光から伝わってくる殺気や闘気は、右腕を失ってもなお衰えない。

イルマのカートリッジリロードは、それを見越してのものだった。

「もうそのフィールドは通用しないと分かっただろうけど、できれば武装解除して欲しい。 乗り込んできて勝手を言っているように申し訳ないが、君たちはこちらの制限海域を侵犯しているから、まあおあいこ様という事で……………」

「降参せよと? ……なんでも同じ事を言わせるな……………」

するとやはりイルマも予想していた通り、その騎士甲冑はよろよろとしながらも立ち上がった。

迎え撃つためイルマが狙いを定めて目を細めた時、突然声が響いた。

『待つのです、ローラン！　そして、時空管理局の方々も……どうか、武器を収めて下さい』

普通の声では無い。

おそらく念話に近い、ある種のテレパシーのような頭の中にしみ込んでくるような、透き通る女性の声だった。

「しかし……！」

『良いのですローラン。これ以上、貴方が傷つく様を見ては居られません……貴方は、良く尽くしてくれました』

ローランという名前があるのならば、これ以上騎士甲冑やロボットなどという抽象名詞は失礼にあたるか……。

とりあえずイルマ達が今の流れで知ったのは、この騎士甲冑もといローランなる存在と、ローランがあそこまでして守ろうとしていた主なる人物、それがこの不思議な声の主だと言う事だけだ。

『時空管理局の方々、私たちの抵抗はこれまでです。　後はロストロギアと呼ばれる、この私を封印するも、破壊するも、どうぞご自由……ですが一つ、この従者“ローラン”だけは！』

「少し待て……我々は別に君たちを破壊しようとも、封印しに来たわけでもない」

『……えっ？』

誤解が解ける瞬間を強調するように、女性の声が意表を突かれた時のような声になった。

そして・・・そう、それが言いたかったんですと、なのはやティアナも苦笑して軽く頷く。
イルマが最初から戦う意思はなかった事のアピールに、レヴィンをバリアジャケットに提げているホルスターへと収納し、その二人へと続ける。

『我々がこうして来た理由は、この船が我々が指定する進入禁止領域へと進入したからであって、別に最初から君たちを害そうとして来たわけじゃない』

「そうです、誤解です。私達もこの船に生存者が居ないか、探索に来ただけなんです！」

イルマとなのはの必死の訴えに、ローランと彼の主はしばらく息をひそめているかのように何もしゃべらない。

信用してもらえるのか・・・それとも・・・！
緊張の空気が二人の間に流れる。
そして・・・

『血流、瞳孔の拡大具合に異常なし。私もやや混乱してしまいましたが、貴方がたの言葉は嘘では無いようですね・・・』
「なんと・・・！ 敵ではなかったか!？」

どうやら信じてもらえたようだ。

主の言葉だから信じなければならぬのだろう。
そしてそれを聞いたローランの声は信じられないと言うより、自分が大変な事をしてしまった時の悲愴な叫びに似たような物だった。
それにしてもどこから見ているかも分からないのに、血流やら何やらで嘘かホントかが分かるなんて・・・一体どういう人なんだと、イルマは頭を捻らせる。

(そういえば、自分はロストロギアって言ってたっけ・・・?) と

いうことは・・・)

「信じて頂いて感謝します。先程、こちらの高町一尉らから申し上げたと思うのですが、この船は非常に危険です。今なら、貴方がたを安全に保護する事も可能ですが?」

『はい。どうやら貴方たちは時空管理局ですが、私たちを追っている存在とは違うようですから・・・お世話になろうと思います。

それから、誤解していたとはいえ、私が管理局員へ攻撃の命令を出していたのは事実です。ですから、一切の責めは私が負いますから、ローランには・・・』

「それは後で話しましょう。まずは脱出してしまるのが先だと思えます・・・それから貴方の事は何とお呼びすれば?」

『私ですか? 私は・・・では、オリヴィエと』

「わかりました。ではローランさん・・・結構酷くやっつけてしまいましたが、動けますか?」

イルマが見上げるほど身長が高いローランへと歩み寄り、さっきまで銃と拳を突きつけ合っていた相手にそう尋ねた。

「問題無い。じきに再生できる・・・それよりお主らに、本当にすまないことをした」

『あとであるナカジマ陸士に同じ事を言っして下さい。それより、オリヴィエさんはどこに?』

「こちらだ。我が案内する・・・」

ローランはそう言いながら、ノツソノツソとゆっくりと歩き出す。さっきまで絶対に通すまいとしていた鋼鉄のドアの先、おそらくこの船のブリッジと思しき場所へ。

「スターズは、ナカジマ陸士を外へ。ヘリの中でルノアに応急処

置をするように言っているから、彼女と連絡を取ってください」

「は、はい！」

「了解です、トレノー佐。ローランさん達をよろしくお願いします」

なのは達がその場で敬礼をして外へと向かって走り出す。それを見送るとイルマはローランの案内で奥へと向かう。

「ここに我が主、オリヴィエ様がいらっしゃる……」

右腕がイルマに吹き飛ばされて無い状態なので、ローランは左腕で大きなドアの解錠を行った。

ゴウウウンツという重々しい扉が開く時の駆動音と、そしてドアとドアの開いて行く裂け目からキラリと光がさしこみ、イルマは思わず右腕で目を覆った。

そこにあつたのは……

「コンピューター？ それもこんなに大量に……」

その部屋に一杯にあつたのは、無数のモニタとそれを動かす大小さまざまな箱型の機械だった。

戦技研究部でも次元航行等の仮想シミュレーションを行う時等に、似たような大型コンピュータを用いて演算を行う。

だがこの部屋にあるものは形や接続配線の系統など、イルマが見慣れた物とは程遠いような形状だった。

「そしてあれが、オリヴィエ様だ」

ローランが向けた手の平。

その先にあつたのはコンピュータから伸びる無数のケーブルと、そ

れに繋がれた一枚の金色に輝く正方形の金属プレートのような物だった。

『案内御苦労さまです、ローラン・・・そして』

その時プレートが輝きだしたと思うと、そこから光の粒子が溢れだしそれが徐々に何かの形を作って行く。

やがてまとまりだした光は、一人の礼装のような服を纏った女性のような容姿を形作った。

『はじめまして、トレノさん。 私がオリヴィエ・・・時空管理局の方々は、ロストロギアとも、超高密度記憶演算出力媒体とも・・・』

「そうか・・・ロストロギアと聞いて、恐らくとは思っていましたが・・・本当に人では無かったとは」

『そうですね・・・。 血潮が通う肉体を持つ生物を人というならば、確かに私は人ではありませんね』

イルマは失礼を覚悟で敢えて言ってみたが、それに対して少し物哀しい表情を見せたりと本当に機械かと疑いたくなるような仕草をする機械だ。

「しかしそれでも、保護すると確約した手前、例え人でなくても人道的に保護します」

『ありがとうございます。 では、お願いします』

そう言うと、バシユバシユという音とともにオリヴィエの本体に繋がっていたケーブルが勝手に外れ、埋め込まれていたオリヴィエの本体は装置の上から更にせり上がる。

それを大事そうに握り締め、イルマはローランに「行くぞ」と促し

てその場から走って脱出口へと向かう。

外ではまだガジェットとの戦闘が繰り広げられていた。

さすがに屈強のブルーインパクト隊員であったが、この時になると彼らは心身ともに疲弊していた。

「はぁ・・・はぁ・・・さあ、今度はどこから来るのかしら！」
「ブルー2、上だ！」

疲労で判断が鈍ったか、一人で襲来したガジェットの半数以上を叩き落としていたセレスが頭上を取られ、後方にいたブラットが注意を促す。

そして攻撃位置についたガジェットから、無数のレーザーがセレス目掛けて放たれる。

命中するかという位置まで光が迫った時・・・

” Dimension shield ”

セレスの頭上でバリアが展開し、同時に急に展開されたそのバリアにガジェット数機が衝突して大破した。

「ホッ、助かったわマリノ。 ありがとう」

「お姉ちゃん上見無さ過ぎ。 敵も学習しているんだから」

「わかったわ、気を付けるから」

そう言っている間にも、アルの斬撃やブラットの狙撃を受けてガジェットは次々に海へと叩き落とされていく。
そして・・・

” Split slash ”

「これで最後！」

アルが魔力付与の直接斬撃”スプリット・スラッシュ”をお見舞いし、ガジェットは中心線から真つ二つになり落下する。

落下して行く先で爆発を引き起こしたガジェットが四散し、海へと落下する。

そして空から完全にガジェットの姿が消えた。

ガジェットの大群が押し寄せた光景から、再び元々の青空を取り戻した瞬間だった。

『0223時、全ガジェットの撃墜を確認！ みなさん、お疲れさまでした〜！』

セリーナの声に交じって、司令本部の部屋の中からは拍手が沸き起こる。

そしてもう一つ吉報が舞い込んだ。

ルノアのスバルへの応急処置の結果、脳震盪を起こしていただけで頭の怪我の切り傷を負っているわけではないとのことだ。

その結果に、ブルーインパクト隊員達やなのはもとより、スバルの親友のティアナは本当に安堵して腰が抜けたようにヘリの中でペタンと座りこんだ。

さらに増援で到着したもう一機のヘリへ、ローランと彼に持たせたオリヴィエの本体を乗せ、一同は帰路に就く。

二機のヘリを護衛するため、再び外へと飛び出して6人で編隊を組むイルマ達ブルーインパクト。

イルマが後ろを見ると、全員笑ってはいるが本当にお疲れ気味のようだった。

今日もまたあの光景が繰り広げられるぞと想像しながら、彼はセリーナに帰路に就く旨を通信で伝える

『皆さん、おー疲れでした。ブルーポイント、ブルーインパクト、コンプリートミッションRTB』

『はい、了解です。気を付けて帰ってきてくださいね』

『ラジャ』

一日の終わりを実感しているように、皆の身体に疲労が重くのしかかっていた。

その一部始終をモニターで見ていた人影があつた。

男二人に女が一人、薄暗い部屋でブルーインパクトと二機のヘリが帰路に就くのを薄い笑みと共に見守っていた。

「交戦開始から42分13秒で、合計218機のガジェット？型および強襲爆撃母機タイプの？型を全機撃墜しましたわ・・・追加戦力は、送りませんわね？」

「当然。これ以上増やしても鉄屑を増やすだけ、資源と労力の無駄だ。しかし新記録達成だな・・・局内でも最速記録だ」

「フンだが、アレくらいのがラクタ落として・・・疲れているようでは話にならない」

坊主頭の男性が疲れ切った様子の隊員達を見て、嘲笑するかのよう
に言い放つ。

「フフンツしかしだな、シュミット。私は彼らの中に一人だけ、
憂慮すべき存在を見つけたぞ」

「憂慮すべき存在？ あのSSダブルエスランクの空戦魔導師か？」

「それとも、彼女・・・出向になったエース・オブ・エースの高町なのは、でしょうか？」

シュミットと呼ばれた坊主頭の男の返答にも、座ってモニターを操作する女性にも、そのリーダー格の男は首を振るだけであった。

「いや、違うね。確かにあのSSランクの空戦魔導師も、そしてエミールの言うエース・オブ・エースもその経験や能力は十分に脅威だが、私が何より警戒したのは・・・彼だ」

そう言っつてその男がモニターの一点を指差した先に居たのは、イルマであった。

その男の選択にシュミットもエミールという女性も、一様に疑問の表情を呈した。

「お言葉ですがツエーザー隊長、彼の魔力値はこのSSランクの魔導師の半分からそれ以下。また観測できた攻撃魔法の種類から考察して、SSランク未満と思われるわ」

「SSランク未満だと？ それじゃ話になんねえなあ。それに肝心のエース・オブ・エース様は後遺症で全力投球は無理と来た・・・楽しみが減りまくりだぜ」

セレスの半分以下の魔力値しかないイルマなど警戒するに値しない。シュミットもエミールもそういう見解であった。

しかしそれでもなお、ツエーザーはイルマを嘲笑しようとはしない。むしろ二人に警戒感が無い事に、少し苛立ちと僅かな焦りを覚えたようだ。

「馬鹿者め。いつも言っているだろう？ 確かに君らの言うとおり、魔力が高いなら高いに越した事は無い。だが同時に、それだ

けでは勝負は決まるまい」

幾ら強い魔導師でも動きに隙がありそこを突かれた場合、その先には待ち受けている恐ろしい事態がある。

「半年前のあの時も同じように、この男は常に仲間が最大能力を発揮できる適切なポジションを指示していた。それも6人同時にだ・
・これ程指部隊揮能力が高い奴は、おそらく教導隊にもおるまい。
あのチームはあの男を頭とし、チーム全体で一つの身体を作っているようなものだろう」

ツエーザーが言っていた憂慮すべき人物と、その能力を知りエミールは僅かに表情を強張らせた。

「それでは、一体どうすればいいのですか？ あのレベルで付け入る隙が無くなるのであれば、私どもとて勝敗は分かりませんわ」

「なに、そう深く考える必要はない。簡単な方法が一つある・・・

」

ツエーザーが不敵な笑みを浮かべ、シュミットもエミールもそれに聞き入ろうと向き直った。

「チーム全体を一つの身体と考える。例えば人体、手は物を握り、足は地面を蹴って走り、頭は物を考える・・・だが手で考える事や、足で正確に物を握ったり、頭で走る事はできまい？」

「なるほど、それは確かに有効かもしれませんがね」

「なるほどなあ、ツエーザー。つまりチーム内の統制を乱してしまえば、あとはこっちのモンってわけだ」

エミールとシュミットの納得したような返答を聞いて、ツエーザー

は思わず哄笑を上げた。

「そう。そして奴らを地へと叩き落とし、我らパトリオットが栄えある理想郷へ辿り着く鍵を手に入れるのだ！」

ツエーザーの長い哄笑は、薄暗い部屋ですつと響き続けていた。

暗い・・・

本当に暗い・・・

何も見えない・・・みんなどこ？

イルマさん、セレスさん・・・なのはさん、ティア！

何も見えない闇の世界・・・スバルは一人、暗い闇の中を彷徨っている。

出口も分からぬまま、その永遠に続く闇の中で迷子になっていた。

ガシャツ・・・！！

その時、不意に音がしてスバルが振り向くとそこには・・・

「ア、アンタは！！！」

「言った筈だ。どこへ行っても逃がさぬと・・・！」

迫りくる拳に、スバルが思わず手で顔を覆った。

・・・気がつけば、同じようなポーズをしていた。

「アレ？ 今の、夢・・・だったの？」

見慣れない天井が見え、そしてスバルはどうやら自分がベッドに寝かされているようだと言う事に気付いた。

そうだ、こういう時に大体傍にいるティアナはどこだろうと、スバルはまず左を見たがそこにはティアナの姿は無かった。

では反対側ということ、右をスバルが向くと・・・そこにはあの騎士甲冑の赤く光る眼があった。

(えっ?)

両者一瞬の沈黙・・・

「・・・お主、どうやら気がついたようだな」

ローランが起き上がったスバルを見て、安心したのか声をかける。
しかしその時・・・

「う、うわりやあああああつっ!!!!」

悲鳴なのか攻撃の雄たけびなのか、そんなどつちともつかない声を部屋いっぱい響くように上げながら、スバルは驚愕しながら右拳で起き上がりの一撃をローランへ叩きこむ。
しかし・・・

ゴーンッ！

変身解除状態のスバルの右手には、当然ながらリボルバーナックルがついておらず、そのままの白い素手で殴ったのは鋼の身体を持つローランの頭だった。

「いつつたああああい！！痛いイタタタ・・・！」

スバルが目には涙を溜め、赤くなった右手を押さえてうずくまる。その光景をローランは微動だにせず見守る。

「お主、大丈夫か・・・？」

きつとローランに顔という物があったならば、間違いなく苦笑しているに違いない。ある程度まで痛みが引くと、まだ半泣き状態のスバルがローランの方を振り向く。

「な、なんでアンタが居るのよ！？」

「まあ落ちつくのだ」

起きてすぐ興奮状態のスバルを宥めるように、ローランが言いかける。

しかしあんな死闘を繰り広げ、気を失っていてこれまでの経緯を知らないのだからこうなるのも無理はないか・・・。

ローランがスバルを落ち着かせるのに四苦八苦していると、開いたドアから見慣れた親友が何食わぬ顔で入ってきた。

「あら、気がついたのね」

「“気がついたのね”じゃなくてティア！ なんであのロボットが

「ここにいるのよ!？」

「スバル、静かに！ 隣、見なさいよ」

ティアナに言い咎められてそろつとスバルが左のベッドを見ると、なのはと彼女の帰りをずっと待ち続けていたヴィヴィオがスヤスヤと軽い寝息を立てていた。

大きな声は上げれないという事で、ティアナはやや小声でスバルが気を失って以降の出来ごとを教えた。

「そ、そうだったんだ・・・」

「そうだ。しかし貴殿には傷を負わせてしまい、大変失礼な事をした。我が非礼を、許して欲しい」

ローランが座ったまま頭を下げ、スバルに怪我をさせた事を謝罪する。

なんだそう言う事になってるのかと、スバルは安堵し溜息を吐いた。

「ああ、もう良いですよ。こうやって、ピンピンしてますから・・・」

頭には包帯が巻いてあるが、ティアナから聞けばちよつとした切り傷のようらしく、大事には至って無いとこの医務官が言っていたらしい。

やがてローランはスバルの無事を確認すると、主オリヴィエの元へ行くの良い部屋を後にした。

するとスバルはローランが居なくなつたのを見計らい、ティアナの話聞いていた中で未だに分からない事を尋ねた。

「ねえ、ティア。イルマさん、どうやってローランさんのフィールドを撃ち抜いたの？ 私のIS・振動破碎もなのはさんのディバ

インバスターも無力化しちゃってたのに、イルマさんのAA+ランク射撃魔法が効くなんて、どう考えてもおかしいよね」

「ああ、それ？ それは私も一時間くらい前に、イルマさんに教えてもらってようやく分かったの。 とりあえず、これを見て」

そう言いながらティアアナが病床に備え付けられているモニターにメモリを挿入すると、画面に何かが映し出された。

それは先程のローランとイルマが対峙している時の戦闘データだった。

雄たけびを上げながら突進してくるローラン、そしてそれに対してイルマは収束砲の構え等も見せずじつと待っている。

やがて射撃魔法、マグナム・バレットをイルマが放つ。

そしてその魔法弾はティアアナからも聞いていた通り、ローランの右腕を方まで粉碎した。

それは二度見ても三度見ても、やっぱりイルマはただマグナム・バレットを一発撃ってローランを倒しているように見える。

「うーん、わっかんないなあ」

「まあ、普通そうよね。 それじゃあ、もう一回……今度はイルマさんの右手の動きに注目して」

身を乗り出して画面を凝視していたスバルに、既に種明かししてもらって答えを知っているティアアナが大ヒントを与えた。

右手……イルマがレヴィンを持つ手は左手だ。

一見、無関係そうに見えるが……もう一度発射のシーンを再生する。

そして……

「あれっ？　なんか、右手が動いた！」

スバルもイルマの右手の不審な動きに気がついた。
イルマがマグナム・バレットを撃つ瞬間、彼の右手のひらはレヴィ
ンの撃鉄を擦るような動きをしていた。

「イルマさん、言ってたわ。 実はローランさんのエネルギー無効
化フィールドも、ある状態の時には無敵じゃないって」

「ある状態？」

「魔法弾とか、砲撃とか、エネルギーがそのフィールドに衝突した
瞬間よ。 その瞬間、どんなエネルギーも無効化できるそのフィー
ルドは、攻撃を受けると瞬く間に拡散させてしまふ。 でも、一発
受けたらほんの一瞬だけ、その部分は弱くなるの」

「じゃあ、すぐにその部分を狙えば・・・」

「そうなんだけど、問題はそれが可能な時間。 一度薄くなってか
ら元通りになるまで、ビデオで測ってみたけどおよそ0・12秒つ
てところね」

つまり、ティアナの説明では一旦攻撃を当てて0・12秒以内に攻
撃を当てないと意味が無いのだ。

「じゃあ、まさかイルマさん・・・」

「そう。 それをやったのよ、あの人。 イルマさん、あれは手抜き
だっけ言ってたけど・・・私には精一杯収束させた収束砲より、こ
の攻撃の方がよっぽど恐ろしいと思ったわ。 とりあえず、見て」

そう言いながらティアナがビデオをスローモーションで再生する。
ビデオはイルマがマグナム・バレットを撃った瞬間から始まってい
た。

「まず、ここでマグナム・バレットを一発撃つ。 そして次、右手
の親指に引っ掛けたハンマー（撃鉄）で、カートリッジの魔力をそ

のまま弾として撃ちだす」

「ホントだ。一瞬でもう一発撃ってる！」

映像では確かにティアナの言うとおり、イルマは右手の親指をレヴィンの撃鉄に引っ掛けて更にもう1発を発射していた。

「まだよ。それだけじゃない、さらに人差指でハンマーを引っ掛けて、ロードしたカートリッジをさっきと同じように撃ってもう一発。そして最後に、小指で引っ掛けてもう一発」

「い、一瞬で4発も撃った！？ 4発撃つのに0.3秒かかって無いし、二発目が命中したのは一発目から0.04秒・・・確かに、速い！」

「スバル。確かにカートリッジの魔力をそのまま撃ち出すだけなら、私も経験者だから分かるけど本人の魔力の負担は少ない・・・多分イルマさんが言った“手抜き”ってのは多分その事だと思う。それに私だってあんな感じでどうにかすれば、かなり早くは撃てるようになると思う。でもね・・・」

スローモーションで動く映像、イルマのレヴィンから4発の魔法弾が放たれ真っすぐローランへと向かっていく。
そして・・・

「ウ、ウン・・・そんな事、出来るの!？」

「幾ら早く撃てたって、全く狂わずに同じ場所に当てる自信なんて無いわよ。それなのにイルマさんの弾は・・・」

「4発、全部同じ場所に！」

イルマの魔法弾は、あれだけの早撃ちをしながら放った計4発の弾は、全て同一の箇所に着弾していた。

デイベインバスターのような高威力の砲撃に比べたら明らかに低威

力だが、連続で放たれた魔法弾はローランのフィールドに、まるで小さな穴をあけるようにくさびを撃つ込むかのごとく断続的に叩きこまれ、そしてついに破れたのだった。

これがあの時の真実・・・そしてティアナは初めて、魔法以外での高い壁を見たような気がした。

薄暗い部隊員室で一人報告書を作成していたイルマ。

他のメンバーはというと、ソファアや椅子と壁など色々な所を寢床としてスウースウーと幸せそうな寝息を立てていた。

皆が疲れて眠っているそんな中、彼は一人今日の戦闘データや、戦闘開始前のガジェット等の出現パターンログを何度も見返していた。そしてある推測に行き当たった・・・

(オリヴィエにローランは、時空管理局を敵と見なしていた。そ

して今日、あの場に現れた敵は・・・ガジェットだった。もしそ

うなら、時空管理局がガジェットを派遣したという事になる・・・)

間違はなく大問題だ。

質量兵器の保有を禁じている管理局が、質量兵器を運用していたとなると、主張と実態が矛盾し、最悪管理世界全体の時空管理局への不信へと繋がる。

しかしこれ以上調べても何も出てこないし、それも単なる憶測にすぎない。

第一ガジェットがどこからやってきたかも分からないのに、ガジェットを管理局が飛ばしてきたなんて言えば・・・証拠も無いのにそんな事を言っていたら大顰蹙を買うこと間違いなしだった。

終わろう・・・これ以上調べても変な憶測が頭を飛び交っていくだ

けだ。
イルマはモニターを消し、青基調のブルーインパクト隊員の制服の
コートを掴み席を離れた。

シウツと扉が開き、イルマが隊員室から外に出ると偶然にも報告
に来たティアナと遭遇した。

「あ、トレノ隊長」

「ん、ああ君か。 どうした？」

「スバルが、いえナカジマ陸士が目を覚ましました。 本人も、ピ
ンピンしてますから大丈夫です」

「そうか。 それは何よりだ。 怪我也大した事なくて良かった」

笑顔でスバルの回復を喜ぶ二人。
しばらく廊下と一緒に歩いていると、不意にティアナがイルマに声
をかけた。

「あの、トレノ隊長」

「ん？」

「あの技は、どこで？」

「あの技・・・？ ああ、バースト・ショットの事か？ さっき言
ったと思うが、アレは手抜き技」

「いえ、そんな事無いです！」

ややぶつきらぼうに答えるイルマに、ティアナが彼を見上げながら
詰め寄った。

「4発の弾を0.5秒以下で撃って、全部同じ場所に命中させるな
んで・・・こんな事ができる射撃型魔導師、トレノ隊長以外私は知

りません」

「止めて欲しいな、照れるじゃないか・・・別に誇る事じゃないのに、ただああいう風にならないとダメだったただけだ」

気恥ずかしいように照れ笑いを浮かべ、イルマが笑顔で言った言葉に、ティアナは戸惑った。

「ああいう風に、ならなければいけなかったって・・・？」

「ああ、自分はセレスのような広域殲滅魔術や、高町教導官のような強力な砲撃は出来なかつたり不得意でね・・・恥ずかしい話、ここで一番魔力が弱いのは・・・」

誰かを言葉では答えずに、イルマはサラツとした笑顔で右手の人差指で自分の胸を突いた。

「えっ！？・・・隊長が、そうなんですか！」

「驚くでしょう？ だからまあ、皆と一緒に行動するうちに、魔力を突きつめるより他の部分でどうにかしないといけないって思っ・・・その結果産まれた物の一つが、アレかな・・・」

魔力以外を突きつめて、それで強くなる。

魔法での戦闘力やスキルにコンプレックスを抱えていたティアナにとって、それは思いもよらない方法だった。

「そっか・・・そういうこと！　ありがとうございました、トレノ隊長！」

「ん、あ、ああ。　明日からの訓練、頑張ってねー！」

パアツと表情を明るくしたティアナが、割り当てられていた個室の方へと走って帰って行った。

彼女の姿が見えなくなるまで軽く頬笑みを浮かべていたイルマだったが、彼女の姿が廊下の角を曲って見えなくなると、その表情は呆れたような物へと変わる。

何に呆れたのか・・・ティアナにはない、自分にだ。

「嘘を・・・教えてしまったな、レヴィン」

” What is it? ” (何の事ですか?)

「とぼけるなんて、君も優しいな。ただ逃げただけの癖して、魔力以外を突きつめるとか・・・なに不相応なカッコイイ事言ってるのだろうと、そう思っただけさ」

” No. Captain, I think that it is good words so that you say .

”(いいえ。隊長、自分は貴方があの言葉を言うには相応しいと考えます)

「そうか・・・? まあ、ありがとうレヴィン。これから先も、お前に何かと迷惑をかけるかもしれない」

” Don't worry , There is me with you from now on . ” (心配しないでください。これからも私は貴方とともにあります)

再びありがとうと心の中でイルマはレヴィンに感謝し、気持ちを切り替えてその場を後にする。

三つの月が月光を放ちながら地平線から天頂へとゆっくりと動いて行き、慌ただしかった昼間はあれ程早かった時間の経過が今ではゆっくりと流れていく。

ブルーインパクトの隊員、そしてなのは達の最初で長い一日がようやく終わった。

Flight 06 : 秘技バースト・ショット！（後書き）

最後のシーン、なんかイルマとヴァイス陸曹が被るのは気のせいでしょう（笑）

6話目でようやく長かった一日が終わり、そしていよいよ次回からは訓練が始まります。乞うご期待！

ご意見、ご感想をお待ちしております。
初めての方でも遠慮なく気軽にどうぞ。

Flight 07 : 暗雲の到来

Flight 07 : 暗雲の到来

新暦76年5月5日 AM7:50

あのスクランブルから4日が経とうとしている。

あれから正体不明の敵に動きは一切なく、間に一日の休みを挟んでなのは達は訓練に勤しむ事が出来た。

ブルーインパクト隊舎は屋上から見えた通り、表玄関の真反対はエプロンというヘリ等の駐機場を挟んで海側の飛行場と繋がっている。その広々としたエプロンの一角に早朝、ブルーの制服のイルマ達とその横には訓練服を着たスバルとティアナ、そして教導官の制服を着たなのはが佇む。

「敬礼！・・・なあれ！」

前に出たイルマの号令で全員がビシッと揃った敬礼を彼に向け、なおれの号令で姿勢をただしたまま敬礼を終える。

「はい、みなさんおはようございます。5月5日、午前のミーティングを始めます。・・・ええと、今日でもう4日経ちました」

イルマが言っているのは、おそらく先のガジェット戦のことなのだろうと三人は理解した。

「ですが、まだ警戒を怠ることなく行きますので・・・今日の哨戒

飛行は3、6、のアルとルノアでお願いします」

「了解」

「了解です」

またどこからともなく襲ってくるかもしれない相手を警戒し、襲撃当日から急遽ブルーインパクト隊員で基地の周囲上空をパトロールして回る哨戒飛行が日課に入ってしまった。

「それ以外の隊員は、午前は各分担のタスクをこなして・・・1230時には、部屋の方に集合と言うようにお願いします。そして訓練生の三人は、私についてきて下さい。以上、解散！」

イルマの解散の号令で各隊員がバラバラに散って行き、任せられた職務を実行するために各々の職場へと向かう。

そして隊員の中ではただ一人、イルマだけがそこに残りなのは達と目の前で対向した。

「貴方たちが来てからも、今日で4日目ですね。もう大分慣れましたか？」

「はい。みなさんのおかげです」

「昨日のセレスさんとの近接格闘訓練、かなり優しく教えて頂きましたから」

ほう・・・セレスは相変わらず訓練生や年下には優しいなど、イルマは思わず心の中で苦笑した。

アルや自分には対してはあんな感じだったりというのに、あの女は・・・!

まあ、別に良いだろう。

「ああ、そうですかあ。クラレンス二佐は優しかったですか」

「な、何か変な事言いましたか・・・？」

「いえいえ、別に何でも。それで自分が担当する訓練を受ける前に一言、言っておきますが・・・厳しいです」

それを聞いて三人は頭上に“？”を浮かべる。

厳しいって一体何が・・・？

能力的にダメって事？

私たちに訓練に耐える力が無いってこと？

ぐるぐると色々な憶測がスバルやティアナの頭の中で飛び交う。

そしてゆりかご戦での後遺症が未だに残る事で言われているのでは考えたのはが、その事を恐る恐るイルマに尋ねる。

「あの、厳しいって一体何がですか？ やっぱり、私の・・・」

「いえ・・・私の訓練が一番厳しいです。顔では大体笑っていますけど」

(はい？)

終始笑顔のイルマの返答に対して三人は、心の中で一斉に突っ込みを入れた。

いえ、隊長が一番優しそうに見えるんですけど、と・・・

最もこの二十分後、そう考えていた事が、思いっきり間違いでしたと三人は思い知らされるのだが・・・

そうとは知らない三人は、イルマの案内で待機していた車に乗る事約十分、戦技研究部敷地の外れにある屋外の訓練フィールドへと連れられた。

緑の草木が生い茂り、山肌をそのままの形で加工したようなその訓練場は、これまでに市街地戦を想定した機動六課での訓練疑似ファイ

ールドとはまた違う様子だった。
高さが数百メートルの山、その麓と山頂には白い壁をもった建物が存在した。

「今日、訓練をしていただく場所はここです。この山一つ、全体がフィールドとなっています」

「うわぁー、凄く広いですねえ・・・」

「広いでしょうか？ ああ、その麓の建物が今回はスタート地点になりますね」

イルマに案内されて、三人は建物の中へと入ると、そこには何故か医療班らしき白衣を着たスタッフの姿があった。

そして彼らの挨拶をして少し奥へと進む、そこには外へと繋がる出入り口の横に、壁一面を覆う横断幕で“集中しすぎない！平常心！”と書かれていた。

「あのー、トレノ隊長。さっきの人たち、観測部の人たちじゃないですよ？ それに、あの横断幕って何ですか・・・？」

「ああ、あれですか？ 実はですね・・・この五号フィールドっていうのはですね、あのー実戦用と同じ実弾を使うので・・・」

実戦用の・・・実弾！？

いや、これって訓練なんですけど・・・！

一瞬イルマが何を言っているのか理解できなかった三人は、その言葉の意味を理解すると同時に目が点になっていった。

実弾と聞いて、先にイルマがローランに対して放ったバースト・ショットがティアナの脳裏には真っ先に浮かんだ。

あんなものに狙われたら、鋼鉄でさえバラバラに吹き飛ば・・・こんな柔らかい体なんて、一体どうなってしまっただろう。

「（（はいいいつ!?!））」

「まあそう言う事なので、ああいった戒めを含めた注意書きがあるんですね。訓練用魔法弾を使うフィールドには、あんなのは無いです、なんにもね」

三人の心の叫びをまるで無視するかのように、イルマはいつもの笑顔のまま淡々と続けた。

「え、あ、あのー・・・隊長、ちょっと待ってください、隊長!」

引きつった軽い笑みを浮かべつつ、なのはが恐る恐る尋ねた。

「えーと・・・実戦用の魔法弾を使うのが、この五号フィールド?」

「はい」

「・・・ここで、今から私たちが訓練をするんですよね?」

「そうです」

どうやら聞き間違いでは無かったらしい・・・。
なのはもスバル、そしてティアナも僅かな可能性に期待したのだが、むなしくもイルマの肯定でその可能性は否定された。

「やっぱり実戦弾と訓練弾では、心構えから違いますからね・・・
まあ、安心してください。当たり所悪くても、死んだり後遺症が残るような事は無いような威力に抑えてありますから」

「ええと、それじゃあ怪我とかは・・・?」

「怪我ですか? しますよ、当たれば。だから大丈夫なように、医療班がスタンバイしています」

「隊長、フォローになってません・・・」

スバルやなのはが苦笑しながら溜息交じりの言葉で、呟くように返答した。

「しかしまあ、仮にも皆さんは元機動六課……やれるでしょう！」

「やれるでしょうって、隊長……そんな簡単に言われても……」

マイペースなイルマに対し、最早敵しいを通り越して鬼畜なんじゃないかとさえ思う三人。

その後、三人へ詳しいルール説明がなされる。

説明によると、魔力弾を発射するのは淡く発光するオートスフィアと呼ばれる球体。

それらがこのフィールドには動き回る物や、固定砲台のように動かない物が合計30以上。

しかしそんな物が可愛く見えるほど、何より脅威だったのは……

「これ……まさか、砲台……ですか？」

「はい。およそフィールドの二分の一から三分の二の広さを射程に設定している長距離砲です」

訓練を受ける前のイルマの説明に、質問したティアナも含め三人全員が息をのむ。

山頂付近の急斜面の一部に、巨大な砲身を持つ砲台がモニターには映し出されている。

地上本部が開発を進めていた魔力砲アインヘリアル程ではないが、その威力の前にはたとえ巨木に隠れてもそれごと吹き飛ばされるだろうことは、容易に想像できた。

しかしイルマの話によれば、着弾地点から10mも離れれば爆風による被害も受けないとのこと。

「そして、この訓練で皆さんに学んで欲しい事は、ズバリ連携です。幸いにも、空戦魔導師と陸戦魔導師、遠距離砲撃が得意な魔導師と近接格闘が得意な魔導師が揃っていますので、かなり有意義な訓練になると思います」

「連携……ですか？」

聞き返したティアナに、イルマはよくぞ聞いてくれたというような笑顔で頷いた。

「そうです、連携です！ それに、機動六課での皆さんの活躍を聞く限りでは各個分担任して敵にあたり、三人で同一のフィールドにいる敵と一緒に戦った事はありませんでしたよね？」

「そういえば……そうでしたね」

機動六課での一年間を振り返り、なのはが顎に手を当て頷きそして答えた。

思い返せば最初のレリック確保にあたっての出撃時も、なのははフイトと共に上空のガジェット？型を掃討していた。

その間、スバル達はライトニング分隊のエリオとキャロ達とともに列車内に進入して数タイプのガジェットと戦いながら列車のレリックを確保した。

そしてJS事件の最後、ゆりかご戦ではなのははヴィヴィオを救出するためヴィータと二人で傷つきながらも、なのははなんとかヴィオを救出し、ヴィータは駆動炉を破壊。

一方のスバルとティアナは、地上本部目指して移動していた戦闘機人達と交戦、苦戦しながらもスバルは姉のギンガを救出。

ティアナは足を怪我しながらも戦闘機人三体と同時交戦、そしてみごと巧みな戦術で三人を倒す事に成功し、JS事件を解決へと導いた。

確かにそう考えれば、スバルとティアナは一緒の時もあったが、そ

ここなのはまで加わる事は六課ではまず無かった。

「それじゃあ、この間のローランさん達と戦った時が、私たちがなのはさんと一緒にチームで戦った最初だったのね・・・」

「そうですね。本当はこの訓練をその最初にする筈だったんですが、図らずもああいう事になってしまいましたけどね」

『ねえティア・・・』

『何よ？』

『あの時、私たちって連携取れてなかったかな・・・？』

『連携は取れてたと思うわ。ただ最後にローランさんと戦った時私たちの制止を聞かずに飛び出して行ったどこかのバカを例外とすればね』

『ううティア、それを言われると・・・』

念話でティアナにいつもながらツンとした態度で言い咎められ、スバルはこの時は念話でさえグウの音も出ない。

以後気を付けますと言うしかなかった。

スバルがちよつとへこんでいる間、この間の戦いを思い返していたティアナはある違和感を覚えていた。

それは不思議な違和感だった・・・心の中に違和感はそうかもしれないと思う自分と、絶対にそんな筈は無いし信じたくないという自分がいた。

そしてその違和感というのも、具体的に言葉では表しにくいものだった。

(まさか・・・ね)

ティアナがその違和感について少し考え込んでいた時だ、不意になのはが自分を呼ぶ声がした。

「へっ？」と抜けたような声でティアナが顔を上げると、なのはを含め全員の視線が自分に集中していた。

「どうしたの？ なにかあったの・・・？」

「え、い、いえいえ・・・何でもないです」

慌てて返事を返すティアナに、その場にいた皆が一同にクスクスと笑い、ティアナは気恥ずかしさで顔を赤くしていた。

「さて、ではとりあえず・・・行きましようか？」

イルマの案内で、三人はいよいよ準備へと入った。

イルマと別れてからは、三人はそれぞれの計画を立てた。

この訓練は三人全員が山頂の施設に辿り着けば勝利。

誰かが一発でも被弾したその時、訓練は強制終了、なのは達の負けとなる。

イルマと別れてから、およそ十分程経過した頃だった。

三人は戦闘用のバリアジャケットを纏い、デバイスがそれぞれの形へと変化している。

その頃、イルマはフィールドの外れにある司令塔にいた。

研究部のオペレーターら数人と一緒にモニターを見守るイルマ。

準備が整ったようで、三人からはいつでもどうぞの通信が入る。

『それでは始めます。 レディ・・・』

イルマが言う合図に合わせて、フィールド中にオートスフィアが、そして砲台が起動した。

『ゴーツ!』

威勢のいい開始の合図。

その合図と共になのははアクセルフィンを広げて空へ、スバルとテイアナは木立を盾にし、その間を縫うように斜面を登って行く。ふわりと空中を舞うなのは、空中から敵の位置を確認する。

地上では沢山の木々が視界の妨げとなり、敵役のオートスフィアの位置が分かりづらい。

そう判断しての、いわゆる偵察飛行だった。

その時、なのはの視線の先・・・数百メートル離れた山肌にキラリと光った多数の物体。

「見つけた。 オートスフィア! 沢山降りてきてる!」

” Enemies divide into the two groups.” (敵、二手に分かれます)

なのはに発見されたのを察知してか、オートスフィアの幾つかは二手に分かれて山を下るのをレイジングハートが気付いた。

その直後、下の森林地帯から無数の光弾がなのは目掛けて発射される。

それをなのはは右に左に体をひるがえし、回避しながらもオートスフィアを攻撃するため狙いを定める。

ところが・・・

「くっ・・・狙いが付けづらい!」

オートスフィアは森林の木陰から撃つてくるため、上空からでは木々の葉っぱや草などで正確な位置が掴みづらかった。

さらには話に聞いていた天然由来の軽いAMFが発生しているため、

レイジングハートのサーチでもその正確な位置までは分からない。おまけにオートスフィアは狙われているのを感じると、即座に場所を変えてしまうという特徴ももっていた。

(トレノ隊長が言っていた連携が必要な所って、ここなの!?)

なのはは予想以上の訓練のシビアさに、改めて思い知らされて毒づいた。

しかしそれでも、対抗策はいくらでもある。

なのははある作戦を思いつき、一旦後退する事にした。

その様子を、イルマは司令塔のモニターから一部始終を監視していた。

「スターズ1後退」というオペレーターの声を聞き、固唾をのんで見守っていた彼は軽く笑みを浮かべる。

(そう。このフィールドの最大の恐ろしさは、決して実弾なんかじゃない。空からは敵全体の動きが分かるが、その正確な位置までは地上で無いと分からない・・・空と陸、互いの連携を図らなければ、攻撃できないまま終わる)

しかしどうやら、このフィールドがそういう危険性を孕んでいるという事を、なのはは既に気付いたらしい。

おそらく後退したのはそれに気付いたからだろうと、イルマは判断した。

その時、不意に後方の扉が開き薄暗い司令塔の中に誰かが入ってきた。

「あら、早速やらせたのね・・・」

その声でイルマは誰かがわかる・・・セレスだった。
しかし彼女達には、各個人に作業や課題などが割り当てられており、それをセレスもやってきた筈だったが・・・

「セレス・・・タスクは終わったのか？」

「何言ってるの、もう昨日には終わってたわよ」

「そうか・・・早いな」

「あなたが遅すぎるだけじゃないの？」

「・・・かもな」

溜息交じりに問いかけるセレスに、イルマは苦笑しながら答える。
そんな突っつきあい程々に、セレスもモニターに映っているなのは達の訓練風景を見つめる。

「動きは？」

「・・・悪くない」

「そう。もともと個々のポテンシャルは高かったからね・・・全く異なる戦闘形態でも、その中で対応できる幅は広い」

淡々と返すイルマに、前日に近接戦闘を指導したセレスが三人の能力を高く評価していた。

それについてはイルマも理解しているし、そうでなければいきなり最初からこんな訓練はさせない。

もし問題があるとするれば、それは個々のポテンシャルより他にあるとイルマは睨んでいた。

「問題は・・・他にあるぞ」

「ええ。それはそうと、例の件だけねど・・・」

それを聞いてイルマはセレスの方を向き、何か分かったのかと尋ね

た。

しかし結果は、何も分からなかった事が分かりましたと言う、なんと歯がみしたくなるような結果だった。

今では例の件と言えば、他でもないローランとオリヴィエのことだった。

二人の構造等については、その日のうちに承諾を得て調べはついていた。

まずローランは、機械部品で造られた完全なロボットだが、頭脳となる部分にはインテリジェントデバイスと同じようなAIが搭載されている。

あの時は殴るという単調な攻撃しかなかったローランだが、セリーナの分析では砲撃型の攻撃も少しは使える筈とのことだった。

そして超高密度記憶演算出力媒体とも名乗ったオリヴィエ。

彼女と言って良いのかは分からないが、ともかく彼女の正体は単一でミッドほどの大規模な管理世界の情報全てをやり取りできる超高性能のパソコン。

またそれはミッド全体の情報として換算した場合のことで、もし高性能演算装置でも演算できないようなある机上の空論でも、彼女なら出来るのではないかというのが、セリーナの見解だった。

また保存されているデータ量も、天候から魔法に関する事まで、ミッドチルダ全土のコンピューターの記憶データ量を合わせても互角くらいの容量だった。

形容する言葉が無いが、敢えて作るならば、スーパーコンピューターを遥かに凌駕する、さしずめウルトラコンピューターとも呼ばうか……。

ともかく、明らかなオーバーテクノロジー……話には聞いていたが、これがロストログア。

「人間が手を出していい代物じゃない。もし悪意ある人間が使えば……それこそ、あのスカリエッティのような人物がこんなもの

を手に入れば」

「一瞬で世界を100%滅ぼせる方法、というのも計算してしまうかもしれない・・・」

「そうだね。でもきつと・・・」

イルマはあのことなく優しい雰囲気のオリヴィエを思い出した。

AIである筈の彼女には、まるで母のような温かい包容力というか、とにかくそんな物があつた。

まだ敵か味方も分からないのに、感情移入は禁物。

それでも一つ分かっている事がある・・・。

「きつと彼女は、悪事のために生まれたのではないと思う・・・」

「そうね。ところで、それじゃあ二人をいつまでウチであずかっているつもり？」

「分かっている。ちゃんと信頼のおける人物に、既に相談済みさ。ロストロギア“ゴテス・アルタナティーヴェ”を確保したとね」

イルマの説明に、セレスは納得の表情を浮かべた。

ゴテス・アルタナティーヴェ、ベルカ語で“神の代わり”という意味になる。

そしてそのロストロギアのために、動き出していたのは戦技研究部のイルマ達だけではなかった。

世界各地にその姿を現しては、時には絶大な力で惨事を招きかねないロストロギア。

そんな事態を避けるため、管理局は各世界を結ぶ次元という海を渡る部隊を持っている。

それが、次元航行部隊だつた。

そしてその次元空間内に浮かぶ、巨大な構造物。

縦に横に濃いグレーの棒状の柱が伸びている見た目が、まるで悪の

大魔王の城みたいに見えるが実はそうではない。

それこそが、時空管理局の中核である本局だ。

次元の海を漂流している、この本局も一種の艦だと言えよう。

その本局内部の通路を、二人の青年が肩を並べて歩いてきた。

一人は管理局の中でも幹部が着用するような濃紺の制服、そして制服と似たような群青色の髪。

今ドックに停泊している次元航行部隊の艦隊を率いている提督、クロノ・ハラウン。

かつて二件のロストロギア関係の事件の解決に定評のあった魔導師で、つい8カ月前にはJS事件で蘇った聖王のゆりかごを最終的に破壊する事に成功し、はやくも提督としての名声も急上昇中だ。

そしてもう一人、緑の長い髪を持つ青年は査察官のヴェロツサ・アコース。

二人は歩きながら、ある話題に関して話を進めていた。

「そう、見つかったんだね」

「ああ。ロストロギア“ゴテス・アルタナイーヴェ（＝神の代替）”、幸いにも本局所属の部隊が確保したとのことだ」

「そう。どこだい？」

「戦技教導隊第四班・戦技研究部だ」

ヴェロツサも情報通の査察官として、既に何度かは耳に挟んでいた名前だった。

戦技研究部、最新鋭の先端技術を研究しているという、本局戦技教導隊に形式的に所属しているだけの特殊機関。

本局でも上層部しか、その研究内容や本拠地の場所を知らないと言っ

「それはまた、珍しい所で見つかったね。それじゃあ、僕にはそこに行つて・・・そうだね、戦技研究部の人たちがそのロストロギ

アをよからぬ事に使っていないか、調べてくるとか？」

「おいおい。彼らはそんな人間じゃないぞ、ヴェロツサ」

クロノが少し呆れ気味に反発し、ヴェロツサは思わず頭をかいて苦笑する。

「冗談だよ、ごめんごめん。ついこの間の事だから、研究者つてのに変なイメージでも植えつけられたのかな・・・そんなことよりクロノ、君は彼らと面識が？」

「全員とは面識は無いが、戦技研究部の持つ実戦部隊の隊長と隊員の一人は、僕の士官学校時代の三歳下の後輩でね・・・今回のロストロギア確保の第一報も、むこうの隊長が直接僕にしてきたんだ」「そうだったんだ。クロノの後輩か・・・彼らに会いには、誰に行かせるつもりだい？」

「一応、妹のフェイトを向かわせるつもりだ。別件でなのは達も行っているようだから、なにかと色々とやりやすいだろうという事だ」

それを聞いてヴェロツサは、情報提供の対応の仕方がJS事件時の地上本部とは大違いだと改めて感じた。

「他にも、調査要員として派遣する人物がいれば10人程度までなら受け入れられるとの事だ」

「そうかい。対応が良いね、やっぱり君の後輩だからかい？」

「うーん、それも全くないとは言えないかもしれないけど・・・彼は結構他者に柔軟な人間だったからな」

「ところで、さつきからずっと聞きそびれていたんだけど・・・この査察官の僕に頼みたい事って何だい？」

それを聞いて、クロノは周囲に人が居ないかをチラリと一瞥し、誰

も居ない事を確認して口を開いた。

「ここだけの話なんだが、ヴェロツサ・・・実は今度のロストロギア出現と言い、そのロストロギアを狙って現れたガジェットと言い、もしかしたら本局の上層部が絡んでいる可能性があるんだ」

「なんだって・・・！ 本当なのかい？」

「だから、君にその真偽の尻尾でも良いから掴んで欲しいんだ。

もちろん信じたくはないが、上層部しか知らない筈の戦技研究部の場所に、ガジェットが出現したんだ。向こう隊長の話では、ロストロギアとガジェット、どちらかが敵であったとしてもその可能性があるあるそうだ」

「なんてことだ・・・」

最悪の可能性に、ヴェロツサは思わず言葉を失った。

「ともかく、JS事件の時のように、かなり危険な頼みことになるかもしれない。それに、別に深く入らなくても良い・・・尻尾さえ掴んでくれれば、あとはこちらが動ける」

「了解だ。ともかく、最初は少し怪しい人物を絞り込んでいく事にするよ」

「そうだな。まだ時間はある・・・焦らずに地道にやってくれ」

ヴェロツサにクロノが声をかけ、二人はその場で別れた。

クロノは再びJS事件の時のように、暗雲が青空を覆っていくような・・・思わずそんな様子を想像してしまっていた。

それは、もしかしたら再び何かの事件が起こるかもしれないという、クロノの憂慮を現していた。

Flight 07 : 暗雲の到来(後書き)

なのは達の訓練の様子が途中で終わっていますが、それはまた次回。

そして次回からは、話にもあつたようにフェイトが合流します。

それでは次回もお楽しみに。

ご意見、ご感想お待ちしております。

Flight 08 : ワーストプレイヤー (前書き)

すみません、今回フェイトを出す予定でしたが・・・

思いのほか文量が多くなってしまい、次回にお預けとなりました。
期待していた方、本当にごめんなさい。

Flight 08 : ワーストプレーヤー

新暦76年5月5日 AM 9:07

ダウンッ、ダウンッ・・・!

直径数十センチ程の魔法弾が、砲台から断続的に放たれる。そしてそれが着弾した先で、土煙を巻き上げて付近の木々をなぎ倒す。

「マツハキヤリバー!」

” Air right , Wing Road ”

スバルの足もとに正三角形と剣十字形を組み合わせた、水色の魔法陣が展開。

そこから空中へと伸びた道路を、スバルは上って行く。

そして間一髪、さっきまでいた場所に飛び込んできた砲撃から逃れた。

「ティア!」

「大丈夫! それより左、来るわよ!」

土煙の中にいたティアナを心配してスバルが声をかけるが、その心配は無用だったようで逆に注意を受けてしまう。

ティアナは巻きあがった砂塵にせき込みながらも、周囲に多数の魔法弾を展開し迎撃弾を放った。

「クロスファイア・・・シュートッ!」

そしてティアナの周囲から多数の光弾が、現れたオートスファイア目掛けて空気を切り裂いて飛んでいく。

木陰から飛び出したクロスファイアシュートが命中した幾つかのオートスファイアは、その場でパアツと散るように消滅する。

命中しなかったオートスファイアは、体勢を立て直すためかそのほとんどが反転した。

「やった！ ティア、やるうッ！」

ガッツポーズでティアナを激励するスバル。

ウィングロードで高所に居るスバルからいつもの事ながら誉められ、ティアナが思わずありがとうと返そうとした時だ・・・

彼女はスバルの近くの木、そのそばの茂みにいくつかの光る物体があるのに気付いた。

しかもスバルは気付いていない！

（マズイ！ あんなところにオートスファイアのアンブッシュ（＝待ち伏せ）が！？）

「スバル！ 下ッ！」

ティアナが叫ぶのと同時に、オートスファイアから多数の光弾が放たれる。

咄嗟にガードのバリアを張ったスバルだったが、魔法弾が命中してポロポロになったウィングロードがその場で崩壊した。

「うっ、うわわわわッ！」

「スバルッ！！」

「大丈夫ッ！」

” Absorb grip ”

転落したスバルのローラースケート型のデバイス、マツハキヤリバーのグリップ力を高める魔法アブソープグリップ。

そのグリップ力が増したエツジで、スバルは木の幹を蹴るように高所からの落下のエネルギーを水平方向のいエネルギーへと変え、木と木の間を跳ねるように移動する。

そしてガシュツというカートリッジロードの音とともに構えたりポルバーナツクルが、スバルを狙い撃ちしたスフィア群に狙いを定める。

「いつけえええええツ!!!」

スバルの叫び声に合わせて、先程の砲撃と勝るとも劣らない衝撃がオートスフィアを貫通して地面をめくれ上がらせた。

周囲にあった数個のオートスフィアの気配が一瞬で消滅。

まったく冷や冷やさせるんだからとティアナが文句の一つでも言つてやろうとスバルに駆け寄ると、今度はティアナの背後上空に気配が！

「今度は私!?」

無機質なコンピューター制御なのに、熟練かつ意地悪な人間が操作しているように油断も隙も無い！

ところがティアナがクロスミラージュの銃口を向けた時・・・

空から一筋の桜色の光線が飛び込み、ティアナを狙っていたオートスフィア群がことごとく消滅した。

二人が空へと目を向けるとそこには、誰よりも頼りになる人の姿・・・

・！

「なのはさん！」

「なのはさん、助かりました！」

なのはが援護に駆けつけて来てくれたおかげで、二人の表情はパツと明るくなる。

誰よりも頼りになるエースの援護は、二人にとっては何よりの支えだ。

「このフィールド、空と陸が連携を取らないと効率よく敵を倒せないように出来てるみたい。上からじゃ、正確な狙いが付けられないの」

「でも、下からでは向こうの動きが全く・・・あつ！ そうか！」

ようやくティアナも、そして遅れてスバルもこの五号フィールドの攻略法に気付いた。

イルマが言っていたこのフィールドで最も重要になる連携、それは上からは敵の大まかな動きや配置等、戦略面の見極めが可能だが、その反面オートスフィアの細かい位置までは分からない。

一方、地上では周囲のオートスフィアの細かい位置は正確に分かるが、フィールド全体の視界が悪いため全体の動きという物がまるで分からない。

つまりこのフィールドの攻略方法は地上と空とで位置情報を交換しつつ、地上からの目標位置の指示で空からは援護砲撃を行いながら、地上戦力は援護を受けながら地道に敵を倒しつつ山頂へと登って行くことだった。

やがて司令塔でその様子を見ていたイルマとセレスは、三人の動きが変わったのに気付いた。

それぞれ三人が各個群を撃破していたスタイルから、三人で同じ目

標群のそれぞれ最適な位置の敵へ攻撃を加えるというスタイルへと変化した。

そして一番その中で変わったのは、なのはの戦闘スタイルだった。やや前面に出て突出しがちだったなのは、ところが今は地上の二人を援護するため常に二人との距離を一定に保つくらいの位置で援護を行うようになっていた。

木陰から飛び出したティアナが魔法弾を放つと、一発が命中して消滅したオートスフィアから蜘蛛の子を散らすように散開するオートスフィア。

そこへすかさず上空のウィングロードから飛び降りたスバルがリボルバーナックルの強烈な一撃で、数其のオートスフィアを叩き潰す。

『よし、良いよスバル！』

『ありがとうございます！ あっ・・・スターズ3、3時方向からオートスフィア群接近！』

スバルの視界に真右から接近する複数の光る球体。

『了解、任せて！』

” Short buster ”

スバルに伝えたなのはは、スバルの後方から接近するオートスフィアに狙いを定める。

こんどはバツチリだった。

スバルからの位置の指示は、なのはの最速砲撃魔法ショートバスターの照準を正確なものにした。

無言で放ったなのはの砲撃は、一気に五基のオートスフィアを叩き落とした。

「スターズ1、5基をまとめて撃墜。」
「スターズは現在、合計で16基を撃墜しました」
「調子が良いな。訓練生の中ではかなり上位のペースだ」
「陸戦魔導師が二人もいるのにな。空の集団戦が出来ない事を加味すれば、これは指折りのペースだわ」

オペレーターの実況や、モニターから出てくるデータを参照し、セレスはやや歓喜の表情を浮かべる。
このまま行けば、かつて訓練を受けたエリート教導官達のタイムに勝るとも劣らない。
でも、それはあの山場を越えられればの話。

「いよいよ大詰めか・・・ん？」

ふとセレスは全く喋らなくなったイルマの方を向くと、セレスは彼がいつになく真剣な表情でその様子に見入っているのに気付いた。
いつもの茶目っ気な表情とは全く異なり、これが同一人物かと思えるくらいに締まった顔だった。
その時何かを思いついたように、おもむろにイルマはオペレーターへと指示を出した。

「オペレーター・・・」

「はい」

「上段部の砲塔防衛以外の残存オートスフィアの照準を、全てスターズ2と3へ半々に分けてロック」

「えっ!？」

「了解です、砲塔防衛以外のオートスフィアの照準を、全てスターズ2と3へ合わせます」

「ちょっと、イルマ……一体どういうつもりなの？ 一番若い二人を集中攻撃なんて……」

イスに座っているイルマにセレスが思わず語気を強めに尋ねるが、彼は右手を挙げて彼女を制した。

「静かにセレス、見ていれば分かる。彼女達が、本当に集団戦とは何か……“連携”とは何かを理解しているかがね」

いつになく険しい表情、セレスはイルマのこの表情に思わず一種の怖さというか、それに近い感情を知らず知らずのうちに覚えていた。やむなくセレスは隊長であるイルマの指示に従う事にし、再び彼の座っているイスの後ろへと下がった。

「う、うわッ！ 取り囲まれた!？」

「な、何なの!？ 急に攻撃が増えた!？」

足もとにオートスフィアからの高速弾一発が着弾し、おもわずこけそうになるスバル。

そしてティアナも自分たちに火力が集中してきた事に気づき、二人は太い樹木の裏側へと隠れた。

これではらくは持ちそうだと僅かに二人が安堵した時だった。

マツハキヤリバーが二人に迫りくる危険を察知した。

” Warning! The enemy cannon adj
usted aim to us.” (警告！ 敵の主砲が私たちに照準を合わせました)

「う、うそッ！」

「最悪！ こんなタイミングでなんて！」

二人が思わず悲鳴に近い声を上げる。

周囲には自分たちに照準を合わせるオートスフィア。

出ていけば確実に被弾しかねない極めて危険な状況で、敵はじわじわと距離を詰めてくる。

ところがこの木に隠れていても、主砲の砲撃で木ごと吹き飛ばされてそれこそ一巻の終わりだ。

絶望的な状況を打破するには、迷っている時間は無い……でも方法が無い！

一瞬、山頂に近い山肌の一角がキラッと光った。

” Danger! Enemy cannon fired!”
(危険！ 敵主砲発射！)

それは主砲発射の閃光だった。

もうダメ……やられる！

二人の脳裏を最悪の結末がよぎった。

” Protection EX”

その時に響いたAIの機械音声、そして展開するミッドチルダ式の桜色の魔法陣。

一瞬の間の後に展開されたその障壁に主砲弾が命中、眩い閃光と激しい衝撃が周りに広がった。

それをバリアを展開した片手で受け止めるその姿は、本当にエースの凛々しい姿そのものだった。

「二人とも、大丈夫？」

「あ・・・はい！」

スバルが上空に居るなのはに向けて応えようと、スバルはなのはの姿がああ空港火災時に救出してくれた時のようにとても頼もしく思えた。

二人からの返事にまずは安心したなのはは、最大の難関である砲台へと目を向けてその目を細めた。

砲塔が今度はなのはを狙っている。

ドウウンツという砲撃音と共に大きな球状の魔法弾がなのは目がけて向かってくる。

動きは単調、誘導能力は微弱で真つすぐ飛んでくるだけ。

なのはは防護障壁を張るまでもなく、ひらりと軽く体をひるがえしてその砲撃を回避した。

「私がああ砲塔を押さえるから、二人はその場をしのいで。できる？」

「はい」

「やってみます！」

二人からの返事を聞いて、なのははさしずめ二人の最大の脅威と睨んだ砲塔へと攻撃するため山頂付近へと上昇する。

砲塔への攻撃位置になのはが付くと、周囲にあつた防衛射撃用の動かないオートスフィアからパルスレーザーのような無数の対空砲火が放たれる。

なのははこれも高速で飛びまわり華麗に回避し、命中しそうなものに関してはプロテクションで防御。

そしてバリアを消失させると、魔力を溜めていたレイジングハートの杖先を砲塔へと向けその照準を合わせた。

” Divine Buster”
「デイバイーン・・・バスターツ！」

砲塔の砲撃を遙かに凌駕する大口徑大出力の砲撃魔法が、一直線に砲塔へと伸びていく。

これは行つた・・・オートスフィアからの執拗な攻撃を回避しつつ、その様子を見ていたティアナがそう確信した。
ところが・・・

ギューイイツという何かが強引に引き裂かれるような音がすると、
なのはのデイバインバスターは砲塔を覆うように出現したバリアによって防がれた。
その光景に思わず毒づくなのは。

” New reactions in around the cannon. These are barrier generators. (砲塔周囲に新たな反応あり。これらはバリア展開装置のようです)”

どうやらバリアの発生源は、オートスフィア同様に茂みの中や木陰に隠れているようだった。

ところが空からでは狙いが付けづらい。
その上、今スバルとティアナに援護を頼むことなんて出来ない。
なぜなら二人は今、この目の前の砲撃によって苦しんでいる。
なのはは覚悟を決め、頼りになる相棒レイジングハート・エクセリオンを祈るような表情で握り締めた。

「レイジングハート、エクシードモード！」

なのはの姿が光り輝き、その光が晴れた時には彼女の姿に若干の変

化があった。

見た目にはスカートはロングスカート化し、胸のリボンも無くなっている。

しかし目に見えない変化として、大幅な防御力が向上した戦闘用へとなっていた事があげられる。

つまり、このエクシードモードはなのにとっては本気を意味するものに等しいものだった。

変化を終えるとなのはは素早く砲撃形態を取るレイジングハート・エクセリオンの杖先を、再度砲塔へと向ける。

今度こそ砲塔を無力化して二人を助けると、なののは固く心に決めていた。

「スバル・・・あとどれくらい持ちそう？」

「10分くらいかな・・・ティアは？」

「私もそれくらい」

この時スバルとティアアナは疲弊して息も絶え絶えになりながらも、何とか数基を撃破していた。

まだ残っているオートスフィアは十基以上、自分たちを取り囲むようにじわじわとその距離を詰めてくる。

その距離、10メートルにまで接近しようとした時だ。

突然ティアアナが木陰から飛び出し、走りだした。

当然のごとくオートスフィアから狙い撃ちに会い、彼女の身体に多数の魔法弾が命中した・・・ように見えた。

ところが命中した瞬間、ティアナの姿はまるで霧が散って行くように突然消滅した。

そして混乱するオートスフィアに、好機を待っていたスバル達が反

撃に出た。

これはティアナの幻術魔法フェイク・シルエットを使つての作戦だった。

「もらったああッ!!!」

目標をロストして混乱していたオートスフィアに、スバルの拳が叩きこまれ瞬く間に消滅した。
同じく木陰から飛び出した本物のティアナも、数基のオートスフィア群へと狙いを定めた。

”Variable barret”
「シュートッ！」

正確に狙いを定め、放った弾丸は真つすぐオートスフィア数基の群に向かつて飛んでいく。

そしてそれらは急に曲り、高い貫通性を武器にオートスフィアを撃ち抜いていく・・・筈だった。

ところが、一発目が当たった瞬間・・・オートスフィア数基は先程のティアナの幻術のように消え去った。

命中しての消失とは違う、明らかに手ごたえの無い消え方だった。

「なッ！」

「これって、ティアの!？」

自分の幻術と同じものを食らい、ティアナもスバルも二人とも一瞬面食らったように茫然となった。

次に頭が動いた時には、もう遅かった。

「じゃあ、本物は!？」

「ああッ、ティア！ 後ろッ！！」
「えっ！？」

スバルの声に気付き、ティアナが後ろを慌てて振り返るとそこには、数基のオートスフィアが茂みの中から待ち構えていた。

しかも攻撃はもう飛んできている・・・間に合わない！

ティアナが咄嗟にクロスミラージュでガードしようとし、そして・

バシイッ！

電撃が迸るような、なにかに弾かれるような音がし、ティアナが握っていたクロスミラージュが弾き飛ばされた。

指を捻り、ティアナはこの時本当は痛みを覚えていた筈だった。

ところがそんな事よりも、自分が大失態を犯してしまったというシヨックで頭が真っ白になっていた。

そう、まるであの時のように・・・

トサツという音を立て、クロスミラージュが草の上に落ちた。

一見、銃身にやや凹んだ部分があるようにもみえるが、本体に大したダメージは無いようであった。

本来ならばティアナが拾って使う事も出来るだろう。

しかし、これは訓練の為に実戦弾といえど威力をある程度まで落とされているのだ。

このフィールドでの被弾判定は、実戦だった場合を想定して最終的に判定されるよう、各員のデバイスは調整されている。

” I was hit in the main frame and judged to be total loss. The system is down.” (フレームに被弾し、全損

と判定されました。システム、ダウンします）」

それはクロスミラージュからの、全面的な敗北宣言だった。

その敗北宣言と同時に、パワーロスによる影響でティアナのバリア
ジャケットが元の制服へと戻ってしまう。

驚き落胆するティアナが、自分の両手を見つめ変身が解けてしまっ
た事を理解した。

『そこまで！ スターズ4の被弾を確認！ 訓練は中止します！』

訓練を監視していた戦技研究部のオペレーターの声がフィールド内
に設置されていた拡声器から響き、オートスフィアは消え、砲台は
その動きを止めた。

そしてがっくりと肩を落として意気消沈のティアナ。

「ティ、ティア・・・そんなに気にしないで！ 元々、あの作戦は
私が提案したんだし・・・」

「うるさいわッ！ さっきまで上手く行ってたのよ・・・この失敗
が、アンタのせいなわけないでしょ」

ティアナの落胆ぶりは、スバルとしても久々のものだった。

まるでなのはの教導方針に反して、訓練中になのはから撃墜された
時のような・・・

「アタシさえ失敗しなければ・・・不自然な動きであるの幻術を見破
っていれば、こんなことにはならなかったわよ！」

「お、落ちついてよティア！」

「スバルの言うとおりだよ、ティアナ」

その時、上空から降り立ったなのはがスバルに続いて優しくティア

ナに声をかけた。

「なのはさん・・・」

「皆でやってるんだから、ティアナだけのせいじゃないよ。それに、失敗して悔む暇があるなら・・・次に向けて反省だよ。私からもまた、トレノ隊長にこのトレーニング実施をお願いしてみるから」

ティアナを励ますのはとスバル。

頼れる二人からの励ましを受けて、ティアナも被弾時よりは大分落ちつきを取り戻してシヨックも和らいだ。

少し痛む手で少しヒビが入ったクロスミラージユを握り、ティアナはその頼れる相棒にも心の中で謝った。

中腹部分から転送魔法で一瞬にして三人は麓へと帰って来た。

早速、手首を痛めたかもしれないティアナを、医療班のスタッフがその場で診察する。

そうしているうちに、麓の建物にある二階の司令塔からイルマとセレスが下りてきた。

「いやあ、惜しかった。あと少しでしたね」

「トレノ隊長、それにセレスさんも・・・」

「三人とも、良く頑張ったわ。この訓練はね、最初に経験する魔導師っていうのは・・・例え教導隊のエース級でも数分でやられる事もあるくらいなの、とても癖のある難しい訓練だったのよ」

訓練を終えて降りてきた三人の健闘を、セレスが誉め称える。

ただ、訓練は中止になったにも関わらず誉められてもと、ティアナの心は二人からの言葉を聞いても晴れるものではない。

そんな彼女の心の言葉が伝わってしまったのか、イルマが不意に重い口を空けた。

「ただ当然、悪い所もありました。後でデータを本部に持ちかえって全員で分析してみるので、細かい事は後になりますが・・・一応、上で見ていて私と副隊長の二人の見解が一致した部分があるので、それについて簡単に話を・・・」

「今日の訓練で一人・・・チームの足を引っ張ってしまった人がいるわ」

そのとても残念そうな表情をしたセレスの一言が、ティアナにはとても恐ろしくそして重く感じられた。

足を引っ張ってしまった人、それはまさしくチームに敗北をもたらしてしまった自分の他いなかった。

「失敗したのはティアナ、お前だ」と・・・そう言われると思い、彼女は耳をふさぎたい気持ちでいっぱいになった。

「それはね・・・」

セレスの言葉の一瞬の間が、ティアナには恐ろしく長い時間のように感じられた。

そして、そのワーストプレイヤーの名前を告げるため、イルマが口を開いた・・・

ティアナは覚悟して、震えかけた手をぎゅっと握りしめて抑えた。ところが・・・

(えっ!?! うそ・・・)

聞こえてきた名前に、ティアナは耳を疑った。

それは自分の名前じゃなかった。けれども、そんなティアナの表情には安堵など微塵も無い。

驚き、驚愕、愕然・・・しかもそんな表情をしているのは、自分だけじゃなかった。

スバルも、自分同様に信じられないという表情で、まるで人形のようなきこちない動作でそつと自身の横へと向いた。

「チームの足を引つ張ったのは・・・高町教導官、あなたです」

残念そうな表情でやうつむき加減のイルマが告げた、ワーストプレーヤーは高町なのはこの一言に、三人は一樣に言葉を失った。

どうしてなのはさんが!?

ティアナは治療のため座っている席で、雷に打たれたような表情で動けずにいた。

訓練で一番足を引つ張ったのはなのはこのイルマの発表に、シンとなる一同。

空調機と作動している電子機器類の小さな音だけが、彼らには聞こえる。

「どついう、ことですか・・・？」

沈黙が十秒ほどたって、ようやくなのはがその回答に疑問の声を投げかけた。

その表情には戸惑いと不満が、横に居たスバルの目にも見て取れた。スバルにも信じられない事だった。

あの無敵のエース・オブ・エースと言われたなのはが、足を引つ張った張本人なんて・・・

もっとも信頼しているなのはを馬鹿にされたようで、スバルは思わずムツとなり無意識のうちにイルマ達の方を軽く睨んだ。

「そのままの意味ですよ。幾つかの細かいミスは、あなた以外の二人も起こしています、それはとりわけ実戦でも致命的な瑕疵（かし）きず、欠点）にはならない。しかしあなたが最後に犯したミスは、実戦だったらとても危険な結果を招く・・・」

「ちよつと待つてください、トレノ隊長！」

そこに後方で医師の診察を受けていたティアナが、彼らを跳ねのけるように起き上がりなのは達の間を通り越してイルマへと詰め寄る。

「最後にミスしたのは私です！ 私が後方に回り込んだオートスフィアに気付いていれば、こんな事にはならなかったんです！ なの

はさんを責める事には、納得がいきません！」

「ティアナ……」

「ティア……」

イルマに厳しい表情で猛抗議するティアナに、なのはとスバルはハラハラしながらその成り行きを見つめる。

おまけに、かつて教導方針に反対して、なのはに詰め寄って来た時のティアナの表情と、今日のそれは殆ど同じように見えた。

「フィールドに慣れるのにも時間がかかり、幻術も効果的に使う事が出来なかったようにも思います。だから今回、責めを負うべきは、なのはさんではなく私の能力不足だと思えます！」

それをイルマは決して怒るような表情を見せる事も無く、黙ってティアナが言い放つ抗議を聞いていた。

隣に居るセレスも、目を閉じて入るが時折頷いているため、イルマと同じようにティアナの言葉に耳は傾けているようだ。

「言いたい事は、それだけですか。ランスター陸士？」

「え？」

イルマの物言いが少し冷たいように感じ、ティアナは思わず声をあげてしまった。

「君たちが、絶大な信頼を寄せる高町教導官を庇いたくなる気持ちも分かるし、君が犯したミスもミスと言えば確かにミスだ」

「いえ、私は理由も無く感情で庇うなど……！」

ティアナは思わず言い返したが、感情的じゃないと否定したくても否定できるはずが無かった。

「しかし君が最後に被弾した原因が高町教導官にあるとしても、君は彼女を庇い続けて自分を責め続けるつもりかい？」

その言葉にティアナは驚き、頭は混乱して真っ白になる一歩手前だ。

「私のミスが・・・なのはさんのせい、なんですか？」

「皆さんは最初に気付いた筈ですよ。陸では視界が悪いため接近してきた敵の動きや位置しか分からない。そしてAMFが薄くなる空からは、反応の動きで大まかな動きは察知できても、目標の正確な位置まではつかめない。ここは、そういったフィールドなのだと」

「そこで・・・問題は、最後になのはさんが敢行した砲台への攻撃よ。一発目で、砲台を覆うシールドとその発生源が地上にある事に、気付いたわよね？」

セレスの問いかけに、全員の視線が一斉になのはへと向けられる。

「ええ。おまけに、砲撃とオートスフィアの挟撃で二人が動けずにおりました。ですから、二人が窮地を脱するには砲台の破壊しかないと思います・・・」

「それで、エクシードモードまで出して・・・力づくかつ速攻で砲台を無力化しようとした。そう言う事ですね？」

イルマの確認のための問いかけに、なのはは黙って頷いた。

「それでは、砲台を無力化すればオートスフィアは停止しましたか？」

「あッ・・・！」

「あの時、陸の二人に差し迫った危険は、砲撃よりも周囲を取り囲

み始めたオートスファイア群でした。現に最後、ランスター陸士はオートスファイアからの射撃に被弾したでしょう?」

「なのはさん、あなたは独断で二人の危険を判断して動き、結果的には二人を危険な状況のまま放置していたと言う事になるのよ。」

あの時、あなたが取るべき行動は、飛来する砲撃を防御しながら二人を取り囲むオートスファイア群を掃討する事だった」

二人の的を得た指摘を受けて、なのはが黙り込んで思わず俯いてしまふ。

それがなのはが、自分のミスを認めた瞬間でもあった。

「・・・それでは、この訓練のデブリーフィング(＝結果を振り返るためのミーティング)は、明日の1400時に隊本部の会議室2で行います。・・・以上、解散」

イルマの号令で彼らとなのは達が敬礼を向け合い、その場は解散となった。

未だに不安そうな表情の三人と共に、彼らは隊舎の方へと引き上げていった。

同日 AM11:30 第十一航空隊本部内、戦技研究部長室

薄暗い部屋で複数のモニターを眺めつつ、ひざ下まである白衣を着た男性は椅子へと腰を下ろした。

その時、失礼しますという声が聞こえ後方の扉が開くと、そこに姿を現したのはイルマだった。

「司令、訓練生三人の五号フィールドでの訓練は終了しました」

「御苦労さまトレノ隊長。結果は聞いていますよ、なんとも惜しかったね」

「はい。あと一步という所でした」

「フフフ、あと一步・・・されど一步だよトレノ隊長。その一步が戦場で生死を分けるのなら、それはあまりにも大きすぎる一步だ。今後の彼女たちの良い成長のために出来る事があれば、いつでも訪ねて来てくれたまえ、隊長」

戦技研究部の部長は、イルマに言い諭すようにゆつくりと喋る。

その一声一声が最初は怪しく感じ、中には気持ち悪いと思う人もいるかもしれないが・・・。

「それで、先日のロストロギアの件ですが・・・現在、捜査のほうはどうなっていますか？」

「次元航行部隊が一人、敏腕の執務官をこちらへ寄こすそうだ。

詳しくは、その執務官と話し合って決めると良い・・・この件に関しては、私は君に決定を一任するよ」

「わかりました、最善を尽くします・・・それで、その執務官はいつこちらにいらっしゃる予定ですか？」

「・・・明日の午後だと聞いている」

なるほど、善は急げか・・・確かにロストロギアは、下手をすれば一時一秒が命取りになる場合だつてある。

その事を特にクロノは理解しているのだろう・・・自身の父の死という犠牲のもとに。

「分かりました。では各隊員にもその旨を伝えておきます」

「ん、よろしく・・・トレノ隊長」

背を向いている司令に、イルマは敬礼を向けてその部屋を後にした。すると偶然にも、反対側の隊司令室からファイルを胸に抱えて歩いて来るセレスと遭遇した。

おそらく、セリーナから今日の三人の訓練の詳細データを、デブリーフィングで使うための紙面資料として受け取ってきたのだろう。

「司令に報告？」

「ああ。少し残念がってらっしゃったようだが、結果を成長の糧にして伸びて欲しいとも……」

そう、とセレスが軽く頷き呟く。

その時ふと、イルマは大事な事を思い出し、セレスへと尋ねる。

「それで、三人の様子はどうだった？ まだ、なんか恨まれてる感じかな？」

「馬鹿ね、そんな人たちじゃないわ。でも確かに、皆それなりにシヨックだったみたいね」

なのはにしてみれば、これまで厳しい訓練や実績を重ねて来たにもかかわらず、命取りなミスを犯してしまったというシヨックはあるだろう。

ただし、そんなことで心に深い傷を負うほど、彼女はヤワではない。第一、そんなことではとても教導官など勤まる筈が無い。

ただ、問題はスバルとティアナの事だった。

これまで機動六課において、誰よりも信頼できるなのはの教導を受けてきた二人。

その二人が、なのはがアレコレと酷い物言いを受けている様子を見れば、少なからずシヨックを受けることくらい当然だ。

「なのはさんからすれば、あんなこと言われてショックもそうだけど・・・あんな様子を二人に見られて恥ずかしいとも思う筈よ。

後からなのはさんと呼んで、彼女にだけそれを伝えると言う事も・・・

」

「それも考えたけど・・・どうしてもあの場で伝えないといけない事が二つあってね。一つは例えエース・オブ・エースでも、完全無欠じゃないっていう戒めというか、まあ注意みたいなものかな」

「もう一つは？」

「もう一つは・・・ランスター陸士のことだよ」

イルマの回答を聞いて、セレスはそれだけで思わず納得していた。

「前に機動六課でも、ちょっとしたトラブルがあったみたいけど・・・彼女、結構自分を悲観的に見る癖があるだろう？」

「それで、きつと自分のせいだって思い続けてるんじゃないかって考えて・・・あの場で言うって決めたのね」

「まあ、そういう事かな。結果として、また違うショックを与えてしまったような気がするけど・・・」

溜息を吐きつつそう呟いたイルマ。

セレスはそれを聞いて、思わずフツツと笑みをこぼした。

「・・・何か変な事でも言ったかな？」

「いえ。自称敵しい隊長さんも、結構気遣いが上手なんだと思っただけです」

皮肉たつぷりの表情と言葉を投げかけられ、イルマは軽い笑みを浮かべる。

そして一言・・・

「昔の反省からね」

というイルマの一言は、二人以外の誰にも聞こえることなく、廊下で微かに響いた。

同日 PM10:03 第11航空隊隊舎内

消灯時間が過ぎ、非常灯以外のメインの照明が落ち薄暗くなった隊舎内。

ところが、隊舎内の食堂だけは未だに明々としていた。

その室内には二つの人影、既に就寝前の部屋着に着替えていたスバルそしてティアナだった。

二人がやっていたのは話し合い・・・特に今日の訓練での事についてだ。

その話し合いも終わりに近づいたころ、ふとスバルがある疑問をティアナに投げかけた。

「そつえばさ、ティア」

「なに？」

「クロスミラージュは直ったの？」

なんだそんな事というような表情で、ティアナはスツとポケットから傷一つない待機状態のクロスミラージュをスバルに見えるように見せた。

訓練終了時には数か所にヒビが入っていたクロスミラージュだったが、今では傷一つないピカピカの状態だ。

「アウトフレイムの一部に傷があっただけで、幸い内部にまでは損傷は及んでなかったから、夕方前にはもう戻って来たわ」

「そうなんだ、良かったね、ティア」

「それもこれも、なんだかんだ言っただけで手加減してもらってたからよ」

そのティアナが行った手加減というセリフに、スバルは思わず首をかしげる。

「手加減？」

「そ、最後に私が被弾した攻撃・・・あの直前に私たちの背後にオートスフィアは回り込んでいたんなら、別に私が振り返って気付く前に、私かアンタの体を撃つても終了になったでしょう？」

「そういえば・・・そうだよな」

「トレノ隊長は自分は厳しいとか言ってたけど、結局私たちはあの人に助けられてたのね・・・」

（ああいう風に言われてなければ、私はまた同じ過ちを犯していたかも・・・）

テーブルの上で重ねた両手に、ティアナが自分の顔を乗せて複雑な表情でややうつむく。

それは思い悩む表情であるが、スバルからしてみればティアナが自分の成長に疑問を感じ、なのはの教導方針に反発した時の物より断然穏やかだ。

今のティアナは昔に比べて、かなり理論的に悩んでいるのだとスバルは考えた。

「そう・・・きっと助けられてたのよ、私たち」

もう一度確認するようにティアナが復唱して言ったその言葉に、スバルは「そうだね」と温かな笑みで答えた。

その様子を食堂と廊下を繋ぐドアの僅かな隙間から見守る三組の視線。

「なんか、昔というか、ついこの間というか・・・ブルーインパクト結成前を思い出すな」

「そうね。八割がた、ブラットが原因でミスして、深夜まで反省会をした事もあったかしら」

「オイ、俺はそんな問題児じゃ無かった筈だぜ？」

二人の様子を眺めつつ会話をしていたのはブラットとルノア、そして後ろには二人の様子にやれやれと呆れ顔のアルだった。

「しかしまあ、今のうちに悩めるだけ悩めって奴だよなあ」

「悩めば悩むほど、成長できる・・・っていうのは司令の言葉よね」

「ところでお前たち、もう消灯時刻を過ぎてるんだが？」

暗くて表情はよく見えないが、アルの口調にはちよつとばかしの苛立ちが含まれているようにも感じられた。

「まあ別に良いじゃないですかアルさん」

「そうそう、あんまりお堅い事言ってるよ・・・そのうち体までカッチコチになつて、すごい速さで歳とりますよ？」

「ンガッ・・・」

二人に言われた言葉を聞いて、ガツンという衝撃を受けたアルが思わずよろけた。

ともかく、スバル達がこの日深夜まで大事なミーティングを続けられたのも、彼らの粋な計らいもあったのだということにしておこう・・・。

新暦76年 5月6日 PM1:10

午前の訓練も無事に終え、汗をかいた体をシャワーで軽く流すと、スバルにとっては至福の時である昼食の時間がやってくる。

三人とヴィヴィオを合わせて四人で食堂で一緒に食事を取っていると、スバルはふと横に目が行った。

横のテーブルはブルーインパクト隊員達の席だが、今日はイルマの姿が無い。

というより、これまで毎日午前中にはどこかで顔を合わせていたのだが、今日に限ってまだ一度も彼の顔を見ていない。

「あー、セレスさん」

メインの魚のムニエルをのみ込んだ直後にスバルがセレスに問いかけると、彼女は「ん？」と言い食後のコーヒーを飲む手を降ろした。

「イルマさん、今日はどこに行かれていますか？」

「ああ、イルマ？ イルマは今日は、先日見つかったロストロギアの件で、次元航行部隊の方と会うそうよ」

「次元航行部隊、ですか・・・？」

「本局が、もう動き始めたんですか？」

「まあ、そういうことになるわね」

セレスが心配そうに尋ねるのは達に、事態が事態だけに少し残念そうな表情で彼女は答える。

「でも、貴方たちからすれば喜べる事かもしれないわよ？」

喜べるって、一体どういう事だとなのはは頭を捻らせた。

四方を山と海に囲まれた戦技研究部の本部。

そこへと通じる一本道を、一台の黒いスポーツタイプの車が走っている。

運転していたのは長い金髪を持つ女性と、隣の助手席には茶髪に眼鏡の女性だった。

二人はともに管理局の制服を着ている。

運転しているのは本局所属の執務官、フェイト・T・ハラオウン。

そして隣には彼女の副官、執務官補佐のシャリオ・フィニーノの姿があった。

「戦技研究部本部には、このまま真つすぐみたいですね」

「そうみたいだね。それよりシャリー、お休みの途中だったんだよね？・・・ごめんね、急に呼び出したりなんかして」

「良いんですよ、気にしないでください。」

「でも確か、ミッドの魔法万博に行く予定だったって聞いてたから・・・」

最新の機械やデバイス等に目が無いシャリオは、いわゆるメカオタなだけに二年に一回ミッドで開かれるミッド魔法万博への参加を熱望していた。

開催一カ月前くらいから興奮が収まらないらしい。

「だって、フェイトさんが重要な仕事に向かっているのに、自分だけ楽しむなんてもつてのほかですし。それに・・・」

「シャリー・・・？」

「だって戦技研究部ですよ戦技研究部！！ ミッドの万博なんかよ
り、こっちは一生に一度だって行けない人が多いって言うのに、そ
こに行ける機会を私が逃すワケないじゃないですか！」

「そ、そういえば、そうだね・・・」

「ああ、一体どんな物を研究しているんだろう・・・あつと驚くデ
バイスに、超が幾つついても足りない高性能の電子機器・・・ああ
本当に楽しみですッ」

(シャーリー・・・仕事、忘れてないよね・・・?)

目がキラキラと輝くシャリオに、フェイトが苦笑しながら、ちよつ
とした心配は心のうちに秘める。

「そういえば研究部では常に沢山の魔法技術や新しい戦闘技術が誕
生しているんですけど、その中から使える物をテストするための部
隊があるそうですね」

「そう、たしか“ブルーインパクト”っていう部隊だね？ そこ
に今、なのはやスバル、そしてティアナは訓練生として参加してい
るみたい」

「えっ！？ なのはさん達も、来てるんですか？」

「別件だね。 あれ、シャーリーに話はしなかったっけ？」

「へえそうだったんだあ。 皆元気にしてるかなあ」

「シャーリー、まだ六課が解散してまだ一週間くらいしか経って無
いよ」

そうでしたねアハハ、と笑うシャーリーと彼女につられて思わず笑
みのフェイト。

しかしその心中には、今回の件に関してある懸念が浮かびあがっ
ていた。

逃げてきたロストロギアに、それを追うようにして現れたガジェツ
ト。

フェイトは直感的に、まだJS事件は終わっていないとさえ思った。そしてもう一つ、空戦魔導師部隊ブルーインパクトは、限られた訓練生への新しい戦闘および魔法技術の教授と戦技研究を行う部隊。彼らだけに言えた事ではないが、戦技研究部自体が管理局の資料閲覧の規制が最高の部類にあり、検索して出てくる資料のどれも閲覧には本局局長の許可を必要とする。

ただ前から知っていた事とクロノからの話でも分かった事だが、部隊としては管理局の中でも最高戦力ランクにあたるSSS+が与えられている事。

これはつまり、SSS+ランクという管理局が考え得る最高レベルの敵と交戦しても互角に渡り合えるという事を意味していた。

『隊員の中で最高魔法ランクはSSと聞いているけど、それを6人集めたとしても普通はSSS+クラスには・・・到底届かない』

出発前にフェイトがクロノにブルーインパクトについて尋ねた時、彼はそう言っていた。

彼らをまとめる者が居てこそ、初めて最大の戦果をあげる事が出来る・・・。

(しかしそうなるここには、そんな最大戦力を置いても守らないといけない何かがある・・・そういうことなのかな)

フェイトがそう色々と考え込んでいるうちに、車から見える戦技研究部の建物やビル群が間近に迫ってくる

そこに居た守衛が何食わぬ顔でとりあえずと挨拶をすると車のウィンドウが開いてフェイトが、予め発行されていた許可証を掲示する。

「本局より参りました、フェイト・T・ハラオウン執務官と」

「執務官補佐、シャリオ・フィニーノです」

二人の名前と許可証を照らし合わせて確認すると、守衛はどうぞと言つて正門を開き、フェイト達の車はその中へと進入して行った。

最初に気付いたのは、スバルだった。

ちょうど食堂の窓は隊舎の表玄関に面しているため、外の様子がつぶさに分かる。

窓際の席に座っていた彼女は、いくつもの研究棟がある向こう側から一台のどこかで見た事あるような車が走ってくるのに気付いた。

「あれ、あの車って……」

「ん？」

三人がスバルにつられて窓の方を見つめる。

やがて隊舎の前に停まり、待っていたイルマの前で降り立った人影は……

「あッ、フェイトちゃん!？」

「やっぱりフェイトさんだ!」

「シャーリーさんまで……!」

三人は驚きとも喜びともつかない表情で、お互いの顔を見合わせた。

「ようこそ、戦技研究部へ。 第11航空隊ブルーインパクトの隊長であります、イルマ・トレノと申します」

「フェイト・T・ハラOWN執務官ならびに、シャリオ・フィニーノ執務官補佐、こちらでロストロギア確保との報せを受けて参りました」

イルマが敬礼の後にフェイトとシエリオの二人と握手を交わし、二人の徒労をねぎらう。

「遠路御苦労様でした。とりあえず、これまでに分析で分かっている事を隊員室の方で軽く、説明したいと思いますので、こちらへどうぞ」

いつもながらニコニコ顔のイルマに、初めて彼に会ったフェイトとシャリオは思わず疑問を浮かべる。

（お兄ちゃんがあれだけ言うくらいだから、もう少し堅かったり威厳に溢れたような人だと思っていたけど・・・）

（むしろ、こっちの方が親しみやすいかも・・・）

そんな事を考えつつ、二人がイルマの案内で隊舎へと案内された時・

「フェイトさん！ シャーリーさん！」

予め知っていたのであまり驚きはしなかったフェイトにシャリオだが、スバル達の元気な様子には少し驚いたようだった。

スバルに続いてティアナ、そしてヴィヴィオを引きつれたなのはが姿を現す。

「みんな・・・！」

「元気そうね！」

フェイトやシャリオがにつこりと笑みを浮かべて答える。

その様子を見てイルマは、まあ仕方ないかと思いいその場にとどまった。

「ここでの生活は、もう慣れた？」

「はい。なのはさんや、ブルーインパクトの皆さんのおかげです！」

ティアナの快い返事を聞いて、イルマはクスツと笑い「どうも」と一言。

「本局から次元航行部隊の人が来るって聞いてたけど、フェイトちゃんだったんだね」

「なのは・・・うん、兄さんが派遣を決定してくれたの。いろいろと、やりやすいだろうからって」

なのはと言葉を交わした後、彼女はヴィヴィオへとそつと目を向ける。

「ヴィヴィオ、久しぶりだね。元気にしてた？」

「うん、フェイトママ！」

「そっか。それを聞いて一安心」

この後も少し全員と会話を楽しんだフェイト達。

会話を終えるとなのは達はこれから午後の訓練に、そしてフェイトとシャリオはイルマに案内されて隊員室でオリヴィエらの事について概要を聞いた後、改めてその場所へと向かう。

エレベーターを降り、地下数階の位置にある部屋。

そこがオリヴィエ達に臨時で宛がわれた部屋だが、一步も外へ出ら

れないため、ある意味扱いが扱いだけに軟禁状態ともいえる。

扉を開けると、数人の白衣を着た技師と彼らを取りまとめるセリーナが目についた。

そしてイルマ達に気付いた彼らはその場で敬礼すると、再び作業を始める。

「テストロッサ・ハラウン執務官そしてフィニーノ執務官補佐、こちらは第十一航空隊の研究班主任のトライハート三尉」

「セリーナ・トライハートです。テストロッサ・ハラウン執務官にフィニーノ執務官ですね、ご活躍はかねがね」

「いえ、とんでもありません。それより早速なんですけど、今何をされているんですか？」

「これですか？ これらは、多種に渡るエネルギー伝達を測定する機器や、オリヴィエさんの回路の一部に高性能のコンピュータを繋いで、いろいろと調査をするためです」

セリーナが部屋に運ばれている大小さまざまな機械類を指さして答えた。

「それで、詳細については……直接聞かれてください」

「は、直接……？」

フェイトがセリーナの言葉を聞いてきよんとした時……奥の基盤に設置してあるオリヴィエから、黄金の光と共に彼女の人の姿を形成した。

「これは……ホログラム!？」

「これがロストロギア、ガテス・アルタナティーヴェ……」

その様子にフェイトもシャリオも声を失っていると、先にオリヴィエの方から二人に話しかけてきた。

「初めまして、私がオリヴィエ。 貴方がたの言う、ロストロギアの一種です」

「あ……ええと……」

「あの……どうかしましたか？」

返事に困っているフェイトに、オリヴィエが心配そうに声をかけてきた。

「いえ、その……なんというか、初めましてロストロギアです、なんて名乗ったロストロギアは初めてだったものですから、つい……」

「フフツ、そうだったんですか……それは失礼しました」

このやり取りの中で、フェイトはクロノが“封印するには少し困る”と言っていた理由を理解した。

おそらくAIだと思うがこのオリヴィエ、これまでのロストロギアどころかデバイスのAIも比べ物にならないくらい人間に近かった。物言わぬモノなら封印するのも何とも思わないが、極めて高い人格形成が出来ているような物体を果たしてモノと言えるのだろうか？そしてそんな存在を、本当に危険な物と見なして封印するべきなのだろうか……

もしかしたら、私は後に究極の選択を迫られるかもしれないと、フェイトは心の中で覚悟を決めた。

Flight 09 : 第一の合流（後書き）

最後の方ですが、これでようやくフェイトが合流しました。
それにしても、私の作品って大体テンポが遅いですね。
早めたつもりがコレだったりします（笑）

ご意見・ご感想をお待ちしています。

Flight 10 : Into Danger Zone

新暦76年 5月6日 PM21:40

「なのは、入るよ?」

フェイトがそつと囁くと、目の前のドアが開く。

なのは個室に入って目についたのは、ベッドの上で既にスヤスヤとお休み状態のヴィヴィオ。

そして開け放たれたドアと夜風で揺れ動くカーテン、そしてその奥のベランダにいたのは、なのはだった。

彼女はなぜかぼんやりと、夜の闇に浮かぶ三つの月を見上げている。

「・・・どうしたの、なのは?」

「フェイトちゃん、うん・・・ちよつと、考え事をしてただけ」

そつか、とフェイトは軽く流そうとしたが、なのはのちよつと思いつめたような表情を見て、フェイトはとてもしうする気分になれなかった。

そしてそつとなのはの隣に来たフェイトが、彼女と同じように青白き月を見上げる。

「・・・また無茶しちゃったことを怒られたんだってね」

「なッ!?!」

突拍子もなくフェイトが言った言葉に、なのはは恥ずかしさを覚えて思わずたじろいだ。

ベランダから落っこちるようなオーバーアクションこそないが、そ

れでも彼女は飛び上がるくらいにドッキリと驚いた。
そんな彼女にフェイトはツンと澄ましたような表情で、さらに続ける。

「トレノ一佐から聞いたよ。・・・周りが危険な状況になったら、
どうもなのは逆に周りが見えなくなる癖があるからって」

「うう・・・」

「レイジング・ハートも。　なのはを引き留めるどころか、二人揃
って無茶をするんだから・・・！」

” I · m · s o r r y · ” (す い ま せ ん)

フェイトの思わぬ言葉攻めに、なのははもう苦笑いを浮かべる以外
の術を持っていなかった。

「それに、正式にヴィヴィオを引き取って母親になったんだから、
ね」

「そうだね。　ごめんね、フェイトちゃんにまで心配かけて」

分かれればよろしいと、フェイトはなのはの顔を見てフツツと笑みを
浮かべる。

「実は、この数日でトレノ隊長達と一緒に訓練をして分かった事が
あって・・・私に足りなかったのは、周りに対する信頼じゃないの
かなって」

「信頼？」

「その、なんて言うのかな・・・別にスバルやティアナの腕を信頼
していないってワケじゃないよ、もちろんフェイトちゃんだって」

少し心配そうに見つめるフェイトに、なのはは慌てて言葉を訂正す
る。

「ただ、訓練で一緒に空を飛んでいた時に分かったんだけど、ブルーインパクトは編隊で飛んでいる時には、基本隊長以外前方を見ないんだって。後ろの五人が見るのは隊長だけ、こんな編隊での飛び方・・・教導隊でも絶対に教えない危険な飛び方だよ」

「一歩間違えば、墜落。最悪の場合・・・」

「それに戦闘のときだって、皆は全然疑いもせずに隊長の指示に従って行動する。凄いやね、そんな事が出来るくらい、皆は隊長やお互いの事を信頼し合っているって事なんだね」

この数日間でののはが実感したブルーインパクトの凄さを、彼女は脳裏によみがえらせた。

訓練時の連係プレーからも、地上に居る時の隊員達同士の会話でも、彼らがイルマに寄せる信頼が無上の物である事がなのにも見て取れた。

「お互いをあそこまで信頼しているからこそ、少し仲間が危険になったからと言ってすぐに助けに行かなくても良いって思えるんだね」

そして本当に助けが必要な時には、黙っていても助けが来る」

「そうなんだね。六課のみんなとは、またちよつと違うね・・・」

「うん。私がおここに居る三ヶ月間で学ばないといけない事は、自分それだと思う。それに、具体的じゃ無い物をここまで真剣に学びたいって思ったのは、これが初めてかも。そういう信頼のあり方もあるんだなあってね」

フェイトはそれを聞いて、なのはの中で何かが変わったような気がした。

これまでは無茶をするなと周りに言いつつも、仕方が無い時には自分から真つ先に無茶をしていたのは。

そんな彼女が、絶対に無茶をしないための方法を真剣に学びたいと

言っているのだ。

「・・・励まそうと思っていたけど、別に要らなかつたみたいだね」
フェイトは安心したようになのはへと、そう優しく言いかけた。

今回のフェイトの活動は時間が限られているため、なのはと一緒に居る時間も少ない。

彼女はそのまましばらく、ロストログア捜査のためにここへと留まり、そして本局からの応援で護送手段が整えば長くても一週間後にはここを発つてしまう。

だから、なのはの前日のような無茶ぶりを聞いて、フェイトは早速なのはの所へとやって来たのだ。

しかし彼女も言うように、それはどうやら要らぬ心配だったらしい。

翌朝も、そして翌々日もフェイトはなのは達の訓練風景を仕事の合間に眺めたりしていた。

そこではなのははこれまでとは違い、三人で連携を図るような訓練を取り入れたりしていた事があった。

ブルーインパクト3人との模擬戦も、かなり善戦するようにはなってきたおり、数日間でここまで全体が向上するのは、さすがなのはの教導と言ったところなのだろうとフェイトは思った。

それが、嵐の前の静けさだったという事に気付いていた人間は、多くはないが少しは居た。

ところがその日は、彼らの予想を遥かに超えた早さで訪れる。

それは一週間以上経ったある日の真夜中に起きた・・・。

5月15日 AM3:30 ミッドチルダ某所公園

住宅街の中心部にある公園。

昼間は住宅街の中心という事もあり、またその噴水の広場が綺麗だと言う事もあって訪れる人は多い。

ところが誰もいない筈の、その噴水の広場には十人ほどの人影があった。

真夜中の公園を溜まり場にする、不良たちの人ばかりだった。

好き勝手ゴミを散らしたり、バイクの騒音をまき散らしたりともうやりたい放題だ。

その公園へ、新たに数人の人影が走って駆けつける。

「管理局首都警備隊の者だ！ 君たちが真夜中にするさいと、ここの住民たちから苦情が出ている。今すぐ退去しなさい！」

「んだとコラア！」

「うっせーよ。どこで何しようが、俺らの勝手じゃねえか！」

全く聞く気が無い彼らに対し、首都警備隊ももちろん一步も引かない。

「しかしね、君たちの行為は迷惑行為にあたる。あんまりやり過ぎると、逮捕する事になる」

「へえへえ、出やがったよ。正義の味方気取り……！」

「君たち、いい加減に……！」

ようやく警備隊員達が彼らの言動を腹にすえかねた時だ、不意に奇妙な振動を感じた。

それは向こうの不良少年たちも一緒に、彼らも首都警備隊員達と同じようにあちこちをキョロキョロと見渡していた。

「な、何の音だよコレ？」

「さ、さあ……」

ゴゴゴゴゴゴ……

次第に振動はどんどん強くなっていく。

そしてようやく気付いたのは、地震とかの類では無い。
震えているのは大気だった。

それに気付いて一人が上空を見上げた時、彼は思わず驚愕した。

「な、何だよアレ!？」

空を埋め尽くすような何かの大群……多すぎてまるで空が動いているかのような錯覚まで覚える。

「あ、あれはまさか!？」

首都警備隊員がその正体に気付いた。

半年以上前に起きたJS事件、その時に都市部に甚大な被害をもたらしたガジェットドローン。

彼らの上空を飛んでいるのは飛行型と重爆撃機型の新タイプ?型、
そしてその?型に格納されている艦載機円盤型の?型の大群だった。

「ガジェットドローン!?!? あ、あんなにたくさん!?!」

「う、ウソだろッ!?!」

彼らは慌てて本部へと通信回線を開こうとするが、端末の画面には砂嵐と雑音が聞こえてくるのみであった。

5月15日 AM3:43 戦技研究部・第11航空隊司令部“ブルーポイント”

昇っていた月も大半が傾き、皆が寝静まっている真つ最中の時刻。数人のオペレーターが事務作業や各世界との通信、そして空域の監視といった作業を淡々とこなしていた。

夜勤組の交代要員とはいえ、深夜にまたがれば疲れもたまってくる。通信士の一人が伸びをしようと机から少し離れた時、彼の目の前のモニターにある表示が出現した。

「なッ、緊急通信!？」

「司令! 本局から緊急通信、セルシオ・ガーラント防空司令部最高顧問からです!」

「・・・繋ぎたまえ」

司令室の一番後ろの席に座っていた第11航空隊司令が、オペレーターに通信を繋ぐように促す。

その指示を受けてオペレーターが機器を操作すると、司令部の大きなスクリーンに角刈りに白髪の厳つい顔の老齢男性が映し出された。

「ガーラント大将・・・緊急通信と言う事は、やはり?」

「そうじゃよ司令。奴らが動いた・・・よりもよって、奴らはほとぼりが冷めかけたミッドの街中を、爆撃しておる!」

「ッ・・・! なんとという愚行を・・・!」

ガーラント大将の言葉と、平行してスクリーンに映し出されたクラナガンの今の様子・・・。

あちこちから闇夜をオレンジ色に染め上げる劫火が舞い上がり、空

にはあのガジェットドローンが数タイプ、当然ながら爆撃機タイプも空を飛び交っている。

首都防空隊の空戦魔導師が必死に追撃を行っているが、全く手が足りない。

その目も当てられない光景を見せられ、司令は思わず静かなる罵倒と怒りで口角を歪ませた。

「今、首都防衛隊の連中が、居合わせた元機動六課の騎士達と地上本部があるクラナガン中心部への侵攻を何とか食い止めようとしておるが、やはり人手が足りん。そう地上本部からの要請が、たった今届いたところだ。」

（空襲直後に本局へ増援を頼むとは、曲がりなりにも強力なリーダーシップを発揮していたレジアス中将亡き今、地上の連中もなりふり構っていられなくなったという事か・・・）

「・・・第11航空隊ブルーインパクト、行ってくれるな？」

「もちろん・・・そのためのブルーインパクトでもありますから」

「一刻も早い沈静化を願っている」

司令の返事にガーラント大將は頷くと、画面越しに敬礼を向けて通信は切れた。

再び、あのサイレンが隊舎内に鳴り響いた。

暗かった隊舎内の廊下は緊急事態につき全照明が点灯、赤色灯が非常事態を報せる。

イルマとアル、そしてマリノは万が一の場合に備えて隊舎内のアラート待機所に詰めていたため、彼らは三人すぐに外へと飛び出した。交代で眠っていたセレス達も、自室のベッドから飛び起きると寝巻の姿のままベランダに飛び出して行った。

「な、なに、コレは!?!」

「これは確か、スクランブル!?!」

一緒に眠っていたフェイトに続いてなのはが飛び起きて、モニターに出ているスクランブルの表示を見て緊張の表情を浮かべる。

緊急事態の状況を掴みかねていると、二人の部屋にスバルとティアナが駆けつけた。

「なのはさん! フェイトさん! これは一体!?!」

「私たちもまだ・・・とりあえず、トレノ隊長達に聞いてみないと」

「分かりました、それじゃあ私が・・・!」

聞いてきますとスバルが部屋から飛び出して行くこととした時、彼女は同じような表情のセリーナとぶつかった。

「あッ! セ、セリーナさん!」

「み、みんな・・・こっちに来て! ミッドチルダで非常事態!

トレノ隊長達はもう、緊急出撃の準備を整えている所よ!」

「ミッドチルダで、非常事態!?!」

そのセリーナの慌てたような声に、全員の間緊張が走った。

サイレンが鳴り響く隊舎の外で、一瞬眩く青い光が広がった。

そこには、ブルーインパクトの全隊員達がバリアジャケットを纏い、集合を完了していた。

「・・・トランスフォーム・コンプリート」

自分達全員が変身を終えた事を確認すると、イルマは一度後ろを見

渡す。

後方でも同じように準備が整っている事を確認すると、彼は一拍置いて空へと飛び上がる合図を送る。

「ワン、テイクオフ・・・ナウ！」

六人が一斉に飛び上がり、月が浮かぶ闇夜へと青白い軌跡を描いて舞い上がる。

上昇を続けると、やがて山並みと同じくらいの高度に達した時に、彼はミッドチルダへと繋がる転送ゲートに向かうため隊形を整える。

「メイク・トレイル」

全員がそれぞれイルマから一段ずつ下がった後方へと位置を取り、縦一列の形に隊形を変化させる。

これから狭い渓谷を飛ぶため幅広のデルタ隊形ではなく、こうした縦一列の隊形へと変化させたのだ。

イルマ達が転送ゲートへ飛んで急ぐ中、セリーナに連れられたなのは達は部隊員室のスクリーンに映し出されたミッドチルダの光景を見て、目を見開いて言葉を失った。

「そ、そんな・・・！」

「ミッドが、クラナガンが・・・！？」

「燃え、てる・・・?!」

「うそ・・・だよ、ね」

信じられない光景だった。

ミッドチルダが、私たちの街が燃えている・・・あそこには親友が、大事な人が、家族がいる。

「お父さん！ ギン姉ッ！！」

スバルの父ゲンヤと、姉のギンガは管理局の人間であり共にミッドチルダに住んでいる。

唐突に二人の安否が気になり、スバルはその場で思わず叫んだ。

「15分ほど前、ミッド標準時午前3時30分。 どういうわけか防空網を掻い潜ったガジェットと、魔導師と思しき危険人物がミッドチルダ首都クラナガンに進入。 地上本部の重要拠点に向けて、攻撃を行っているそうよ」

「それじゃ・・・お父さんやギン姉の、陸士108部隊は、どうなってるんですか!?!」

「ごめんなさい。 情報が錯綜していてそこまでは・・・」

今にも泣き出しそうなスバルに詰め寄られ、セリーナが申し訳なさらうような表情で謝った。

そんな中、モニターには騎士としての防護服を纏い、混乱する現場を空中で指揮する一人の人影が映し出された。

「は、はやてちゃん！」

「八神、部隊長！」

空中で黒い六枚の翼を広げ、剣十字シユベルト・クロイツを手に現場に駆け付けた首都防衛隊の魔導師達を指揮していたのは、元機動六課の部隊長八神はやてだった。

機動六課が解散した今、部隊長という呼称はおかしいが、この時は誰も突っ込む余裕などない。

映し出された彼女の焦るような表情からも、現場が極度の混乱状態に陥っている事が手に取るように分かった。そしてそれを見て、なのはとフェイトは覚悟を決めた表情でお互いを見た。

「セリーナさん、私たち・・・現場へと向かいます！」

「転送装置とか・・・とにかく、何か無いですか？」

「そういうと思って、もう手配はしているわ。ここから南に16kmの渓谷に、戦技研究部が保有する大型転送ゲートがあるわ！なのはさんにフェイトさんは、そこから・・・スバルさんにティアナさんには、エプロンにヘリが待機しています」

「セリーナさん・・・」

準備が良すぎると言うか、まだ作戦立案もしていないのにヘリまでとっくに手配していると聞き、全員がセリーナの方を向く。

「今、ミッドチルダは混乱の渦中よ。一刻も早く、貴方たちのような魔導師が現場に必要なんだから、これくらいしていても当たり前でしょう？」

「あ、ありがとうございます！」

「でも良い事、絶対に無事に帰ってくる事・・・それ以外は許可しないわ。それじゃ、私たちは司令室でオペレートを行うから・・・」

「

「はい。あ、セリーナさん・・・よかったら、シャーリーにも協力させてください」

フェイトのその返事にもちろんよと答えると、セリーナはその部屋を走って後にした。

「それじゃ、私たちも行くよー！」

「はい！」

全員が一斉にその場を後にして、隊舎の外へと飛び出して行った。

縦一列の隊形で飛行するイルマ達の視線の先に、溪谷の中に浮かぶ四角い光の枠のような物が見えてきた。
あれが大型転送ゲートだった。

「ブルーポイント、ブルー1。これよりゲートに進入する」

『了解。どうかお気を付けて！』

そして痛みも衝撃も無く、全員がゲートの異空間内に吸い込まれるように進入して行った。

クラナガンの上空は混迷を極めていた。

それぞれの隊司令部からの応答が無いため、指揮系統が乱れつつあった首都防空隊の魔導師の連携はバラバラだった。

既に魔導師だけでなく、爆撃の影響で地上の一般市民にも多数の死傷者が出ている。

上空に上がった首都防衛隊は総勢500人程度、対して相手は改良で動きが更に素早くなったガジェットドローンがおよそ二千機以上、そしてそのガジェットドローンと行動を共にする敵性魔導師達は、空と陸合わせてその戦力は800以上。

絶望的な状況な中それでも一筋の希望を掴むため、はやてはガジエツトに対して広域殲滅魔法等で奮戦しつつ、現場指揮官として現有戦力の臨時的な統制にあたっていた。

「八神二佐！　ここは危険です！　後退してください！」

「分かつてる。　戦力は足らへん、各部隊司令部との通信は出来へん、本局の増援は来ない・・・おかげで徐々に押されてる！」

『こ、こちら陸・・・隊！　応・・・を・・・！』

『だ、駄目だ！　・・・つて来ている！　う、うわあッ・・・！』

散らばる防衛隊隊員達と次々と通信が途絶して行く中、はやては平常心を保とうと必死だった。

自身の守護騎士、シグナムを筆頭とした4人もそれぞれ他の部隊を支援するために駆けまわっている。

はやてが次の手を打とうと考えていた時だ、彼女やその場にいた魔導師達の後方に転送ゲートが開いた。

もしや敵の奇襲と思い、彼女達は思わず身構える。

しかしそのゲートから飛び出したのは、敵と呼ぶには余りにも綺麗なブルーの軌跡を描く6人の空戦魔導師の姿だった。

彼らはゲートから出るや否や、縦一列の隊形からスピーディーに基本隊形となるデルタ隊形へと変化した。

「あれは・・・？　本局の増援か？」

「いえ、あのような部隊は存じ上げませんが・・・」

はやてと傍にいた防衛隊の魔導師が上空を見上げて、開いたゲートから飛び去って行く彼らを見つめる。

そこへ、はやて達が見つめる先の彼らから通信が入った。

『こちら、本局航空戦技教導隊第4班・第11航空隊ブルーインパクト隊長、イルマ・トレノー一等空佐。　クラナガン防空の手助けに来ました』

「ブルーインパクト・・・？　ああ思いだした、なのはちゃん達の転属先の空戦魔導師部隊、味方や！」

『ブルー1より現場指揮官へ、目標群の指示をお願いしたい。ゴ
ー・アヘッド（どうぞ）！』

現場上空で攻撃準備を整える中、はやてからはさっそく目標への指
示が入る。

『臨時指揮官の八神はやて二等陸佐です。トレノー佐、増援感謝し
ます。早速ですが、南方から接近するガジェットと敵性空戦魔導
師部隊の迎撃、お願いできますか？』

「ラジャ（了解）。ライト・ターン・・・ナウ！（右旋回・・・
今）ブルーポイント、ブルーインパクト、エンゲージ！（ブルー
インパクトからブルーポイントへ、交戦します）」

『ブルーポイント了解。 現在感度は良好です』

セリーナの返事を聞いてから、彼らは右に大きく旋回しながら敵部
隊へと真つすぐに飛んでいく。

「酷い状況だ・・・。」

「なんて事しやがる。 焦土作戦かよ・・・！」

「ええ。 まさか、魔法文化の中心地ミッドに、こんなに大々的に
攻撃を仕掛けてくる組織が・・・。」

「それにこの敵の多さ・・・明らかにテロ組織の範囲を超えていま
す！」

その上空へと向かう最中、眼下には炎を上げる建物や既に倒壊した
ビルも見受けられる。

隊員達が眼下に流れる変わり果てた街並みを見て、思わず言葉を漏
らした。

「イルマ・・・この攻撃、やっぱり」

「ああ、間違いない。おそろく……」

『そつだ隊長、パトリオットさ』

「司令……」

イルマの前に急に開いた画面には、ブルーインパクトの司令が映っていた。

『気を付けたまえ。偵察衛星には市街地外の海上数十キロ沖合に、SSランクの魔力を持った魔導師らしき人物達の姿も確認されている』

「見物のつもり……ですかね？」

『それは分からないがパトリオットにとって、ミッドチルダに生きる人間は、腐敗した管理局という飼い主に生かされている、いわばペットだ。彼らの命も守つてあげたいが……その時その時で、

一番優先するべきものは何か……隊長、しっかりと判断したまえ』

「ラジャ。ブレイク、レディ……ナウ！ 高度1500！」

イルマの合図でブルーインパクトは一斉に散開していく。

「あれは……敵の増援か！」

「爆撃ガジェットを落とさせるな！」

イルマ達に気付いた敵魔導師が、一斉に方向を変えて彼らへと射撃を浴びせた。

「アイギス！ アクティブ・シールド！」

” Active shield ”

マリノのデバイスから広がった光が、飛行する隊員達を守る障壁へと変化し、彼らを射撃から守る。

しかし、彼女の障壁はこれだけでは無かった。

敵魔導師が放った射撃のエネルギーは、一瞬潰れるように障壁面で小さくなる。

そして・・・

「リフレクション！」

マリノのデバイスが違う光を見せたと思えば障壁にぶつかっていた魔法弾は、跳ね返るようにその攻撃を放った魔導師達へと向かって飛んでいく。

咄嗟にガードした者もいたが、それ以外にガードし損ねた魔導師達は一斉に被弾した。

「くそッ、こうなったら直接攻撃に！」

敵魔導師の一人がデバイスの形状を直接攻撃に向いたブレード状に変化させ、イルマ達へと突撃しようとしていた時だ・・・

バスツッ！

頭を襲った強烈な衝撃に、体をのけ反らせて落下していく。

そしてそれに気を取られて、一人、また一人と落ちて行った。

「フンッ！ 飛んでくる弾、全てが見えるなんて思うなよ？」

決して見えることなく発射時の反応も掴みづらいブラットのスナイパーライフル型のデバイス、オウルズ・アイから放たれたステルス弾は、あっという間に敵五人を叩き落とした。

イルマの射撃やセレスやアルの直接攻撃で、飛び込んできたガジェットを次々になぎ倒し、指定されたルートからの爆撃機の侵入を防

ぐ。

「よし、やった！」

「早いなあ。 200機以上の強化型ガジェットを、あつという間に・・・ブルーインパクトか、頼もしい増援や」

絶望的な状況から一筋の希望が見え始め、防衛隊員達が歓喜の声をあげて士気を取り戻す。

はやてもこれならいけるかもしれんと、希望を取り戻した。

そんな折、彼女にイルマから次なる目標指示を要請する通信が入る。

『ブルー1、目標群E全機撃墜を確認。 次の目標指示を願う』

「了解や。 東に西からのリターン機の迎撃が間に合っていない・・・

トレノ一佐、西から反転してくる目標群Dの迎撃を頼みます！」

東西ということは、これから向かうにはどっちか一方のみ。

片方を迎撃していたらもう一方が間に合わない・・・さてどうする？

「イルマ・・・」

その時、覚悟を秘めた声でセレスがイルマに話しかける。

「東からの敵は、私が引き受ける。 海側だから、大丈夫だと思うから」

「本気かい？ あの力で、君はどれだけ傷ついたか・・・離れたわけじゃないだろう？」

編隊を組み直しながら隣を飛ぶセレスに、イルマは心配げな表情で語りかける。

「大丈夫、私は大丈夫だから。それにだからと言って、ここで街の皆を助けられなかったら、それこそきつと後悔する・・・だから！」

「・・・いや、それでも許可できない！」

「イルマ！」

「別に君を信頼してないわけじゃない。ただ、今この状況ではそれをやってしまうと少し分が悪い。編隊を二つに分ける。セレス、君はルノアとマリノを率いて東へ。西はこっちがやる」

イルマはセレスに言い聞かせると、それぞれ編隊を二つに分ける。戦力は二分されるが、その方が効率よく敵を迎撃できると考えたからだ。

そのブルーインパクトが散開して敵にあたっている最中、はやては他の防衛隊員達に指示を飛ばしていた。

それだけでなく、自らも魔法攻撃でガジエットの撃墜や敵性魔導師の逮捕に奔走する。

しかしそんな中、はやては敵性魔導師達の事について一抹の不安を覚えていた。

（テロ集団とは思えない物量数、そして魔導師の魔法体系は一般的なミッドチルダ式・・・それに汎用性から特性まで・・・）

はやてはふと、後方でガジエットや敵魔導師に対して攻撃を行う防衛隊魔導師の方を振り返る。

（敵は、管理局の魔導師そっくりや・・・一体、何がどうなってるん！？）

はやてがその光景にやや戸惑いを浮かべていた時だ、数人の魔導師達の叫び声が近くであがった。

「なッ!? 敵か!?!」

「八神二佐! 敵です!」

その声に慌てて振り返ると、敵魔導師が二人、はやて目がけて突っ込んできた。

「気付かへんかった!? くッ、隠密スキル習得者!?!」

「うおおおおおっ!」

雄たけびを上げながら突撃してきた魔導師の武器と、はやてのシユベルトクロイツがクロス、その瞬間火花が散った。

近接攻撃に慣れているわけではないが、それでも持ち前の魔力や技量ではやては何とかその攻撃を凌ぐ。

「八神二佐! 後ろですッ!」

援護に駆けつけていた味方の一人が、もう一人の敵の姿を捉えた。はやての後方に回り込もうとしている。

（あかん! 後ろに回り込まれたら、対応出来へん!

はやてが思わず劣悪な状況に毒づいた時だった。

” Accel shooter ”

後方から迫りくる魔導師に、上から桜色の魔法弾が無数に飛び込み炸裂した。

「！」

「なッ!? 今のは!」

” H a k e n f o r m ”

そして突然の攻撃に驚いた魔導師にもゴールドの鋭い一閃が飛び込み、体は何とか逃げおおせたものの掠ったデバイスの柄が真つ二つに切断された。

思わず後方へと飛びのいた敵魔導師が見上げた空には、闇夜に浮かぶ二人の人影。

「お待たせ、はやてちゃん!」

「ゴメンね。少し遅くなつて」

そこには、純白基調のバリアジャケットにアクセルフィンの羽を広げたなのは。

そしてもう一人、鎌のような形状をとるデバイス“バルディッシュ”を構えるフェイトの姿があつた。

二人とも、転送ゲートを通じてブルーインパクトの本拠地から直接飛んできたのだ。

「高町教導官だ! エース・オブ・エースが来てくれたぞ!」

「ハラオウン執務官もいる! まだだ、まだやれるぞ!」

そしてその二人の登場に、防衛隊の隊員達はどつと沸きかえる。無敵のエースに最強の執務官の登場は、彼らの士気を爆発的に高めた。

更にはやても長年の親友で最も頼もしい援軍の到着に鼓舞され、彼女は力強くシユベルトクロイツを握り締める。

「なのはちゃん、フェイトちゃん・・・来てくれたんやなあ。よし！ この戦い、行けるで！ みんなでこの街を守るんや！」

はやての声に、防衛隊の隊員達は「オオーッ！」と力強く答え、そしてなのは達はそれぞれの方向へと散開して行った。

そしてようやく、反撃態勢が整った。

これからは、こっちのターンだ。

F l i g h t 1 0 : I n t o D a n g e r Z o n e (後書き)

ご意見やご感想をお待ちしております。

『こちらミッド地上本部指揮管制室、現在首都クラナガンは所属不明の敵勢力の攻撃を受け、全区域非常事態下である。なんとしても、敵の侵攻を阻止せよ！』

『こちら陸士203部隊、第3防衛ラインの構築は完了しているか？ こちらもそろそろ限界だ、第二防衛ラインは破棄！ そちらに引き上げる！』

『ファイフスアベニュー、D-14区画に負傷者多数！ 医療班の援護を要請する！』

『チクシヨウ！ 迎撃の手が足りない！』

『援護は来ないのか！？』

『くツ・・・多すぎる！ 敵は一体何者だ？』

『管制司令室より本局所属の応援部隊へ、応援感謝する。この地上の平和を守り抜くため、どうか我々に力を貸してほしい！』

『ブルーインパクト、ブルー1了解。前線へと移動する』

ミッドが燃えていく。

通信ではあちこちに助けを求めたり、中には人々の悲鳴や叫び声が通信に紛れ込むものであった。

しかし大半の通信は妨害電波の影響か、それとも司令部が爆撃により被害を受けたかで出来ない状況が続いている。

そんな中、ついこの間までいがみ合っていた筈の本局の戦力と地上本部の戦力とが、共に見えない手を取り合う。

両サイドにとって簡単な筈なのに一番難しかった事が今、この戦禍に巻き込まれているこの街で実現しようとしている。

首都クラナガン周辺の混乱が著しい。おそらく敵は管理局地上本部の無力化へ徹底的に狙いを定めてここまで来たのだろう。

おまけに前線の地上では、敵の新兵器が功を奏して戦力がガタ落ちしていた。そのワケは・・・

「な、なんだ！？ 魔力が結合しないぞ！？」

「あの変な爆弾のせいか！？」

地上が混乱する原因は、敵の重爆撃機型ガジェット？型が投下する魔力結合無効化弾、つまりのところAMF爆弾によるものだった。爆心地から中心に直径約100mの範囲で一時的に魔力結合が出来なくなるといふもので、非殺傷武器の類ではあるが魔導師にとって魔法が使えないと言ふのは致命傷以外に他ならない。

そんな状況で地上戦力は一方的に撃破、地上ガジェットが一気に首都の方へとなだれ込もうとしていた。

まるで質量兵器廃止を唱える管理局への当てつけのように、彼らは魔法という物を投下するAMF爆弾で魔法を全否定していく。

そしてJS事件では主に示威活動やテロリズムのため行動していたガジェットや戦闘機人達。

ところが今、そのガジェットや敵魔導師達が行っているのは、とてもテロリズムという言葉で片付けられるものじゃない。

「敵がこんなにたくさん、しかも広範囲に・・・これはテロなんかじゃない。イルマ・・・これは戦争だ！」

「・・・・・・・・。」

いつもは隊長としか呼ばないアルが、イルマの事をもしかしたら数年ぶりとなるかもしれないくらいに名前で呼んだ。

だが黙するイルマにとってみれば、同調している暇もそんな事を気にしている時間も無い。

既に二つの防衛ラインも破られ、敵の地上戦力はクラナガンの地上

本部にあと十数キロという所まで接近している。

「こちら戦技教導隊第4班第11航空隊ブルーインパクト隊長、イルマ・トレノー等空佐。これより本官が前線にて臨時戦隊を編成、前線の指揮を行います」

『了解！　こちら首都防衛隊第17航空隊、指示を乞う！』

「防衛隊第17航空隊、および第三防衛ラインに集結中の航空戦力へ・・・重爆撃機型ガジェットがAMF特殊弾を投下し、これによって地上戦力が思うように実力を出せないでいる。なるべく火力をその爆撃機型ガジェットに集中してください」

『了解です！　射撃用意！　目標、敵大型爆撃機！』

後方からの全体の指揮ははやてに任せ、イルマはとりあえず芳しくない状況の前線に向かい戦力を統御する。

これまでは防空隊も地上本部へと向かう敵を手当たり次第に迎撃していたが、これで少しは状況は好転するかもしれない。

各員分散して敵を迎撃していると、遠方の空中に剣を持つ騎士と小柄な体でハンマーを持つ騎士の二人の姿が確認できた。

一人は炎が迸る剣を持ち、蛇のように長くのびる刀身で小型のガジェットを叩き落とす、はやての守護騎士シグナム。

そしてハンマーを持つ赤い防護服の騎士、ヴィータが数個の丸い銀の実弾をハンマーで弾き飛ばし、曲線を描いて飛んでいくそれらはガジェットに命中して爆炎をあげた。

「酷いな・・・こんなこと、一体どこの誰が!?!」

「こんなこと、アタイらでもやった事ねえぞ！　なのに、誰の犯行かも分かんねえし、それを考えている時間も無え。もどかしいったらありやしねえ!」

悲惨な事態に思わず歯がみをする二人。

かつては過去の主の命令とはいえ、悪事に手を染めた事もあった二人。しかしそんな彼女たちでも、この事態を到底見過ごすことなど許せるわけが無かった。

「早くも本局からの増援が来た。彼らによると、重爆撃機は市街地の建物を破壊すると同時に、魔力結合を不能にするAMF発生弾を投下しているそうだ」

「おっし、そんなじゃあアタシは見つけ次第ソイツらを叩く！ アイゼン！」

「私たちも行くぞ、レヴァンティン！」

” Jawohl!” (了解！)

それぞれの方向へと二人は散開し、向かった先でまた多数のガジェットが爆発する。

その中にいた爆撃機は、片方の翼を無残にもバラバラに切り裂かれて煙をあげてローリングしながら海に落ちていく。

ここが市街地上空なら、完全に破碎出来るように爆散させないと行けないなとシグナムはそれを見て思った。

皆の奮戦もあってか、状況が徐々に好転しつつある。

これまで押されていた流れが、ここにきてようやくイーブン（水平）に戻った。

上空からの援護や爆撃機の度重なる撃墜は、地上戦力がガジェットに対して抵抗を発揮する機会を作った。

第三防衛ライン付近の上空に辿り着いた一機のヘリ。

それはブルーインパクトの基地から飛び立ったスバルとティアナを乗せたヘリだ。

「うん！ 聞いていたより、状況がかなり良くなってる！」

「なのはさんにフェイトさん、それにトレノ隊長達のおかげだね」

「後方は八神部隊長がちゃんと押さえている。 思いきって行くわよ」

「うん！」

二人は第三防衛ラインの一端になっているビル群の谷間へと降下し、バリケードを築いてガジェットに射撃を仕掛ける防衛隊魔導師達の前に出る。

「スバル・ナカジマ、二等陸士です！」

「同じく、ティアナ・ランスター二等陸士！ 防衛ラインの手助けに来ました！」

「ナカジマ陸士にランスター陸士・・・？ ああ！君たちが元機動六課の！」

「すまない！ 助かる！」

二人が防衛隊員達に歓呼を以て迎え入れられる。

二人の陸戦魔導師の反撃を合図に今、空戦魔導師の援護を受けて各地の防衛ラインから一斉に反撃に出ようとしていた。

なのは達空戦魔導師もまた、地上戦力への支援のために駆けまわっていた。

リミッター付きだとキツイ・・・三十分も全力で戦えば流石に息が上がる。

よそで敵を殲滅したフェイトがよって来て、二人は空中で背を合わせた。

「なのは、大丈夫？」

「大丈夫、平気だよ。あまり自分の事ばかり気に掛けて置きたくはないけど、それが逆に皆にとっては良いのよね……っていうか、フェイトちゃん怪我してる！」

なのはが後ろ目で見ると、フェイトの白いマント状の防護服の一部が裂け、彼女は肩と大腿にうつすらと血を滲ませていた。

「大丈夫。ちょっと、掠っただけだから」

「そう……。」

フェイトのバリアジャケットは、基本設計のコンセプトが機動力を重視しているため装甲は大変薄い。

その点なのはのバリアジャケットは防御力や砲撃能力に重点を置いているため、装甲は非常に厚い。

例えるならば、それこそ車と戦車ぐらいの差があるのだ。

そのため、なのはでは傷にならないようなダメージも、フェイトは血が出るような傷を負ってしまう時もあった。

そんなフェイトからの大丈夫という返事を聞いて、それなら良いけどなのはは再び自分たち目がけて接近してくる敵を見据えていた。そして射程距離に接近したガジェットから、一筋の煙が他の機からも多数こちらへと飛んでくる。

息を合わせたように二人は放たれたミサイルを高速移動でかわし、先に真上を取ったなのはのレイジングハートに桜色のエネルギーが集まる。

「デイバイーン、バスターツ！」

放たれた光の奔流に呑みこまれたガジェットは、爆発することなく

光の中で消滅。

周囲を飛んでいた機にも余波が当たったのか、編隊の7割以上をなのは一撃で撃墜した。

そして残存機が逃げのびた先には、夜闇に浮かぶ金色の光を纏ったフェイトの姿が。

「トライデント、スマッシュャーッ！」

フェイトが作りだした魔法陣に左手を掲げ、三つに分かれた光線が放たれると瞬く間に残りのガジェットをのみ込んだ。

なのはとフェイトはこのあたり一帯のガジェットを殲滅し、それを確認すると疲れを見せる間もなくデバイスを構えなおした。

「よし、次！」

先行した魔導師部隊、そしてガジェットの大群は圧倒的多数ということにも関わらず、ミッドを守るうとする敵に苦戦している。

おまけに本局から来たという増援部隊のおかげで、さっきまで総崩れ状態だった戦線を今では立て直しつつあった。

まあ先遣部隊の程度というのはたかが知れている、レアスキルや手ごわい魔導師が相手ならば多勢イコール優勢と言う事にはならない。だが、その立て直しはこの後脆くも崩れ去るだろう・・・そう、我々の手によって！

過信でも何でもない、自分の実力を十二分に知りそして発揮できるこそその笑みが、シュミットにはあった。

彼は精鋭の部下十名あまりと共に、ミッドの海上を高速で飛行して

いる。

「お前ら良く聞け！ 敵の中に少し骨のある奴がいたらしい、ツエーザー部隊長から聞いている例の部隊とエース・オブ・エース、そして夜天の主とその他大勢。」

「了解！」

「占領に邪魔になりそうな奴らだけ叩け！ 防衛隊のザコには構うな。 ザコ供のお掃除は……」
『私の役目、ですね……？』

シユミットの横に開いたモニターに映ったエミールに、頷きつつ「まあ一つ派手に頼むぜ」と言い残し、彼は部下たちと共に炎を上げ続けるミッドチルダ都市部へと進入して行った。

服装は黒と白のバリアジャケット、その腰の部分に左手を当て右手を高々と掲げたエミール。

「フェルカーモルト・フリユーゲル」

”Volkermord Flugel”

静かに呪文を唱えたエミールのグローブ型デバイスが煌めくと、彼女の掲げる右手にオレンジ色の光が収束する。

その光は彼女の体のサイズを越えて、何十倍かの大きさと思えるくらいにまで膨れ上がった。

そしてエミールが遠巻きに見える紅蓮の炎に包まれる都市ミッドチルダ首都クラナガンに狙いを定め、「行け」と彼女が念じた時……

ブワアッ！という巨大な風圧が巻き起こり、その球体はどんどん速度を上昇させてミッドチルダの方へと向かっていく。

やがてその球体は多数の光の筋を作る無数の球体に分裂し、まるで水平に翼が広がっているかのような錯覚すら覚える。

その異様なエネルギーの接近を、世界を越えてミッドチルダの成り行きを見守っていたブルーインパクトの司令部ブルーポイントが捉えた。

フェイトの頼みを受けて司令部で臨時管制官としてオペレートを行うシャリオも、その異様な光景に言葉を失った。

「クラナガン郊外南東部の海上より高エネルギー無数に接近！」

「物理破壊型・・・推定SSランク！」

「数30以上！クラナガン上空、防衛隊と同高度に向かっていきます！？」

管制室がこれまでにない緊張に包まれる。

そしてコンピュータの素早い分析から、エネルギーの正体が判明する。

「古代ベルカ式広域殲滅型誘導砲撃魔法、フェルカーモルト・フリーゲル！」

「それって・・・！？」

「いけない！！早くみんなに知らせて！！」

エネルギーの危険度に気付いたセリーナが、たまらず司令室に響くような声をあげた。

現場ではイルマ達が、上空を飛びながら何かが接近してきているのに気付いた。

そして他の高ランクの魔導師達も同様に、南東から何か不気味な物が接近してくるのを感じ取る。

「この感じ・・・大きい！」

『こちらブルーポイント！ みんな、下に降りて退避して！ 古代ベルカ式の禁術砲撃魔法、フェルカーモルト・フリーユールよ！！』
「なッ！・・・くッ、インバーテッド、ナウ！ 高度を下げる！」

飛来する魔法の危険さを知っていたイルマは、全員に背面飛行を行わせてそのまま下降。

そして市街地の狭路をとにかく北へと向かい、少しでも着弾予測地点から退避した。

『ブルー1から全部隊へ！ 敵の広域殲滅魔法が南東から接近中！』

その一報を聞いたなのはとフェイトは、思わず表情を強張らせる。

『広域殲滅魔法やて！？』

イルマのその言葉を聞いたはやてが、同じような広域殲滅魔法の使い手である彼女が通信に入り込み思わずイルマに聞き返した。

『それもシールドで防げるような代物じゃない！ 時間が無い、直ちに全部隊に下降を促すんだ！ 巻き込まれたら命は無いぞ！』

時間が無い！

なのは達もそれを聞いて高度を下げて回避行動を取る。

はやては可能な限り全部隊に緊急通信として、攻撃を回避するように促すが最前線には繋がらない。

繋がらない事に焦りに焦りを浮かべていたはやて、そして・・・

『着弾!』

セリーナのゼロカウントとほぼ同時に、クラナガンの夜空に突然眩しい煌めきが走った。

例えるなら目の前に太陽が出現したような、もしくは自分たちが太陽に包まれたような錯覚さえ覚えた。

遅れてズーンという地響きのような轟音が衝撃波としてはやて達の体を打ちのめし、クラナガンに爆風が吹き荒れた。

「こ、こんなことって・・・し、信じられへん! 防衛隊第13班、防衛隊34班、応答を!!! 応答してツ!!!」

はやてが必死に最前線にいた魔導師達を呼ぶが、全く応答が無い。それからも分かるが、魔力に敏感な彼女はそれ以前に前線にあった多数の魔導師魔力反応が一瞬にして消失したのに気付いていた。だとしても彼女は一緒に街を守っていた者として、彼らを指揮していた者として、そんな事を認めたく無かった。

『も、もう駄目だツ・・・落ちる!』

更に追い討ちをかけるかのようにダメージで変身状態を保てなくなった魔導師達が、次々と地表へ落下して行く様子が通信で生々しく聞こえてきた。

防護服も無い生身の人間が高所から落ちたらどうなるか、誰の想像にも難く無かった。

「もう、やめて・・・やめてえええツ!!!」

その光景を目の当たりにして精神的な限界を迎えたはやてが、二筋の涙を流して夜天にむかって叫んだ。

多数の魔導師の反応が消えた事は、同時に今となっては唯一まともに稼働しているクラナガンの司令室がある地上本部でもキャッチしていた。

その場に居たほぼ全員が、一瞬で大勢の魔導師が消滅した事に驚きを隠せなかった。

中にはもうこの世から消えているであろう魔導師達を、涙ながらに大声で呼びつけるオペレーター姿もあった。

「司令！ 攻撃が飛んできた海上に高ランク魔導師らしき反応あり！ さらにその後方120kmから・・・なんだ、これ？」

「どうした!？」

「未確認の飛行物体です！ 動いています・・・全長約15km! ? これは、艦ふねです！」

「バカな、そんな巨大艦・・・知らんぞ!？」

それを言えば、オペレーターだってこんなものは知らない。

だから未確認飛行物体と言ったのだが・・・とにかく、海上から新たな脅威が出現して迫ってくる。

そしてそれはまだ続く・・・

「クラナガンに多数の敵性魔導師侵入！ 魔力ランク推定S以上!」
「未確認巨大艦の後方からも魔導師反応です！ 多い・・・多すぎる！ 畜生、さっきまでのはお遊びだったとでも言いたいのか!？」

オペレーターの一人がそう叫びつつ、溜まらず悪態をついて画面を殴った。

後方で見守っている彼らでさえそんな事をしたいくらいに、これでもかと前線に出ている魔導師達は痛めつけられる事になる。

「さっきの魔法はフェルカーモルト・フリーユゲル・・・貴様たちの一部が禁術と呼んでいる魔法の一つだ」

その時、不意に司令室の後方のドアが開いき男の声が響いた。ほぼ全員がその方向を振り向いた。

「その魔法は83年前には完成していた魔法だ。もっとも、今の管理局の貴様たち患者供には、到底理解が及ぶものではないだろうがな！」

そこに立っていたのは白銀の髪を持ち、コートのような服を羽織っている長身の彼は、手にサーベルのような物体を持っていた。当然のことながら、オペレーターや司令官達の中に彼を知る者はいない。

「だ、誰だ君は！？ どうやってここに入ってきた！？」

近寄った局員が青年の肩を掴むと、彼はキツとその局員を睨みかえし左の人差指を突き付けた。

「汚い手で触るな、失せろ！」

ドンツと衝撃波が巻き起こり、局員は体をくの字に曲げて後方のモニターへと突っ込んだ。

その様子を見て全員が驚いた表情を浮かべ、中には悲鳴を上げたり

する者までいた。

「き、貴様！ まさか敵か！？ バカな・・・この最深部の司令室はJS事件での反省から、いかなる空間操作魔法も受け付けられないように改良された筈！ どうやってここに！？」

「フハハハハッ、ああそのようだな。 だから、正面玄関からここまで歩いて来てやったぞ・・・道中、余計な歓迎も受けたがな」

青年が嘲笑を浮かべて開いたモニターには、地上本部のあちこちのフロアでぐったりと倒れている局員達の姿があった。

その光景を見て、司令官は思わず絶句した。

「まあ、軽い息抜き程度にはなった。 安心しろ・・・奴らは殺してはいない。 これから我々の役に立って貰わねば困るからな」

「ど、どういう・・・!? なッ!?」

どういふ事だと司令官が言おうとした最中、彼の腕が横からガッツリと押さえられた。

今まで自分の部下だった者が自分を無表情で睨み、そして上官である筈の自分を拘束しようとしていた。

「な、何をするんだお前たち！？ まさか・・・裏切るつもりか!?」

さらに青年が質問に答えるよりも早く、どこからともなく現れた武装局員が室内にいる全員に武器を向けた。

それを横目でチラリと見て、青年はフッフと不敵に笑みをこぼした。

「き、貴様！ 局員を裏切らせて何をするつもりだ！？ まさか、この地上本部を乗っ取るつもりか!?」

拘束されて机に抑え込まれている状態で、司令官が青年へと叫ぶように尋ねた。

するとそれを聞いて青年は返事の代わりか、不気味なほど高らかに哄笑をあげた。

「ハハハハッこれはなんと愉快な事か・・・まさか知らぬとはな！ 乗っ取る？ バカも休み休み言え・・・！」
「じ、じゃあ一体何を!？」

「乗っ取るのではない、返してもらおうのだ！ このミッドチルダ地上本部は、元々我々のものだからな!!！」

司令官が意味を理解出来ないでいる中、青年は再び高らかに哄笑をあげた。

その声が合図となつてか、彼の仲間であつた局員たちが一斉に暗号コードを送信した。

そしてその効果は、瞬く間に異変として現れた。

「な、何や・・・！ 一体、何が起こつた？」

はやては、いきなり飛び込んできた通信内容に愕然となつた。

地上本部から局員が武装して、クラナガン防衛にあたっていた局員たちに攻撃を加えているとのことだ。

それも洗脳の類の様子はまったく見受けられない。

明らかに彼らは、自分の意思で同じ仲間である筈の防衛隊員達に攻撃を仕掛けていた。

対する防衛隊員達は、突然の奇襲という理由と何より仲間な筈の彼

らを攻撃できないでいた。

『どうして攻撃してるん!?　なんでや!?　仲間やないの!?!』

はやてが通信で必死に叫び声をあげた時、彼女の横にさつとモニタ
ーが開いた。

『はやて!』

『ハラオウン提督?』

そこへ映し出されたのはクロノだった。

彼の表情にはこれまで一度も見えた事無いような極度の緊張が見て取
れた。

『はやて、それからクラナガン防衛にあたっている魔導師達、落ち
ついて聞いて欲しい。　君たちが交戦している敵は、同じ管理局員
だ!』

『な、なんやて!?!』

その言葉に全員が思わず絶句、自分たちと今まで戦っていた敵が同
じ管理局員という事に驚愕を隠せなかった。

『しかも、我々と同じ本局所属の部隊だ。　戦力数は一万人から五
万人とも・・・正しくは、本局特殊作戦師団“パトリオット・フォ
ース”!』

『じ、じゃあ・・・この攻撃つてまさか!?!』

『間違いない、アコース査察官が掴んだ情報では100%彼らが企
てたクーデターだ!　そして彼らが狙う地点、それは地上本部以外
に考えられない!』

『そ、そんならよ乗っ取りを阻止せんと・・・!』

はやてがそう言ってまだ動ける防衛隊員達に呼びかけようとした時、彼女やほかの隊員達の横にもう一つ通信の画面が開く。

『クラナガンの街を守らんと武器を手にしていた者たちよ、今しばらくその攻撃の手を止めて欲しい』

映し出されたのは長めの銀髪に黒衣のコートを纏い、嘲笑に近い笑みを浮かべる青年だった。

『私はツエーザー。 ツエーザー・ヴァーリゲルト・・・本局特殊作戦師団“パトリオット・フォース”の師団長だ』

『な、なんや？』

ツエーザーと名乗った青年が映し出され、それを目にしたはやてやなのは達、そしてイルマ達も全員がその画面に注目した。

『私はここに、抵抗力を喪失した時空管理局ミッドチルダ地上本部の接収を宣言する』

「なッ!？」

その言葉を聞いて、それを聞いた魔導師達が本日もう何回目かになる驚愕をその表情に浮かべた。

しかしそんな事を言われても、未だに状況を受け入れられないはやて達。

抵抗を諦める・・・それはつまり、降伏するということ。

しかもよりにもよって、時空管理局地上本部・・・そして第一管理世界ミッドチルダが、敵の手に落ちる・・・そんなバカな事があって良い筈が無い！

「ん？ フツ、状況の飲み込みが遅い者が沢山いるようだな・・・ではもう一度言ってみよう。ミッドチルダ、時空管理局地上本部は今、我々および我々に共感を持つ者たちによって制圧された。その証拠に見たまえ、彼らにはもう抵抗する力も意思も無い」

ツエーザーの哄笑と共に表示されたモニターの映像には、捕縛された地上本部職員の姿やあちこちで倒れる魔導師の姿があった。そしてその中には、ツエーザーのいう自分たちに共感を持つ者たち、つまりこちらにとってのクーデター戦力の姿もちらほら。

「どういう事や・・・どないしたんやみんな、管理局を裏切るつもりか!？」

「裏切る？ フハハハハッ、夜天の主とやらよ・・・随分と間の抜けた事を言うのだな。これは裏切りではない、これが管理局の本来のあるべき姿なのだからな！」

「一体・・・どういう事や!？」

「フフフツ、まあくだらん話は終わりだ。ともかく地上本部は制圧し、第一の目標を果たした我々としては、これ以上貴様たちと戦う理由はない。だが貴様たちがその矮小なる力で我々に歯向かうのであれば、我々は新たに得た拠点を守るために戦わざるを得ないがな!」

ツエーザーとはやてのやり取りを聞きながら、イルマは色々な事を同時に考えていた。

増援として出現した巨大空中機動艦も合わせて考えた敵の戦力、そしてそれに対しての自分たちの圧倒的不利な戦力との対比。

そして街の被害の規模や死傷者数、そしてこれ以上の戦闘が可能であるのか・・・何より戦力未知数な相手に勝ち目があるのか？

イルマはそれらに対して、結論を短時間で導き出した・・・。

モニターの向こうのツェーザー、彼らをモニター越しに睨むように見つめるはやて達八神家のメンバーと、なのは、フェイト、そしてヘリに戻ったスバル達。

そんな時、彼女たちに全体通信が送られる。

それはイルマからの衝撃的な一言だった。

『こちら、イルマ・トレノー一等空佐。 当作战域において最高指揮権を持つ者として、全体に命令します。 ミッドチルダ防衛にあたっていた全魔導師・騎士は、現時刻を以て作戦を中止！ 繰り返し、防衛作戦は中止します！』

「ちゅ、中止だって！？ それじゃ、一体ミッドはどうなるんだよ！？」

幾つもの階級を飛び越えてヴィータが堪らずため口でイルマへと噛みつくが、彼はそれを予想していたのか表情を変えずにそれに答える。

他にもあちこちから、「冗談はよせ！」だとか「俺たちはまだまだやれる！」「戦場から逃げる気か！」という罵声まで聞こえた。

だがそんな言葉に耳を貸さず、彼の口から驚くべき一言が告げられた。

『これは本局最高議会の決定でもあります・・・残存戦力は全てクラナガンより北方の、ベルカ自治領へと撤退！ 残念ながらミッドチルダ首都、クラナガンは放棄します！』

結構派手な設定になってしまいましたが・・・

ご意見ご感想をお待ちしております！

Flight 12 : White Flag、涙と屈辱は胸に

新暦76年5月15日 AM6:43

『ミッドチルダ首都、クラナガンは放棄する!』

イルマが下した命令を聞いて、疲れ果てていた魔導師達もがやがやと騒ぎだす。

彼らの中にはミッドチルダに家族や兄弟、恋人が居る者までいるのだ。

彼らはみんな、一体何を言っているんだというような表情を浮かべている。

そして、愛する街や人達を捨てて、逃げることなどできないと・・・。

『こちら陸士143部隊、そんな命令には従えない! まだ敵は目の前に居るんだぞ!』

『俺たちもだ。こちら首都防衛隊第22班、この街に住む人達を救えずしてのうのう逃げるくらいなら、死んだ方がマシだ!』

『これだから戦場を知らない人間の指示は・・・! 家族や身内を思つて戦っている奴の事を考える!』

こんなことを言われる事くらいは予想は出来ていたが、いざ実際に言われてみると心が痛む・・・ズキリと、まるで錐で刺されたように。

イルマの指示に従わず、街を守るために立ち上がった彼らはまだ戦おうとする。

(違う！ そうじゃない！ これ以上は君たちだって無理なんだ！)

『南東からは高ランクの敵性魔導師の姿、ガジェット、長距離型の広域殲滅魔法、そして巨大艦や更なる増援数およそ3千の姿が確認されている。敵の戦力は未知数、この戦力ではこれ以上の戦闘継続は困難です！』

『あなた、臆したのか！？』

『違う！ 現場を適切に判断しての事なんだ！』

まだでも戦おうとする戦士たちの状態に、空中からそれを見守っていたイルマは思わず毒づいた。

この街が大事だと思うのは自分だって一緒だ。

だからこそ、ここでは撤退が必要なんだと・・・！それをどうしたら分かってくれる！？

イルマが必死に考えを絞りだそうとしている間にも、防衛隊員達は自分たちの故郷を踏みじめる奴らに対して再び攻撃を加えようと身構えていた。

『ダメです、やめてください！』

凜とした声が、黒煙を上げるクラナガンの街中に響いた。

なのはが全体通信を使って叫びをあげたのだった。

その声に皆が一斉に動きをとめ、そして通信画面の方を振り向いた。画面に映っているなのはは少し震えているようだった。

顔をあげた彼女の表情を見て、全員がそのわけを知る。

なのはは泣いていた・・・。

『こういう事になってしまった事、私だってすごく悲しいです。

だけど、ここで貴方たちに何かあったら・・・もっと悲しむ人が増えます！』

『し、しかし・・・』

『高町教導官だって、この街には大事な人がいらっしやる筈でしょう？』

階級はイルマの方が遙かに上だったのだが、エース・オブ・エースとして名を知られているためか、それとも彼女の言う事に影響されたかで、反論の音が丁寧かつ小さいものになる。

その成り行きを、時間が無いにも関わらずイルマ達は黙って見守る事にした。

もしかしたら、彼女が助けしてくれるかもしれない、ということに期待して・・・。

『皆、頭を冷やして良く考えて！ このまま皆がバラバラに突っ走っても、どうしようもない事くらい・・・分からない訳じゃないでしょう？』

『う・・・』

『それは・・・そうなんですが・・・』

全く以って予想外彼女の力説に、次第に反論の声は静まって行く。同時に臨戦態勢だった陸と空の魔導師達が、冷静さを取り戻して行く。

『私だって、クラナガンをこんなにした相手を許せない・・・すぐにでも皆を助けたい！ だけど、胸が張り裂けそうな気持ちを押し込めて、苦渋の選択をしないといけない時もある・・・今が多分、その時なんです！』

なのはは、かつてヴィヴィオが誘拐された時の事を思い出した。あの時も助けたい一心ですぐには飛びださず、冷静に部隊の作戦指示などで行動を共にし、結果的にヴィヴィオの救助に成功した。

ヴィヴィオが誘拐された時、そして高らかに演説を行ったスカリエツティの中継から彼女の泣き叫ぶ悲鳴が聞こえてきた時、彼女の心は何度も限界を超えそうになった。それでも、耐えないといけない時がある……敵に背を向けてでも、生きないといけない事がある。

『……我々は、必ずここに戻らないといけない。そのためには、今君たちをここで失うわけには行かない。全員、撤退命令に従って欲しい』

エース・オブ・エースの力添えもあつたおかげか、さっきよりは言い易いとイルマは感じた。力強い何かが、後押しをしてくれていたようだった。

『……はあ、分かった。アンタ達を信じるよ。陸士087部隊、全員撤退！へりまで戻るぞ！』

『撤退路はベルカ自治領で良いんだな？防衛隊第9班、北へ向かう！』

彼らの他にもわらわらと撤退する行動を開始した部隊が現れる。なんとか聞いてくれた……本当に良かった。

イルマ達と同様、彼らたちの無謀な特攻を阻止したなのはもフェイトと顔を見合わせて力なくも安堵の表情を浮かべた。

『ありがとう……貴方の言葉が、皆の心を動かした。』

『いえ、ただ……皆が少し、以前の私ににっていた気がしたから、つい……』

『ハハッ、以前の事の反省から……というワケですか。しかし何にしても良かった……これであなただまで戦うとか言っていたら、正直もうどうしようもありませんでしたよ』

苦笑いを浮かべつつ、イルマ達や彼女たちも、そしてスバル達地上戦力も残っていたヘリで北へと向かう。

未だに煮え切らない様子のヴィータも、なのは達がそうするんならアタシ達にも選択の余地はねえ、と言ってなんとか撤退には従ってくれた。

戦闘開始から数時間が経過・・・遠くの地平線には陽光が昇ってきているため、徐々に夜闇から明るさを取り戻して行く。

何かの訪れを感じさせる朝日だが、この時だけはまるで去る者を照らす落ちる夕陽のように見えた。

敵に敗れて北へと逃げる・・・まさしく敗北だ。

（残された皆・・・必ず助ける、だから・・・！今は、無力な我々を許してくれ）

朝焼けに照らされてもまだ無数の黒煙をあげる街並みを後ろに見て、イルマ達はなんども胸中で呟いた。

そして同時に、絶対に戻ってくると心に堅く誓った。

新暦76年5月15日 PM3:12 ミッドチルダ極北部、ベルカ自治領、聖王教会本部・・・

『現在通常の番組を中断して、緊急速報をお送りしております。』

本日ミッド標準時午前3時半過ぎ、ミッドチルダ首都クラナガンに多数の武装勢力が侵入し、管理局地上本部の重要施設を含む都市部に大規模な破壊活動を展開、現在でも都市部の機能は完全に麻痺している状態です。また、防衛任務にあたった多数の管理局魔

導師を含め、この攻撃による都市部の死者数は3000人以上、行方不明者を含めると7000人以上と、ミッドチルダ有史以来で未曾有の大惨事となっております』

クラナガンからの放送が出来ないため、隣接世界である第3世界ヴァイゼンのテレビ局がニュースを今朝からずっと流し続けている。撤退してきた魔導師達や彼らに連れられた一般市民で、聖王教会本部はごった返していた。

そんな彼らも絶えず、隣接世界から送られてくる情報に目や耳を向けている。

中には身内の安否が気になって朝からずっとテレビの前に居る婦人や、壁に背を持たれて虚ろな表情の者までいた。

『尚、情報によりますと武装勢力の規模が極めて大規模であったため、現場指揮官の命令により防衛にあたっていた魔導師部隊は撤退。現在はクラナガンを脱した一部の市民たちと共に、ベルカ自治領に駐留しているとのことです』

『また、首都クラナガンを占拠中の犯人グループからは、現在何の声明も無く・・・管理局側からの武装勢力に関する情報や、対峙姿勢の発表も未発表のままです。皆さま、このままチャンネルを変えずにお待ちください。新しい情報が入り次第・・・』

「駄目ね・・・昼前と言っている事、あんまり変わって無い」

「そう・・・だね」

姉ギンガや父ゲンヤの安否を確認できなかった事で落ち込むスバルに、ティアナはテレビを見て残念そうに言った。

「でも、別に陸士108部隊が壊滅したなんていう情報も入って無い。希望は捨てちゃ駄目よ、分かった？」

「うん。 ありがとう、ティア」

スバルはやや力なく立ち上がり、不眠不休でブルーインパクト隊舎から今までに至っていた体を休める許可をもらうため、イルマ達がいる教会本部の外に臨時で設けられた指揮所の方へと向かう。

その時、誰かの怒号が聞こえてきた。

小走りで角を曲った先、臨時指揮車が多数止めてあるその駐車スペースの一角で、何やら誰かがもめ合っているようだ。

二人が近付いていくと、そこにいたのはブルーインパクト隊員そしてなのは達だった。

そしてその中心でもめ合っていたのは、イルマと最後まで撤退命令に不服的だったヴィータであった。

「てめえ、聞いたぞ！ あの撤退命令は、お前の独断だったってな！ 本局には事後承諾だったそうだな！」

「そうです、ヴィータ三尉。 しかしあの場で本局からの返答を待っている余裕など無かった。 やむを得ず、自分があの場において最高階級を有する者として、これ以上の戦闘継続は無理と判断し命令した次第です」

胸倉を掴みたいがヴィータの身長のおかげで彼女の手は、イルマの腰を掴んでいる。

ものすごい剣幕で迫られても、イルマは淡々と自分の判断の正当性を主張した。

「てめえそれでも管理局の魔導師かよ！？ アタシ達は教官として普通は無茶をやっちゃならねえって教えているけど、さっきのあの時は命をかけても守らないといけない場だったんじゃないのかよ！？」

「それについては、さっきも言った通りです。 クラナガンから撤

退した残存戦力と、各世界からの増援を合わせて改めて後日反撃に出る・・・そのためには、貴方たちをあの場合で失うわけには行かなかった」

「なんだよ、ソレ・・・アタシらじゃ無理だったっていうのかよ、アタシら全部の力を知ってるわけでも無いくせに、勝手に見切りをつけてるんじゃないよー!!」

「グイ、グイータ三尉。落ちついてください」

「グイータちゃん、やめて!!」

怒りの涙を浮かべたグイータの猛抗議は冷めるどころか更に加熱し、イルマやなのはの制止を振り切ってイルマをその小さな体で揺さぶる。

「あの場合であの判断は適切だった。戦闘時の敵布陣の詳細データを見た今でも、自分はそう思っている」

「そうじゃねえよ! てめえには、人の心つてもんがねえのかよ! ? あそこで傷ついた奴も・・・無念にも死んだ奴だってたくさん居るんだぞ!? あそこで撤退したら、あそこで無念に散った奴らは絶対に浮かばねえだろ!!」

「・・・」

「なあ! なんとか言えよ!! 散って行ったアイツらの気持ちを、お前は一回でも考えたのかよ! ?」

その時、なのは達はイルマの少し小さめの溜息を聞いた。

そして同時に、ゾクツとするくらい冷たい波動のような何かが、彼女たちの間を駆け抜けていった。

「・・・考えたら、何ですか? 考えてあげたら、誰かが喜びますか? 誰かが救われますか? それだったら、自分だって今すぐにも考えましょう・・・ですが、無駄な事です」

「なッ！！ て、てめえ・・・無駄だつて!？」

氷のように冷たく言い放ったイルマに対して、そんな氷を瞬時に溶かさなければかりに燃え盛る炎が、ヴィータの心から噴出しそうになっていた。

「・・・これ以上、貴方とこの話題に関して議論を展開することは無意味です。それに貴方は三尉、私は一佐・・・他部隊ではありませんが、上官の命令には従っておきなさい。他の方々も、やる事が無いならば休息を取ってください・・・朝から働きづめで疲れているでしょう。行きますよ」

そういうと困惑の表情を浮かべる他のブルーインパクト隊員を率いて、イルマはどこかへと向かうため踵を返し歩き出す。

「つてつめえ・・・!!！」

しかしその彼を追ってヴィータが堅い握りこぶしを構えて駆けだす。あんな光景や、首都から逃げだしたにもかかわらず、彼にはそれに対して後悔という表情が全く見受けられない。

詰め寄られても淡々と言葉を返すイルマを、上官とはいえ殴ってやらなければヴィータの気が済まなかった。

「あつ、ヴィータちゃん!!！」

「ふざけんなああああッッ!!!!!!！」

なのは達の引き留める声に全く耳を貸さず、ヴィータは拳を振り上げて飛び上がった。

パシィイツ!!！」

しかしヴィータが付きだした拳は、即座に振り返ったイルマの左手に握られ阻止されていた。

さつきと全く変わらず少しさめた表情のイルマと、一発が防がれて少し驚きと更なる悔しさが増していくヴィータ。

「ヴィータ三尉・・・正当防衛等の正当な理由以外での上官への暴力は、謹慎以上場合によつては局員資格剥奪の処罰になりますよ？
ですが、貴方は少し頭に血が上り過ぎているだけと判断して・・・この一回は許します」

「うるせえッ！！ アンタらはホームは別の街にあるからそんな事も言えるんだ・・・でもアタシらのはあの街がとても大切なんだ！だから・・・あそこで撤退した事に何も思っていないお前に、一発入れてやらねえと気が済まねえ！！ アイゼン！」

” J a w o h l ”

ヴィータのデバイス“グラ フ・アイゼン”が起動し、彼女が赤いバリアジャケットを纏う。

その光景を見たイルマだけでなく、なのはやはやても皆緊張の表情を浮かべる。

「ヴィータちゃん、ダメ！」

「やめるんや！」

「悪いはやて・・・後で何とでも謝るから、ただ今だけはコイツを殴ってやらねえと、アタシの気が済まねえ！！！」

主であるはやての制止を振り切つて、ヴィータは空中に飛び上がる。大して魔力を加えていないとは言え、変身状態では無いイルマが食らえば下手すれば大怪我をしかねない。

咄嗟にイルマがレヴィンを起動して対抗しようとした時、彼らの間

に誰かが割って入った。

” Strike blade ”

そして放たれた一閃が、グラ ファイゼンを振り上げていたヴィータの腹部を直撃した。

激しい衝撃を受けて地面を転がり、嘔吐感に必死に耐えながらヴィータが振り返った先に居たのは・・・

「・・・いい加減にするのはお前だ！ ヴィータ三尉！」

さっきまでのヴィータ以上に、怒りの形相を浮かべるアルだった。バリアジャケットを纏った彼の片手には、日本刀のような形状のデバイス“マーヴェリック”が握られている。

「つてめえ、邪魔するんじゃないやねえよおッ！！」

そして周りがアルの反撃に驚くよりも早く、ヴィータは自分を妨害したアルへと攻撃を叩きこむ。

ガキインという金属音と火花を放って交差する二人のデバイス。

「ヴィータ三尉・・・上官へ不当な暴行を加えた行為のため、管理局法に基づいてお前を処断する！」

「し・・・！」

「処断やて!?!」

「くッ・・・やれるもんならなあッ!!」

処断という言葉聞いて、なのは達だけではなくイルマ達も驚きを覚えた。

かつてのベルカの先史時代には、王の命令に逆らったり戦の敗北の

原因となった部下を、王は処断し殺す事もあったという。しかしその言葉を知っているであろうヴィータは、かえって激昂して加える力をさらに強める。

「おい、アル！」

「イルマ・・・いや、隊長。ここは少し、任せて欲しい」

イルマが思わずアルを制止しようと声をかけると、彼はいつもの冷静な声でイルマに返事を返した。

何か覚悟というか、決意というか・・・そういう物を彼から感じてイルマはそれ以上彼を制止する事が出来なくなっていた。

罅迫り合いのような状況から、二人は互いを押し返して離れる。

「隊長が何も分かっていないだ！？ 分かっているのはお前の方だ！ 死者の気持ちだの何だの余計な感情を戦場に持ち込んで、それで正常な判断ができると思っているのか!？」

「余計だと!？」

「ああそうだ！ あの場で撤退命令を出したのは、そういう感情を必死に押さえこんで隊長が正常に判断した結果だ！ もしあの場で隊長が撤退命令を出していなかったら、お前たちは今この世に居なかったかもしれないんだぞ！」

「ッ・・・!」

「お前の抗議も、隊長が撤退命令を出してくれたから今ここで出来るんだ！ そうじゃないのか、ヴィータ三尉！ それに教官であるお前が、感情任せになるなど・・・教官失格だ！」

「う・・・うるせええよおおッ!!! アイゼン！」

” Gigant form ”

ヴィータのグラ ファイゼンの形が変化する。

ハンマーが巨大化し、ヴィータの身の丈をはるかに超える巨大な金

槌だ。

そしてそれを振り上げ、彼女は雄たけびを上げながらそれをアルへと一気に振り下ろす。

ヴィータの技の中で破壊力が高いギガントハンマーだった。

「マーヴェリック、ディメンション・ブレード！」

” Dimension blade ”

アルはそのハンマーが振り下ろされる真下から、マーヴェリックを構えて紫のエネルギーを刃に集める。

そして二人の姿が交差し、それぞれが自分の武器を振り抜いた。

制止した二人の姿に、周囲の人間はみな言葉を失う。

そして……

「あ……ぐ……」

ヴィータのグラーフアイゼンが柄から切断され、アルから一撃を加えられたヴィータはその場で倒れて昏倒した。

なのは達は思わずヴィータへと駆け寄り、変身が解け気を失っている彼女を揺さぶる。

「安心しろ……。 デバイスの基幹部分には攻撃はしていない・
・彼女の体への物理ダメージも、かなり押さえている」

そう言ってアルは後ろ目に変身状態を解除すると、顔を洗ってくる
とイルマ達に言い残してその場を後にする。

イルマは彼を放っておけず、ブラットとルノアにアルを見ていく
れと念話で頼んだ。

数十分後、教会本部内談話スペース・・・

「さつきは、本当にすまなかった」

「いえ、その・・・なんて言うか・・・」

「いいえ、悪いのはこちらです。トレノー佐が謝る事じゃあらへんです」

教会本部の談話スペースに移動した全員に、イルマが謝ると困惑を浮かべるスバル達の間からはやてが主として、暴走したヴィータの事をイルマに謝った。

それを聞いてイルマは少し安心したような表情を浮かべた。

もう一人医務室送りにしてしまったが、アルが絶妙に手加減していたおかげで今でも眠り続けているヴィータの体へのダメージは殆ど無いと言っても良かった。

「しかし、驚きました・・・まさかアルさんが、あんなに怒るなんて」

「私も・・・ブルーインパクトでも、とても大人しそうなイメージでしたから」

「フフツ、それを言うなら・・・私だってあんなのは初めて見たわ」

「えっ！？ セレスさんも、初めてだったんですか？」

スバルとティアナの質問にセレスが返した返事を聞いて、二人が思わず疑問を浮かべる。

付き合いが長い筈のセレスでも、その事を知らなかったのだ。

しかし、そこで一番付き合いが長く、彼を一番よく知るイルマが口を開いた。

「一応、彼の名誉のために言っておくけど・・・アルは、ボーイン

グ三佐は理由があっても、誰かを滅多に怒るような事はしない。たった一つの例外を除いてね」

「例外、ですか・・・？」

「感情で回りが全く見えなくなった人間・・・おそらく彼がこの世で一番嫌いな存在だ」

感情で回りが見えなくなった人間、そうまさしく先のヴィータそのものだった。

しかし一体なぜ・・・？

「彼の両親は優秀な空戦格闘型の魔導師夫婦だったと聞いている・・・だがアルがまだ小さいある日、自身の保身のために暴走したロス・トログリアを無理やりにも抑え込むため、部下に無理やりな突撃命令を出した指揮官のおかげで、二人は殉職した。ヴァイゼンでね」

「なっ・・・」

「そうだったんですか・・・」

アルがあそこまで怒った原因を知り、全員が息をのみ驚いた。しかしイルマは更に続ける・・・

「彼が14歳の時、今から8年も前・・・彼に7歳年上の実の姉がいた。ミル・ボーイング一等空尉、いや二等空佐だった。今から8年前のある日、ミッドチルダでとある魔導テロ事件があった。

その犯人に仲間を殺されて逆上した指揮官が生き残った数少ない部下に、まだ多数健全のテロリスト達に攻撃を仕掛けるように命じた」

「テロ事件・・・」

「その指揮官も、その同じテログループに娘を殺されていて、今回は仲間も大勢殺された・・・気持ちは分かるが、たった三名の魔導師に多数のテロリスト達への攻撃を命じたのは間違いだっただ。そしてアルの元に帰って来たのは、何も語らぬ物となった愛しい姉の

遺体だった」

知らずイルマの話に周りの人間はその話に思わず聞き入っていた。そしてティアナは、彼の姿にかつて似たような理由で兄を失った自分を重ねていた。

「アルさんに、そんなことが・・・」

「恐らく許せなかったし、無視できなかつたんだろう。感情だけで適切な判断をしていない人間っていうのが・・・特に集団を指揮したり、教えたりするような立場の人ならば、より一層」

それを聞いて最初はイルマの撤退命令に反抗的な感情を抱いた者は、皆一様に自身の過ちを咎められた気分になり俯いた。

「教官失格だ！」というアルのあの罵声が、彼女たちの心に響いて来るようだった。

「ただ、これだけは分かって欲しい。別に感情を否定しているわけじゃない・・・感情は時に、思っていた以上に自分の力を高めてくれたり成長させてくれたり、良いこともあるのは彼だって知っている。それに皆あそこに早く戻りたいだろう？自分だって、ミッドには家族が居る・・・」

「えっ！？トレノ隊長、家族がいるんですか！」

「言つてませんでしたっけ・・・ああ、言つてませぬね。父と母、姉と弟、そして祖母の五人がミッド南部に住んでいる・・・」

「隊長も、あつたんですね・・・どうしても戻らないといけな理由が。それなのに・・・」

イルマが撤退命令を出した時に、スバルは一瞬命令に反抗的だった。きつとイルマは守るべきものが無いから、そんな命令を出せるんだと思っていた。

ところがいざ聞いてみたら、スバルの二人を抜いてイルマはミッドに家族が五人……！

それなのに、感情を必死に抑え込んであんな判断を瞬時に……あんな境遇を持つアルが、反抗せずに指揮官であるイルマに信頼を置いている理由が分かったような気がした。

その時、部屋の扉が勢い良く開いてフエイトが現れた。やや息を乱しているようだ。

「みんな、ニュース中継のチャンネルを開いて！」

その言葉を聞いて、部屋にあったモニターを起動してニュース番組を付けると、そこにはあの青年ツェーザーの顔がデカデカと映し出された。

そして更に、言っている内容は全員がその耳を疑うような物だった。

『我々は、このミッドチルダ全土を、腐敗し准ずる価値も無い管理局から独立させる。そう……今日からここは、独立国ミッドチルダ！』

「独立国……！」

「ミッドチルダ!？」

思わずなのはとはやてが驚きの声をあげる。

独立させる……それはつまり、全ての管理局の規制や規律そして適切な管理から離れると言う事だった。

テレビの画面には、ツェーザーの他に側近のような女性そして大柄な男性の姿、そして彼に従い内応したと見られる多数の局員が映っていた。

『地上の民たちよ、知っているか？ 本局と地上本部は本来は手を

取り合い協力しなければならぬ．．．ところが！ 彼らはお互いに足を引っ張り合い、拳句の果てにJS事件のような事件まで起こした．．．そう、諸君の命は、管理局によって守られ、同時に脅かされていたのだ』

何を言うか．．．お前たちだって、あんなに一般市民を殺しておきながら．．．！

その場にいた全員が、憤りを覚え画面を睨む。

『私たちは管理局創設以来からあるこの矛盾から、魔法文化発祥であるこの偉大な地ミッドチルダを解放する！ 先の我々の攻撃により多数の犠牲者を出してしまった事は、誠に申し訳なく思う．．．だがあれば必要悪、やむを得なかった事だ。 現に管理局の勢力は去り、北のベルカの地で解放されたこの地を再び奪い取らんと画策している』

画面が切り替わり、将官クラスの者まで映っていた。

彼らも協力者なのかと．．．敵の戦力的勢力以外の脅威に、イルマは改めて驚かされた。

『だが諸君にここで約束しよう！ 我々を信じてくれさえすれば、この地で命を落とした者たちが渴望した良き世界を、我々が実現させると言う事を！ そしてそれを実現させるだけの力、良き協力者も我々と共にある．．．』

そしてツエーザーから画面が切り替わり、映し出された人物。

その人物を見て、一体何千．．．いや何万．．．全世界に散らばる管理局員を合わせて何十億の人が驚愕した事か！

『しぎげんよう、諸君．．．』

薄くのびるような声、薄気味悪くも整った顔に切れ長の目と黄金の瞳……その姿は……!!

「ジェイル……スカリエッティ？」

「ば、馬鹿な！？ アイツは、私が捕まえた筈……!!」

映し出されたのは、どう見てもジェイル・スカリエッティにしか見えない。

挨拶で聞いた話し方、顔、モニターの人物が彼と同じに見えるためフェイトは我が目を疑って思わず言葉を漏らした。

髪の色はダークグレー、そして来ている服は市販のスーツのようであつた。

ただ、パツと目で全く分からない。

ホントに違うのはそう言った細部だけだからだ。

『この顔にピンときたら何とやらだと思うが……私はJS事件の首謀者、ジェイルでは無いと言っておこう。私の名は、デイスピア・スカリエッティ。私はここに居るヴァーリゲルト少将と行動を共にし、彼の考えに深く共感している』

「デイスピア・スカリエッティ……!？」

「な、なんなのよコイツ!？」

頭が混乱する。

きつとそれはこの画面を見ている全員が、そう思っていた所だろう。ところが、イルマ達だけはまるでそれを予想していたかのように、驚いたような表情は見せなかつた。

とりあえず、演説はその後ツイエーザーが一言を残して終わった。

再び速報や中継を映し出したニュー画面を見つめながらも、一体何が起こっているのか、なのは達の頭の中は全く整理がつかない。首都クラナガンが陥落し、独立させると高らかに宣言した男、そして彼に協力するジェイル・スカリエッティそっくりの男ディスプレイ・スカリエッティ。

考える事が多すぎて、本当に分からない……。

その時、部屋にアルに付いていた筈のルノアが戻ってきた。

そして何かメッセージがあるようで、その内容をルノアはイルマに耳打ちした。

彼女からのメッセージを聞いたイルマは、スッと立ち上がるとなのは達の方を向いた。

「どうしたんですか？」

「君たちに、会ってもらいたい人が居る。 戦技研究部の最高研究主任で、我々ブルーインパクトの最高司令官だ」

そして彼に連れられ、なのは達が教会本部の別の部屋へと移動する。ドアを開いた先の部屋は、とても薄暗い。だがどうやら、隅の方にブラットとアル、そしてセリーナがそこには居ると言う事は分かった。

「セリーナさん！」

「知り合い？」

「うん。ブルーインパクトの、オペレーターの人だよ」

フェイトになのはが答えると、彼女は無事だったのねとなのはに微笑みかけた。

そしてセリーナが一言……

「私たちの司令官であるこの方から、貴方たちにどうしてもしなければならぬ話があるそうです……」

そういうとセリーナはわきへどき、なのは達の視線の先には机と背もたれが裏返った椅子に座る一人の人影だった。

そして、その人物が言葉を発する……。

「よく来たね、元機動六課のエースの諸君……そして偉大なるベルカの騎士達よ。私は君たちと会うのを、実に楽しみにしていたよ」

「その声、まさか……!?!」

薄暗い部屋に響く、誰にとっても聞き覚えのある声。

フェイトにとつてみれば、忘れたくても忘れられない因果を持つ相手の声とさっきのデイスピアの声とそれは同じだった。

「……自己紹介が遅れたね、私が戦技研究部最高研究主任であり時空管理局少将、そして第11航空隊ブルーインパクトの司令官でもある……」

そしてその人影が椅子を回転させて振り返る。

その人影は……!

「……ホープ・スカリエツティだ」

その顔そしてその声、まさにジェイル・スカリエツティ本人と何も変わらない。

ただ違うのは髪の色が彼は黒、そしてジェイルが着ていたような白衣に代わってホープ・スカリエツティが着ていたのは、濃紺系基調の管理局高官の制服であったことだった。

今日何度目かになる信じられない光景に、全員がまたしても言葉を失った。

Flight 13 : The Truth (絶望と希望) (前書き)

クラナガンが陥落し、絶望と混乱の淵にあつた私たちの前に現れたのは、JS事件で逮捕した筈のジェル・スカリエツィと同じ顔を持つ男。

そこで知ったのは、遠い昔の出来事、あまりに巨大な敵、そして悲しき運命。

それでも、立ち止まらない。

あの時立てた、必ず戻るといふ誓いのために！

魔法戦記リリカルなのは Infinite Blue 始まります

かつて自分たちが必死に逮捕した男と同じ顔と声の男が、今度は自分たちの上官として現れた。

その様子に言葉も出ない一同だったが、ようやくフェイトが言葉を絞り出した。

「ホープ・スカリエツティ・・・一体、貴方は!？」

「私は君たちがかつて野望を阻止したジェル・スカリエツティと、同一のクローンとして生まれたスカリエツティ・シリーズ三体うちの一体。もう一体はご存知ジェル、そしてもう一人が・・・」

「デイスピア・・・デイスピア・スカリエツティ!!」

「・・・その通り」

フェイトの質問に、ホープ・スカリエツティがジェイルのように口角を歪めてニヤリとした笑みを浮かべて答えた。

仕草まで、本当に似ている・・・夜道で出会ったら反射的にバルディッシュ・アサルトで吹き飛ばしてしまいそうだ。

と、フェイトは冷静でなければ務まらない執務官にあるまじきことを想像してしまう。

「その反応から察するに、君たちも見たのだろうか？ 先程、私とジェルと同じ顔を持つ男を」

「はい・・・それで、貴方たちは一体？」

「・・・今は昔、管理局最高評議会がああ伝説の都市アルハザードの技術で作りだした三人の存在がいた。それぞれに、欲望、絶望、希望という異なる夢を抱かせてね」

「それじゃあ、あなたが・・・そのうちの一人？」

「そう、私が開発コード“アンリミテッドホープ（無限の希望）”、

私の名前もその開発コードそのものだから、さほど違和感はない」

話は更に先へと進む。

先程の中継で堂々と名乗ったデイスピアスカリエッティに関して・
。

「デイスピア・スカリエッティ、彼の開発コードは想像が付いていると思うが“アンリミテッドデイスピア（無限の絶望）”。この世界に、絶望をもたらす為に生まれた存在だ」

「この世に・・・絶望を!？」

「そして、それを最低限達成しうるであろう力を、彼は手に入れた・
・・・それが」

「パトリオット・フォース、ですね？」

はやての肩に乗っていたラインの質問に、ホープはニヒルな笑みのまま黙って頷く。

そういえば、彼らの正体はなのはも気になっていた所だ。

極秘のヴェールに包まれていたブルーインパクトの存在でもうつすらと知っていたにも関わらず、あれだけ強大な力を持つ部隊の存在など彼女たちは耳に挟んだ事も無い。

「パトリオットフォースという部隊に関しては、本局が計画を進めていた多岐任務に対応可能な機動部隊だ。その事は私も調べてすぐに分かったんだが、問題は今あの部隊を率いている三人だ・・・」

あの三人・・・

それが先程の中継で高らかにミッドチルダ独立を宣言していたあの男と、彼の傍にいた大柄の男と細身の女性だと言つのを全員が理解するのに、さほど時間はかからなかった。

先の戦闘分析の結果でも、あの男性と女性はおそらくオーバース

クラスの推定魔法ランクという分析結果が出ている。

女性に限ってはあの残虐性の高い広域殲滅魔法の使い手であり、目に見えて高い戦闘力を持つという事が伺える。

そして、二人が付き従うあの青年も・・・おそらくは相当な実力の持ち主。

「演説をしていた男はツェーザー・ヴァーリゲルト、もう一人の男はシュミット・ハイゼル、女性の方はエミール・ローアだ。これは、パトリオットフォースから公表されていた情報だから、信頼性は乏しい偽名だと思っていた。ところがだ・・・」

「ところが？」

「この方々が、彼らの正体をご存じだったよ・・・」

そういうとホープはどこかへと通信を繋げる。

うすぐらい部屋の中央にモニターが開き、そこに映し出された人物は・・・

「フィ、ファイルス相談役!？」

「キール元帥に、クローベル統幕議長まで・・・」

「伝説の、三提督・・・あッ!」

最後に思わず呟いたスバルは、周囲のなのは達が画面に映る彼らに敬礼をしているのに気付き、慌てて自分も敬礼を送った。

レオーネ・ファイルス法務顧問相談役、栄誉元帥のラルゴ・キール、そして本局統幕議長のミゼット・クローベル。

この三人は管理局の魔導師だったら知らない者はいない程の、有名な伝説の三提督の面子だった。

そして影ながら、機動六課を支えていたのも彼らだったため、なのは達にとっても馴染みの深い相手ではある。

「久しぶりだねえ、はやてちゃんに元機動六課のみなさん」

ミゼットがにつこりと笑みを彼女たちに向け、隣に座っていたフィルス相談役もキール元帥も一様に笑みを浮かべている。

堅苦しい言葉から始まらなく、本当にそこらのおばあちゃんから声をかけられたような気分になり、なのは達の緊張はうっすらと消えていく。

「クローベル統幕議長、お久しぶりです。お元気でしたか？」

「ええ、貴方たちのおかげよ。今回も、いろいろと大変だったわねえ」

「いえ、とんでもないです。それより・・・私たちの力不足で、クラナガンがあんなことに・・・ホンマに、申し訳ない気持ちで、なんと行って良いやらで・・・」

「残念だけど、仕方がないわ。あの三人はそれだけ危険な存在だったのだから、むしろ貴方たちがこうして無事だった事を喜ぶたいくらいよ」

ミゼットが優しく微笑んですまなそうに俯き加減のはやてに語りかけるように言った。

「気にしないでということなのだろう・・・」

「それで、統幕議長はあの三人をご存じなのですか？」

「ああ、今からもう何十年も昔の事になる。まだ私たちが、君たちのように魔導師として前線に出ていた頃の話だ」

ミゼットが変わってレオーネ相談役が説明を始める。

彼の表情にも、今までは見たことないような険しさが刻み込まれていた。

「これは過去の事と言えど管理局の信頼に関わる事であったから、殆ど公にされる事なく歴史の闇に葬られた事だったのだが・・・実は、管理局は一度、内部で組織紛争を起こしているんだ」

「なッ！？ 組織紛争!？」

「管理局同士で、争ったと言う事ですか？」

「そうだ。地上本部の局員は今でこそ穏健派と武闘派に分かれ、それぞれの均衡を保ちつつ平和を維持してきた。だが、当時は違った・・・武闘派などよりも恐ろしい派閥が、地上本部の意思決定を掌握していた」

「それが、管理局過激派と呼ばれる連中じゃった・・・そしてそれを率いていたのが、若干26歳で地上本部代表に上り詰めた若き地上の英雄、ツエーザー・ヴァーリゲルト少将だった」

キール元帥の言葉と同時に彼の・・・ツエーザーの画像が出ると同時になのは達の間から、内紛の事を聞かされた時よりも大きいどよめきが沸き起こる。

先程の人物と髪型に若干の差はあるが、その容姿はまさしき先程独立を宣言したツエーザーそのものだった。

「管理局、過激派!？」

「この人たちが・・・それを？」

「彼らは偉大な魔法文明を生み出したミッドチルダこそ、その魔法の力を以て世界を統べるに相応しい世界だと信じてやまなかった。

そして管理はなるだけ介入せず監視するにとどめるべきという本局とは、その思想の違いから袂を分かち、そしてある日とうとうそれは始まった」

「それが・・・ヴァイゼンの本局支局が管理していたロストロギアへの対応のこじれから起こった、管理局地上本部過激派によるヴァイゼン侵攻。それが、地上本部と本局の最初にして最後の戦争じやったよ」

レオーネから代わって説明を始めたのは、キール元帥だ。彼が語りだしたおぞましい過去を聞いて、なのは達は驚き以外の表情を浮かべていない。

驚愕の真実だった。

確かにこんな事を公表しようものなら、各世界の人々は押し並べて今の管理局に怪訝の目を向けるだろう事は簡単に予想できた。

「私たちはやむを得ず彼らと戦い、多くの犠牲を払って辛くもその戦いに勝利した。その時の大怪我で、私はしばらく前線には立てなかつたくらいだったよ」

「管理局員がヴァイゼンに無差別攻撃を仕掛ける等、言語道断であった。今でも、ヴァイゼンの歴史にはそれは大規模テロ組織の起こした犯行となっているが、事実はこちらだ」

ミゼットやレオーネの言葉には、重みと同時に歴史やその時の彼の想いが垣間見えたような気がした。

そしてなのは達は、ようやく理解できた。

伝説の三提督が言う過去の悲劇と、全く同じ事が今起きているのだと……。

しかしそれを理解しても、スバル達にはどうしても理解できない事があった。

「あの、一つ質問しても宜しいでしょうか？」

「ん？ どうぞ」

「あの地上本部を占拠した人たちって、若かつたですよ？ 何十年も昔の人には、見えなかつたんですけど……？」

「バ、バカ！ スバルッ！ それは、三提督はお年寄りって言うてるよつなものじゃない！」

「あ、あわわわッ！ す、すみません！ 申し訳ありません！ い、

今のはお忘れになってくださいっ!!」

ティアナから小声で注意され、スバルが素っ頓狂な声をあげて画面の三人に必死に謝る。

しかしそこは人望の厚いというか、寛容な三提督はハハハと笑って過ぎました。

「ナカジマ陸士、だったね? . . . その質問には、私が答えよう」

そして未だに落ち着きを取り戻していないスバルへの回答に名乗りを上げたのは、三提督の誰かでもなく彼女たちから見て画面の奥の同じ部屋にいるホープだった。

「ホープさん . . . ?」

「君たちも、忘れたわけじゃないだろう? 行動を起こしたパトリオットフォースの後ろに、誰がついていたか . . . 」

それを聞いて、というかホープの顔を見て、なのはとフェイトは納得のいく答えを導き出した。

ディスプレイ・スカリエツティ . . . 彼がパトリオットフォースを後押ししている。

そして彼やホープと同じ顔を持つジェイル・スカリエツティが専門としていた、生命操作技術。

もしディスプレイ・スカリエツティが、戦闘機人等の生命操作技術を応用して彼らを . . . ! ?

「それを私たちが知ったのは半年前、最初は我が目を疑ったよ。

何十年も昔に、自分たちの死という形であの悲しい戦いを終わらせた彼らの姿を、また見る事になるとはね」

「ともかく、彼らが何らかの技術で復活を遂げたのは間違いなかつ

た。それも、記憶や力、経験もそのままに」

「そこで我々は、そこに居るホープ君やトレノ隊長達に、彼らに対してありとあらゆる解決方法や防衛策の構築を任せましたが、さすがに時既に遅かったんじゃない」

三提督がそれぞれの想いや後悔を吐き出すように、なのは達に語りかけた。

「彼らは、本局で開発していた次世代次元重巡航母艦リベラトリックスと、その艦と艦隊を構成する次元航行砲艦ネメシスなどの艦を強奪し、一カ月半前に管理局から姿をくらました」

「リベラトリックス・・・それが、ミッドに現れたあの巨大艦ですか？」

フェイトの問いかけに、両手を机の上で組むレオーネはゆっくりと頷く。

「離脱前の中でも、彼らは管理局の目の届かない所で色々な工作を行っていた。自分たちの計画をより完全な物にするために、彼らはどうとう自分たちの障害となり得るような人物の暗殺まで計画し始めた」

「暗殺・・・そんなことまで！」

フェイトが驚きを隠せない様子でぽつりと呟くと、はやてが何かを決したようにミゼット達を見上げた。

「統幕議長、高町一尉たちに例の事・・・話しても宜しいですか？」

「・・・そうだね。それじゃあ、お願いするよ」

「はやてちゃん？」

改まったように振り返ったはやてを見て、なのはが思わず眉をひそめる。

「ゴメンな。実は、なのはちゃん達を戦技研究部に送った理由、三人そろってプログラムへの参加っていうんは、あれは嘘だったんや」

「・・・えっ!？」

「や、八神部隊長! どういうことですか!？」

思わず声をあげるなのはとティアナ。

嘘という言葉に、彼女たちは湧き出たショックを隠せなかった。

その言葉を聞いて、少なからず責任を感じたのか、イルマ達は思わず顔を下や横に反らしている。

「この先は、私が言うよ。彼らは、自分たちを妨害しそんな人物の暗殺を計画し始めたと言ったね? そんな彼らが今から五か月前、ある人物の暗殺を実行するために動いた。その人物が・・・」

そう言いかけたミゼットの視線が、ある人物に向けられる。それに連れられて全員の視線も、彼女一人に向けられた。

「エース・オブ・エースと名高い、高町なのは一等空尉・・・あなたです」

「わ、私を・・・暗殺? 殺されかけてたんですか、私!？」

暗殺されかけていた恐怖からの驚愕で、なのはは思わず声をあげた。その事実を隠していたはやては、彼女の方を向いてすまなそうに俯いている。

「というより、狙われていたのは元機動六課の隊長陣だった三人。

けれど、高町一尉以外の二人を狙う場合、少し難しい事があった。

テスタロツサ・ハラオウン執務官は、役職の性質上次元航行部隊に属して定まった世界に駐留しない事が多いため、暗殺を狙うタイミングが非常に難しい。はやてちゃんには、守護騎士の四人がいてこちらを狙いにくい」

ミゼットが語りだす真相。

自分たちが知らない裏で、そんな事が起きていたなんてと、なのは達は一樣に驚きを浮かべていた。

「そして、去年の12月12日の深夜・・・とうとう彼らは動いた。およそ20名以上のAランク以上の魔導師が六課隊舎に攻撃をかけ、高町一尉を暗殺するためにね」

これも全く知らない事実だった。

自分たちが攻撃をされていた事も、危険人物である魔導師達がミッドに出現していた事も・・・。

フェイトは、おそらくこの時既にレーダー監視等の部署にパトリオットフォースの一味の一部が入り込んでいたのだろうと推測した。そうでなければ、首都防衛隊の魔導師が緊急出撃したり、なによりそう言った事実を自分たちが以前に耳にしている筈だった。

「だが、それは阻止されたよ。そこにいる、トレノ隊長達ブルーインパクトによってね」

ミゼットの言う12月中旬深夜の戦闘、それは公には何もなかった事のように伏せられている。

JS事件が収束したばかりで、市民たちに余計な不安を与えたく無かったのか・・・

それとも、襲撃者が反乱を起こした管理局員だと言う事を知られた

くなかったのか・・・
あるいは両方が・・・。

「でもともかく、これで形振りを構っていられなくなったのは私たち本局の方だよ。彼らと戦ってでも・・・彼らに首都クラナガンをも、ミッドチルダを渡すわけにはいかない」

あの惨劇を引き起こした相手にどんな思いや考えがあったのかは知らないが、あの暴拳を許すわけにはいかない。

ミゼットの言葉になのは達が真剣な表情で頷いた。

そして悔しさでいっぱいの中、敵に背を向けて感じた、絶対に戻ってみんなを助ける。

だから、相手はどんなに強大かは分からない、それでもここで立ちすくむ事は絶対にできない。

「本局からは、増援となるヴァイゼン軌道で待機していた次元航行艦隊が明後日にでもミッドチルダの遠軌道上に到達する。本当は同じ管理局員同士、こんな事になって何と言って良いか分からないくらいだけど・・・ただ一言だけ、どうか無事で」

三提督たちも、ミッド陥落という事態を招いてしまった事に少なからず責任を感じていたのだろう。

終始そうついた表情で行われた会話も、その一言を最後に終わった。

「悩むような事が沢山出てきて、さぞ混乱しているだろう」

通信が終わわりそれぞれに顔を見合わせて話をしていたのは達に、ホープが優しく言いかける。

緊張気味の体が今のところ、彼女たちに一切の疲れを感じさせてはいないが、その緊張の糸が切れると同時にドツと疲れが来る事はな

んとなく予想出来ていた。

「ところで、このベルカ自治領は独立を宣言したミッドへの編入をグラシア代表は堅く拒むつもりらしい、だがそれを聞いて彼らがどんな手を打ってくるか分からない。だから、今はその時に備えて体を休めてくれたまえ」

「そうですね・・・わかりました」

ホープの締めくくりの言葉で彼女たちは解散し、教会本部のシスターに案内されて休息を取るための部屋へと案内される。

長い廊下を歩いていきながら外の風景を見ると、怪我人がへりや垂直離着陸型の救難部隊の飛行機で運ばれてきていた。

「あ、いた。なのはさん、フェイトさん！」

「あれ、シスター・シャツハ？」

そんな状況を彼女たちが複雑な面持ちで見っていた時彼女たちは不意に声をかけられた。

廊下の向こうからは教会のシスター、シャツハ・ヌエラが小さな子を連れてやって来ていた。

「なのはママ！ フェイトママ！」

「ヴィヴィオ！」

目頭に少し涙を溜めて駆け寄ってきたヴィヴィオを、なのはは掬うように抱きしめた。

「ママあ、ママあ」

「ごめんね、心配してたよね・・・！」

泣きじゃくるヴィヴィオと、彼女を抱きしめて優しく頭をなでるのは。

ヴィヴィオと会えて安心したのか、なのはの目にもうっすらと涙が・

。。。

その様子を温かく見守っていたイルマ達は、ふと反対側のロビーの方が何やらがやがやとしているのに気付いた。

近付いてみると、相変わらず続いていた筈のニュース画面から、長い金髪の女性が真剣な面持ちで会見をしている様子だった。

「騎士カリム！ そっか、確かホープさんが言っていた・・・」

フエイトが映っていた人物を見て、先程ホープが言っていたベルカ自治領が占領に反対表明という内容を思い出した。

カリム・グラシア。聖王教会騎士団の代表であり、機動六課の設立から活動までを幅広く支持して尽力した影の功労者だ。

また、管理局にも籍を置いており少将というかなり高官の階級だ。

そのため幅広く人望があり、また本局からの信頼も厚いため、機動六課の隊長陣のリミッター解除権限があるなど、かなりの実権もあるようだ。

『・・・ここに、ベルカ自治領ならびに聖王教会騎士団は、昨夜から早朝にかけてミッドチルダ首都クラナガンを襲撃した武装勢力に対し、管理局からのミッドチルダ独立を正式に拒絶および、多数の死傷者を出す惨事を招いた彼らを非難する事を表明します』

それを聞いてロビーに人だかりを作っていた、治療を受け終わって包帯を所々に巻いた局員や民間人達からは、ドツとどよめきと拍手が沸き起こった。

首都から撤退してから、なに一つ良いニュースが入ってこない彼らにとってみれば、カリムが行った非難表明に賛同する事が、今では

せめてもの抵抗だったからかもしれない。
そして、カリムはその高まる期待を感じ取っていたのか、更に続ける……

『また我々聖王教会騎士団は、クラナガンを襲撃した武装勢力へ、速やかな首都解放と武装解除を求めます。貴方がたは非人道的かつ許されざる行いをしました。しかし、その心に僅かでも良心があるのなら……この勧告を受け入れる事の善悪が、判断出来ると思います。』

中継をしていたのは、どうやらこの聖王教会本部の一室のようだった。

部屋の内装が酷似していたからだ。

しかしそんな事に気付くよりも、最初に中継に気付いたイルマ達の周りにはなのは達も加わって、こちらでも大所帯を作ってその様子を終始じつと見つめていた。

その後記者からの質問に受け答えをするカリムを見ながらなのははやて達は、画面に映る彼女が頼もしくそして誇らしく思えていた。

予想していたので何も驚きはしなかったが、しかしこれでミッドチルダが二分された事が明白化した。

首都クラナガンを占領しているツエーザー率いる大軍団パトリオット・フォースとそのクーデター勢力、そしてカリム達聖王教会に一時的に匿われている自分たち。

「ここが、私たちの最終防衛ラインになるのね……」
「そうだね」

心配そうに画面を見上げるセレスに、イルマは静かに同調する言葉を囁いた。

ここが最終防衛ライン、ここより後には引けない。
だって、ここより先には後退できる場所が無いのだから！
いや、厳密に言えばブルーインパクトの本部がある世界まで逃げ込
む事も出来る。
しかし、これ以上逃げたくはない・・・その思いがイルマ達の心で
何回も弾むように木霊していた。

Flight 13 : The Truth (絶望と希望) (後書き)

ついに、その時は始まる。

長い年月をかけて生みだされた、巨大な歯車を動かして。

でも、これ以上は逃げない。

そして、負けられない！

次回 魔法戦記リリカルなのは Infinite Blue

Flight 14 : ベルカ自治領防空戦 (聖なる地にて邪を討つ) (前編)

負けられない、皆の帰る場所を守りぬくために！

テイクオフ・・・ナウ！

真実を知り、そして大きすぎる敵に気付いた私たち。

そして、その彼らがまたしても迫ってくる。

でもここには傷つけてはいけない人がいる、守りたい人がいる。
だから、私たちは戦う。

魔法戦記リリカルなのは Infinite Blue 始まりま
す。

新暦76年5月17日 AM10:22 ベルカ自治領、聖王教会
本部

ミゼット・クローベル統幕議長の言った通り、事件の翌々日には次元航行艦隊の先遣隊がミッドから数十万キロの遠軌道へと到達していた。

しかしミッド地上には、パトリオットフォースの切り札ともいえる巨大艦リベラトリックスなどの強力な敵艦隊が控えており、うかつに降下しようものならいい的になってしまう。

敵艦の戦力が未知数に等しい上に、対空戦闘能力が向上しているガジェット?型が多数稼働しているという事実も、危険要因を高めている一翼を担っていた。

風の便りというか、この頃になると現地から逃げてきた人たちの中には撤退後の現地の様子を知る者たちも多く、彼らからその様子を聞く事にした。

彼らによると、ツエーザー指揮のもと地上本部は管理局としての本局との相互連携以外は通常通りに稼働を始め、暴徒化した市民達の鎮圧にあたる警察機能や、瓦礫の撤去や要救助者の救助には地上本部所属の救助部隊が当たっているとの事だった。

それを聞いてなのは達は、首都の状況が好転していないにも関わらず、過激派と呼ばれる敵勢力がミッドチルダの市民たちに苦役や拷問を科すような残酷な連中ではないと知り、少しばかり安堵した。どうやら、それなりの規律は存在するようだ。

「う……ん」

ぼやーっとしていた目の前が晴れていくように、眠っていたのが目を覚ます。

戦技教導官の上着を脱いだだけのシャツとブルーのスカートと寝るには適さない服装だが、寝巻を持ち合わせる事が出来なかったのは状況から考えれば当然のことである。

気が付けば、目の前にはまだスヤスヤと眠るヴィヴィオ。

そしてヴィヴィオを挟むように一緒に眠っていた筈のフェイトは、今はいない。

空戦魔導師達で割り当てられた、周辺空域の哨戒任務に空へと上がっているんだと、なのははすぐに大よその見当がついていた。

なのはも昨日一度飛び、彼女やフェイトの他にもブルーインパクト隊員達も含め、クラナガンから撤退してきた防衛隊の空戦魔導師が幾つかのルートを見て回っている。

一方、今彼女がいる部屋。

厳密には部屋では無い。

それは戦技研究部から届いたという、イルマ達が持ち寄ってくれた魔法で展開式のテントだ。

この簡易テントには、ベッド等が付属しているため、寝床に困る事はなかった。

ヴィヴィオに布団をかけ直してあげた後、なのははテントをめくって外に出ると、水色の同じようなテントが、本部近くの広い外庭に沢山並んでいた。

それが、首都から撤退した後の自分たちに宛がわれた部屋。

他にも、その外庭の各所にはレーダーを備えた防空指揮車や通信車が各所に停まっていた。

ここが今の私たちの拠点なんだと、なのははその光景を見て改めて思った。

なのはが上を見上げると、行きかう救護部隊のヘリに交じって魔導師達の編隊が複数、縦横無尽に付近の上空を飛んでいた。

「おはよう、なのはさん。よく眠れたかしら？」

「セレスさん、おはようございます。はい・・・おかげ様で、ちよっと寝過ぎしちゃったくらいです」

「でも、頑張り屋の貴方には、それくらいが丁度良いわ」

フツツと笑みをこぼすセレスにちよっと皮肉っぽく言われ、なのはが思わず苦笑いを浮かべる。

そういえば、セレス以外のブルーインパクト隊員達が見当たらない。これまでだったら、だいたい彼女のそばにはイルマがいたような覚えしかないが・・・。

「あの、今セレスさんお一人なんですか？」

「ん？ ええ、まあそうなるわね。アルと妹のマリノは哨戒任務だし、ブラットはまだ仮眠中、ルノアは人手不足の応急救護の方に回ってる」

「ええと、イルマさん・・・いえトレノ隊長は？」

「ああ、イルマなら今・・・」

そう言っただけでセレスはそっと教会本部の建物がある方へと視線を向けた。

その教会本部では、隊長格や佐官クラスの間人々を集めた会議が開かれていた。

会議の内容は今後の聖王教会本部や協会騎士団と本局魔導師達の連携、そして兼ねてはベルカ自治領以外はほぼ占領されたミッドチルダを奪還するための行動等。

その会議には戦力を各世界から呼び寄せ、その中心となっているクロノまで別次元の艦から通信によって参加していた。

朝から続く会議もようやく佳境に入り、今ははやてがけが人や一般市民達の保護や受け入れ態勢について報告や提案をしている。

「……というわけで、今もまだ人手が足りない所です。もし、付近の住民の中で医療従事者がいれば、その人たちにも協力を仰ぎたいと考えています」

「そうですね。わかりました、それはこちらで手配をしましょう。では次に、現在の防空体制について第11航空隊のイルマ・トレノ一佐、お願いします」

会議を取りまとめているカリムの呼びかけを受け、全員の視線が集中する中イルマが立ち上がり説明を始める。

彼の担当はこの空域一帯の防空網の構築と、戦闘発生時の場合に備えての防衛ライン構築というように戦闘関連の事に集中している。

「……このようにレーダー車だけでは谷間に潜む敵を発見する事は至難ですから、常時定数の空戦魔導師を複数の経路で哨戒飛行を行わせて随時警戒に当たらせています。」

イルマがモニターの図を示して、カリムや他の高官達へ説明をしている。

ベルカ自治領の南部には観光スポットになるような山間部も多く、地面の起伏が激しい所はレーダーが届かない。

そこから侵入される事を防ぐため、上空には常時空戦魔導師に飛んでもらい、特にレーダーでは感知できない範囲を重点的に見回りを行ってもらっている。

「多い、ですね。そこまで前に出れば、もしここまで侵入された場合には……」

カリムがポツリと不安を口にする。
クロノを通じて何度か親交のあったイルマを信用していない訳ではない。

ただここが最終防衛線だというにも関わらず、イルマが提示した計画ではかなりの数の魔導師がこの教会本部を常時離れている事になっていた。

もしここが敵の侵入を許せば、すぐに陥落はしないにしてもかなりの損害が出る可能性は高かった。

しかしイルマはそんな彼女たちに、力強くある決意を伝えた。

「いえ、ご心配なく……ここを戦場にはさせません。敵は、この地に到達する前に全て叩きます！」

セレスとの別れ際、彼女はなのはには今日の午後に哨戒飛行が入ってますからねと言い残し、去って行った。

これから午後に向けてどうしようかとなのはが悩んでいた時だ、不意に「よう」と声をかけられてなのはが振り向く。

「ヴィータちゃん！ その……もう大丈夫なの？」

「当たり前だ。アタシらの体はそんなにヤワじゃねえ……それに、結構手加減してもらってたみたいだしな」

手加減という言葉に、二人は昨日のアルとヴィータのトラブルを思い出した。

結構手ひどくやられたように見えたが、本来は二人とも敵意は無いためお互いに無意識のうちに加減していたのだろう。

「昨日はその……悪かったよ。アタシ、頭に血が上り過ぎてた。」

「・・・ミッドがあんな事になって、多分混乱してたんだと思う」
「うん、そっか」

「でも勘違いしないでくれ！ アタシが言ってた事、別に100%悪かったわけじゃないだろ？ アイツが言ってた事も、正しいと言えば正しい、だけど・・・素直に、認められなくて」

「そう、だね・・・。確かにヴィータちゃんの言ってる事も分かるから、私は別に否定はしないよ。でも、なんだろうね・・・」
「アタシらとは、また別の考え方・・・っていうより、アタシらとはまた違う世界の考え方っていう感じだった」

「生きている世界が違う・・・ぼんやりとはあるが、ヴィータはイルマ達の考え方や言動などに、魔導師らしからぬような違和感を覚えていた。」

「それはなのも同じだ。確かにそれぞれの教導官達によって指導方針や教授のスタイルまで様々だ。」

「しかしブルーインパクトの教導方針は綺麗に二つの方向に秀でていた、いかなる場合でも極めて高い戦闘効率を目指し、なおかついかなる場合でも極めて高い生存率を求める。」

「それが絶対的に求められる場所と言ったら・・・」

「まるで、戦場の兵士みてえだ・・・ヘンだよな、アイツら戦技研究のための部隊だったんだろ？」

「ヴィータが呟いた小言が、北の地を吹く風がさらって空へと舞いあげて行った。」

その空では今、多数の魔導師が溪谷や川の流れる谷間をシャープな

軌跡を描いて飛びかっている。

そんな中に、白いマントを纏った魔導師フェイトの姿もあった。彼女はこの時間帯、南部の森と川とが入り混じる地域一体の探索を任されていた。

「執務官、こちらはクリアです」

「同じく、こちらも。今日も、空振りですかね・・・？」

「空振りが続いてくれたら逆にそっちの方が良いけどね。でも、帰還まで気は抜かないで」

「はっ！ 引き続き、周辺探索を続行します！」

高い実績のあるフェイトにやや緊張気味に答えた武装局員が、再びそれぞれの方向へと散って行く。

そしてフェイトも彼らを率いると同時に、自らも周辺に目だけでなく魔力や熱源の反応を探って周辺空域をくまなく探索する。

その時、彼女の相棒バルディッシュ・アサルトが何かを感じ取った。

” I sense reactions of the heat to come close . ”

(接近する複数の熱源を感知しました)

その言葉に緊張を覚えるフェイト。

「バルディッシュ、本当？ どこから？」

” These come from south . ” (南からです)

南、それはまさしく敵が居座るクラナガンの方向だ。

フェイトがその方向を振り返る、だが姿は見えない。

しかしバルディッシュは、熱源は彼女が視認できる距離にまで接近

していると告げていた。

誤作動ではない、増してやバルディッシュが嘘をつく筈も無い。だとしたら答えは一つ、光学迷彩が何かで見えていないだけ！

” They'll pass beneath us.”（私たちの真下を通り過ぎます）

「・・・っ！」

何も見えない、しかし何も見えない中でフェイト達の下を無数の何かが通り過ぎて行った。

音も気配も感じる、無いのは姿だけ。

迷っている暇などない、フェイトはバルディッシュ・アサルトを掲げるとその方向へと向けた。

同時に彼女の周囲に多数の金色の尖った弾体が生成される。

「プラズマ・ランサー！」

その何かが駆け抜けていった方向へ、フェイトが誘導射撃魔法プラズマランサーを放った。

その槍のような鋭利な弾体が突き刺さった先で、土煙を巻き上げる爆発を起こす。

その時だった、何も見えない筈の空气中に淀みのような物が出来たと思えば、次の瞬間には無機質な鋼鉄の動きまわる塊が多数出現した。

「見つけた、ガジェット！」

フェイトの攻撃を受けて光学迷彩を維持できなくなり、姿を消していたガジェットはついにその姿を現した。

数は25、そこまでは多くない。

だけどその微妙な多さが、フェイトにとっては逆に不安だった。彼女は飛行機型のガジェット？型と光学迷彩を発生させていた特殊円盤機型のガジェット？型を追尾しつつ、本部へと緊急の通信を入れた。

「こちら、南部第12ルートを哨戒中の執務官フェイト・T・ハラウン！ 当ルートにて、北上するガジェット？型と？型を発見！ 指示を乞います！」

フェイトの通信内容に、その場にいた者たちは再び戦いの始まりを予感し緊張を高めた。その彼女に対し、イルマは即座に返信をかけた。

「こちら本部。ハラウン執務官、数や詳細を！」
「数は全部で25。？型と？型の混成編隊で北上中！ 敵は光学迷彩のようなもので隠密に行動をしている模様です！」
「偵察には多いけど、我々への攻撃には少なすぎる。おそらく、他のルートでも隠れて動いているものが居る筈だ！ 君はその現場の戦力で力を合わせて迎撃にあたってくれ！」
「了解です！ 攻撃します！」

フェイトとの通信を終えると、イルマは他のルートを哨戒中だった部隊にも連絡を入れる。

「哨戒中の全部隊へ！ 視認探索から熱源探索に切り替えてください、ガジェットが隠れて接近している可能性があります！」

「りよ、了解です！」

「本部で駐留中の魔導師も、各所で発見の一報があり次第そちらに分散するように向かってください！」

イルマが通信を終えようとした時だ。

状況の発生で緊張の面持ちながら覚悟を決めたのはが通信に出る。

『トレノ隊長！ 私たちも！』

「ええ、貴方たちが頼りですから・・・」

『こちら、南西部第2ルート！ 北上するガジェット群を発見！
数は先程の一報より多いです！』

『南東第21ルート！ こちらでもガジェットを発見！ 数は・・・
40・・・いえ、もつとです！』

その時イルマ達の会話を割って入り、各地からも続々とガジェット
発見の一報が入り始めた。

「中央は薄く牽制し、外側両サイドから来るつもりか！」

『トレノ隊長！』

「ああ、君たちは二番目に報告のあった南西部第2ルートに向かっ
てくれ・・・ヴィータ三尉も、よろしく頼む！」

『ああ、分かってる！』

アレとコレは別だというような表情で、ヴィータもなのはに合わせ
てデバイスの起動とバリアジャケットの装着を済ませる。

そして二人はついこの間までのように、元機動六課のスターズ分隊
の隊長と副隊長として敵を討つため空へと舞い上がった。

『イルマー！』

防空司令の一翼を担っているから仕方ない事だが、通信が忙しい。
今度はこちらの副隊長セレスだ。

『南東部の方は、まだ戦力が足りないわ!』

「分かってる。そっちは自分たちで叩く!」

『分かったわ!』

「ただ、アルは南西に、君とルノアはここに残っていて欲しい」

『えっ?』

イルマが言った事に、思わず眉をひそめるセレス。

こんな状況なのに、前線へ私を出し惜しみするつもりなのかと、セレスは疑った。

「自分の読みだと、おそらく・・・いや確実にあの攻撃が来る!」

『あの攻撃・・・ってまさか!?!』

セレスの脳裏にクラナガン戦での海上から放たれて大爆発を起こした、あの長距離広域殲滅魔法が過った。

「フェルカーモルト・フリユーゲル。一回で大勢の魔導師達を葬った、クラナガンでのあの攻撃だ!」

するとセレスの表情は最初は驚き一色だったが、イルマの言葉を聞いて決意を秘めたような真剣な物になった。

「それじゃあ、私のレールキャノンモード・・・メサイアバレルのスタンダードシエル3で?」

『そうだ。フェルカーモルト・フリユーゲルが、地上に落ちる前に君の力で高高度で迎撃して欲しい。そうすれば、もう誰も落ちずに済む』

「うん。わかったわ!」

『ただし、一度に撃つのは最大4発まで・・・発動を許可するけど効率よく、くれぐれも体に過負荷のかかるような無茶だけはしない』

ように』

「了解よ。 それじゃ」

セレスは青基調のバリアジャケットを纏い、ツインブレード状の基本形態を取ったセイヴァーフを握りしめ教会本部の真上の空高くへと飛翔した。

そして程なくして、各所で砲撃やガジェットが放つレーザーが飛び交う戦闘が展開された。

聖なるベルカの地を守るための防衛戦・・・これ以上は譲れない想いが交錯する戦い。

「エクセリオン、バスターツ！」

なのはの威勢のいい掛け声とともに彼女に収束していたエネルギーが、桜色の光線となって地上を這うように進んでいたガジエツトを中心に薙ぎ払う。

「アイゼン！」

” E x p r o s i o n ! ”

続いてガシユツというカートリッジロードの快音と共に、ヴィータの眼前には鉄球のような無数の塊が出現する。

「シュワルベ・フリーゲン！」

ハンマー型のグラフ・アイゼンで力強く叩き飛ばし、猛スピードで突っ込んだ弾体はガジエツトの鋼鉄の機体を易々と撃ち抜いて爆

発を起こす。

何機かは外側に這うように進路を変えるが、狭い溪谷内なので高空のように急激な回避行動は出来なくなっていた。それはむしろ、なのは達によって好都合だった。

「逃げられると思うなよ！ これ以上は・・・！」

” R a k e t e n f o r m ! ”

ヴィータの心の想いを受けて呼応したグラ フ・アイゼンの形態が変化する。

前方に鋭く尖った楔のような先端、そして後部にはまるでジェット機のようなブースターを備えた形態へ。

「行かせるかよッ！」

” R a k e t e n h a m m e r ”

そしてその後部から噴射された魔力で、ヴィータは山吹色のエネルギーを体に巻きつけるように自らも回転しながら、急激にガジェットへとその距離を詰めていく。

追いつかれたガジェットに、それを回避する方法はなかった。

気合いの叫びをあげながら突撃したヴィータの強烈な一撃を受け、ガジェットは爆散した。

「はあ、つたく・・・しつこい奴らだ！」

「ヴィータちゃん！ 後ろ！」

なのはが何かに気付いてヴィータへと慌てて声をかけた。

振り向いたヴィータが見たのは、いつの間にか攻撃態勢に入っているガジェット？型。

恐らく第二波・・・光学迷彩を解き、円盤の下から出た銃口のよう

な物が、ヴィータのその小さな体に狙いを定めていた。撃たれる・・・そう直感したヴィータが咄嗟に障壁を張ろうとした時、上から何かが飛び込んできた。

” Split wave ”

上から放たれた鋭利な斬撃が、ヴィータに迫っていた円盤型ガジェットを綺麗に真つ二つの半円状に斬り捨て、即座に爆発を発生させた。

「お、お前・・・」

ヴィータが見上げた先に居たのは、相変わらず無表情のまま、魔力の残滓を吐き出す刀状のデバイス“マーヴェリック”を構えていたアルの姿だった。

「うぐっ・・・」

普通の彼女ならここで「ありがとな」の一言があるのだが、一昨日の一件があるため素直にそういうわけにはいかなかった。

するとアルは別に「礼には及ばない」とでも言うような表情のまま、彼女に背を向けてまた次の波状攻撃の迎撃へと向かう。

「あ、ま、待てよ!」

「・・・なんだ? また突っかかって来るつもりか?」

「ぐうっ・・・そ、そうじゃねえよ! その・・・一昨日は、本当に悪かったよ。いえ・・・申し訳ありませんでした、ボーイング三佐・・・それに、その後の処遇も」

「分かれれば別に良い。それに我々が君への処罰を不問としたのは、少し時間がたてば必ず分かってくれろと考えていたからだ。他意は

無い」

うっわ、イルマとかいう隊長も言ってたように本当に無表情な奴・
。
。。
ヴィータは、アルの頭に機械でも入っているんじゃないかと変な想
像を試してみた。

「話は終わったな？ それじゃ、防空戦闘に集中を……」

「ま、待ってくれ！ どうしてもわかんねーんだ……変な感情を
持ち込むなって、それってまるで命令を受けて戦闘をするだけのガ
ジェットのようになれって言ってるような物じゃねえのか？」

「ヴィータ三尉……答えは、その逆だ。決して機械のように
なるなと……。だから余計な感情を持ち込むなど、あの時お前を叱
責した」

どういふ事だよと、ヴィータは思わず眉をひそめる。

するとヴィータがその矛盾を問いただそうとした時に、先行して飛
行するアルの方が先に口を開いた。

「俺も別に、戦場に感情を持ち込む事は否定はしない。守るべき
ものがあるため、それらを守りたいと願って戦いに臨む事は、決し
て悪い事じゃない」

「それじゃあ、あの時あんな事を言っただのは何でだよ？」

「ヴィータ三尉……戦いの場には、唯一決して持ち込んではいけ
ない感情がある。それは……憎しみだ」

「あッ……！」

ヴィータは強烈なショックを受けて表情を変えた。

「あの時、首都の陥落や大勢の仲間がやられ、お前はパトリオット・

フォースに対して、激しい憎悪を抱いていた」

「……あ、ああ、そうだったよ」

「その感情を抱く事は心がある者ならば仕方の無い事だ。だが、そんな感情を戦場へと持ち込めば、その感情は自身を殺しと破壊の兵器と変え、そして最後にはその身を滅ぼす」

力なく答えたヴィータの表情は、まさに反省一色だった。

しかしそんな彼女に、アルは今度は叱責とは別の事を語り始める。

「だが、要はそれにさえ気を付けていれば良い。俺も言葉が足りなかったが、感情を否定しているわけじゃない……」

そう言っただけでヴィータを構えるアル、そしてヴィータは自分たちの周りにガジェットが広がっているのに気付く。

「データ上ではあるが、俺はお前の騎士としての能力を信頼している。これは、戦場に持ち込むべき感情だ」

アルがこれまで滅多に見せなかったような、微笑をその顔に浮かべた。

口は語らずともその顔が言っていた、共にがんばろう、と。

「へへッ、最初からそう言ってくれば良かったんだよ。まったく、めんど臭いな……ボーイング三等空佐殿は！」

皮肉を込めたような言葉を言い放ち、背を預けるヴィータだがその表情には力強い戦友を持ったという笑みがあった。

「アル、と……呼ぶと良い」

「そうか、ならアタシだってヴィータって呼びな！ 行くぞッ！」

二人は一斉にそれぞれの方向へと飛び出し、斬撃や打撃で次々とガジェットを叩き潰して行く。

AM11:22 クラナガン海上上空、リベラトリックス艦内

クラナガンの海上上空に浮かぶ巨大艦リベラトリックス。

動力炉から発生させた反重力によって浮きあがり、まるでその様子は城下町の人々達を見下ろす天守閣のようだ。

その高さは地上本部のタワーの高さよりも高く、おかげでここからでもベルカの地で時折上がり始めた煙や閃光が映像を拡大すれば見える。

市街地を一望できる艦内の間にて、銀髪の男ツエーザーが転送されてくる映像でその様子を見つめていた。

「ベルカめ、徹底抗戦するつもりか……。まあ、それくらい予想していたがな……。いやむしろ、騎士の誓いとやらが、脅し程度で屈する程軟弱な物ではないと再確認できて良かった」

ツエーザーはガジェットを叩き落とすのはやフェイト、空に上がったブルーインパクトの隊員達に落とされるガジェットの映像を見てもなお、嘲笑を絶やさない。

何か別の計画や策があるのか……。そしてそれを肯定するかのよう
に、彼の隣にバリアジャケットを纏い臨戦態勢のエミールの姿があった。

『初めて、宜しいのですか？』

「ああ。この間のように、君の力で我らが願いを阻むものを、薙

ぎ払え」

『はい、では撃ちます・・・そして今度こそ、全てを終わりに』

エミールが居るのは、リベラトリックスと海面の中間の上空だった。

「リンドブルム、フェルカーモルト・フリューゲル・・・発射準備」
”Volkermord Flugel”

彼女のグローブ型デバイスリンドブルムに光がとまり、エミールがあの上に発動させた長距離型の広域殲滅射撃魔法、フェルカーモルト・フリューゲル発動のパワーを集めていく。

「来た！ 来ました！」

指揮車に乗っていたシャーリーが、クラナガンの上空で異質な魔力の発生を確認し、思わず叫んだ。

『来た？ フェルカーモルト・フリューゲルか！？』

「はい！ エネルギー波形も、そして確認された術者の姿も、先のクラナガンでの広域攻撃と同様です！ 物理破壊エネルギー発生型、ランクはSS！」

その声に、前線に出ていたなのは達の緊張が高まる。

イルマの問いかけにも、シャーリーは一昨日の攻撃とデータを照らし合わせるが、その答えは残念ながらイエスだ。

「危険です！ 今すぐ退避を！」

『いや、防空戦闘はこのまま続行させる。どの道、谷で自由に動けない分、逃げ場が無い』

「そんなッ！ それじゃあ、またあんな事に……！！」

シャーリーがクラナガンでの戦闘を思い起こし、思わずイルマに叫びに近い抗議をする。

『上に居る彼女が、止めてくれる……』
「彼女？」

その時シャーリーは強力な味方の反応が、聖王教会本部の上空にあるのに気が付いた。

『そう。こんどこそ、守ってみせるから……安心して、シャーリーさん』

「セ、セレスさん……守るって、あっ!?!」

その時、シャリオは笑顔で自身に言いかけてきたセレスのバリアジヤケットの色が変わって行くのに気付いた。

これまでの青基調の色から、シルバーと赤の二色を基調とした色へと。

そしてなのはのアグレッサモードのような膝上のタイトスカートに二ソックスのような形状から、やや先鋭的な形状のスカート、そして背には光り輝く八つの翼が発生する。

”Barrier jacket IMPACT MODE, activation complete.” (防護服、インパクトモード展開完了)

「うん。久しぶりだね……でも、頑張ろうセイヴァーF」

”Roger that. Rail-Cannon form,

set up.”（了解。 レールキャノンフォーム、起動します）
彼女の呼びかけに応え、ツインブレード状だったセイヴァーフの形
状も変化する。

セレスを中心に空中でミッドチルダ式魔法特有の円形に正方形の魔法陣が展開し、その大きさは直径が100m以上はありそうだ。

「我が手にするは、大いなる天の裁き。 我が放つは、断罪の光なり。 来たれ我が元に、メサイアバレル！」

”Rail-Cannon Messiah-Barrel activate.”（レールキャノン、メサイアバレルを起動します）
するとバラバラに分散したセイヴァーフの粒子が、魔法陣の周囲に均等間隔に並び徐々に何かの形を作って行く。
それは白銀の砲身を持つ真上を向いた大型の砲塔、それが彼女の周囲八方向に設置された。

「ふう、ここまででは上手く行った。 ルノア、魔力リネージュでの支援、お願いね」

「了解です。 ブルー5、支援ポジションに移動します」

悲惨な結果を生み出す力に対し、彼女が手にしているのは守りの力。大事な人達を守るための、決意と共にある力だった。

最初の私は、ただの器だった。

大きすぎる力を押し込め、制御するだけのただの器・・・それが私だった。

産まれた時には周りにいた皆は、いつも私に優しかった・・・必要とされているんだと感じて、親がいなくて孤独だった私はそれだけで嬉しかった。

でも10年前のある日、私は知った。

戦う事に生を見出していた彼らが、本当に必要としていたのは私じゃない・・・私の力だった。

それに気付いた時は、もう遅かった・・・もうどうしようもないと思った。

でもそんな事はないと、あの声が答えてくれた。

それが無かったら、今の私は無かった・・・そう思う。

戦いは終わった。

でも私は管理局の魔導師達を、大勢殺して・・・この手は、おびただしい血でいっぱい。

私はきつと、管理局に殺されちゃうよね、管理局は絶対に守ってくれないよね・・・？

だって私、いっぱい殺しちゃったんだよ！

そんな私を、助けてくれるわけなんて無いよ！

恐る恐る私は、私を解き放ってくれた彼にそう尋ねた。

すると、彼は答えた。

「確かに管理局の対応は、分からない。でも管理局に死刑は無いけど、それに等しい無期限留置にはなりかねない。だけど、いや、

だから・・・僕が守ってやる！」

ベルカ自治領襲撃、二時間前・・・

『それは、本当か？』

「ええ、そうですよ。 クロノ先輩」

聖王教会本部に停まっている通信車の中で通信を行っているのはイルマ、そしてその通信先に居るのはクロノと聖王教会の騎士カリムだった。

『禁術フェルカーモルト・フリーゲル、あの攻撃がまた来るとい
う君の予測もそうだが、あれを防ぐ方法があるという方も・・・そ
もそも、あの攻撃は一体何だ？』

『気になって、私も調べたんですが・・・あの攻撃の前後で発生し
た魔力波などから、あれが古代ベルカ式と言うのは分かっています。
ですが、こちらにはそれらしい資料が一切無く・・・』

「既に昨日、戦技研究部の方で調べはつきました。 これを見てく
ださい・・・」

イルマがパネルを操作すると一昨日の戦闘でエミールが放ったフェ
ルカーモルト・フリーゲルの一部始終が、データとして表示され
た。

「・・・爆発の瞬間、周囲一帯に大量のガンマ線と（パイ）中間
子の放出、そして瞬く間に周囲を飲み込む膨大なエネルギー放射が
確認されています」

『ガンマ線に 中間子、そして膨大なエネルギー放射だって・・・まさか!?!』

「はい。おそらく、この爆発は反物質と物質の衝突による対消滅反応です。そしてフェルカーモルト・フリーゲルの正体は、対消滅反応を意図的に起こす反物質を生成して放つ、いわば反物質砲」
『反物質・・・ですか?』

クロノは正体に気付いたようだが、カリムだけは内容の意味が理解できなかったためかキョトンとしている。

『す、すみません・・・私、理科系ではないものですから、反物質とは一体何ですか?』

「いえいえこちらこそ、説明足らずですみません。まあ反物質というのは、通常の物質を構成する素粒子という物体にある電荷が、通常とは正反対の真逆で構成された物質です」

『威力で言うならば、たった1kg・・・いや、それよりも少量の反物質が我々の世界の物質に接触すれば・・・一瞬でミッドくらの世界を滅すほどの大爆発を起こす。禁術と烙印を押されたのも仕方ないな』

「い、1kg足らずで・・・ミッドが滅亡?」

クロノの補足説明にカリムが緊張を覚える。

そしてその説明をしていたクロノも、まさかフェルカーモルト・フリーゲルがそんな代物だったなんて、と思わず言葉を漏らした。しかしそこで、彼は本題から外れている事によやく気付く。

『ああ、そうだった・・・イルマ、君はそのフェルカーモルト・フリーゲルの正体を知って尚、それを防ぐ方法があると言ったな?』

「はい。手立ては、あります。一人の人間に、少し負担をかける事

になりますか……」

『教えてくれ。その方法とは何だ？』

「はい。要は、あの誘導性能のある攻撃は、狙った場所で爆発してこそ最大の威力を発揮します。つまり、何も無い所で爆発させてしまえば……被害は皆無です」

『爆発させる、つまり対消滅を起こさせるという事なんだろうが……それは一体どうやってだ？』

まさか、直接打撃なワケは無いだろう。

しかし、なのはスターライトブレイカーや長距離型のデイバインバスター・エクステンションでも、安全距離からでは届かない。

「我が部隊、ブルーインパクトのナンバー2、セレス・クラレンス二佐。彼女とセイヴァーフのフルドライブ長距離射撃モード、レールキャノンモードで迎撃させます」

『セレスさん？ 彼女は確か、中近距離メインの空戦魔導師だったのでは？』

「はい。ですが、アレが彼女の本領と言いますか……彼女の持つ真の力であり、同時に彼女がどんな事をしてでも消し去りたいくらの、辛い過去です」

イルマは、彼女の過去を知っていた。

だがこの事実を、イルマ達以外の管理局の中では秘匿事項で殆ど知る者はいない。

『君の事やアルの事は先輩として、昔からそれなりに知っていた。だけど、そのクラレンス副隊長の事は何も知らないんだ……良ければで良い、教えてくれないか？』

クロノからの申し出に、流星の先輩からの頼みごととも言えどもイルマ

は悩んだ。

しかしどの道フェルカーモルト・フリーユージェルの攻撃があれば、その迎撃として彼女の力を使う事になる。

そうなれば、本局の上層部にも疑問に思ったり・・・最悪、敵視されかねない。

その時、イルマの脳裏にあるプランが浮かび上がった。

「それではクロノ先輩、いえクロノ・ハラウン提督・・・一つ、条件があります」

『条件？ とりあえず、聞かせてくれ』

「その条件とは、彼女が迎撃として行う攻撃があります。その詳細を伝えますが提督はその内容を知った後、その内容を管理局の上層部の高官や、統幕議会の方々へ伝えてなおかつ必ず説得してください」

『説得、だつて？』

「はい。それをこの場で確約していただけなのであれば、例えばハラウン提督と言えども、お話しするわけにはいきません」

『むう、なかなか強気に出たな・・・イルマ』

クロノが腕を組んで頭を捻って考える。

さすがに言いすぎたかなと、イルマは内心ドキドキだった。

しかしそんな彼をフォローしたのが、カリムだ。

その内容を聞いていた彼女は、こう言った・・・。

『でも、それだけ・・・貴方が守りたい人ってことよね、イルマさん？』

「うっ・・・ま、まあ・・・それは、これまで隊員が一人も死なずにいる事が、我が部隊の最大の誇りですから！」

そう返事をするイルマの声のトーンがおかしかった。

あれ、でもこれって返事になって無くないか・・・？
とイルマが考えていると、クロノが何かを割り切ったような表情を
見せた。

『わかった。それじゃあ、どう説得するんだ？』

「あ、はい。 たった一つの事を了承してくれば、それで良いん
です。 それは・・・」

イルマがそれを言いかけて、一瞬下を向く。

この攻撃は、彼女を間違はなく人目につかせる事になる。

そうすれば、また以前のような悲劇の引き金にもなりかねない。
だが今は・・・今は先輩を、クロノ提督を信じよう！

「それは、セレス・クラレンス二等空佐を・・・半永久的に、自分
の指揮下に置くと言うものです」

新暦76年5月17日 AM11:25 ミッドチルダ南部、都市
区画内公園

「ねえ、悪い事は言わないわ。 止めておきなさい！」

「悪いが、俺たちは管理局員だ。 民間人は逃げても良いが、俺た
ちはこれ以上アイツらの暴挙を許すわけにわいかねえ」

「ここにパトリオットフォースの奴らが迫ってくる。 空で迎撃で
きるの、もう俺たちくらいしか残って無いからな・・・」

「民間人は、下がっていてください」

一人の民間人女性が、管理局の制服を着た三人の男たちに必死に訴えかけていた。

長い黒髪にイエローの長いリボンが特徴的な女性だ。

彼女たちの周りにはパトリオットフォースの正規軍が管理局の施設を破壊してくると知り、逃げ惑う民間人で溢れかえっている。

しかしそんな彼女の訴えに耳を貸さず、彼らは何度もそういうワケには行かないと頑として聞き入れない。

そして彼らは彼女の制止を振り切り、バリアジャケットを纏うと空へと飛んで行ってしまふ。

「そんなワケだ。アンタはどっかのシエルターにでも避難しておいてくれ！」

「待つて！ 死ぬ気！？」

「・・・例え死ぬとしても、守り通したい物があるからな。行くぞ！」

「おっつ！」

全く・・・最近の若い魔導師は、どうも血気が盛んというか、後先考えずというか・・・。

一瞬、もう関わるのはやめようかとも彼女は考えたが、数秒もしないうちに自分にそれは出来ないと言う事に気付く。

そう思いつつ、彼女はポケットから一枚のカードのような物を取り出す。

「ハア・・・約束を破る事になるかもしれないけど、ゴメンね」

そうポツリと呟いた後、彼女を青白い光が包んだ。

同時刻、聖王教会本部上空・・・

「砲台メサイアバレル、全8基準備完了！」

” Launch units Messiah - Barrel turret , complete ”

セレスの周囲に、彼女の身の丈の数十倍もある巨大な砲塔が全部で8基形成された。

それは全て、セイヴァーフが形を変えた物だった。

陽光を受けて煌めく砲身、まるで巨大な戦艦に搭載する大砲のようだ。

そして底面には彼女と同じ色の魔力光が展開しており、その巨体を支えている。

しかしこれだけのものになると、形態を変えるだけでも息が上がりそうになるほどキツイ。

この形態を維持するためには、セイヴァーフは彼女の体から絶えず魔力を供給されなければならぬからだ。

その証拠に、セレスはまだ攻撃をしていないにもかかわらず、やや肩で息をしているようだった。

「セレスさん！ 大丈夫ですか!？」

「平気よ。これくらいでダウンするようじゃ、前線で戦っているみんなに顔向け出来ないわ」

彼女の護衛兼セレスへの魔力供給補助のためにいるルノアが、きつそうにするセレスに思わず近付いて尋ねた。

「し、しかし・・・」

「大変よ！ フェルカーモルト・フリーユゲルが放たれた、こつちへ来るわ！」

開いた通信にはセリーナが、慌ててあのフェルカーモルト・フリーユゲルの到来を告げた。

「高高度に浮上する！ そしてみんなの所に落とすつもりね！ 着弾予想まで、あと5分を切ったわ！」

「そのようだな。セレス、昔・・・僕は君を守ると言った。だが今だけは、君が僕たちを守ってくれ！」

「イルマ・・・うん、任せて！ エクスプロージョンシリンダー、スタンダードシェル3、装填！」

” Standard - shell3 initiate loading!”

イルマの呼びかけにセレスは力強く答え、右腕を振り上げて砲台を稼働させる。

そしてガコンという音と共に、砲身の根元の金色のカバーのような部分が後退して、ポツカリと何かを入れるための穴をあける。

映像で見る限りでは、本当にそこに人が入れそうなくらい巨大だ。そこにセレスが出現させたのは、大きさが人の胴回りくらいある巨大な円柱状の物体。

この形を見て、これが何かを理解した者は多かった。

「あ、アレってまさか！？ カートリッジですか！？」

「ええ。まあ効果は同じだから、カートリッジといえばカートリッジですが・・・一応私たちは、スタンダードシェルと呼んでいきます」

シャリオが映像に出てきた4発のスタンダードシエルを見て、思わず驚いて同じ指揮通信車に乗り合わせているセリーナに尋ねる。彼女はその事を知っていたらしく、驚きの表情を浮かべるシャリオに説明をする。

「その中でも、空中で炸裂して広範囲に大爆発を引き起こすのが、スタンダードシエルのナンバー3！ その効果範囲は、一発あたり最低でも直径3km」

「さ、3kmの大爆発！？」

「その上、セレスさんの巨大砲塔メサイアバレルと組み合わせれば、最大射程は半径およそ1万2千キロ。秒速12kmまで加速した砲弾は、高まった運動エネルギーと合わさって理論上は大気圏外の艦船だって、一撃でバラバラになるわ」

それを聞いて、シャリオは最早言葉が出なかった。

宇宙空間の艦船も一撃で、おまけにもし彼女の砲撃から逃げないといけないならば、彼女から最低でも1万2千キロも離れる必要があるのだ。

しかしもしそうならば、もし彼女が地上の守りとしてミッドにいるのなら、これほど心強いガードはいない。

「でもその力のおかげで、彼女はホントに辛い思いをしていたのよ・

・・・」

「えっ？ そ、そうだったんですか・・・すみません」

「良いのよ。それが人なんですから・・・さて、いよいよ彼女が撃つわよ」

「はい、こちらも・・・フェルカーモルト・フリーユージェル着弾予想時刻まで、あと3分12秒です！」

セリーナやシャリオが見守る中、画面に映るセレスのメサイアバレ

ルに青白いエネルギーが収束していく。

発射の瞬間が近い……イルマはセレスの射線予定や迎撃による爆発で発生した爆風で、被害が出ないように一時魔導師達を避難させる。

「最前線に出ている魔導師、第二ラインまで後退しましたね？ それから、なるべく低空へ！ こちらの迎撃弾の射線上から半径100m以内は危険だ！」

『は、はい！』

イルマは遠くの上空で見える光を見つめる。

あれがセレスだ……そして、自分が守ると約束した人なんだ。

レヴィンで地を這うように迫る敵ガジェットを撃墜しながら、イルマはふとそう思った。

向こう側の上空に、時おり光る無数の何かが見える。

アレが迎撃すべき物なのだと、セレスは意識をそれに集中させる。

”Thirty-seconds to launch. The final terminal countdown starts.” (発射30秒前です。発射に向けた最終秒読みが開始されました)

「狙いは良い？ 4発で、敵の攻撃を全弾誘爆させる場所に撃つよ」
”Roger that. Adjust four turret's sights. Twenty-seconds to launch.” (了解です。四基の砲塔の照準を設定。発射二十秒前です)

前の方向に出た砲塔四つが、ゆっくりと倒れてその砲口を砲弾を撃

ち込むべき場所へと向ける。

前の4発は、もうエネルギーの収束は完了した。

発射した弾が通るルート₃の安全確保も照準も定まり、安全装置が解除された。

後は発射可能になる0秒に、その砲台に対して「撃て」と命ずるだけ。

” Safety-lock canceled . five . . .
four . . . three . . . two . . . one . . . ” (安全装置解除。 5 . . . 4 . . . 3 . . . 2 . . . 1 . . .)

「発射！」

彼女がそうセイヴァーフに命じ、右手を振り下ろした瞬間 . . . 閃光と爆音、そして衝撃波と共に光り輝く彼女の渾身の4発が放たれた。

それぞれが、4つの軌跡とその周囲の大气に衝撃波の歪みを作りながら超高速で飛んでいく。

そしてそれは、あっという間だった。

その光景になのはやフェイト、はやて、そしてイルマ達も見とれていた先 . . .

フェルカーモルト・フリーユゲルが迫ってくる先の上空へ、セレスのスタンダードシエル₃が到達する。

次の瞬間 . . .

青白い閃光が広がり、続いてフェルカーモルト・フリーユゲルと衝突して大爆発を引き起こす。

まるで空間が歪んでいるように、高空にうかんでいた雲をぐにやりと歪めては消し去る。

その十数秒後、猛烈な爆風が地響きと共に魔導師達に襲いかかる。

幸い障壁を張っていたため彼らは無事だ。

セレスのメサイアバレルの砲撃と、エミールのフェルカーモルト・フリーユゲルの対消滅反応が起こした大爆発だ。

迎撃したのが、高空であったから被害は皆無で済んだが、もちろんそれはイルマは狙ったの事だった。

谷間が多いベルカ自治領での地形では、フェルカーモルト・フリーユゲルで魔導師達や施設をピンポイントに狙うには一度高空に上昇させる必要があった。

そこをイルマはセレスに狙い撃ちさせて、先に爆発させることで被害を防いだのだ。

『フェルカーモルト・フリーユゲル、全弾迎撃されました！ そんなバカな・・・!?!?』

「い、今のは一体何だ!?!?」

『わかりません！ 対消滅反応の直前に、高エネルギー体が秒速12kmで接近して衝突・・・』

初めてかもしれない。

そう思えるくらいに、ツエーザーは身を乗り出して艦橋や地上本部の司令へ、フェルカーモルト・フリーユゲルを迎撃した攻撃について尋ねた。

しかし今の攻撃は艦橋も地上本部指令室とも、もちろんツエーザーにさえ予測不可能だった。

『艦載砲!? いえ、それ以上の威力です!』

『現在、攻撃を分析中ですが・・・該当する魔法はありません。』

「馬鹿を言うな! 現に攻撃があったんだ・・・無い筈は。いや・

・・・管理局が把握していないだけか?」

『ローア一佐、フェルカーモルト・フリーユージェル第二波を発射！
着弾まであと5分53秒！』

その時、今度こそはとエミールがフェルカーモルト・フリーユージェルの第二弾を発射した。

オレンジの巨大な光球体が、数十個に分散して再び聖なる地へと向かって飛んでいく。

まぐれでは無い筈だ・・・少なくとも、全弾を迎撃した事実がツェーザーにはそう告げていた。

あの攻撃で抵抗力を喪失した者たちに、攻撃を加えない条件として“あのロストロギア”を差し出せと要求する予定が、完全に狂ったかもしれない。

歯がみしたくなるような衝動を抑え、ツェーザーは再びモニターに表示される戦闘の様子を確認する。

あれは高町なのはの攻撃では無い、フェイトでも、歩くロストロギアとも言われる八神はやての長距離攻撃でも、あんな距離までは届かない。

こちらのアウトレンジ攻撃であるフェルカーモルト・フリーユージェルを更に上回るアウトレンジのアウトレンジ攻撃。

まさか、あのロストロギアを確保した表向き本局教導隊所属のあの部隊か！？

モニターを確認するツェーザー、その時彼はある事実気付いた。

「・・・居ない。 奴らは6人だった筈だ、あと一人はどこへ？」

『少将！ 敵長距離攻撃の発射地点を特定しました！ 聖王教会本部の上空、今映像に出します！』

映像に出たのは、見ても分かるほど高いエネルギーをその体と周囲の砲塔に集めるセレスの姿。

以前に見たデータから彼女がブルーインパクトのナンバー2という事は知っていたが、彼女の今の姿は彼が知るものとは大よそ異なっていた。

だが同時に理解した、彼女が先程の攻撃を防ぐだけの力を持っているのだと。

「フン、なかなか興味が湧いた。シュミット、聞こえているか？」

『はい。感度バッチリ！』

「敵の長距離攻撃を止めよ。そして、できればあの空飛ぶ砲台を我が元に連れて来い」

『了解！ 我が隊に不可能なし！ 行くぞ！ 全分隊、続け！』

『はっ！』

ツエーザーの眼下、つまりリベラトリックスの真下を出撃した漆黒の魔導師達が通過して行く。

シュミット率いるパトリオットフォースのエース部隊、ゲメツツエル隊の出番だ。

彼らは低空を音速以上の速度で駆け抜けていく。

その様子はさながら、獲物をハントにいく肉食鳥獣のようだった。

その頃、彼らの出撃を知らないままセレスは迎撃を続けていた。

迎撃が成功するたび、地上の魔導師達からは歓声上がる。

” Load cartridge , Variable bar
ret ”

「シュートッ！」

その勢いに乗り、ティアナが放った誘導弾は無数のガジェットを縫

うように貫通して破壊、中央から攻めてくるガジェット群への彼女たちの活躍が侵攻を食い止めていた。

少し前ではスバルが対地攻撃を回避しながら、隙を見せたガジェットに一撃必殺の拳を叩きこむ。

スバルの一撃は重いが、その分周囲に対しての隙が多くなる。

そして彼女の後方へと円盤型のガジェット？型がトリッキーな機動で回り込むが、それは絶えず動向を察知していたティアナの銃撃に撃ち落とされる。

「こっちは味方の数も少ないけど、敵の数も少ないからなんとかやっつけていけそう！ スバル、まだ大丈夫？」

「うん平気！ ティアこそ、フェイクシルエットの使いすぎには注意してよ！」

二人が共に声を掛け合った時、彼女たちは真上から異様な気配が迫ってくるのを感じた。

上を見上げるよりも早く、第六感が鳴らす危険信号に従って二人は飛びのく。

次の瞬間、黒い影が飛び込んだと思ったら、そこへ地面を掘り起こすような衝撃が炸裂する。

思わず二人が身構えると、砂煙の中から一人の魔導師の姿。

手には所々に妙な紋様のある剣型のデバイス、おそらくシグナムのレヴァンティンと同系統のアームデバイスだ。

「・・・外したか」

「ア、アンタは一体誰！？ アンタもパトリオットフォースの魔導師？」

抑揚の無い声と共に姿を現した長身の男性に、ティアナはクロスミ

ラージユの銃口を向け厳しい口調で尋ねる。

「敵だ・・・それ以外に何か？」

憎しみや怨恨から来る憎悪や殺意では無い、これは純粋な敵意。

剣の切先とともにそれを向けられ、二人は思わず身構える。

その長身のすらっとした体からは、二人がこれまでに感じえなかった程の殺気が伝わってくる。

これはマズイ、というかヤバイ！

二人だろうが全然油断できないと、二人の考えはここでも一致する。

同じ頃、フェイトがガジェット掃討のため狭い空中を機敏に動きまわる。

かれこれももう何十分動いただろうか・・・二十分？三十分？・・・いや、もったかもしれない。

しかし彼女の奮戦のおかげで、彼女が防衛するルートの波状攻撃は徐々に弱まってきた。

「あれが最後の一機、いくよバルディッシュ！」

” Yes , s i r . ”

狙いを定めた彼女と、ハーケンフォームとなったバルディッシュが繰り出す黄金の斬撃が回転しながら飛んでいく。

命中する・・・その付近に居た魔導師達が確信したその時、フェイトが急迫する何かを感じ取り思わず横へ避ける。

間一髪、彼女を何者が放った鋭い斬撃を掠めるように通過し、それは彼女が追っていたガジェットを真っ二つに切り裂いた。

味方では無い・・・その攻撃がガジェットを倒したにも関わらず、

フェイトは直前に感じた異様な殺気でその相手が味方では無い事を察した。

掠ったおかげで白いマントの肩の部分にはつつすらと血がにじんでいるが、フェイトはそんな事を気にすることなくその攻撃が飛んできた方向を振り返って見据える。

「ガジェットをやっちゃったね、ハルバード。でも良いよね、100機くらい無くなっても、別にあんな鉄屑どうでも良い」

” Yes , ma'am . ”

そこに居たのは、スバル達と同年くらいの長い銀髪をもつ少女、纏っているのは黒と青が入り混じるバリアジャケット。

その手には青白い光刃をもつ両端刃のデバイスを握り締めている。

「あ、あなたは・・・？」

「私？ 私はパトリオットフォース、第2魔導師大隊ゲムツェルのウンディーネ分隊長、アルネア・ヴェーラ。そして貴方の・・・」

” A x e f o r m ”

「なッ!？」

ハルバードという彼女のデバイスの形態が、両端刃から先端に膨らむような両刃斧状の形状になったと思えば、目で追えないくらいの速さでアルネアはフェイトの背後に回り込んだ。

「・・・敵よ!」

「くッ!」

” T h u n d e r a r m ”

バルディッシュの判断で左手の籠手に集中させた電撃の壁が、アル

ネアの背後からの一撃からフェイトを守る。

バリバリと電撃が辺りに進む中、防がれたにも関わらず未だに悠然さを浮かべたままのアルネアが、電撃を受けないうちに後方へと飛びのいた。

（今の一撃・・・あんなに速かったのに、重い！）

アルネアの攻撃を受けて毒づくフェイト。

攻撃を防いだ彼女の籠手に、無数の亀裂が入っていた。

決して油断が出来ないどころか、速度は速い上に攻撃の一発の重さが尋常じゃない。

（あの攻撃の直撃は致命傷になりかねない。しばらく回避に専念しながら、隙を見て一撃を叩きこむ！）

フェイトはバルディッシュを握り締め、ガジェットの代わりに現れたアルネアの動きに意識を集中した。

同時刻、ミッドチルダ南部・・・

ここにもまた、黒衣の魔導師達が幾つもの編隊を作って南下していた。

彼らの目的は、南部に僅かに存在するという抵抗勢力の掃討。

本局が本格的に攻勢に出る前に、少しでも抵抗勢力を各個撃破しておくに越した事はない。

相手はAAランクにも満たない魔導師達が集まる、彼らにとっては烏合の衆。

さっさと終わらせて帰ろうと、彼らの誰もが思っていた時、何人が前方の彼方から接近する複数の人影に気付いた。空を飛んでいる事から、魔導師か……？

「見つけた。パトリオットフォーエスだ！」

「例えこの身がどうなるうとも、街を守って死ねるなら本望！ 飛び込むぞ、備えろ！」

先刻、街から飛び出した魔導師三人組だ。

彼らは接近を気付かれ迎撃態勢を構えるパトリオットフォーエスの正面から飛び込もうとしている。

「前方に空戦魔導師だ。反応から魔法ランクの推定はB程度……敵か？」

「おいおい、Bランク三人でこの大隊とやりあおうなんて思う魔導師がいるのか？ こっちにはSランクが5人もいるっていうのに？」

「あいつら、コースを変えないぞ……真っすぐ向かってくる」

一方のパトリオットフォーエスの魔導師達は、その光景を怪訝な目で見据える。

それに、敵対するならばこれで油断しない方が逆におかしい。

百歩以上譲って、相手がSランクだとしても同レベルの魔導師が5人以上も居るのならば余裕も生まれる。

増してや接近してくるのは、Bランク。

Sランクからは数段階下の魔導師のようにも見える、そして拳句に3人。

徐々に両者の距離が迫る。

南部の市街地を守るために飛び出した彼らの間にも、緊張が走る。その時、彼らは後方に何かが居るのを感じた。それも自分たちからそんなに離れていない空中を、自分たちと同じように飛んでいる。

「て、敵!？」

と一人が敵か味方かを判別しようと振り返った時と同じくして、三人にはその後方から強力な魔力誘導弾が命中。

思わぬ奇襲を食らい、オマケにノーガードだったため三人は力なく落下していく。

攻撃を加えたのは、彼らの後方についてのか居た女性魔導師だ。青とグレー基調のバリアジャケットに、水色の髪には青いリボンを巻きつけている。

そして彼女は撃墜した三人に、落下の衝撃を和らげる魔法を施すと、接近中のパトリオットフォースの方を見上げた。

『何者かは知らんが、我々の行動を妨害しようとしていた者たちの排除、感謝する』

私がアンタ達に協力？

ああ、きつとさっきの分からず屋三人を落つことした事を、そう勘違いしてるのね。

そんな風に彼らは思っているのだろうと、事実は異なるという真実が優越感とはまた違う妙な気分には彼女は浸っていた。

また、とうに引退した筈の自分が出ないといけないという事実が、同時に残念でもあった。

それでも私がやりたい事は今は一つ。

これ以上、必要最小限の犠牲というお題目で殺される罪もない人々を、増やさない事。

少なくともこのミッドチルダ南部では……。

「馬鹿ね。あの三人を撃墜したのは、無駄死にを防ぐため。貴方たちに協力した覚えはないわ」 貴

『何？ ならば、我々の邪魔をする気か？ 貴様、何者だ？』

「そうね……。まあ、ブルーリボンって名乗っておくわ」

そう言っつて説明は手短かに切り上げ、彼女は圧倒的多数の敵の中へと飛び込んでいく。

彼女の両手にはピストル型のデバイス。

確かに戦える力はあるが、だから一体なんだと言っつのだらう……。一見、無茶とも思える戦いが、ミッド南部の緑の大地の上空で起ころうとしていた。

そして誰もが予想外の結果が、リベラトリックスにいるツエーザーの元に届くのは、そう遠くはなかった

新暦76年 5月17日 PM0:34 聖王教会本部、臨時戦闘司令部

「ああ大変！」

別に後方でレーダー画面を中止していたシャリオたちが、前線メンバーの言葉を代弁するかのようにその言葉を呟いた。

ガジェットの波状攻撃を凌いだかと思えば、レーダーの画面でもちらほらと異質な魔力の反応が現れ始めた。

それがパトリオットフォースの魔導師の反応だと言う事に気付くまで、そう時間はかからなかった。

しかも多い上に、全員がかなりの高ランク。

『既にフェイトさんや、スバルさんにティアナさん・・・前線二か所で推定オーバーSランクの魔導師と交戦』

モニターに映し出された映像には、三人が強力な敵の攻撃の前に四苦八苦している様子が映し出されていた。

そして悪い事は更に重なる。

クラナガン方面を見張っていたレーダーが、戦慄の様子を映し出した。

『フェルカーモルト・フリーユゲル、第6弾、第7弾、連続発射！』

『駄目、あれじゃ防ぎきれないわー！』

分裂したフェルカーモルト・フリーユゲルの子弹が、波を作るようにじわじわと押し寄せてくる。

しかも間隔を空けず撃ってきた所をみると、どうやらこちらの迎撃能力を見極めての飽和攻撃だろう。

『わかった・・・なんとか・・・やってみる!』

通信の画面に出たのは、メサイアバレルから発射するスタンダードシエル3で迎撃を行うセレス。

もはや肩で息をしているというレベルではない疲弊具合だ。

言うなれば、息をするのも辛そうな苦しそうな表情。

「セレス、いやブルー2・・・それでは」

『私は、大丈夫。ルノアからも・・・魔力供給で・・・補助してもらってるし』

「魔力面は大丈夫でも、それを圧縮する君のリンカーコアには過剰な負荷がかかっている」

『だから? だから・・・止めるって言つつもり?』

それを聞いてイルマは思わず黙り込む。

そうは言っていない・・・いや嘘だ、間違いなく言おうとしていた。まるで自分は矛盾した存在だ・・・そして愚かだ。

全体を指揮して守る立場にありながら、守ると誓った彼女を自分が指揮する元で危険な目に遭わせている。

どうしてもか・・・?

どうしても、この戦いに勝つためには彼女を危険な目に遭わせないと駄目か!?

『ここで撃たなきゃ・・・意味、無いでしょ? それに辛いのは、多分・・・敵も一緒』

「そう・・・かもしれない」

彼女の言葉に、そんな事はないと否定は出来ない。そうだ多少危険でも任務をやり遂げてくれと肯定も出来ない。そんな事を悩む必要も無いような、強大な力も無い。考えてみると、どんな人でも結構無い無いづくしなんだなと、彼は吹っ切れたように笑みを浮かべた。

「了解した。頑張れ、そして無事でいてくれ・・・ブルー1、オーバー」

こうなれば彼女の言う事を信じるしかない、祈るような気持ちでセレスからの通信を切るイルマ。

しつかりしると自分に言い聞かせ、彼はリーダーの画面を再び注視する。

すでに二か所で高ランクの敵魔導師の反応、そして交戦しているという情報が入って来ている。

いや、今もう一か所に現れた。

『スターズ1、スターズ2、そちらに高ランクの反応。おそらく敵の魔導師です！』

シャリオの声が、混線した無線の中で聞こえる。

これで三人、三方向に展開する戦線に、敵の戦力が投入されたという事になる。

だがこれは奇妙だと、イルマは考えた。

三か所にそれぞれ高ランクの魔導師と分隊、それはこちらの前線戦力と均衡するようなレベルではない。

物量的に勝るパトリオットフォースが、そんなもどかしくなるような戦法を取るだろうか・・・あの三提督にあそこまで言わせた男が、

そんな戦術を取るだろうか？
それがさつきから、ずっと気がかりだった。

その頃、なのはとヴィータはある男と対峙していた。
ただ、戦う気になれないと言つか・・・とにかく、相手の男がへん
だったのだ。

服は市販されているようなチャコールグレーのスーツ、頭にはつば
が広がったグレーの帽子。

その服はどうやらバリアジャケットではない普通の服と、レイジン
グハート・エクセリオンは魔法の反応からそう分析した。

とにかく空に浮遊しているという事以外、彼はどうみてもミッド中
のそこらにいるおじさんとなに一つ変わらない。

「だ・・・誰だ、おめえは？」

「私かね？ 私は、そうだね・・・シルフと、今はそう呼んで貰お
うかな？ パトリオットフォースに雇われている」

ここで相手が武器や防護服の類を持っているのならば、雇われてい
る＝傭兵という式ができるのだが、シルフと名乗った彼の姿を見る
限り、どうも一般会社員のように思えてならない。

だがヴィータが尋ねたおかげで、理解する事が出来た。

ああ見えても、彼は敵なのだ。

「一応これでも、シルフ分隊を任せられているよ。 ああもつとも、
部隊員は私一人だがね・・・」

「つまり敵だって事だな？ だったら、容赦はしねえぞ！ アイゼ
ン！」

”Gigantform”

ヴィータが鋭く彼へと言いかけて、アイゼンの先端をシルフと名乗った彼に向ける。

グラ フ・アイゼンが巨大化し、対峙する者を圧倒するような迫力をもつギガントフォルムへと変形した。

その巨大なハンマーであるアイゼンを振り上げ、ヴィータはその男シルフへと迫った。

だが、その動きはアイゼンがシルフを叩き潰す直前で突然ピタリと止まる。

同時にヴィータは、言い知れぬ何か・・・説明できない何かをこのシルフから感じ取った。

（な、なんだよコイツ・・・隙だらけ、避けようとしねえ、おまけに魔法は浮遊しか使ってねえ。なのに・・・アタシの何が、

“攻撃すればやられる”って警告している！？）

「どうしたね？」

ヴィータの表情から彼女の心を読み取ったシルフが、不思議と嫌みのこもっていないような薄い笑みを浮かべる。

対人戦闘を得意とするベルカの騎士であるヴィータは、この戦いが長引きそうな事を薄々感じ始めていた。

「第六弾！ 行けッ！」

セレスが第六弾目を放ち、これで合計24発のメサイアバレルからの攻撃を実行した事になる。

最早疲れたというレベルを通り越し、彼女は極度の疲労から手足が末端から無くなっていつてるような感覚を覚えていた。

もう長くは持たない・・・ならば次で決めると、彼女は炸裂したフェルカーモルト・フリーユージェルの閃光を見据え、同時にメサイアバレルに残り少ないエネルギーをかき集める。

そして第七弾を間隙入れずに放って迎撃した時、セレスは何かを感じた。

フェルカーモルト・フリーユージェルを放っていた魔導師であろう反応が、かなり微弱になっている。

同時にその魔導師が第八弾目となるそれを作るような反応も、大陸の端まで届く目である高性能レーザーを備えた彼女のバリアジャケットには感じられなかった。

チャンスは今しかない・・・そう感じたセレスは、エネルギーを左前の砲塔にのみ集める。

これで通常よりも早くチャージ、そして発射点となっている決定打をその魔導師に叩きこむ！

” Turret No. 1 , 15 seconds to launch . ” (第一砲塔、発射15秒前です)

セレスが発射に備えていた時、周囲を警戒しつつ彼女に魔力の補助を行っていたルノアが何かを見つけた。

山肌の方に見える南の低空、空気が淀むように動いているように見え、次の瞬間にはそこから黒と赤のバリアジャケットを纏い両手には二本の直剣をもった魔導師が現れる。

それがパトリオットフォースの魔導師だと気付くのに、そう時間はかからなかった。

高いステルス性を持つ光学迷彩魔術を解くと、まだ自分の接近に気付いていないセレスの姿がすぐそこにあるのを見て、シュミットは

思わず不敵な笑みを浮かべた。

この位置、そしてこのタイミング・・・行ける！

少なくとも俺とグラディウスが、この距離から仕留めそこなう事はこれまで一回たりともない！

「はあああああッ！」

シュミットが雄たけびと共に真下から急上昇し、セレスをバツの字に切り裂いた。

(・・・これは？)

しかし・・・彼は刃から伝わった感触がおかしい事に、瞬時に気が付いた。

それを肯定するように、セレスの姿が霧散するように消えた・・・幻術の類、これは確かフェイク・シルエツト。

思わずシュミットが舌打ちする、それじゃあ本物はどこだ？

シュミットが地上や上空のあちこちを凝視する。

その時、後方に気配、同時にガチャっというデバイスのカートリッジロード音が聞こえた。

「パトリオットフォースの魔導師だな？ それに君は、あのツエーザーとかいう男の左に映っていた・・・」

「シュミットだ。シュミット・ハイゼル・・・」

すぐ背後にイルマが鋭い視線でレヴィンを構えている中、銃口を向けられているシュミットはやれやれと自嘲気味に笑みを浮かべながら名を乗った。

彼は考えた、どうやら敵にもツエーザーのように頭が切れる奴がいるらしい、と。

「三方向に同程度の戦力、狙っていたのは足止めと時間稼ぎ。そして本当の狙いは、長距離攻撃を迎撃し続ける彼女だった・・・そうだろう?」

「へッ、まあご名答って奴だな。ただもう少し、頭が足りなかったようだな・・・」

「なに?」

イルマの表情がシュミットの言葉に思わず眉をひそめる中、突然彼の姿が消えた。

否、消えたように感じただけだ。

猛スピードで後方に回り込んだ彼は、グラディウスの切先をイルマの背中目がけ思いつきり突き出す。

「俺たちパトリオットフォースを舐めるな!」

ザンツ!

刺さった・・・これで一人仕留めた。

後ろから剣を突きさされ海老反りの体勢になったイルマを見て、シュミットは思わず不敵な笑みを浮かべた、が・・・

彼はまたしても違和感に気付いた。

この感触は衝撃を加えれば消える幻術ではない、しかし人間に剣をブツ刺した時の感触でも絶対無かった。

畏に嵌められたとシュミットが気付いた瞬間、剣が刺さったイルマの姿が赤く発光する。

”Decoy silhouette self-destruct ion”

デバイスAIの機械音声が響いたとシュミットが感じた瞬間、イル

マの姿が閃光に包まれ爆発した。

幻術と物理破壊型の爆発系の魔術を組み合わせたデコイシルエツト、
囷である幻術を攻撃してしまえば即座に爆発を引き起こすよう作ら
れている。

「貴方たちこそ、戦技研究部を舐めないでね」

幻術で隠れていた本物のイルマ、そして彼に抱えられたセレスが全
く何も無い空間から姿を現す。

そしてそれに合わせるかのように、徐々に晴れてきた煙の中からも
シュミットが飛び出した。

爆発の影響だろう、バリアジャケットが所々破れている。

「フフフ・・・一発入れられたのは、これが久しぶりだ。 だが・
・ククク、ハハハッ！」

突然笑い出したシュミットに、イルマもメサイアバレルの攻撃で衰
弱しきつたセレスも思わず眉をひそめた。

そんな二人に、シュミットは更に言葉を続ける。

「戦技研究部とやら、戦いにおける勝利とは何かを知っているか？

それは敵を倒す事でも、街を一つや二つ支配下に置く事じゃない。

勝利者とは、目的を達しえた者の事だ」

「・・・何が言いたい？」

「俺のメインの目的は、長距離攻撃の迎撃の手を止める事。 術者

が魔法陣から離れては、魔法の発動は出来まい？」

確かに彼の言うとおり、広域攻撃等の大規模な攻撃は術者が展開し
た魔法陣の中で、呪文を詠唱したり魔力をチャージする必要があっ
た。

しかしセレスは今、その魔法陣から離れてしまっている。

その彼女はふふっと、表情を笑みへと変えた。

それは勝利を確信したような笑みだった……。

「残念ね。これって、魔力を注いだら後は自動発射……。そんなふうに変更したわ」

次の瞬間、術者不在な筈のメサイアバレルから、セレスの力を振り絞った一撃が放たれた。

閃光と爆風が、衝撃波となってシュミットを襲う。

「ぐぐツ、しまった！ まさか……」

術者が離れたにも関わらず発動したその攻撃に、シュミットは衝撃に耐えながら思わず言葉を漏らした。

そんな筈はない事が、今まさに目の前で起こったのだから。

セレスが放ったスタンダードシエル3は、秒速12kmという猛烈なスピードでクラナガンの市街地を突き抜ける。

それはまさにあつという間、今はパトリオットフォー스에協力を強いられている地上本部でも、本当にそれくらいしか言えなかっただろう。

迫りくる高エネルギーを感じ取り、エミールは咄嗟に障壁を展開する。

ベルカ自治領がある北に見える山岳の一部が、キラリと光った。

そして何かが彼女の横を通り過ぎたようだと思った次の瞬間、通過したスタンダードシエル3が巻き起こした衝撃波が彼女の障壁をガ

ラスのように引き裂いた。

「そ、そんな・・・あああああッ！！！！」

声にならない悲鳴をあげ、衝撃に打ちのめされたエミールが力なく海面に落ちていく。

そして彼女を通り過ぎたエネルギーが、通過から一秒ほど遅れて炸裂した。

至近に落雷したかのような轟音と、続いてドンツという衝撃が全長15kmと巨大なりベラトリックスを、岩礁に乗り上げた小舟のように突きあげた。

「ぐッ！ おのれ・・・！」

艦内にいたツエーザーはその衝撃でよろめき、部屋中央にあったコンソールに抱きつくようにつかまった。

同時に衝撃で歪んだいくつかのモニターを睨むと、艦内の無数の通信が混線してきていた。

『艦尾が大破！ 艦が傾斜します！』

『押さえる！ たかが一発程度でこのリベラトリックスが沈めば、ただの大きなガラクタと笑い者だ！』

『艦尾の反重力装置が大破、出力ダウン！』

『艦首と艦中央のモーメントを調整、急げ！ 水平でなくても良い・・・とにかく落下だけは防げ！』

『もうやっています！！』

『艦内負傷者多数！ 誰か救護要員を寄こしてくれ！』

艦首の方のここはまだ良いが、艦尾の方は結構酷い状況になってい

るといのが無線から伝わってきた。
リベラトリックスは後方に10度以上傾斜してようやく停止するが、艦内はまだ火災など予断を許さない状況が続いていた。

リベラトリックスが危機に晒された事は、発射を目の当たりにしたシュミットにも理解できた。

見事に出し抜かれ歯がみするような表情でイルマ達を見上げるシュミット。

「よくもまあ、やってくれたモンだぜ。ここまでされちゃあ、チンケな作戦達成くらいで帰るわけにはいかなかった」

心の中に生まれた憎悪を吐き出すように言うと、彼は右手のグラディウスの剣先を二人へと向ける。

「お前たちを、この剣で叩き斬る！ それくらいやらねえとな！」
「隊長！ ここは私が・・・隊長は副隊長を早く安全な場所に！」

ルノアが鋭い視線でスカイスクレーパーを構え、イルマ達の前に出てシュミットに立ちはだかる。
吠えるシュミットのグラディウスでの強烈な一撃と、それを受け止めるルノアのスカイスクレーパーが火花と電光を辺りにまき散らす。直後のお互いが飛び退くと、シュミットは悠然と不敵な笑みを浮かべた。

「お前はSクラスと聞いているが、どうした？ ハハッ・・・そうか、随分力をつかってしまったようだな？」

シュミットの指摘通り、ルノアはたった一撃を受け止めただけにも関わらず、息を荒げていた。さつきまでルノアが何をしていたかを知っているイルマには、その理由が明白だった。

彼女はさつきまで、セレスのメサイアバレルへの魔力支援を行っていたため、その疲労度はセレス程ではないにしても、そのまま戦闘を行うにはかなりの無茶があった。

しかも相手は三下などではない。

推定だがSS程度との分析が出ている相手だ・・・そうすると、もうイルマが取るべき手段は一つだった。

彼はシュミットと対峙しているルノアに呼び掛ける。

「ルノア、セレスを頼む。できれば、教会本部にいる医務官に」

「イルマさん・・・！」

一瞬ルノアは困惑の表情を浮かべかけたが、イルマが抱えるセレスが目で彼なら大丈夫だからと告げていたのに気付き、彼女は素直にイルマからセレスを預かた。

そしてルノアはセレスを地上の安全な場所に連れて行きながら、後方の上空を振り返る。

そこにはこれで良しという表情のイルマが、こちらにやや顔を傾けて見ていた。

「隊長、ご無事で！」

「勿論」

そう言いかけてイルマはシュミットの方へと向き直った。

「お前は確かAAAクラスだったな？ どういうつもりだ、まさかこの俺と一対一でやり合うつもりか？」

「そうだ」

イルマ率直な返答、それをきいてシュミットは思わず大爆笑した。

「アハハハハッ！ 何言つてやがる！？ 俺と戦うのにテメエのよ
うなAAAクラスで十分だと、一体どの口が言いやがるんだ！？」

「この口だ。そして・・・」

” Double - hand mode ”

イルマは右手で自分の口を指さし、ダブルハンドモードに変形させたレヴィンをその右手に握り締めた。

「SSクラスのお前に、勝つつもりだ！」

二つの銃口を向けて、イルマはシュミットに鋭く言い放つ。

それを聞いたシュミットが、イルマにも聞こえるくらいに激しくギリツという歯ぎしり音を響かせると、彼もまた鋭い視線でイルマを見据えた。

ふざけるなよザコが！

語らずとも、シュミットの表情が彼の心で燃えたぎる感情を映し出していた。

「行くぞアイゼン！ ラケーテンハンマー！」

後部の噴射口から噴き出したエネルギーで、猛然と加速と回転を高めていくヴィータ。

その鉄槌の先が、体勢を崩しつつも悠然さを湛えたままのシルフへと迫る。

ガシッ！

しかしシルフはグラ フ・アイゼンの先端付近の柄を瞬時に把持し、ヴィータの回転運動に合わせるかのようにその手にグイツと力を込める。

「なッ・・・うわああッ！！」
「ヴィータちゃん！！」

見事な返し技、合気道のような相手の力を利用しての反撃に遭い、ヴィータは溪谷の崖に叩きつけられた。

「ぐッ・・・コイツ、また変な技をッ！」
「ふふっ、昔から少々古武術というものに興味があつてね。趣味で少しばかり会得してしまつたよ」

岩壁から抜け出したヴィータに、シルフは崩れた帽子の形を整えながらそう言いかけた。

さつきから同じようなパターンが、数回繰り返されている。なのはがアクセルシューターやデイバインバスターで支援し、彼が体勢を崩した所でヴィータが一撃を叩きこむ筈が、いつもこのシルフの体術で防がれていた。

アルが居ればまだ善戦も出来るのだろつが、彼は他の空戦魔導師を率いて残存するガジェット機体の迎撃にあたつていた。

「私に一撃をお見舞いしたいならば、絶対に避けられない状況を作る事です」

「この野郎、舐めやがつて！」

「まあそう熱くならず。お詫びにレクチャーをしてあげましょうか

と言いたいところですが……残念ながら、本命の方がしくじったようですな」

シルフの言った本命という言葉に、なのはもヴィータもハツとなる。まかさ別働隊が本部に侵入……いや、でもしくじったってことは……？

「致し方ありません。作戦が失敗となれば、撤退するのが筋……ではまた、ごきげんよう、鉄槌の騎士に可憐なるエース・オブ・エース」

別れの言葉を口ずさむと、シルフの姿がスウツと透き通っていくように消えていった。

「なんだあ？ 変なヤツ……」

「ホントに、敵だったのかな……？」

自分から攻撃を仕掛けようとしなかった事からなのはは、敵だとは名乗ったがシルフを本当に敵なのかと改めて疑う。

まるで幽霊みたいだ……本当の幽霊だったりして……。とにかく、これで自分たちの目下の障害となっていた存在は消えた。しかしまだ敵は完全に退いたワケでは無い。

他の戦線へと、二人は戦意を新たにして飛び出して行った。

その頃教会本部上空では、一対一の一騎打ちが展開されていた。上下左右に光が飛び交い、そして時にぶつかり合う。

右手の突き出しと、左手は逆手に構えたシュミットのグラディウス
の猛攻は、それをレヴィンの銃身でなんとか凌ぐイルマの手に強烈

な痺れを与える。

(まともに受けてはいけない・・・そう、攻撃を滑らせて受け流すように！)

イルマは命中しそうな攻撃を銃身の上で滑らせるようにして防ぐが、シュミットの強烈な攻撃を受けてレヴィンにはヒビが入り始める。攻撃の重さは、シュミットの魔力も相まってかなりのパワーを秘めていた。

「オラッ、さつきから逃げ一辺倒か！！ 勝つつもりだなんて、どの口が言いやがったんだ!？」

苛立ちを露わにして襲いかかるシュミット。

彼の双剣捌きは秀逸だった。

これ程の腕、たしかにあの三提督が苦戦したのも頷ける。

彼の性格は一見すると猪武者。

だけでもその剣戟は、時に大胆時に繊細かつ華麗。

その攻撃の緩急に、不意を突かれて何とかガードした時には、レヴィンに更なるヒビの筋が刻まれることになる。

” Gale strike ”

横払いの攻撃を回避したイルマに、間髪いれずに衝撃波を纏った一撃が突き出される。

” Force shield ”

そして咄嗟にイルマが張った障壁と、シュミットの剣先がぶつかり合って激しく閃光を散らす。

だがこれはシュミットの計算通りだった。

どんな優れたエースでも、その判断が難しいとされる障壁状態の咄嗟の判断。

一撃を受けて健全そうに見えるシールドが、次の攻撃に耐えられるかという判断をその攻撃が飛び込んで来るその刹那に行うというものだ。

彼の腹の算段を知らず、シュミットの攻撃に弾かれ、イルマはシールドを張ったまま上空に突き上げられる。

「俺の攻撃を耐えきるつもりか！？ 馬鹿め、砕け散れ！ バルカ
ンアロー！」

” Vulcan arrow ”

シュミットが豪快に言い放ち、イルマの真上から赤く無数の刃が嵐のように降り注ぐ。

汎用性の高いフォースシールドをもう片方にも展開し、イルマはその弾丸の嵐を防ぐ。

「かかったな！ もう一度だ、ゲイルストライク！」

「くッ！ やはり挟撃が狙いか！？」

シュミットの狙いを悟り、イルマは先に展開していたシールドをその二度目の下からの突き攻撃に宛がう。

だがそれを見たシュミットの勝利を確信した笑みと、数条の亀裂が入ったシールドを見てイルマは畏に嵌った事を知りハツとなった。

この攻撃は、ほんの一瞬前に攻撃を受けて脆くなっているシールドだった。

（狙いはそれかッ！？）

一度攻撃を受けたシールドは、続けざまに第二弾を食らえばその防御力は絶対で無くなる。

それを考慮してイルマとレヴィンが開発した攻撃方法が先のローラン戦で見せた、一か所に数発の攻撃をほぼ同時に命中させるというバーストショットだった。

しかし今、イルマはそれと似た攻撃を自分が受けようとしていると悟り、彼の背筋に冷たい汗が流れる。

そしてその予想を裏切ることなく、シュミットのグラディウスが命中した途端、イルマのシールドがガラス細工が割れた時のような音を立てて飛び散る。

(シールドが破れた！レヴィンを盾にするか？)

シールドを突破してもなお、向かってくる剣先の勢いは止まらない。

そして……

ザスツッ！！

青空に飛び散ったのは、赤い血……感じる鈍い痛み。

その様子を見ていた者は、ある者は声を失い、ある者は声にならぬ悲鳴をあげ、ある者は目を覆い、そしてある者は不敵な笑みを浮かべた。

静かだ……そう静寂たる音“Silent”がこの空を支配しようとしていた。

Flight 16 : ヘルカ自治領防空戦〜聖なる地にて邪を討つ〜(後編)

ご意見とご感想をお待ちしております。

次回

Flight 17 「Silent Eagle」

空気が凍りついたように、その一帯の人間は言葉を誰一人喋らない。上空では二人の魔導師が激突し、その正念場が過ぎた所だった。

周りの空気がどうのこうのには気づかないまま、シュミットは目を見開いて驚きの表情を浮かべていた。

「貴様ツ、気でも狂ったか!？」

シュミットの視線の先には、小破したレヴィンの代わりに盾とした右腕にグラディウスを突きたてられ、苦痛に顔をしかめるイルマだった。

バリアジャケットの右袖を伝ってイルマの血が落ち、落ちる過程で空中で霧散するように見えなくなる。

「・・・いや、狂ってなどいない」

グラディウスを腕から抜き去る時の、異物が腕の中を動く感覚と激痛に耐えながら、イルマはハッキリとそう返答した。

あのままレヴィンを盾にしていれば、レヴィンは大破して戦闘不能となり敗北が決定する。

敗北して取り返しのつかない犠牲を払うより、戦闘を続ける代わりに最小限の犠牲なら払っても良いという土壇場の機転だった。

イルマと彼の決意に驚きを露わにしていたシュミットが再び距離を置く。

「レヴィン、リカバリー」

” Recovery”

ポウツとレヴィンが淡く光ると、傷ついた部分が修復を始める。イルマが身を呈して守っただけあって、レヴィンの機能は完全回復を遂げた。

さらに、イルマが受けた傷もレヴィンの自動発動型の治癒魔法で、癒え始める。

だがそれはあくまで応急処置で、止血程度なら出来るものの腕の内
部組織の治癒や、痛みの緩和までは出来ていない。

戦闘が長引けば、怪我で不利になるのは明らかだった。

その事を分かっているのだろう。イルマの表情は、未だに険しい。

「フンツ、あの世に送り損ねたか・・・ならばもう一度落としてやるまでだ！！ グラディウス！」

シュミットの呼びかけに呼応し、グラディウスが再び閃光とエネルギーを纏い始める。

さすがにイルマもそれには危機感を募らせる。

一部の戦線から、シュミットの本部突撃を知った味方が駆けつけてくれるかもしれない。

それがなのはであったりすると、この場をなんとか凌ぐ事はできるだろう。

もちろん、それまで無事に生きていたらの話だ。

「レヴィン、10分ないし5分・・・彼の攻撃を回避し続けられるかい？」

イルマの質問を聞いて、レヴィンはほんの数秒考えた後に答える。

” Perhaps it will be impossible for us in this situation.” (おそ

らく、この状況では私たちには不可能でしょう)

その返答を聞いて、イルマは心の底で笑った。

フェイト曰く、二人揃って一緒に無茶をするというなのはのレイジングハートとはまるで正反対で、この状況では無理だと術者を励まさない辺りが、良くも悪くも正直者なAIだ。

だが、レヴィンは先のセリフに妙な含みを残していた。それを象徴するように、レヴィンはまだ続ける。

" However, there is a method to defeat this situation." (しかし、この状況を打破する方法があります)

思わぬレヴィンの提案に、イルマは思わず耳を傾ける。

" Captain, please call Raptor form." (隊長、ラプターフォームをコールしてください)

「ラプターフォーム・・・待てレヴィン、それはまだ50%も出来ているかどうか・・・」

" As for me, 90% builds new Raptor form that I matched with the aptain in spite of being the state of things."

(勝手ながら、私が隊長に合わせた新しいラプターフォームを作り、9割方出来ています)

「レヴィン・・・お前。いつの間にそんな事を・・・?」

" If your duty is to command all battle, it is duty that I take measures in preparation for

r the situation like this.”
(貴方の務めが戦闘にて指揮を執ることなら、私の務めはこんな事もあるうかと様々な手段を講じることですから)

本当は、こんな賭けのような真似はするべきじゃない。

しかし一対一ではどうせ状況の打破は難しい・・・それならば、今はレヴィンを信じて可能性を少しでも高める事が得策だ。

イルマはレヴィンから目を、グラディウスを構えて今にも襲いかかってきそうなシュミットを見据え、そして腹をくくった。

「わかった、ここで落ちるわけには行かないからなレヴィン、ラプターフォーム、起動」

” Roger that . Barrier jacket change to Raptor form . ”

レヴィンが答えてすぐ、バリアジャケットが変化する。

標準的な性能だったものから、形は先鋭的になり色はグレーへと変わっていく。

変化は一瞬で終わる。イルマが自分が纏うそれをパツと見た感じでは、自分が昔から見知るもう一つの防護服と変わりは無いようだ。

そして形態だけでは無い、機能も大幅に変わっていた事にイルマは当然ながらシュミットも気づく。

「装甲が薄いなんてモンじゃねえな？ 最低限の防御フィールドまで取っ払ったか・・・何を考えてるんだ？」

「最初に言っただろう？ 勝つつもりだ、と・・・」

「ぬかせ！」

いきり立ったシュミットが突進してくる。

それは重い一撃、彼の言うとおりこの装甲が紙程度のこのフォームじゃ当たれば怪我なんてものじゃ済まない。

だが、このフォームはある性能をその犠牲の代償に爆発的に高めた……。

イルマは防御もしない、これは当たるとシュミットが確信した瞬間・
・イルマの姿が突然消える。

「な……」

次の瞬間、驚いて目を見開いたシュミットの背に強烈な衝撃が走る。痛みに耐えて空中でとどまった彼。

背後の上空に、イルマが銃口を向けた先のシュミットを見据えていた。

空から獲物を見つめるような、鋭い視線で。

そんな彼が撃ち込んだのは、汎用性の高いAAクラスの高威力射撃魔法マグナムバレット。

だがシュミットは、イルマが期待した程は大して堪えてはいないらしい。

それだけ頑丈な装甲に加え、比較するとかなり性能は良かった前のフォームでは回避し辛かった機動性を併せ持つとは、なんとも恵まれ過ぎだとイルマは心の中で考えた。

一方のシュミットは、大してダメージを与えられていないにも関わらず、ここにきてその悠然さは消えうせた。

シュミット自身、管理局のE級と言われるSクラスの魔導師には超が付くほどの速いスピードや、高い機動性を持つ者もいる事は知っている。

第一シュミット自身がそうであるし、残像を発生させるほどの高速機動が得意な相手への対策も怠ってはいない。

残像の移動から先読みして相手を迎撃したり、気配や魔力の反応から位置を割り出す事も可能だ。

ところが、それを熟知していたにも彼はここで初めて被弾した。その理由を、彼は認めるか否かの葛藤に苦しむ。

(それじゃあ・・・残像も気配も残さない奴は、一体どうすればいいんだッ!?)

彼はギリリと奥歯を噛みしめ、イルマを睨みつける。

緊張し冷や汗が彼の頬を伝う。

ふと彼が視線を手許に下げると、彼はグラディウスが僅かに震えているのが分かった。

いや、デバイスが震える筈が無い・・・震えているのは自分の手だ。

(俺が恐怖した? 馬鹿な・・・!)

しかし腐ってもSSクラスの實力のある自分。

当たらなければ、どこまでも追っていける誘導弾で仕留めよう。

そう考えたシュミットに周囲に、多数の光弾が出現する。

何も高威力の攻撃にこだわる必要は無い、威力が劣る攻撃でも当たればイルマが大怪我を負う事は目に見えているからだ。

今度こそは当てると、放った光弾は曲る軌跡を描きイルマを目指して飛んでいく。

だがそれで当たらない事は100も承知。

誘導弾はあくまで牽制のため、それに加え自身が肉薄しての一撃であの忌々しい小鳥を叩き落とす。

飛び出したシュミットは、光弾の群を上下左右にヒラリとかわしているイルマへと急迫する。

背後を取った!

今は背を向いている彼に、シュミットが寸前までに肉薄する。だが、またしても彼の突きだした剣先はイルマを捉える事は無かった。

今度は目でイルマの動きを追えたが、彼はまるで空气中を揺らめく木の葉のようにフワリと、重力を無視するような動きでシュミットの斬撃を回避する。

そしてイルマの代わりに目の前には、自らが放った光弾が迫っていた！

「ぐッ！」

光弾が弾け、自身を庇う両腕が衝撃に晒される。

これも大したダメージではないが、図ったように自らの攻撃を受け、なにより数段格下ランクの筈の相手に追い込まれているという屈辱が憎悪となって彼を支配する。

未だに戦意が耐えない、いやむしろ連続の被弾で更に戦意を増しているようだ。イルマはシュミットの様子をそう判断した。

長引けば分が悪い・・・相手はSSランク、さっきの怪我やテストをせずに発動したこのフォームの安全性の事もある。

「次で決めるぞ、レヴィン」

” Roger captain ”

このフォームで本来目指すのは短期決戦。

攻撃と回避が表裏一体の機動で、相手の防御が最も薄い背後や頭上から一撃必殺の攻撃を叩きこむ。

それも、相手が防御をする暇も与えないほど早く。

そして狙うべきは、最初に一撃を加えた背後の胴体部分。

甲冑のような形状のシュミットの防護服には、一部に被弾による傷

が付いていた。

(マグナムバレットとカートリッジ弾での四連バーストショット、彼を倒すにはそれしかない……!)

イルマがそう思い、カートリッジの残量を確認して構えた時だ。

「認めるかッ！ 格下の相手に敗北など、死んでも認めるか!!」
突撃を敢行するシュミットの動きが単調になっている。

おそらく彼を憎悪が支配し、彼は感情の赴くままに殺戮を繰り返す狂戦士と成り果てたのだろう。

おかげで回避は、前のフォームでもできそうなくらいに簡単だった。一瞬で空と陸地がグルリと反転して入れ替わり、次に元に戻った時にはイルマは彼の背後を取っていた。

こんな時、自身にこの格闘方法を教えたあの師ならば、シュミットへ「だったら死になさい」と返答を返すだろうと考える余裕もあった。

距離にして10m、イルマは腰に構えたレヴィンからマグナムバレットを放ち、続けざまにカートリッジの魔力をそのまま弾として撃つ。

ローラン戦で見せた、あの四連射バーストショット。

これならば、頑丈な彼のバリアジャケットでも易々と貫ける！

放った弾丸群は、真つすぐにシュミットへと飛んでいき、命中して大量の白煙を巻き上げた。

やったか……!?

イルマが煙が晴れる様をじっと見据える。

「……なに？」

しかし煙から現れたシュミットは健在だった。
そして驚く事に、もう一人別の人間がいた。
それはなのは達を足止めしていた男、シルフだった。

「ふふつ、やり過ぎだよイルマ君。 過剰な攻撃は、管理局では夕
ブーじゃなかったかね？」

「・・・貴方は？ その様子を見る限り、只者では無いようですが
・・・」

イルマの指摘を受け、シルフが自身の右手に視線を移す。

「ああこれかね？ まあ、昔から今でも魔法に興味があつてね・・・
」

興味があるっていうレベルじゃない！

彼の右手の指の間に挟まれて微動だにしないマグナムバレットをみ
て、イルマはそう胸中で呟いた。

百分の一秒単位で放たれる攻撃を綺麗に指の間で受け止めるなど、
少なくとも人間業では無い。

「イルマ君・・・私が見る限り、3発で十分だったよ。 もし4発
目が当たれば、彼の体はここに来る道中に転がっていたガジェット
と同じようになってたかもしれないからね」

シルフの指摘にイルマは思わず黙り込む。

この場合はやむを得ない事だったかもしれないが、それでも局員に
なった以上人は殺すまいとの誓いを破る所だった。

シルフの言葉が、イルマがレヴィンを握る手からやや力を抜く。
それと同時にシルフの右手の指に捕まえられていた光弾が、パツと

霧散して消えた。

「そうそう、それで良い。これからも、あの8年前の大戦で学んだ事を良く思い出すといい」

「8年前の大戦？ ラーシア大戦！？ まさか、アンタは！？」

「おっと、お喋りすぎたかな？ そうそう私はシルフ、今はパトリオットフォースに雇われている労働者、それ以上でもそれ以下でもない」

その時、シルフの肩に誰かが手をかけた。

それは最早怒りから殺戮の獣と化して、荒い息をあげるシュミットだった。

「テメエ、邪魔すんじゃねえ！ 助太刀なんか居るか！ それに俺の体はそんな貧弱じゃねえ！ シルフ、邪魔するとテメエも一緒にぶっ殺すぞ！！」

「おやおや、随分と威勢の良いことだね。だが、何か忘れていないかね？」

「知るか！ ゲメツツエルの隊長は俺だ・・・俺が命令をする！ 奴らを皆殺しにしるとなァッ！！」

「まったく困った隊長殿だ。ヴァーリゲルト殿から短気だというのは聞いていたが、まさかこれ程までとはね・・・」

呆れ顔のシルフを横に退け、シュミットは彼よりも前に出る。

そしてイルマへとその剣先を鋭い目線に殺気を込めて向けた。

これは流石に不利か・・・？

ラプターフォームで回避は難なく出来るかもしれないが、バーストショットをあんな風に受け止めるのが相手に加わると攻撃が決まらない分が悪い。

だが、イルマのその憂いは予想外な事態で晴れることとなる。

今度は赤いオーラを纏うシュミットへと、シルフが手をかける。

「まあ待ちたまえ隊長殿。君は私が止めなければ、既に敗北した身という事に気付かないのかね？」

「黙れッ！！俺が格下相手に敗北する等、あつてたまるか！」

「それじゃあ、実証してみようか？」

その言葉への理解速度が追いつかなかったシュミットが何か言葉を発する前に、イルマが狙おうとしていた部分にシルフが背後から強烈な正拳を叩きこんだ。

バラバラに砕けた彼のバリアジャケットに加えられた衝撃はすさまじく、シュミットは唾を吐いて白目を剥いて気絶した。

「これが真実、言い忘れたがこれは三発分だ。あと一発も当たっていれば、君は少なくとも怪我はしていただろうね・・・っと、もう聞いていないな」

シュミットの大柄な体を左腕で支えながら、シルフは右手でスーツと帽子を整える。

本当に何者だこの男！？

イルマは思わず言葉を失っていた。

「さて、それでは失礼するよ・・・ラーシア大戦二大英雄の一人、TACネーム“サイレント・イーグル”」

「待て！アンタはラーシアで・・・！」

そこまで言っただけでイルマは言うのを止めた。

目の前にシルフの姿は転移して行ったのかも無い。

彼らの撤退に合わせるように、各方面でもパトリオットフォーエバーとぞろぞろと撤退して行く。

遅滞きながら救援に駆け付けたなのは達に、追撃はしないように各戦局に伝えてくれと言い、イルマは地上に降りる。

赤く腫れて痛む右腕を押さえながら、彼は戦況を確認する。

自分も含め怪我人は出てしまったが、なんとか死者は出さずに済んだと知り彼は安堵のため息を吐いた。

どうやらこの戦いは勝利したようだ。

だがこの勝利は素直に喜べず、新しく現れた敵の強力な戦力を前にどう戦っていくべきかの再考をイルマに迫る。

もっとも、その前に怪我の治療が先だとは思いが……。

新暦76年 5月17日 PM16:50 リベラトリックス艦内

後ろにやや傾いた艦内に戻り、司令官室の扉が開くと同時にシルフは喉元に何かを突き付けられた。

それが、目の前にいるツエーザーのサーベル型のデバイスだという事に気付くのに時間はかからなかった。

しかしシルフもそういう状況にも関わらず、表情は薄い笑みを浮かべた顔のまま変わらない。

「雇われの身であるだけのお前が、隊長の名で撤退命令を下したそうだな？　そしてシュミットにも攻撃を……説明してもらおうか？」

「それは少将が良くご存じだと思いますがね……。」

「何？」

「少将から我々が仰せつかった任務は、こちらに被害が及ぶ前に長距離攻撃を阻止する事。まずその任務が達成できなかった事が一つ、次にシュミット隊長はあれ以上戦うと敗色濃厚でした」

ツエーザーもシルフも眉ひとつ動かさず、張りつめた空気がその部屋に流れる。

「ですから、シュミット隊長が無事である内に戦闘を終わらせ、帰還するように伝達した次第です。あれ以上戦い続けければ、下手をすればこちらに死者が出ていたかもしれませんからね。少将も、昔と同じような事で彼を失いたくは無いですよね？」

「ふん・・・兵として雇われの身にしては、なかなか詳しいな。まあいいだろう」

ツエーザーは剣先をシルフから反らすと、後ろを向く。

そして彼はモニターを操作して複数の画面を開いた。

「それよりシルフ、ミッド南部に出張らせていた部隊が壊滅した」

「ほほう、あのレイヴン大隊が？ それはまた・・・」

「生還した隊員によれば、その空域に現れた敵は全部で4人。だが、何を思ったか後から来た1人が前の3人を撃墜して、たった1人で我が精鋭たちを壊滅に追い込んだとの事だ。しかも、6分弱で」

シルフの脳裏にある人物が浮かび上がる。

そして表情からも察するに、ツエーザーもミッド南部に現れた強敵の正体に、大よその見当はついているようだ。

「会ってきましたよ、ラーシア大戦のエース、サイレント・イーグ

ルに。彼が生きていたのならば、南部に現れたその敵も大よその見当がつくでしょう？」

「フハハツ、そうか・・・！ やはりな・・・！」

ツエーザーがあげた哄笑は、強敵の出現を喜ぶもののように思えた。

「あの時は確か・・・そう、たった二人の小隊が一個師団以上の戦力とまで言われてましたからね」

「ふんツ・・・ならば、まあレイヴン大隊が壊滅したのも領けよう。死んだ筈の存在が蘇るか、なるほど・・・」

「だが二人は死んだ筈だが、実は死んでいなかったというだけで、実際に死から蘇った君たちとは違うようだ」

その時、そこへディスプレイが現れて、ツエーザーの言葉に補足を足した。

何かの作業をしてきたのか、彼は白衣を纏っていた。

「師団長も楽しみでしょう？ かつてのブルー小隊隊長、先代エース・オブ・エース、いやラーシアの魔神“ブルーリボン”が」

「まあ、それも楽しみだが・・・私が楽しみとしているのは、そういった者たちが集まっても、どうにもならないほどの強大な力を以てして、全ての次元世界を正当な方向へと導く事だ」

その様子に、シルフもディスプレイも一様に軽く笑みを浮かべて頷いていた。

“ブルーリボン”・・・ツエーザー達もデータや話で聞くだけで、実際に見た事も会った事も無い。

情報によるとどうやら“ブルーリボン”は女性らしく、当時14歳

だったTACネーム“サイレント・イーグル”ことイルマと二人で一小隊を組んでいた人物。

ただ当時は、二人とも管理局に正式に所属しておらず、本局武装隊の囑託魔導師として活動していたため、大戦以前の記録は殆ど残っていない。

その大戦というのは、ロシア大戦。

第118世界ロシアで起きた、魔法を使う人と人との戦い。

兼ねてから管理局に従順な勢力と、反管理局を掲げる勢力との睨みあいの末に発生した世界大戦だ。

お互いへと憎悪から生まれた戦いの渦中で、話し合い等が出来る筈も無い。

しかし管理局が手をこまねいており、あれよあれよという間に面積の9割を反管理局派に奪われるという状態になり、対応に慎重な本局が重い腰を上げるまでの時間稼ぎとして、報酬で雇った囑託魔導師を戦線に投入した。

囑託魔導師達は予想以上の戦果をあげ、ようやく本局が介入した頃には面積の8割を奪還するという働きぶり、中でもとりわけ目立ったのが、TACネーム“ブルーリボン”と“サイレント・イーグル”で構成された航空小隊。

それが、第2航空魔導師団第108航空小隊“ブルー小隊”だった。更にその中でも、“ブルーリボン”は敵エース部隊と対峙しての連戦連勝や、当時のエース・オブ・エースの称号を得、“ロシアの魔神”とも呼ばれ、賞賛や畏怖を独占した存在だった。

だが、大戦終結から数週間後・・・

反管理局派の残党があるロストロギアを目覚めさせ、ロシアどころか次元世界を崩壊させかねないという災害まで巻き起こした。

事態を重く見た本局は必死に戦うエース達だけでなく住民達諸共、ロシアを艦隊のアルカンシエル掃射で消滅させるという苦渋の選

扱の末、どうにか世界全体の平和を取り戻した。

公式記録ではこの時、“ブルーリボン”も“サイレント・イーグル”もラーシアを脱出できずに死亡したとなっており、彼らの足跡もここで途絶える。

そのため、一般には殆ど知られる事無く表舞台から姿を消したエース・オブ・エースでもあった。

しかしアルカンシエルを放った次元航行部隊の局員の中には、この時の決定を疑問視する声も上がっているらしい、というのはデイスピアの調査によるものだ。

再調査を行おうという動きもあるが、既に解決済みであるという事や、ラーシアが消滅し既に存在しないため調査のしようが無い事が、再調査の進まない原因を成していた。

とにかく、ラーシアの魔神とも呼ばれたエース“ブルーリボン”と彼女を支えたエース“サイレント・イーグル”、この二人が今再び現れた。

コンビを組んでは居なくとも、二人は北と南からこのクラナガンを目指している筈だ。

強敵の出現に恐々してもおかしくないにもかかわらず、夕暮れの街並みを見下ろしながらツェーザーは、むしろ期待で胸を膨らませていたようであった。

同日 PM17:12 聖王教会本部

戦闘の終結は、敵が完全に索敵範囲外に脱した事で確認された。

地上に降りれば大戦があったあの時のようにドンチャン騒ぎと言う事は無かったが、それでも帰ってきた魔導師達は地上のスタッフや

市民達からの称賛を浴びる。

なのは達はもとより、作戦立案やフェルカーモルト・フリーユージェルの迎撃に一役買ったイルマ達も、カリム達聖王教会騎士団首脳部から歓呼を以て迎えられた。

確かにそういうのも嬉しいと言えば嬉しいが、イルマにとっては自分も含め全員無事に帰還出来た事が一番の喜びだった。

セレスは一人休む中、他のなのはにフェイト、そしてはやてやカリム達を含めた幹部クラスのメンバーは休む間もなく反省会を兼ねたデブリーフィングが行われる。

全員の戦闘データを見比べて、課題や反省点を見つけ出すための会議のようなものだ。

「この人物の素早いモーションは要注意です。油断すれば、高ランク魔導師でも即撃墜に繋がりますから」

「敵の大隊を四分割した各分隊の隊長達だな・・・いずれも高い能力があるようだ。全魔導師にも要注意を促していても良いだろう」

「まずは、ウンディーネ分隊長、アルネア・ヴェーラ。素早い動きはもちろん、攻撃の一撃が相当な重さです」

フェイトが交戦した相手アルネアのデータが表示され、彼女のポテンシャルの高さに全員が息をのむ。

それにプラスして、好戦的な性格等と言ったデータ上では分からない事までが話し合われる。

その他にも、スバル達が交戦した長身の男に、本部に突撃したシュミットという男。

「この男、シルフと名乗っていましたが本名では無いようです。本局に問い合わせましたが、該当するデータは無し」

「あの中で能力や思想も含めて、一番よう分からへんのはこの男やな。せやけど、本人が敵と名乗ったんなら、こちらとしてもちや

んと対処せんとな」

そしてそんな中で、イルマやなのはが警戒したのは“シルフ”と名乗った男の事だった。

不屈のエース・オブ・エースと呼ばれる程の実力者、なのはを前にしてのあの悠然さ。

更に激昂したシュミットの防護服を一撃で破って昏倒させる等、高い実力を持っている事は確かだった。

シャリオ達メカニック一同は、これから今回の戦闘データを元に更にストライカー達のデバイス改良を迫られたため、既に忙しそうに動き回っているらしい。

時折会議室のドアの外で聞こえるドタバタという足音に、重そうな機器類をどこかへと運ぶような音は彼女たちのものだろう。

一方、この会議でイルマは部隊構造の変革を打ち出した。
それが・・・

「スターズ空挺魔導師大隊に・・・」

「ライトニング航空魔導師大隊の創設、ですか？」

突然の事で戸惑うようなのはとフェイトに、イルマは静かに頷いた。

彼女たちだけではない。

その残存戦力の新編成案には、はやてとヴォルケンリッターを含めた八神家、そしてイルマ達のブルーインパクトも含まれていた。

構造では、十人未満の比較的小規模な小隊を編成するはやて達とブルーインパクトのイルマ達。

一方で、百人単位の大規模な部隊を更に分隊として幾つかの隊に分けた大隊を任される事になるのはとフェイト。

スターズ空挺魔導師大隊は、空からの援護と地上での攻勢をメイン

として活動する部隊。

ライトニング航空魔導師大隊は、対人格闘のエキスパートを多く集め、複数の分隊の連携攻撃により制空権の掌握を目指す部隊だ。

しかし、そんな大役をいきなり頼まれるとなると、どんな人間でも躊躇してしまうのは当然だ。

「そんな大人数をなんて・・・」

「それに、私たちは大隊指揮官の資格は・・・」

「良く聞いて欲しい。今は非常事態、この際資格の有無は考えず、それが出来る人間として白羽の矢が立ったのは君たち二人なんだ」

「そや。機動六課でもあれだけようやってくれた二人やから、トレノ一佐の案には私も賛成や」

イルマの説明に加え、はやてからもそう言われて、二人の心は更に揺れ動く。

「勝手に申し訳ないが、八神二佐を始めこの案に賛同してくれる人は多い。皆、君たち二人にそれだけの能力があると信じて疑わないという証拠だ」

「そ、それは、本当にありがたいんですが・・・」

「まあ、今すぐにといいのも無理があるかもしれない・・・ただ、時間も限られている。一日待とう。明日の夕方のミーティングまでに、どうするかを決めておいてくれ」

そののち、カリムの締めくくりの言葉でこの会議は終了となった。終了後、イルマ達は廊下を歩きながら先程の会議の事を振り返る。

「あの二人、乗ってくるかな？」

「さあな。っていうか、もし断られたりしたらどうすんだよ？」

「大丈夫さ。あの二人なら、承諾するにせよしないにせよ、最良

の判断をしてくれるだろう」

案に承諾してくれるだろうと言っているようなものだが、イルマが口に出した事についてブラットにルノアが頷く。

二人が承諾してくれるか否かもだが、イルマにはまだ幾つかの憂慮すべき事がある。

まずは過剰な魔力消費によって昏倒状態が続いているセレスだが、セリーナや彼女とともにセレスの容体を診るシャマルの見解では、長くても数日中には目を覚ますとのことだ。

ルノアからその事を聞いてとりあえず安心し、今度はもう一つの憂慮すべき事だが、それを話す為イルマはチーム全員を一室に集める。そこにいたのは・・・

「司令！」

「やあ、いつ来るかと彼女と些細な談義をしながら待っていたよ」「彼女？」

いつもよりややテンションが高いホープの言葉に、ブラットが咄嗟に聞き返す。

彼女と言われても、人の姿がない。

だが次に聞こえてきた声で、イルマ達は“彼女”が誰であるかに気付く。

ホープのデスクの一角に、見慣れたというわけではないが印象が強かっただけに覚えている黄金のプレートがあった。

「お疲れ様です、隊長。怪我も大したことないと聞いて、ホツとしていた所です」

「オリヴィエ？ どうしてここに？」

「私が連れてきたんだ。彼女が、君たちに重要な話があるそうだし」「重要な話？」

部屋に入るなり、いきなり重要な話があると言われイルマ以外の隊員達は顔を見合わせる。

いつもは、いきなり何か重要な話を始めるといふのはホープの悪い癖の一つだ。

今回、オリヴィエはそれを代弁でもするのだろうか。

「隊長は、私が救助された時の事を覚えていらっしやいますか？」

「良く覚えている。」

「それでは、私を狙っていた相手がパトリオットフォースだと言う事も？」

「恐らくそうだろうと考えてはいたよ」

「そうですか。では、その中でも私を狙っていたのはこの人物だという事も？」

オリヴィエの本体と接続されている端末に光がともり、画面にある人物の画像が表示される。

そして映し出された人物、それはあの“シルフ”と名乗った男だった。

帽子を押さえるあの仕草といい格好から、まるで同じだ。

「そこまで言うならば、シルフとかいう奴が狙っている事なんて、もう分かっているんじゃないのか？」

「はい。彼を含め、パトリオットフォースが狙っているのは、とあるロストロギアの掌握。それにより、全次元を恐怖で統一する事です」

「・・・一つで全次元に影響があるほどのロストロギアだって？冗談はよしてくれ、そんなの聞いたことが無い！」

ブラットが苦笑交じりに否定するが、イルマは決して笑わない。

いや、むしろ表情が固まっている。

それに気付いたホープが、敢えてイルマに質問をぶつけた。

「トレノ隊長、君は・・・そのロストロギアを知っている筈だ」

ホープの言葉が合図のように、他のメンバーの視線が一斉に自分に向いたのをイルマは感じた。

認めたくは無いが、ホープやオリヴィエが言わんとしている物が、彼の頭の中にはハッキリと浮かびあがっていた。

そしてまるで何かに操作されているように、イルマがようやく口を開く。

「まさか・・・！ グランド・・・クロス？」

「ええ。貴方と“ブルーリボン”が戦いぬいたラーシア大戦の末期、暴走し壊滅的な被害をラーシアに与えた巨大ロストロギア、それが“グランド・クロス”そうですね？」

「ま、待ってくれ！ 何を言っているんだ！？ あれは消滅した筈だ・・・アルカンシエルによって多くの犠牲と共に！」

「隊長は、グランドクロスによって次元空間が破断の危機にあったことを覚えていますか？ 次元空間を改変し制御する能力、それがグランドクロスの真価なのです」

あの時の光景がイルマの脳裏のまざまざと蘇る。

荒天の空に、大地は裂けて人だけでなく星そのものが死にゆく様だった。

それを引き起こした、黄金の巨大構造体が地中から驚くほどゆっくりとせり出して行く光景。

今でも絶対に忘れる事は出来ない。

「あれがまだ、残っていると？ しかし、どうしてそれが分かる？」

「ええ、なぜなら・・・グランドクロスを完全制御するための制御ユニットとして、私が造られたのですから。どこにあるか、までは分からなくても稼働状態にある事くらいは分かります」
「なんて事だ、奴らの目的は最初からそれか!!」

確かに、言われてみればそうだ。

パトリオットフォースの戦力は大規模だとしても、ミッドチルダのような魔法文明において最重要の世界をいつまでも統治できるような戦力では無い。

本局の増援が届けば、制圧されているのは目に見えている。

だがもし、彼らが次元空間を意のままに操れるようなあのロストロギアを手に入れたならば・・・最早誰も手出しはできない。

急がなければ・・・それはイルマが久々に見せた焦りの表情だった。

Flight 18 : ブレークタイム(前書き)

なんか今回はぐーたらになってしまった感があります。

このあたりはテンポが掴みづらいという事なのでしょうか・・・。

いいえ単に作者に能力が無いだけです、どうもあ(ry

Flight 18 : ブレークタイム

Flight 18 : ブレーク・タイム

新暦76年 5月21日 AM11:54 ベルカ自治領聖王教会
本部

『そうか、やってくれるか・・・』

『はい。 非才の身ではありますが、全力にて』

『隊長達のご期待に添えるよう、最良の努力をしていくつもりです』

『大丈夫だ。 君たちの努力が、我々が望む結果に繋がると信じている。 ミッドに平穩を取り戻そう』

イルマは教会本部内の臨時執務室の一角で、書類を眺めながらついこの間の事を思い出していた。

彼女たちは二人で一晩話し合って、翌朝覚悟を決めた表情で大隊編成を承諾してくれたのだった。

彼女たちのこれから重責を背負わせる事に、若干・・・いや、かなり頭が下がる思いだ。

ふと窓に目を向けると、相変わらず山肌の緑と大空の青が見事な大自然の風景が広がっている。

このベルカ自治領は、聖地と言うだけあって大自然と古き石造りの建物のコントラストが織りなす壮観な眺めが売りだ。

保養地としてもここを訪れる人は多く、日頃は忙しく動き回る人々が訪れたいと想いを馳せるような憩いの地でもあった。

しかし今ではここが、忙しく動き回る最前線というのは何という皮肉だろうか・・・。

空を哨戒する魔導師の数はあの襲撃から、半分とまでは行かないがかなり減った。

熱源探知という方法が、思いのほかかなり有効だったという事が証明され、裂くべき人員を減らせるといふ事が分かったため。

そしてもう一つの理由として、あのような奇襲では攻略できないという事をパトリオットフォースに誇示出来たことで、同じような手は使わないだろうという推測だ。

いずれにしても、先日よりは空戦魔導師の人員を減らしている。

そしてその減った分の魔導師は、今なのはの教導のもとで、以前のデータを元に対人戦闘強化を含めた訓練を行っている。

それが今、窓の外遠く、丘陵地の方角で時折見える光の正体だ。

「スゴいな・・・目標をあつという間に制圧した」

「これが、元機動六課のフォワード。エース・オブ・エースの教導が凄いのか、元々の能力が凄いのか・・・」

「両方じゃないか？」

「おい知ってるか？ あの射撃魔導師はAクラスそこそこにもかわらず、JS事件ではあの戦闘機人を3人まとめて倒したらしいぜ」

「本当か！？ Sクラスでも気を抜けば一対一でもやられかねないって相手にか！？」

「あのハチマキをしている方も、一発の威力が重い上に出が早い！本当に俺たちより何歳も若いのか！？」

少し離れた場所から、スバルやティアナの訓練を見物する魔導師達が、二人の能力の高さに驚いて口々に呟く。

なのはやヴィータが、容赦なく遠距離攻撃や誘導魔術攻撃を仕掛ける中、二人はそれを跳ねのけて二人へと連携して迫る。

ティアナの射撃を障壁で回避しながら、ヴィータはティアナの成長を実感して思わず笑みをこぼした。

（アタシでもだんだん、避けるのが苦になり始めて来た。まったく、未恐ろしい奴だ！）

それも一人だけの力では無いスバルとティアナの連携が、単純計算からは考えられないような効果を生み出している。

二人は明らかに、ブルーインパクトで受けた訓練から少しずつ変わり始めていた。

それは周りからでも無く、彼女たちも薄々と感じていた。

（なんでだろう……。模擬戦は前と同じくらいに苦なのに、攻撃を受ける回数が減った感じがする。おかげで、思い切って攻撃に行ける！）

（攻撃があまり来ない？ アイツが前面に張り付くように出れるから、なのはさん達は、攻撃のチャンスが減っているってこと！？）

時間制の模擬戦は、いよいよ佳境に入る。

ウィータがティアナと射撃合戦を繰り返しながら、空を舞うのはにスバルがウイングロードを展開して猛追する。

次の瞬間、ヒュンツと角度を急激に変えてなのはが急降下する。

必然的に上を取る体勢になったスバルが、ウイングロードから飛び出してなのはに迫る。

するとそれをチャンスと見たなのはが、空中では身動きが取れないスバルへとアクセルシューターの嵐をお見舞いした。

回避不能！？

眼前で腕をクロスし防御態勢のスバルは、瞬く間に閃光と爆風に包まれる。

しかし次の瞬間、白煙から勢いよく飛び出したスバルがリボルバーナックルを振り上げてなのはに迫ってきた。

「うおおおおおっ！」

「ッ……！」

” Divine Buster ”

だがその迫りくるスバルへ、それを予想して待ち構えていたなのは
のデイバインバスターは直撃コース。

急迫する閃光に呑みこまれかけるスバル……だがそのスバルの姿
はデイバインバスターが命中した瞬間、突然霧散して消えた。

（ティアナの幻術！？ ヴィータちゃんを相手にしながら、こんな
事も同時に！？）

なのはが嵌められたと気付くのに、そう時間はかからない。

だがそれよりも早く、なのはの背後から本物のスバルがリボルバー
ナックルの狙いを研ぎ澄まして迫る。

ガンツという強烈な衝撃が、スバルの攻撃を受け止めたなのはの右
手から肩に伝わってきた。

簡単な防御魔法さえ展開する暇も無く、緊急的な防御魔術で受け止
めたため、次第になのはが押し負ける。

なのはの障壁を突き破る攻撃に突き飛ばされるように、なのはは空
中で弾き飛ばされるように後退した。

「やったー！ 私たちが勝ったー！」

「う、うそ……ホントに!？」

「マジかよ……まったく、お前らって奴らは」

ウイングロードの上でガンツポーズのスバルと、未だに一撃を入れ
るといふ勝利条件の達成を実感できていないティアナ、そして信じ
られないという表情の下にやや嬉しさが隠れるヴィータ。

しかし、なのはが少し残念そうな声である事を二人に告げた。

「うーん・・・残念だけど、タイムオーバーだったみたい。でも、本当にあと一步・・・いや、もう一步も無いよ」

「えー、時間切れだったなんて・・・!」

「ハア・・・。あと一步が、恐ろしく遠い一步だこと・・・半年前も似たような事言ってた気がするわ」

「しかし、アタシはブルーインパクトでお前たちが何を学んだかは知らねえけど、お前らの成長にはハッキリ言っただけで感心した。まさか、アタシらをここまで追い詰めるようになるとはな・・・」

「それに実戦では、今日みたいな時間制限なんて無いよ。あと少し時間があったら、間違いなく私達は負けてた。それじゃ、今日の訓練はここまで!」

「は、はい! ありがとうございます」

「ヴィータ副隊長、お褒めの言葉ありがとうございます!」

最初の頃はトラウマになるくらい厳しく怒られた事もあったが、今ではこれまでに無いくらい誉められた。

なんだか実感が湧かないうちに、ティアナは反射的にヴィータに礼を返していた。

するとヴィータがへへッと軽い笑みを浮かべ、二人へもう一度向き直る。

「もうアタシらが教えられる事は、本当に少ないって事だ。それに、

もうアタシはお前たちの副隊長じゃねえ。お前たちはこれから、

スターズ大隊の分隊長として後ろのあいつらを率いて戦うんだろ?」

ティアナとスバルが後ろを振り返ると、数十名の魔導師達が一斉に敬礼を向けていた。

一斉に、しかも年上が殆どの魔導師達の敬礼に、気恥ずかしさを覚えるように、二人はなのは達の方へ早々と向き直った。

「でも、本当に私たちで良いんですか？」

「ティアナは良いとしても、私に限ってはただ一人で突撃ばかりしていたような魔導師ですよ？」

「“いつもと同じようにしてくれば、必ず望むような結果が得られる”ってトレノ隊長が言ってたよ」

「それに、だから今日こうやって見極めも兼ねて模擬戦をやったんだ。もし今日、無様な負けからしやがったら、アイツらは不適合だってトレノ隊長に直訴するつもりだったが、その心配は要らなかったようだ。合格って事だよ、お前ら」

なのはに続いて、ヴィータがいつものような遠まわしな言い方をして二人を安心させる。

「それじゃあ。あ、昼過ぎに結成式があるけど、二人はそれぞれの分隊長だから、30分前には来ていてね」

「はい！」

「了解です！」

なのは達が去り、二人はその丘陵に残ってしばらくおだやかな風景を眺めていた。

ようやく、ティアナが口を開く。

「まさか、私たちが分隊長になるなんてね」

「本当に驚きの連続だよ」

「地上制圧専門の魔導師部隊“シリウス分隊”に……」

「地上攻撃支援専門の“プロキオン分隊”ね」

「んー、なんか私たちの得意分野がそのまま部隊になったような感じ？」

「そう言われてみれば、そうよね……」

そう考えれば少しは楽になるかなと、二人は思わず笑みをこぼす。

「それじゃよろしくね、ティア！ スターズ4改め、プロキオン1！」

「こちらこそ、スバル！ スターズ3改め、シリウス1！」

そう言いながら二人はハイタッチを交わし、お互いの信頼を確かめ合った。

「エース・オブ・エースをあそこまで追い込むなんて・・・」

「俺、てつきり配属先の分隊長は年下だからって思ってたけど・・・こりゃ認識を改める必要があるな」

「ああ、俺もだ・・・」

本部への帰途につく二人の事を、口々にそう呟くのは数人から、いつしか彼女たちの訓練風景を眺めていた局員の大半にまで広がっていた。

そして彼女たちの存在が、これから更に困難が待ち受けるであろう戦いにおいても、彼らの士気を高め続ける事だろう。

さらに二人の様子を本部の屋上から、イルマとはやても眺めていた。

イルマはもとより、はやても実際に二人の動きを見て人選に誤りが無かった事を早くも実感できた。

「シリウス分隊長のスバルに、プロキオン分隊長はティアナか・・・」

「お互いを過度に庇わなくなつて、その分自分の能力発揮に時間を費やせる・・・チーム戦の理想形を、よく短期間であそこまで」

訓練の様子をみて安心したイルマは、部屋に戻ろうとするが、その彼にはやてが気になっていた事を口にした。

「トレノ一佐、こんな時に失礼を承知で一つ聞いていいやろか・・・？」

「何だろっ?」

はやてのやや暗めな口調に、イルマは良くない事を聞かれると感じ、いつもなら笑顔で「どうぞ」と返さなかった。

代わりに彼は、後ろを向いたまま背中彼女の次の言葉をじつと待った。

「どうして、ウチに指揮を任せようと思たんか・・・教えてくれませんか?」

「それは勿論、君が相応しいからだ」

「今更こんな事言うのも変かもしれへんけど、買いかぶり過ぎぢやいます? ウチは、確かに機動六課で部隊長してました・・・せやけど、ウチがやってた事も後手ばかり」

「君は、出来なかつた事ばかりを見ていないか?」

「えっ?」

イルマの指摘にはやてが思わず疑問の声を上げ、上を向いて考える。

「確かに、反省する事は大事だが・・・たまには、自分の積み重ねてきた事を思い返して見るのも悪くは無い。特に、君たちのようにそれだけの事をしてきたのであればね」

「ふふ、まったく一佐の口車にはかなわへんなあ。良いように乗

せられてしまいそうや」

「別に悪い事じゃないから、乗っても構わないだろう？」

冗談を交えながらはやてと別れると、イルマは少し立ち止まり考えた。

（積み重ねた事を振り返るか・・・まったく、堂々と振り返れる君たちが羨ましい）

同時刻 リベラトリックス艦内

シルフがツェーザーの元を訪れた時、彼は演説の時に用いたような黒衣のコートを纏っていた。

何事かと尋ねれば、彼はこのまま地上本部に向かうとの事だった。

「地上に降りられる、と？」

「ああ。ずっと傾いているままの艦内は落ちつかん。それに・・・」

「リベラトリックスを最前線に出しますか？」

「ふん、察しが良いのか悪いのか・・・。正解でもあり不正解でもある」

ツェーザーの言い廻しは、シルフにとってみればいつもの事だった。自分ひとりだけが雇われの身であるならば、その程度の信用しかないのも仕方ないのかもしれないが・・・。

だがそれで分かったのは、ツェーザーがまだとっておきの何かを用意しているだろうという事だ。

この悠然さは、フェルカーモルトフリーユゲルで敵を討ち払った時と同じように見える。

「まあ、深くは聞きませんが・・・一つご忠告を申し上げるならば、過ぎた力は何とやらですぞ」

「・・・シルフよ、貴様は力と言う物は善悪のどちらだと考える？」

「ふむ、そうですね・・・」

珍しくツエーザーがシルフに質問をぶつける。

シルフは表情を変えることなく、頭をやや捻る具合に首をかしげて考える。

「さしずめ、そう・・・善にもなり悪にもなり得る、という所でしょうか？」

「フッフ、貴様もそう思うか？　だが答えは否だ。　力は善悪のど

ちらでも無い、それが答えだ」

「ん？　それはどういう事ですか？」

「では分かりやすく言ってやろう。　ここに、数万人を死に至らしめる兵器があるとす。　この兵器を使用して、数万人が死んだ。

では、悪はその兵器か？」

「・・・」

「違うだろうか？　殺す事を悪と見たとしても、“悪”はその兵器を使用した者だ。　兵器でも魔法でも、どちらも善にも悪にもなり得ないのだ」

帯剣するように、彼はデバイス“イエーガー”を腰に引っ提げつつ話を続ける。

「善悪となり得るのは、“意志”だ。　これまで時空管理局は、ラシア大戦を含め歴史上数多くの失敗と犠牲を重ねてきた。　その

度に、誰かが言う・・・“あの力は邪悪”“あの力は脅威”と。
フン、馬鹿馬鹿しい」

吐き捨てるように言い放つツエーザー。

その時、連絡船の準備が整ったと通信が入った。

「力を善悪と評する事は、意志を裁く事も阻止する事も出来なかつた者の言い訳に過ぎない。シルフよ・・・私が信頼しているのは、力では無く意志だ」

「つまり、私の力はお認めになっても、信用が足りないのは意志のせい、と？」

「貴様は全く私に意志を示さん。まあ、今は貴様は我々にとって有益な存在だ。その間は、貴様の意志をこちらからは問おうとはせん。だが我々と奴らの、どちらが屈すべき存在か・・・早々に見極めていた方が良くぞ。さて、談義はこれまでだ」

その言葉を最後に、ツエーザーはゆっくりとその部屋を後にする。やれやれお見通しか・・・と、シルフはそつと冷や汗を拭った。これが曲がりなりにも、かつては一度ミッドチルダを統治し、今回も多くの犠牲を払いつつも再占領した男か、と改めてシルフは驚かされた。

同日 PM 4：30 ミッドチルダ西部某所

「危ない危ない・・・」

「これでよし、と・・・。しかし、この人たちはどうして急に襲いかかってきたりしたんでしょう？」

都市部郊外の道路のわきに停車しているトラック。

そしてそこには、昏倒する運転手二人と彼らをバインドで拘束したヴェロツサとシャツハの姿があった。

ヴェロツサからの情報で、本局所属の部署のとある部署になにやら不穏な動きがあると睨んだカリムが、シャツハを増援として派遣。

待ち構えていた結果、予定通りにそのトラックが現れ、二人が職質をしようとしてヴェロツサが査察官だと名乗った直後、助手席にいた男が鉄の棒のような物でいきなり攻撃を仕掛けていた。

もちろん否応なしというか、仕方なくシャツハに片づけられてしまったのだが……。

ともかく、彼らの異常な反応で二人が確信したのはこのトラックには何かがある……それも、パトリオットフォーエス絡みで。

空気が抜けるような音で後部の荷台の扉が開き、その中に現れた物を見てシャツハは息をのみ、ヴェロツサは思わず目を細め険しい表情になった。

J・S事件の発端ともいえるそれは、一つだけではなく無数にその荷台に鎮座していた。

レリック……赤い宝石のように淡い輝きを放つそれらは、トラックの荷台に所狭しと並べられている。

「ッ……!」

「ロツサ?」

その時、ヴェロツサがやや細い声でうめいたのを聞いて、シャツハが思わず彼に尋ねる。

しかし次の瞬間、彼がその場でドサツと倒れて彼女の表情が驚きに変わった。

彼女は思わず彼に駆け寄り、彼を激しく揺さぶるが反応が無い。

「ロツサ！ロツサ！！ 一体・・・アウト！！」

しかし次の瞬間、彼女も首に何か刺したようなチクリとした痛みを覚えると、急激に目の前が霞んで立っていられなくなり、ヴェロツサの背に突っ伏す形で倒れ込んでしまった。

遠くからその様子を眺めていたのは、ブリザード分隊長のアルネア、そしていつものようにスーツ姿のシルフだった。

少し違う所と言えば、彼が長い筒のような物を口にくわえていた事だろうか。

やがて目的が達しえた事を確認すると、彼は少し満足そうな笑みを浮かべて吹き矢の筒を口から離す。

「美味しそうな餌を用意するって、案外名案だね。魔法に長ける人たちを、魔法以外の方法で倒すっていうのも気に入ったわ。でも、納得がいかないわ！」

「ふむ・・・具体的に納得がいかないのはどの辺りかね？」

そう言いながら彼は昏倒した二人の元へと向かうと、ヴェロツサとシルフをその両腕に抱える。

彼が放ったのは麻酔針で、二人はその影響で眠らされていたのだ。

「ここで始末してしまえば良いのについて言いたいのよ！」

「ふふつ、それでは一つの石で一羽の鳥を落とすだけ。彼らには価値がある・・・北へと逃げた彼らを追い詰める程の価値がね・・・」

。既に少将殿にも許可を取り付けている」

やや不満そうに呟くアルネアだが、シルフにツエーザーの事を言われると彼女は黙り込んで転送の魔法陣を展開。

やがて光が収まった後には、トラックとその運転手以外には何も残

らなかつた。

Flight 19 : 降下作戦開始！ く勇士は舞い降りるく (前書き)

一カ月ぶりの更新となり、すいませんでした。

私事ですが・・・

この一ヶ月間で、私はどうにか就職が決まったりと、人生を左右するような大きな出来事が起こりました。

物語も、そして人生もこれからが大変となっていくんですかねw

では

Flight 19 : 降下作戦開始！　　勇士は舞い降りる

新暦76年　5月27日　AM 11:21　聖王教会本部内臨時戦
隊司令部

「なんですって？　それは本当ですか？」

それは防衛成功以来、久々に飛び込んできた良くない知らせだった。パトリオットフォースに関して独自に調査を続けていたヴェロツサと、彼を護衛するためにカリムが派遣したシャツハがその消息を絶つたとの事だった。

次の作戦に向けた会議の後、それを悲哀に満ちた表情でカリムが告げ終え、イルマ達と別れるために後ろを向いた彼女の肩が震えているのにはほぼ全員が気付いていた。

おそらく二人はパトリオットフォースに攻撃ないし拘束された可能性が非常に高いだろうと、それがイルマ達の判断だった。

そして彼らが最後に残っていた報告ログには、本局より護送の不審物の追跡とあったのを見て、一人自室に籠っていたイルマはそれまで抱いていた推測が確信に変わった。

（今回の騒動も、ラーシア絡み・・・そして本丸は、パトリオットフォースではなく、やはり・・・）

午後には明日に決行されるある作戦についての、重大な会議が始まった。

明日決行される作戦、それは待ちに待った反攻の始まりを告げる作

戦。

軌道上にて待機する次元航行部隊の艦隊が、一斉にミッドへと降下させ安全地帯へと引き入れる作戦である。

これの成功か失敗かで、ミッドチルダを取り戻せるか否かが決定されるといっても全く過言ではない。

その会議には元機動六課の隊長陣を初め、教会本部の重鎮達、そしてイルマや新たに分隊長を任される事になったスバルとティアナが加わり、それだけでもかなりの大人数となった。

「はあく、なんか私たちが居るのが酷く場違いな気がするわ」

「うーん、八神部隊長達ならもう慣れてるけど、やっぱりカリムさん達とこういう場で一緒っていうのは、無かったからかな？」

「・・・さて、全員揃とるか？ ならば、始めよか」

スバルとティアナが二人でこそそと話をしていた時、全員が揃っている事を確認したはやてが、全体を見渡してから会議の開始を告げた。

そんな彼女はまず最初に、全員へ告げるべき事を先に話す為、その場で立ち上がった。

「まず、残念なお知らせや。 もう殆どの人は知ってると思うけど、私たちの仲間が二人、おそらく敵に捕まってしまった。 もちろん二人を救出するために最大の努力はする。 せやけど、今回はこの作戦に集中して欲しい」

もう誰かは、言わずとしてもこの場の全員は知っている。

若手の方でも特にティアナはヴェロツサから、はやてとは上司と部下の関係を越えた関係を築いて欲しいと優しく言葉をかけられた思いもあり、それを思い出した彼女は重苦しい表情を浮かべていた。

それでも今は作戦に集中しようと、彼女は自らを律するように真正面を見据えなおした。

するとはやてが、今回の作戦に関して最初に参謀役へとなったイルマにその概要を求めている所だった。

「今回の作戦はミッドチルダを奪還するに欠かすことのできない、反攻作戦の第一歩となる。ここより北へ数百キロにわたる予定のポイントに、軌道上に待機する次元航行部隊の大艦隊を引き入れる。・明後日の今は、ミッドチルダを占拠する粗暴な相手に対抗するための戦力が、今の十倍程になっている筈だ。各員、心して欲しい」

イルマに続いて、今度はそれぞれの部隊長が主な任務や配置などの確認を行う。

まずスターズ大隊のなのはが続いてフェイトが、その場で立ち上がる。

「スターズ大隊部隊長、高町なのはは一等空尉です。私たちスターズ大隊は、主に空からと地上による降下ポイント周辺の安全の確保に努めます。しかし、降下ポイントはその全長だけでもゆうに400km、周囲の安全を確保するには私たちだけでは足りません。他の部隊からの、応援を要請します」

「ライトニング大隊部隊長、フェイト・T・ハラウン執務官です。その制空権の確保は、主にライトニング大隊により円滑かつ確実に行います。ただし不測の事態に備えて、大隊の約半数は航行部隊と共に移動しながら周囲を哨戒します」

これは主にはやての立案にイルマが少しばかりノウハウを足したに過ぎない。

それでもこの立案ならば、例えば敵がどの方向から現れたとしても数

分の余裕は稼げる。

最悪の場合、再び軌道上に退避する事も可能だ。

彼女たちの確認事項と照らし合わせながら、イルマはこの作戦の有効さを改めて確信していた。

「それなら、最後にトレノ隊長、確認を」

「ブルー遊撃隊、イルマ・トレノ一等空佐です。本隊は遊撃隊として万が一接敵があった場合、各方面で戦闘を行う味方部隊への援護を行います。」

イルマが率いる部隊はブルー遊撃隊、もといブルーインパクトのメンバーのみで構成された部隊。

その任務は支援が必要な戦闘区域へと急行し、敵を掃討するというもの。

対空対地の全てに常時気をつけねばならないため、高い戦闘技術に加えて幅広い柔軟性と視野が必要とされる。

また部隊員をブルーインパクトのみに絞った理由、それは接敵するにあたってチームを効率よく動かすにはやはり個人の能力を最大限発揮できるポジションにつかせなければならない。

それには、長期間にわたってチームを組んでいるメンバー以外を選ぶこと等出来なかった。

軌道上・・・

まだ24時間という時間がある。

しかしその数値がじりじりと減っていく様は、その場にいたクルー全員に緊張の表情を与えていた。

クラウディアを先頭に数十隻の大艦隊が軌道上を周回し、その時を

今か今かと待ちわびていた。

「あと一日……。各員、予想される敵襲撃のポイントは確認したか？」

「はい、ハラオウン提督。既に艦隊全艦に通達済みです」

「よし。どんな困難が待ち構えているか分からない。しかし、どのような状況になっても冷静な対応を心がけるように」

「はい！」

同じ事をつい二時間前にも言ったような気がするが、念には念を重ねたいというクロノの気持ちちはやる。

報告された情報から、敵の保持する艦は数こそ少ないもののその力は強大。

特にその不安要素は、リベラトリックスを中心として他の支援艦の存在だった。

（敵はたかが少数と、思わない方が良いな……）

少なからず緊張からくるストレスか、クロノはやや胃が痛むような気がした。

こんな時に自分に励ましの声をかけてくれていたヴェロツサは、これから対峙するであろう敵に捕まってしまった可能性が高い。

だがそれは彼にも新たな疑問を浮かべさせる事になった。

（ロツサの動きは本局上層部および査察官統括部、それからシャツ八が同行すると言う事からカリムくらいしか知らない筈だ……情報漏れるにはあまりにも早すぎる！）

それを考えついたクロノに思い当たる結論があった。

本局の中にスパイがいる……それも特秘事項の情報を知ることが

できる相当な権力を持った人物が。
しかしそれは同時に、今自分たちが踊らされているという事実を認める事にもなるのだった。

新暦76年 5月28日 PM1:00

極北部というだけあって、それよりもさらに北へ進むとそれはそれは一面が銀世界。

白い山脈や森や湖さえも、この季節は白く変わり果てた姿を見せる。地形や時折吹きつける吹雪きのおかげで視界の悪さ等、一見すれば何かの作戦を行うには不向きな一帯だ。

しかし裏を返せば敵が攻め込みにくいという事であり、何より人が住まない土地であると言う事が降下ポイントとして選定される重要な要点になった。

その上空を6人の人影が、地表を掠めるような猛スピードの低空飛行で駆け抜ける。

彼らだけでは無い、周囲には多数の魔導師による警戒態勢が続く。

「ブルー1よりロングアーチ、ポイントデルタ天候確認終了」
『了解、どうぞ』

「風向310度、風速12、天候は雪、最大視程約5km」

『了解しました。ポイントデルタ周辺で待機してください』
「了解」
「了解」

周辺一帯の天候確認を終え、イルマ達は指定された上空で待機する。もう間もなく、軌道上から無数の艦艇が降下を始め、やがては自分たちの目にその姿が映る筈だ。

その時、司令室のモニターを注視していたはやて達の目に光点が多

数。

この反応は味方の物だった。

「来ました！ 高度約126km、XV級クラウディアを先頭に艦隊が大気圏突入！ 降下してきます！」

「艦隊の全艦とデータリンク。 現在周囲に敵の姿は見当たりません！」

「追尾状況は良好です。 約25分後に、最前線のスターズ大隊護衛可能空域へと到達します」

「良い感じに來たな。 さて、問題はこれからや・・・」

まずは順調に事が進み始めた事に、ひとまずは安心するはやて。だがそれとは裏腹に、この動きを察知している筈の敵が敢えて鳴りを潜めている事が彼女にはかえって不気味にも感じられた。

艦隊の降下が始まった。

順調に行けば25分後には山脈上空に到達し、魔導師達が護衛位置につく事が出来る。

だからこそツエーザーは、先程部下の「仕掛けますか」の問いかけに敢えてNOと答えたのだった。

『開始のタイミングは地上本部から伝える。 ネメシス、コンコルディアの二艦はそのまま待機せよ』

「はっ。 了解しました」

『艦隊の壊滅は、単なる敵戦力の大幅な減退だけではない。 艦隊による侵攻が、このミッドチルダには無意味だと言う事を彼らに思い知らせる事にもなる』

「心得ております。」

疑問を感じつつも敬礼をもって返答し、巡航艦ネメシスの艦長はふたたび自席へと戻った。

分かる事は、どうやら独立国の元首たるツエーザーはまた何かを考えているらしいと言う事。

そして自分たちのとりあえずの任務は、その号令があるまでひたすら待機する事だった。

「艦長、一つ尋ねても宜しいでしょうか？」

「・・・なんだ？」

「艦長は、少将の命を全て承服されておりますか？」

「・・・」

若い士官から唐突に尋ねられ、艦長の男はやや顔色を曇らせたようにも見えた。

無理も無いだろう。

突然、遠まわしに最高司令官たる者の事を信用するか否かを尋ねられたのだ。

二者間にやや重い空気が流れ、質問をした士官がさすがにマズイと感じたのか口を開く。

「あ、いえ・・・失礼しました。ただ私は、今回の作戦の中に・・・

・・・まるで民間人を盾にするような内容がありましたので、それについて少々如何なものかと」

「・・・いつの時代も、変わらんよ。」

「え？」

「犠牲の出なかつた戦争は無い。決して後味の良いものではないが、仮に彼らが犠牲になるとしたら今後を有利に進める材料になる事に変わりはない。」

「・・・確かに管理局が保身のために民間人を殺したとなれば、我々に同調する民間人が多数現れる事は間違いないでしょう。今後

の占領作戦もやり易い、ですが……」
「そう仕向けるのが、我々に与えられた任務だ。管理局が、彼らを殺さざるを得ない理由を作る事が、ね……」

|||||

最前線のなのは達から連絡があつたのは、最初の一報から二十分以上が経過してからであつた。

『こちらスターズ1、護衛対象の艦隊を視認しました。降下してきます』

「了解、スターズ本隊は護衛位置に移動を」

司令部ロングアーチからの指令を受けて、バリアジャケットの効果で寒さを感じないが極寒の気温となる上空へなのは達は飛翔する。薄雲のかかる程度だった低空を抜けると、そこは透き通つたようなスカイブルーの空。
そこから無数の艦が、キラキラと陽光を反射した光を放ちながら降りてくる。

「ヘンだとは思わねえか？」

「え？」

唐突にヴィータが呟いた言葉に、隣で降下する艦隊を見上げていたなのはが反射的に声を上げた。

「クラナガンには軌道上の艦艇追尾施設が整つてるんだろ？ なのに、艦隊は今まで一度も攻撃を受けた事も無いってのは……」

『た、大変です！！』

その時、オペレーター達の慌てたような声とけたたましいサイレンの音が飛び込んできた。

これを意味する事は、何らかの非常事態が起きたと言う事だ。

その通信を耳にした全員が、ロングアーチからの情報に即座に耳を傾けた。

『大規模な収束エネルギー確認！』

『ロングアーチ、その場所は！？』

『そちらより南東に212km！・・・これは、艦！？』

収束砲の可能性大！ 危険です、回避を！！』

『逃げる・・・どこへ！？ 上か？』

『こちらブルー1、谷だ！ 溪谷へ潜り込め！』

谷へと逃げ込む。

確かに、それならば山が盾となって収束砲の直撃は免れるだろう。

しかし小型のヘリが飛ぶ場合にも細心の注意がはらわれる程狭い溪谷内を巡航艦のような艦が通るには、それこそ神業のような操縦が要求されるだろう。

今にも敵は撃つて来そうだ・・・クロノは瞬時に決断を下した。

『谷へ降下する！ 全艦、溪谷内へ降下！ 航行には細心の注意を

払え！』

『りよ、了解！』

提督のクロノより谷へ降下すると聞いて、僚艦の艦長達にも緊張が走る。

だが、迷っている時間等無いと言う事を次の瞬間彼らは思い知らされた。

『高エネルギー、放出！ そちらへ向かってきます！』
「くっ、間に合えッ！！」

思わずクロノが叫んだ次の瞬間、光で白んだ左舷側から艦をギシギシと揺らすような衝撃と轟音が彼らを襲う。

悲鳴や怒号が飛び交う中、クロノ達は椅子にしっかりとしがみ付き、投げ出されないように必死だった。

「何だ今のは！？ 艦載収束砲！？・・・被害は！？」

『ありません！ ですが、レーダーの一部に乱れが発生！』

「よし・・・各艦、被害は！？」

『こちらヴェイエーラ！ 攻撃管制システムが破損！ 攻撃不能！』

『ハラオウン提督！ ロテイスが大破、通信途絶・・・墜落したもよう！』

「くっ・・・もう少し早く気づいていれば・・・！」

他にも数隻の艦が大破ないし中破するという被害。

仮にも時空管理局の誇る主力艦が、一撃でここまでの被害を受けるとは・・・！

「・・・各艦、反撃の機会を伺いつつ渓谷に沿い目的地まで航行せよ！」

「ん？・・・ま、待ってください提督！！」

「どうした？」

その時クルーの一人が声を上げ、クロノはまた何かよからぬ事が起きたのだと思いきざま聞き返した。

するとクロノの目の前にモニターが浮かび、地形図のような物が表示される。

「本艦隊がこのまま航行を続けた場合、目的の集合ポイントに到達できません……ですが、これを！」
「これは……しまった!!」

クロノの目に飛び込んできたのは、溪谷の両端を結ぶよう地図上で表示された一本のライン。

「こちらクラウドディア！ 作戦本部ロンググーチへ！」
「こちらロンググーチ！ よかった、無事だったんですね……！」
「しかし大変な事になった。良く聞いてくれ、本艦隊の航路上にレールウェイの橋がある！ あと二十二分後には衝突してしまう！」
「なんやて!?! ……そうかあ、やられたな……」

はやてやクロノは即座に、これが敵の計略であったことを悟るが今となってはもう遅い。

敵の二次攻撃に備えたチャージが進んでいる事から、少しでも頭を出せば撃つ態勢を整えているに違いない。

インフラである橋を破壊するか、それとも航路を変えるか……クロノに生死を分ける決断の時が迫る。

『後続のフロレンティーナ、敵艦捕捉！ 攻撃位置につきました！』
「クラウドディア、クロノだ。 応戦を許可する……これ以上艦を失うわけにはいかない！」

さきほどのお返しとばかりに、艦隊の数隻がパトリオット・フォーアの巡航艦へと砲口を向ける。

中心部では光が徐々に大きくなり、発射までいよいよと迫った時だ……。

「提督、敵艦の後方から更にもう一艦が！ 前に出るようです！」
「何？ みすみす当たりに来るとは……？ 何かある！ 駄目だ、
攻撃中止 ツー！」

しかしクロノの制止が届くよりも早く、僚艦の数隻が敵巡航艦ネメシスとコンコルディアへと一斉砲撃を行った。

するとその砲撃の光が命中する前に、ネメシスの後方から前へと出たコンコルディアが障壁のような物を展開する。

そして艦隊が放った渾身の一撃を切り裂くように上下左右へと反らし、再び二艦とも無事な様をクロノ達へとまざまざと見せつけた。

行く先には鉄橋、長期戦にもつれこませるわけにはいかない。

だが短期戦を仕掛けようにも、相手は数隻まとめての砲撃を意図も簡単に避ける事の出来る艦。

打つ手なし……ここまで来て、自分たちがやらねばならない事はまだたくさんあると言うのに！

艦橋越しに、外でクロノ達の困窮した事態をどうにか打開しようとするなのは達の姿が見える。

！

しかしそれは余りにも賭けに近い 少しでも間違つと、待ち受けているのは恐ろしい事態のみ。

（ 本当にそれしかないか？ 砲撃を行う艦に体当たりを行う
と言う方法以外に…… ）

クロノが今まさに、かつて“闇の書”事件で失った父クライドと同じく、自らの命を賭して為すべきかの選択を行おうとしている。
死戦を覚悟しようとするほど、親友や家族の事が頭をよぎっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2484n/>

魔法戦記リリカルなのは Infinite Blue

2010年11月22日17時23分発行